

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Aspect and tense of the modern Japanese verb

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001270

国立国語研究所報告 82

現代日本語動詞の アスペクトとテンス

国立国語研究所

1985

刊 行 の こ と ば

国立国語研究所言語体系研究部第一研究室は、現代日本語文法の研究を担当しています。今回、その一つとして、数年来進めてきた動詞の形態論的な分析の中の、アスペクトとテンスに関する研究の成果が、一通りまとめられましたので、国立国語研究所報告82として刊行します。

この研究は、

言語体系研究部長 高橋太郎

が、同部第一研究室長であったときから担当してきたものです。

なお、目次の英訳にあたっては、ノートルダム清心女子大学教授山田小枝さんの協力を得ました。

昭和60年1月

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

Aspect and tense of the modern Japanese verb

I Introduction

- 1 Object of the study
- 2 Perspective of the study
- 3 Sources of the examples used in the study
- 4 References

II Perfective aspect

- 1 Action as a whole
- 2 Aspect in progressive phase
- 3 Aspect in continuative phase of a state
- 4 Neutralization of aspect

III Continuative aspect

- 1 Aspect in continuative phase
- 2 Aspect in iterative phase
- 3 Aspect in the phase following the preceding phase of a process
- 4 Aspect in continuative phase of a state
- 5 Neutralization of aspect

IV Perfective non-past

- 1 Tenses of perfective verbs
- 2 Future
- 3 Present (1)—Action or state in the present
- 4 Present (2)—Qualitative attribute in the present
- 5 Extended present
- 6 Neutralization of tense

V Perfective past

- 1 Past (1)——Action in the past
- 2 Past (2)——Qualitative attribute in the past
- 3 Anterior present
- 4 From the past to the present
- 5 Modality and tense

VI Continuative forms equivalent to certain tense forms of a perfective verb

- 1 Tense forms of a continuative verb equivalent to relative-tense forms of a perfective verb
- 2 Continuative non-past form equivalent to perfective anterior present or perfective anterior future form
- 3 Continuative past form equivalent to perfective anterior past form

VII Continuative non-past

- 1 Tenses of continuative verbs
- 2 Present
- 3 Future
- 4 From the anterior present to the present
- 5 Extended present
- 6 Permanent properties
- 7 Neutralization of tense

VIII Continuative past

- 1 Past
- 2 From the anterior past to the past
- 3 Qualitative attribute in a continuative past form
- 4 Modality and tense

IX Table of contents (details)

も く じ

刊行のことば

第Ⅰ部	序 説	1
第1章	この研究の対象	1
第2章	分析の観点	10
第3章	用例のための資料	24
第4章	参考文献	29
第Ⅱ部	完成相のアスペクト	33
第1章	動作のまるごとのすがた	33
第2章	進行のなかにあるすがた	55
第3章	状態の持続のなかにあるすがた	60
第4章	アスペクトからの解放	64
第Ⅲ部	継続相のアスペクト	85
第1章	持続過程をなす局面のなかにあるすがた	85
第2章	くりかえしの過程のなかにあるすがた	107
第3章	ある局面の完成後につぎの局面のなかにあるすがた	113
第4章	状態の持続のなかにあるすがた	125
第5章	アスペクトからの解放	132
第Ⅳ部	完成相非過去形のテンス	137
第1章	完成相のテンス	137
第2章	未 来	144
第3章	現在(1)——現在の動作, 状態	157
第4章	現在(2)——現在の質的な属性	165
第5章	ひろげられた現在	169
第6章	テンスからの解放	172
第Ⅴ部	完成相過去形のテンス	179

第1章	過去(1)——過去の動作	179
第2章	過去(2)——過去の性質、ひろげられた過去など	195
第3章	現在以前	200
第4章	過去から現在へ	206
第5章	モーダルな性格とテンス	212
第VI部	完成相のテンス形式に準じる継続相	219
第1章	完成相あわせテンス形に相当する継続相について	219
第2章	完成相前非過去形に相当する継続相非過去形	225
第3章	完成相前過去形に相当する継続相過去形	231
第VII部	継続相非過去形のテンス	237
第1章	継続相のテンス	237
第2章	現在	245
第3章	未来	252
第4章	現在以前から現在へ	254
第5章	ひろげられた現在	256
第6章	恒常的な状態	257
第7章	テンスからの解放	263
第VIII部	継続相過去形のテンス	265
第1章	過去	265
第2章	過去以前から過去へ	282
第3章	恒常的な質的属性を継続相過去形であらわすとき	288
第4章	モーダルな性格とテンス	295
第IX部	内容（細部のもくじ）	297

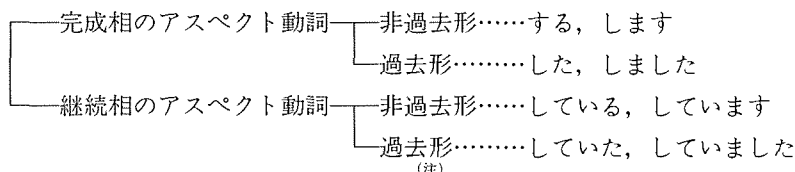
第 I 部 序 説

第 1 章 この研究の対象

第 1 節 この研究の対象

この研究の対象は、現代日本語動詞のアスペクトとテンスである。

具体的な形式についていえば、つぎの八種の語形のアスペクト・テンス的な性格についてしらべたものである。



アスペクトについては、完成相と継続相のアスペクト動詞「する」と「している」がどのような対立をもつかという観点から、それぞれの形式の実現するアスペクトの意味と、それを実現する条件について記述した。

テンスについては、完成相と継続相で非過去形と過去形の対立のしかたがちがうので、それぞれのアスペクト動詞ごとに、両形の対立に着目して、それぞれの語形の実現するテンスの意味と、それを実現する条件について記述した。

アスペクト動詞についても、テンス語形についても、基本的な意味のほかに、基本的でない意味を実現したり、また、アスペクトやテンスから解放されたりしているものがあるので、そうしたことについても記述した。また、テンスの記述にあたっては、そこで実現しているアスペクトの意味と関連させて記述した。

継続相のアスペクト動詞には、ほんらいのアスペクト動詞としての用法のほかに、完成相のテンス形式としてとらえるほうが適切であるとおもわれるものがあるので、それについては、ひとつの部をたてて記述した。(第VI部)

この研究の対象となる形式は、アスペクトについては、完成相と継続相のア

(注) 完成相と継続相の対立というとえかたは、奥田靖雄1977によるものである。

スペクト動詞であり、テンスについては、それぞれのアスペクト動詞のいいおわり形ののべたて・断定形の非過去形および過去形である。また、そのうちのひとつの動詞だけをあつかった。このひとつの動詞は、ふつう体とていねい体をふくんでいる。したがって、形式についていえば、さいしょにあげた八つの語形をあつかったわけである。

アスペクトとテンスは、動詞の形態論的なカテゴリーである。つまり、それを実現する形式は、動詞の語形変化のシステム——活用のパラダイム——のなかに、語形（広義）として位置づけられている。アスペクト動詞とテンス語形は、このように動詞のパラダイムのなかに位置するものであるので、まず、そのことについて、のべておかなければならない。

第2節 現代日本語動詞のパラダイム

1) 動詞のとらえかた

動詞は、語法的な意味において動作・変化などの運動過程をあらわすものを中心として、文中で述語になることを基本的な統語論的機能とし、動詞的な形態論的なカテゴリーによって語形変化する単語グループである。動詞からいわゆる助動詞をきりはなして、従来の六活用形のなかにとじこめるとき、動詞は、動詞の部分となって、完全なすがたをもった動詞であることをやめる。なぜなら、それは、動詞の形態論的なカテゴリーをうしなうからである。

このことについて、鈴木重幸1972は、つぎのようにのべている。

われわれは、いわゆる助詞（全部）と助動詞（大部分）を独立の単語とはみとめず、単語の文法的な部分だとみとめるたちばをとる。ということは、たとえば、つぎのような形式は、すべて動詞だとみとめることである。

〈とき〉 よむ（すぎさらず）—よんだ（すぎさり）

〈きもち〉 よむ・よんだ（のべたて）—よもう（さそいかけ）—よめ（命令）

〈みとめ方〉 よむ（みとめ）—よまない（うちけし）

〈ていねいさ〉 よむ（ふつうのいい方）—よみます（ていねいなお方）

これらの形式は、それぞれの（ ）のところにしめしたような文法的な意味（これについてはあとでいちいちとりあげる）で対立し、左の〈 〉にしめしたような、一般的な文法的な意味（すなわち、文法的なカテゴリー）のもとに統一して、

それぞれ系列をなしている。そして、それぞれの系列には共通の形式「よむ」があり、それによって、それぞれの系列はおたがいにむすびついている。このようにして、ここにあげられた動詞は、他のここにあげられていない動詞とともに、対立し、統一しながら、全部で一つの複雑な体系をなして存在しているのである。こうした体系は、いわゆる助詞・助動詞を動詞からきりはなさずに、それをともなった全部を動詞とみなすことによってとらえられるものである。助詞・助動詞を動詞からきりはなせば、「よむ」と「よんだ」、「よむ」と「よもう」とは、別のところであつかうことになるからである。

これまでの学校文法は、助詞・助動詞を動詞からきりはなしてあつかったために、こうした動詞の文法的なカテゴリーとその文法的な意味を体系としてとらえることができず、主としていわゆる「六つの活用形」の作り方と、助詞・助動詞への接続関係という形式的なことしかあつかわなかったのである。

いわゆる助詞・助動詞を動詞からきりはなさずに、それをともなった形を動詞やその文法的な形とみなすと、動詞の種類やその文法的な形は非常におおくの数にのぼるが、それらは、いくつかの文法的な意味をあわせもっていて、それぞれの文法的な意味によって対立しながら統一して、全体で動詞の形態論的な体系をなしているのである。だから、われわれは、この形態論的な体系にしたがって、それぞれの動詞の種類やその文法的な形をとりあげていくことになる。

このようなたちばにたつて、はじめに、動詞の語形変化（活用）の全体像をスケッチしておきたい。

2) 基本的な語形変化

動詞の文法的な形（語形）は、ひとつの複雑な体系をなしているのだが、その基本は、ていねいさとみとめかたによってつくられた四つの文法的派生動詞（つぎのページの表のよこの系列）が、それぞれ、おなじ一定の語形変化（狭義）^(注1)の体系（たての系列）をもっているというかたちでとらえることができる。^(注2)

狭義の語形は、その構文的な機能から、いいおわり形、連体形、中止形、条件・譲歩形にわけられる。いいおわり形は、述語となって、文をいいおわるときの形である。連体形は体言へつづくときの形であり、中止形は文を途中でと

（注1）広義では、文法的派生動詞や文法的くみあわせ動詞も語形である。

（注2）伝統的な国文法では、「終止形」を特定の形にかぎっていて、やはり文をいいおわるときの形である命令形を、終止形からはずしている。「終止形」というと、誤解されるおそれがあるので、ここでは、「いいおわり形」としておく。

基 本 的 な 語 形 変 化

機能 (きんねつぎ)		ムード (きもち)		テンズ (とき)		ふ		て	
						みとめ	うつけし	みとめ	うつけし
いおり形	のべた形	断定形	非過去形	よむ	よまない	よみます	よみません		
			過去形	よんだ	よまなかった	よみました	よみませんでした		
		推量形	非過去形	よむだろう	よまないだろう	よむでしょう	よまないでしょう		
			過去形	よんだだろう	よまなかっただろう	よんだでしょう	よまなかったでしょう		
	さそいかけ形			よもう	(よむまい)	よましてよう	(よみすまい)		
		命令形		よめ	よむな	よみなさい	——		
		非過去形	よむ	よまない	(よみます)	(よみません)			
			過去形	よんだ	よまなかった	(よみました)	(よみませんでした)		
中止形	第一中止形	よみ	よまず(に)	——	——				
	第二中止形	よんで	よまないで	よまして	よみませんでして				
条件・譲歩形	第一条件形	よめば	よまなければ	(よみますれば)	——				
	第二条件形	よんだら	よまなかったら	よましてたら	よみませんでしたなら				
	第三条件形	よむと	よまない	よみますと	よみませんと				
	第四条件形	よむなら	よまないなら	よみますなら	(よみませんなら)				
	第五条件形	よんだなら	よまなかったなら	よましてなら	(よみませんでしたなら)				
	第一譲歩形	よんでも	よまなくても	よまして	(よみませんでも)				
第二譲歩形	よんだって	よまなかったって	(よみますたって)	(よみませんでしたって)					

めるときの形である。条件・譲歩形は、有効あるいは無効な条件をさしだす従属句節につかわれる形である。

いいおわり形は、ムードのカテゴリーをもつ。ムードは、文のあらわすこと(注1)がらと現実の関係にかかわるカテゴリーであるが、ここでは、そのうちの、ききてに対する態度の面からの、のべたて形、さそいかけ形、命令形を、現実に対する関係の面からの断定形と推量形をかかげた。

いいおわり形のなかののべたて形と連体形とは、テンスのカテゴリーをもつ。テンスは、発話時を基準にした前後関係のあらわしかたに関するカテゴリーであるが、連体形のばあいには、主節のしめす時を基準にする相対的テンスなど(注2)にうつるものがおおい。

なお、これらの語形の位置づけと名づけは、それぞれの語形のもつ基本的な統語論的機能や形態論的意味にもとづいているのであって、こうした基本的な形は、多機能的、多義的であるのがふつうである。

また、まえのページにしめした語形変化の表は、基本的な語形しかあげていないが、精密な記述のためには、目的に応じてさらにくわしいものが必要である。そのばあい、このみちすじのうえにたって、ひろげることが可能であるし、また、実際に、拡大した表がつくられている。(高橋太郎1975, 鈴木重幸1977)

3) 文法的な派生動詞やくみあわせ動詞が表現手段となる動詞のカテゴリー

うけみ、使役の「よまれる」「よませる」のような文法的派生動詞や、持続のなかにあることをあらわす「している」、こころみをあらわす「よんでみる」のような文法的くみあわせ動詞は、そのそれぞれが、基本的な語形表をもつという形で、2)でのべたこととかかわる。「よまれる」は、まずくよまれる、よまれない、よまれます、よまれませんの四つにわかれ、そのそれぞれが、くよまれる、よまれた、。。。よまれたってのように、狭義の語形変化をする。「よんでいる」も、くよんでいる、よんでいない、よんでいます、よんでいませんのように四つにわかれて、そのそれぞれが語形変化する。こうして、ひろい意味での語形が全体として一つの体系をきずきあげているのである。

文法的な派生動詞やくみあわせ動詞が表現手段となる動詞のカテゴリーには、

(注1) ムードに対応する文のカテゴリーは、モダリティといわれる。

(注2) 高橋太郎 1974

ボイス、アスペクト、やりもらい、もくろみなどがある。

ボイスは、動作の主体、客体、ひきおこし手などの動作メンバーと、主語、補語（対象語、目的語）などの文メンバーとのかかわりの表現に関するカテゴリーである。主体を主語にし、客体を補語にする能動（よむ）、客体を主語にし、主体を補語にするうけみ（よまれる）、ひきおこし手を主語にし、主体（客体）を補語にする使役（よませる）などがある。

アスペクトは、動作の、基準時間とかかわるすがたの表現に関するカテゴリーである。基準時間によって分割されない完成相（よむ）と、分割される継続相（よんでいる）がある。

やりもらいは、動作のサービスの性格に関するカテゴリーである。これにはボイス的な側面と境遇的な側面があり、前者では、「よんでやる」と「よんでくれる」の主語がサービスのほどこし手、「よんでもらう」の主語がサービスのうけ手である。また、後者では、「よんでやる」と「よんでもらう」の主語が話し手または話し手のがわのもの、あるいは、話題の中心として視点をおかれた聞き手または第三者であり、「よんでくれる」は、サービスのうけ手がそれらである。

もくろみは、一定の意図をもっておこなう動作の表現に関するカテゴリーで、こころみをあらわす「よんでみる」、みせびらかしをあらわす「よんでみせる」などがある。

このほか、「よまれる」「およみになる」などの尊敬や「およみする」「およみもうしあげる」などの謙譲も、文法的な派生動詞またはくみあわせ動詞である。

以上にあげたのは、代表的なものだけであって、それらの中間的なもの、複合的なものがいろいろとあって、それらが全体として体系をなしている。

また、そのほかに、「よみたい」「よみやすい」「よみそうだ」などの、文法的派生形容詞もあって、さらに複雑な体系をなしている。

こうしたものは、それぞれが一つの（広義の）語形であって、一定のカテゴリーのなかにあり、単語の文法的な形としての独立性をもっていて、単に助動詞の相互承接といった結合性だけでは記述しきれものではない点は、重要である。

第3節 アスペクト語形とテンス語形の パラダイム上の位置づけ

1) アスペクト動詞のテンス語形

完成相「よむ」と継続相「よんでいる」の対立は、狭義の語形変化の表のなかにはない。それは、語形づくりの手づきからいえば、もとの動詞と文法的くみあわせ動詞の対立だからである。このふたつの形式（広義の語形）は、それぞれ、完成相動詞、継続相動詞として、第2節の2) にしめしたような基本的な語形変化のパラダイムをもっている。そのいいおわり・のべたて・断定形の非過去形と過去形がこれらアスペクト動詞のテンス語形ということになるのである。

アスペクト動詞は、この基本的な語形表ぜんたいにひろがっていて、テンス語形にしばられているわけではない。たとえば、つぎのA)では、〈彼女がやってきた〉という動作が成立した時間は、〈店をあける〉という動作のおわったあとにあって、この動作を分割していないが、I)では、基準時間がこの動作の持続過程のなかにあって、これを分割している。

A) 彼が店をあけると、彼女がやってきた。

I) 彼が店をあけていると、彼女がやってきた。

このように、条件形をとっていても、完成相と継続相は対立しているのである。

アスペクト動詞は、いろんな機能やムードの形をとることができるのだが、この報告では、テンスとのかかわりあいを見ることに主眼があるので、アスペクト動詞のテンス語形にしばって、分析をこころみた。第1節にあげた八つの語形は、このようにして、もとめたものである。

2) ムードのなかにあるテンス

第2節の2) の基本的な語形変化の表にしめしたように、非過去形と過去形の「よむ」「よんだ」は、のべたて・断定形でもある。このことは、単にパラダイムの形式においてのみそうなのではなくて、文法的意味においてテンスはムードのなかにあるのである。

のべたて・断定形は、現実の動作をそのままとらえてつたえることを基本的な意味とするムード形式である。非過去形「よむ」と過去形「よんだ」の基本的なテンスの意味は、この基本的なムード的意味のなかで成立するのであり、そのムードの意味が基本的でなくなると、テンスの意味も影響をうける。たとえば、現実^(注1)に反することを仮想してのべるばあいには、未来の動作を過去形でのべることができる。

ウ) もしきみがなおしてくれなかったら、あした、おれは、まちがったままよんだよ。

この報告のなかでは、特別のばあいをのぞいて、このことにいちいち言及しないが、いつも、のべたて・断定形でもあるテンス語形のことについて記述しているのであって、その前提なしでのべているわけではない。

第4節 アスペクト動詞と局面動詞など

1) 局面動詞

動作の時間的な側面にかかわるカテゴリーとして、テンス、アスペクトのほかに局面がある。局面というのは、動詞のあらわす動作の過程のどの部分(局面)^(注1)であるかに関するカテゴリーである。「よみはじめる」はよむ動作をおこすことをあらわし、「よみおわる」はよむ動作をおわることをあらわす。このような観点から「しはじめる」「しだす」「しかける」「しつづける」「しおわる」などの文法的複合動詞を局面動詞としてとらえることができる。局面動詞は、アスペクト動詞とくらべて相対的に語意的な性格がつよく、ふつうの動詞と同様、「よみはじめる」と「よみはじめている」、「よみつづける」と「よみつづけている」のように、完成相と継続相に対立してアスペクト動詞となる。

従来のアスペクト研究では、継続相が一定の局面のなかにあるすがたをあらわすことと、局面動詞が局面をかたちづくる動作をあらわすことが混同されて、その区別があいまいであったが、奥田1978以後、局面動詞の研究がはじまっている。^(注2)

(注1) 山田小枝 1984は、これを「局相」とよんでいる。

(注2) 金田一春彦1955、高橋太郎1969、鈴木重幸1972、吉川武時1973なども、このあやまちをおかしている。現在、藤井由美による局面動詞の研究がすすめられているが、まだガリ版ずりの段階で、公刊されていない。

「してしまう」は、文法的くみあわせ動詞であるが、基本的な文法的意味の観点から局面動詞といえる。

2) 「していく」「してくる」「しておく」「してある」「しつつある」など

「していく」「してくる」などの文法的くみあわせ動詞は、現在の目の動作をあらわすとき、動作が進行過程のなかにあるすがたをあらわす（第II部第2章）。そのばあいには、「していく」と「していっている」が対立せず、進行相ともいうべきアスペクト的意味を実現しているとおもわれるが、この形式全体をとしてみたばあいには、アスペクト動詞といえないものが多い。

「しておく」も、「しておく」と「しておいている」の対立がなく、それ自身が完成相のような側面をもっているが、そのアスペクト的な性格は、まだ検討されていない。「してある」は、「しておく」とボイス的な対立をもっているようにみえるが、動作主体がしめされないので、ボイス的な対立とはいいいきれない。「してある」は状態持続のなかにあるという継続相アスペクトと共通する性格をもっているが、動作との関係がたちきられているので、アスペクトとはいえないだろう。

「しつつある」は、動作が運動の局面のなかにあるすがたをあらわす文法的くみあわせ動詞であり、その実現する意味の観点から、継続相のアスペクト動詞だということができる。けれども、それは、動作や変化が運動の局面のなかにあることを積極的にのべたときにだけつかわれる特殊な形式である。

第2章 分析の観点

この研究をすすめるにあたって、基本的になったたちは、あるいは留意した
だいじな点などについてのべておく。

第1節 アスペクトについて

1) 対立のたちば

金田一春彦1955は、現代日本語動詞のアスペクトを、「動作相」と「状態相」
の対立としてとらえた。しかし、その後、これをうけついで多くの研究は、「状
態相」のなかの進行の状態と結果の状態の対立に興味の中心をおいて、もとに
なる、おおきな対立のことをわすれがちであった。^(注1)この研究は、金田一1955が
提起した、アスペクトをめぐる二者の対立をみるたちばにもどるものである。

2) 形態論的な対立としての完成相と継続相^(注2)

金田一1955は、アスペクトを二者の対立としてとらえたが、それは、動作相
に属する諸形式と状態相に属する諸形式の対立であって、ひとつの動詞の形式
としての「する」と「している」の対立ではなかった。それはアスペクト的な
意味の観点からみた動作相グループと状態相グループの対立であって、パラダ
イムのなかの二形式の形態論的な対立ではなかった。その後、鈴木重幸1957は、
形態論的な対立として、「する」と「している」をうちだしたが、「する」の形
を「基本態」とよび、実質的には、その対立のありかたをとらえられなかった。
この形態論的な対立をアスペクト的な形式と意味の統一として、形態論的な対
立のかたちでとらえたのは、奥田靖雄1977であった。そこでは、「スル」と「シ
テイル」の形はそれぞれ「完成相」、「継続相」とよばれ、その基本的なアスペ
クトの意味は、前者が「ひとまとまりの動作をさしだすこと」「分割をゆるさな
いglobalityのなかに動作をさしだすこと」であり、後者は「継続のなかにある

(注1) 高橋太郎1969も、そのひとつである。

(注2) この項は、奥田靖雄1977の、これにかかわる記述を要約したものである。

動作をさしだすこと」であるとされた。

この研究は、このたちばにたつ。

3) アスペクト形式の、局面動詞からの分離

鈴木重幸1972は、「すがた」(アスペクト)をつぎのように解説している。

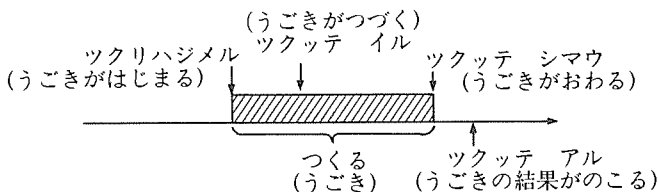
ここでいうすがたとは、ヨーロッパの文法論でいうアスペクト aspect をさす。動詞のあらわす動きは、ふつういくつかの過程的な部分からなりたっている。たとえば、「あるく」「およぐ」などは、動きのはじまり、持続部、おわりからなりたっているし、「しぬ」「こわれる」は、状態変化とその結果からなりたっている。動詞のすがたとは、おおまかにいって、動詞のあらわす動きのどの過程的な部分を取りたてて問題にするかという文法的なカテゴリーである。動詞のさししめす動きが文のなかであらわされるときには、一定のときになりたつ(なりたつた)ものとして表現されるが、その一定のときにおいて、動詞の語意的な意味のどの過程的な部分が問題にされているかをあらわすのがすがたのカテゴリーである。

日本語では、こうしたすがたをあらわすために、すがた動詞が発達している。こうしたすがた動詞のもとになる単純な動詞(「いる」「ある」「しまう」のようなたすける動詞とくみあわさっていないもの)は基本的には、動詞のさししめす動きの過程全体をあらわす。これに対して、すがた動詞は、その動きの過程的な部分を取りだしてあらわすのである。

(注) すがた動詞のもとになる単純なくみわたの動詞を、すがた動詞に対して単純態とよんでおく。

これは、あいまいないいかたをしているが、高橋太郎1979は、これをもっと局面動詞のほうへよせてしまっている。

動詞のあらわすうごきの過程のどの部分を問題にするかという、文法的な意味を「すがた (aspect)」という。



アスペクトをこのようなものとして、とらえたために、「している」の形は、「する」の形よりも、むしろ、「しはじめる」「してしまう」「してある」などと

ならべられ、対比された。

今回の研究では、アスペクト形式を局面をあらわす形式とは、きりはなして、動作の非分割と分割の対立としてとらえた。なお、アスペクトは局面と無関係ではないが、そのことは、5)でのべる。

4) 基準時間について

角張新治1976Aには、「時間的な中心」という用語をつかった、つぎのような記述がある。^(注1)

このように②の動詞^(注2)の単純相^(注3)が変化をあらわすのにたいして、これらの動詞の^(注4)アスペクト相は、ある時間的な中心において、主体が、動詞でさしめられる動きがつくりだす一定の状態にあることをあらわしている。

時間的な中心とは、その時間において主体がある一定の状態にあるような、時間的な点、幅のことである。

主体の一定の状態と時間的な中心とはある時間的な中心における主体の状態という関係において相関づけをうけている。

2) 修一郎がそこに入っていったとき、トシ子はジンジャエールをのんでいた。
(冬の旅・188)

3) しばらく二人は黙って山を歩いていた。(素足の娘・103)

そこに入っていったときがあらわす時間的な点において、主体はジンジャーエールをのむといううごきの継続の状態にあったのである。したがって、そこに入っていったときは、アスペクト相のんでいたにとって、ここでいう時間的な中心としてはたらいっている。

3) のばあい、しばらくがあらわす時間的な幅にわたって、主体は、うごきの継続の状態にあったのである。これも時間的な中心としてはたらいっている。

この、時間的な中心をまたいでいるかいないかということは、継続相と完成相を区別する重要な特徴であるので、今回の報告では、この概念をかりることにした。ただし、この報告では、この概念をふんだんにつかうので、ひょっとし

(注1) 角張新治は、奥田靖雄の講義をきいていた。奥田1977, 1978には「時間的な中心(テンポラルセンター)」の用語はないが、研究会の席上等で、以前から奥田が使用してきた用語であるので、奥田の影響があるとおもわれる。

(注2) 「②の動詞」というのは、「する」と「している」の両形をもつ動詞のことである。

(注3, 4) 角張1976Aは、「する」を「単純相」, 「している」を「アスペクト相」とよんでいる。

て角張1976Aやそのもとになった原書（В.Н. Жигadlo, И.П. Иванова, Л.Л. Иофик 1956 「Современный английский язык——теоретический курс грамматики——」Москва）の概念のはんいを逸脱するかもしれないとかがえ、それをおそれて、「基準時間」という用語をつくった。^(注1)

5) アスペクト的な意味の実現と、動作の局面

継続相は、持続過程のなかにあるすがたをあらわすのだが、それが、動作動詞のばあいと変化動詞のばあい^(注2)でことなる。前者では、動詞のあらわす動作過程のなかの運動の局面（動作の局面）のなかにあるすがたをあらわし、後者では、動詞のあらわす動作過程のなかの、結果の局面のなかにあるすがたをあらわす。どちらも持続過程をなす局面のなかにあるすがたをあらわす点でおなじなのだが、その、とりだす局面はちがっている。そうすると、継続相のあらわすアスペクト的な意味は、動詞のあらわす動作過程のなかの一定の局面をとりだして、その持続のなかにあるすがたをあらわす、あるいは、持続過程をなす局面が基準時間をまたいでいるすがたをあらわす、ということになる。このようなかたちで、継続相のアスペクト的な意味が実現するばあいに、局面がはいりこんでくる。

ところで、完成相のばあいのことなのだが、実は、こちらも、同様に局面をとりだしている。たとえば、「水道が2時にとまった。」と「2時から3時までとまった。」をくらべてみると、前者は、〈とまる〉という動作過程の変化の局面をとりだしているし、後者は、結果の局面をとりだしている。後者がとりだしている局面は、継続相をつかった「2時から3時までとまっていた。」のばあいと同じ局面である。では、完成相と継続相がおなじことをいっているかという、それはちがう。継続相が持続過程をなす結果の局面のなかにあるすがたをあらわしているのに対して、完成相は、結果の局面を、その始発から終了までをふくめて、まるごとのすがたであらわしている。^(注3)そうすると、完成相のば

（注1）筆者は、あえて異をとえなえるつもりはないので、もし、この報告における「基準時間」の概念が「時間的な中心」のはんい内におさまるならば、この新語をやめることにやぶさかでない。

（注2）この「動作動詞」と「変化動詞」の用語は奥田1977による。金田一1955の「継続動詞」と「瞬間動詞」にあたる。

（注3）この両者のちがいについては、第II部第1章第1節および第IV部第1章第1節でくわしくのべる。

あいも、動詞のあらわす動作過程の一定の局面をとりだして、それをまるごとのすがたでさしだすというほうが、より正確だということになる。

動作動詞のばあいにも、つぎのような例がある。

ア) 「うん」と信行はちょっとおじぎでもするようにうなずいてだまった。

ふたりはしばらくだまった。(暗夜70)

まえの「だまった」は、動詞のあらわす〈だまる〉という動作過程の始発の局面をとりだし、あとの「だまった」は、動作の局面をとりだしている。共通しているのは、どちらも、その局面の始発から終了までをまるごとのすがたでさしだしているということである。

完成相のばあい、おおくの例は、運動の局面（動作動詞の動作の局面、変化動詞の変化の局面）をとりだしているので、その始発から終了までをふくめて、まるごとのすがたでさしだすことは、結局は動作をまるごとさしだすことになるが、それでも変化動詞の変化の局面の終了の部分は結果の局面の始発と一致し、変化の局面をまるごとのすがたでさしだすことは、結果の局面の始発の部分のぞいた残りの持続の部分をきりすてることになるので、「変化の局面をとりだして、それをまるごとのすがたでさしだす」といったほうが、より正確になるだろう。

このようにみていくと、アスペクトは、動詞のあらわす動作過程のなかの一定の局面をとりだして、それを非分割または分割のすがたでさしだすものといういいかたが全体をおおうものとして、より適切だとかんがえられる。

この報告では、基本的にこのたちばをとり、その場その場に応じて、「動作またはその一定の局面を……」のように、ほかしてかくことにした。

6) アスペクト的な意味の限定と展開

アスペクトを非分割と分割の対立のなかでとらえ、そのアスペクトの意味が典型的にあらわれているものを、基本的なアスペクトの意味が実現しているものとしてあつめ、そのほかのものをアスペクト的な意味がずれているものとして、何種類かにわけた。たとえば、眼前の移動動作を完成相非過去形「いく」「くる」などであらわすものは、「進行過程のなかにあるすがたをあらわすもの」(第II部第2章)とした。また、「会はずでにはじまっていた。」のようなものは、「ある局面の完成後につぎの局面のなかにあるすがたをあらわすもの」(第III

部第3章)として、基本的なアスペクト的な意味の実現するものからはずした。

7) 状態の持続過程のなかにあること

継続相の形式をとりながら、動作、変化などの運動とかかわりをもたない状態をあらわす動詞がある。

イ) 山がそびえている。

ウ) 家のなかはひっそりしていた。

これらの動詞は、運動とかかわらず、また、したがって、動作過程の一局面でもない。アスペクトを、動作またはその一定の局面をどのようなすがたでさしだすかに関するカテゴリーであるとするとき、このような、動作とかかわらないものは、アスペクトからはずれることになる。これらのあらわす状態は、ふつうは、その始発と終了に無関心である。だから、まるごとというとなえかたと対立しない。この点でも、アスペクトから、はずれていることになる。

けれども、これらの状態は、基準時間をまたいで持続するという、継続相と共通する側面をもっている。その点でアスペクトの側面をもっているということが出来る。そのことは、つぎのように、状態性をもたず、非分割と分割が問題にならないもの(これはアスペクトから解放されている。)とくらべると、ひとつの特徴となる。

エ) かれのはなしはばかげている。

オ) むすこの誕生日と父の命日が一致していた。

この報告では、状態の持続過程のなかにあることをあらわすものを、準アスペクトとよぶ。これにもいろいろのものがある。(第II部第3章、第III部第4章)

8) アスペクトからの解放(1)——modusの要素のあるもの

「おもう」「かんがえる」「感じる」などの完成相非過去形で一人称の心的活動をのべるとき、あるいは、二人称の現在の心的活動をたずねるとき、アスペクトから解放される。

カ) わたしはこれでよいとおもう。

キ) おまえもそうかんがえるか。

これらはテンスのうえで現在のことをあらわしているが、それが話しの時という基準時間にまるごとおさまっているのか、それとも、基準時間をまたいで

いるのかということに無関心である。

アスペクトは、テンス、ムードからみれば対象的であって、その意味では、相対的に語法的なものにちかい。つまり、動作のすがたを名づけているのである。ところが、「おもう」「感じる」など一人称の心的活動をはきだすときには、（あるいは、二人称の心的活動をはきださせるときには、）〈「おもう」と言う〉という言語活動そのものと〈おもう〉という活動の内容とが未分化であって、完全に対象化できない。つまり、modusの要素とdictumの要素が未分化で、対象化できないのである。（第II部第4章第1節）

なお、一人称であっても、過去の「おもった」「感じた」などや、継続相の「おもっている」「かんがえている」などのばあいには、心的活動の内容が活動の時間のそとにあって、対象化できるので、それらは、基本的なアスペクト的意味を実現する。

心理活動とかかわるうごきにはいくつかの種類があって、それらが、いろんなかたちで、また、いろんななどあいで、アスペクトの成立をさまたげている。こうしたことについても考察した。

9) アスペクトからの解放(2)——できごと過程のなかにはない属性をあらわすもの

文の名づけ的な意味において、述語ができごと過程のなかにはない属性をあらわすばあい、アスペクトから解放される。

名詞述語文は、その典型である。

ク) クジラは動物である。

ケ) これはペンです。

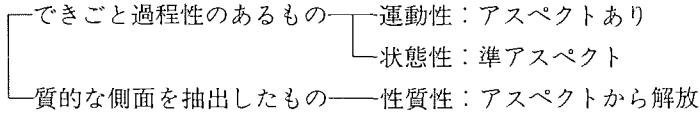
形容詞述語文のばあい、その述語が状態をあらわすばあいには準アスペクトの意味をもつが(コ)、性質をあらわすばあいには、アスペクトから解放される(サ)。

コ) へやへはいると、まっくらだった。

サ) にげたさかなはおおいかった。

動詞述語文であっても、その動詞が述語として動作や状態などのできごと過程のなかにはない属性をあらわすばあいには、アスペクトから解放される。これには、1) にあげたエ) やオ) のように継続相の形式をとるものと、つぎのシ) のように完成相の形式をとるものがある。（第II部第4章第2節、第III部第5章）

シ) 精神は性格とことなる。



動詞が動作性をうしなって形容詞やコピュラにちかづく、脱アスペクト化してくる。完成相形式にも継続相形式にもこれがある。

ス) あれは敬服にあたいする。

セ) それはおひとによります。

ソ) きんのうの彼の発言は当を得ている。

形式的に完成相と継続相が対立していても、どちらにしても、意味的にはアスペクトから解放されているものもおおい。

タ) 秀吉は子どものころ日吉丸といった。(いっていた。)

チ) かれの怒号は、もうれつをきわめていた。(きわめた。)

完成相が「よく」でかざられたばあい、可能動詞になってあらわれるばあいなども、形容詞にちかづくものがある。

ツ) かれはよくたばこをすう。

テ) この草はたべられる。

述語をかたちづけている動詞が、単語の意味のレベルで動作そのものをあらわしていても、述語のレベルで、その動作のできごと過程的な側面を捨象して、その特徴的な面だけをひっぱりだしてのべると、できごと過程のなかにない属性をさししめすことになって、アスペクトから解放される。(第II部第4章第3節)

ト) 「この本、しってるか。」「いや、はじめてみる。」

ナ) 「ここで負けたら、もうやるな。」「きついことをいうね。」

これらの「みる」や「いう」は、一定の動作をあらわすという、動詞的な意味が、りっぱにいきている。ところが、これらの文は、動作・できごとからひっぱりだした特徴的な側面をあらわして、「みるのは、はじめてだ」、「いうことがきつい」と同じ価値をもった発言となっている。このため、できごと過程の側面とかかわるアスペクトから解放されている。

これらは、つぎの例と同様、はなしの内容は直前過去のことであり、過去形にすると、完成相としての基本的なアスペクトの意味がでてくる。

二) こらっ、またわらう!

過去のことで、非過去形でいえるのが特徴でもある。

ヌ) 「あいつ、とうとう自分で会社をつくったよ。」「そうか。さすがにあいつらしいことをする。」

準アスペクトと脱アスペクトを区別したのは、この報告がはじめてであるともう。この報告では、動詞がアスペクトやテンスから解放される現象には、^(注)とくに目をむけた。

第2節 テンスについて

1) 形態論的な対立としての非過去形と過去形

現代日本語の動詞は、テンスの面で、「する」と「した」に対立するが、このことは、伝統的な国文法では、とりあつかわなかった。なぜなら、「した」は、「し」と「た」にわけ、「た」を助動詞として、動詞からきりはなしてしまったからである。それでも、「た」については、過去あるいは完了の助動詞として、まがりなりにも、そのテンス的性格の一端をとらえていたが、助動詞のつかない「する」のほうは、そのテンス的性格にまったくふれられなかった。

こうしたなかで、金田一春彦1950, 1955が「する」と「した」をそれぞれひとつの単位とみて、それをテンスの面に対立させたことは画期的であり、テンス研究の出発点となった。金田一1955は、「動作相」のテンスを「完了態」と「完了態」の対立をとらえ、「状態相」のテンスを「非過去態」と「過去態」の対立としてとらえたのであった。

その後、教科研1963は、「する」と「した」を、動詞の形態論的な形として、パラダイムのなかに位置づけた。今回の報告は、このたちばになつ。

完成相の「する」と「した」のテンス的な意味の記述は、鈴木重幸1965, 1979にかなりくわしいものがみられ、今回の報告も、基本的に、それによるところがおおきい。

2) 絶対的テンスと相対的テンス

テンスは、発話時を基準にした、動作や状態の時間位置のあらわしかたに関

(注) 動詞の非動詞化は、高橋1974, 1983A, Cなどで追求されたものとつながる。

するカテゴリーである。これは、テンスの基本なのだが、テンスのなかには、一定時を基準にした時間位置をあらわすもの、つまり相対的テンスがある。日本語のテンスをすべて以前、以後、同時という相対的テンスで説明するのは、もちろんあやまりであるが、いいおわり形のテンスについても、一定時以前という相対的テンスでとらえたほうがよいとおもわれるものがある。こうしたことについても考察した。(第3節参照)

3) ムードのなかにあるテンス

第1章第2節の2)のパラダイムにしめたように、テンス語形はムード語形のなかにある。これが単に形式上の位置づけでなく、意味的にもテンスをムードのなかでとらえなければならないことは、第1章第3節2)でのべたとおりである。そこでは、反実仮想のばあい^(注)にふれたが、決定の表現や発見、確認、おもいだしのばあいなどについても、ムードによるテンスの変容がみられる。(第V部第5章、第VIII部第4章)

完成相非過去形が未来の動作をあらわすことは、現実をとらえてそのままつたえるという、のべたて断定形のムード的な性格と矛盾する。このばあいのことについても(第IV部第2章第1節、第3節)考察した。

4) アスペクトとテンス

完成相と継続相では、非過去形と過去形とのテンス的な対立のありかたがことなる。完成相のばあいは、未来と過去の対立となり、継続相のばあいは、現在と過去の対立となる。この事実については、金田一1955が動作相と状態相のテンスのありかたのちがいについてのべて以来ずっといわれてきた。

完成相非過去形がアクチュアルな現在をあらわすことができないのは、発話時という瞬間のなかに、動作をまるごとのすがたでおさめることができないからである。つまり、完成相非過去形が現在をあらわせないというテンス上の法則は、それが動作をまるごとのすがたであらわすというアスペクト上の法則に

(注) 奥田1977は、つぎのようにのべている。「suru というアスペクチュアルなカタチが表現するアスペクチュアルな意味は、基本的には、《分割をゆるさない globality のなかに動作をさしたす》ことである。このように理解しなければならない根拠は、なによりもまず、suru という完成相の動詞は、その現在形において、《アクチュアルな現在》をあらわすことができないという事実にある。

よっておこっているのである。

完成相の意味が実現していても、発話時のなかにおさまるような瞬間的な動作であれば、現在の動作をあらわすことができるし、また、完成相の形式をとっていても、「いく」「くる」のようにアスペクト的な意味がずれていたり、「おもう」のようにアスペクトから解放されていたりすれば、やはり現在の動作をあらわすことができる。(第IV部第3章) 一方、継続相非過去形が現在をあらわすといっても、持続過程の両はしのしめされた「展覧会は、先週から来週までひらかれている。」のようなものは成立しない。(第VII部第1章第2節) こうしたことは、アスペクト的な意味がテンスのありかたと密接にかかわっていることを証拠だてている。

つぎの二つは、どちらも、ひろげられた現在のはばのなかで成立することがらをあらわしている。

ア) わたしは、このごろ毎日八時間ねます。

イ) 彼女は、大学につとめている。

けれども、この動作のあらわれかたはちがっている。ア) のばあいには、動作は断続的におこっている。そして、これを話しているときは、その動作は実現していない。それに対して、イ) はその動作はひとつの持続過程としてつながっていて、はなしているときも、その持続のなかにある。なぜそうなるのかというと、完成相非過去形が現在のアクチュアルな動作をあらわせないのに対して、継続相非過去形は、現在から両方にのびた、ひらかれた持続過程のなかにあることをあらわすからである。このことは、完成相のばあいには「ひろげられた現在」というものがもっている「現在」との差異を、継続相のばあいにはもっていないということである。継続相のばあいには、ただの「現在」と「ひろげられた現在」が質的なちがいをしめさないものである。(第VII部第1章第3節)

この報告では、いつもアスペクトと関連させながら、テンスについて記述した。

5) 現在点の精密度

いまうえにみたように、現在という時間のはばは、継続相非過去形にくらべて、完成相非過去形のばあいには、はるかにきびしいものとなっている。完成相非過去形であっても、アスペクトから解放されると、精密度がゆるくなる。つ

ぎのようなばあい、テンスから解放されているというよりも、はばのややひろがった現在のことをのべているといったほうがよいだろう。(第IV部第4章第2節)

ウ) これこれ、また大きな声をだす。

エ) 「これ知ってますか。」「いや、はじめてみます。」

実況放送のようなばあいは、刻々のうごきをつたえるので、現在点が精密になってくるが、極度に精密になったばあい、非過去形と過去形で現在点の位置がちがってくる。非過去形のばあいは、発話の始発から終了までが現在点であり、過去形のばあいは、発話の終了時が現在点となる。(第V部第1章第1節4))

オ) とりました。一るいへおくります。

カ) ライトかまえています。とりま——した。

おおざっぱに発話時を現在というといっても、その現在はばをどの程度の精密さと解釈するかによって、テンス的な意味の理解がちがってくるので、必要なばあいには、精密さの概念をいれて記述した。

6) テンスからの解放

完成相と継続相の非過去形は、テンスから解放されることがある。

たとえば、なりたつ時間に関係のない命題のなかでの動作や質的属性は、テンスから解放される。

キ) 恋というものは、人間をわかくする。(河明300)

ク) 芸術はこれとことなる。(むら14)

ケ) このまよいのために、死をはやめるのはばかげている。(野火61)

また、過去のものごとの質的属性を非過去形であらわすものも、テンスから解放されている。

コ) しかし、今までのところ、各文化層の測定数値の序列は、考古学的判断ともだいたい一致している。(学問253)

サ) おれたちは、おなじ日にうまれたのだが、うまれた時刻はちがう。

テンスからの解放とアスペクトからの解放は、同時にあらわれることもあるし、かたほうだけがあらわれることもある。だから、その両者をつきあわせながらしらべた。

7) コンスタントな属性をあらわすもの

「山がせまっている」「線路がはしっている」のように、コンスタントな質的属性をあらわすものは、現在から両方にひろがっている点において、現在とつながっているが、また、いつでもそうだということは、過去、現在、未来というテンスから解放されているともいえる。これは、たぶん両者の中間にあるのだろう。

風景のもっているコンスタントな質的属性は、紀行文のなかなどでは、「山がせまっていた」「線路がはしっていた」のように、過去形でかかれることがある。ところで、その質的属性が現在でも持続していることがあきらかであるようなばあいには、その過去形は、発見のニュアンスがつく。このあたりに、継続相の過去形と発見の関係をむすぶかぎがあるようにおもえたので、そのことについても考察した。(第VIII部第3章第1節)

第3節 完成相の分析的テンス形式に 相当する継続相形式

1) 前非過去形と前過去形に相当する「している」と「していた」

高橋太郎1975は「『していた』の経験・記録をあらわす用法は、大過去と接しているともいえる」とかいているが、「している」「していた」という形式は、一定の時以前に、動詞のあらわす動作がまるごとのすがたで完成したというテンス、アスペクトの意味を実現する形式としてはたらくことがある。つまり、アスペクト的には完成相の意味を、テンス的には、相対的テンスとしての以前の意味をあらわすテンス形式としてはたらくのである。分析的テンス形式というのは、「して」と「いる」という二単語でつくられたテンス形式という意味である。これは、意味的には完成相のテンスをあらわしているが、形式は継続相動詞というアスペクト形式をとっているので、うえのように名づけたのである。(第VI部)

〔前非過去形に相当する形〕

ア) むすこはすでに大学を卒業している。……現在以前に完成(前現在)

イ) わたしが死ぬまえに、むすこは大学を卒業している。

……未来の一定時以前に完成(前未来)

〔前過去形に相当する形〕

ウ) わたしが定年になるまえに、むすこは大学を卒業していた。

……過去の一定時以前に完成（前過去）

2) 現在以前の動作やできごとの質化

現在以前の動作をあらわす「している」が、脱アスペクト化して、過去の動作やできごとの特徴的な側面をひっぱりだしてのべる文となったものがある。

エ) 昨年の夏の大会は、A校が優勝している。

オ) 彼は三年まえに一度離婚している。

このようになると、過去のできごとの質的な属性をのべることになるので、テンスから解放されたことになる。これにテンスをあたえて過去形にかえても、さしめすことがらはかわらない。

カ) 昨年の夏の大会は、A校が優勝していた。

キ) 彼は三年まえに一度離婚していた。

こうしてできた（テンス・）アスペクトから解放された記録の用法は、実況放送の事後の解説にさかんにつかわれる。

ク) ファール。バットのさきをかすめています。

ケ) ファール。バットのさきをかすめていました。

3) 非現実の仮定のばあいのテンスの諸形式

動詞は、「する」「した」「している」「していた」などの、いろいろの形になって、非現実の仮定の帰結の述語につかわれる。この四つの形は、形式的には、前二者が完成相、後二者が継続相であるが、そのはたらきからみると、この後二者は、この節でのべている用法のものである。このようにとらえることによって、アスペクト的な意味をかえない諸テンス形式がムードによって変容したものととらえることができる。つまり、アスペクトとは関係なく、ムードとテンスの関係として、とらえることができるのである。

コ) おまえがもし知らせてくれなかったら、おれ、あしたいくよ。

サ) おまえがもし知らせてくれなかったら、おれ、あしたいったよ。

シ) おまえがもし知らせてくれなかったら、おれ、あしたいってるよ。

ス) おまえがもし知らせてくれなかったら、おれ、あしたいってたよ。

第3章 用例のための資料

基本資料として、つぎのリストの作品のそれぞれ一定量のページから使用例を採集した。また、必要におうじて、このリストの作品以外からも採集した。それらについては、使用例のあとに作者と作品の名をフルネームでだした。

なお、使用例のかなづかいは、すべて現代かなづかひにあらため、また、漢字は、なるべくかなになおした。そのため、読点をおぎなったものもある。

1) 文学作品

(年代)	(作家名)	(作品名)	(出典)	(略号)
1898	国木田独歩	武蔵野	岩波文庫	武蔵
1900	泉鏡花	高野聖	〃	高野
1901	徳富健次郎	思出の記(上)	〃	思出
1906	伊藤左千夫	野菊の墓	〃	野菊
1906	島崎藤村	破戒	〃	破戒
1907	田山花袋	蒲団	〃	蒲団
1907	二葉亭四迷	平凡	〃	平凡
1910	長塚節	土(上)	〃	土
1913	森鷗外	阿部一族	〃	阿部
1913	有島武郎	或る女(前)	〃	或る
1913	鈴木三重吉	桑の実	〃	桑の
1914	夏目漱石	こころ	〃	ここ
1915	徳田秋声	あらくれ	〃	あら
1915	芥川竜之介	羅生門	〃	羅生
1916	倉田百三	出家とその弟子	〃	出家
1917	佐藤春夫	田園の憂鬱	〃	田園
1917	久保田万太郎	末枯	〃	末枯
1919	菊池寛	恩讐の彼方に	〃	恩讐
1919	武者小路実篤	友情	〃	友情
1921	志賀直哉	暗夜行路	〃	暗夜

1921	滝井 孝作	無 限 抱 擁	新潮文庫	無限
1922	長与 善郎	青銅の基督	岩波文庫	青銅
1923	宇野 浩二	子を貸し屋	新潮文庫	子を
1923	正宗 白鳥	生まざりしならば	"	生ま
1923	里見 弴	多情仏心(前)	岩波文庫	多情
1926	宮沢 賢治	銀河鉄道の夜	"	銀河
1926	宮本百合子	伸子 (上)	"	伸子
1928	山本 有三	波	"	波
1929	小林多喜二	蟹 工 船	"	カニ
1929	徳永 直	太陽のない街	"	ない
1930	林 芙美子	放 浪 記	新潮文庫	放浪
1930	横光 利一	機 械	"	機械
1930	野上弥生子	真知子(前)	岩波文庫	真知
1931	永井 荷風	つゆのあとさき	"	つゆ
1933	尾崎 一雄	暢 気 眼 鏡	新潮文庫	暢気
1934	室生 犀星	あにいもうと	"	あに
1935	高見 順	故旧忘れ得べき	"	故旧
1936	佐多 稲子	く れ な い	"	くれ
1936	阿部 知二	冬 の 宿	岩波文庫	冬の
1937	川端 康成	雪 国	"	雪国
1937	島木 健作	生活の探究	新潮文庫	生活
1938	中山 義秀	厚 物 咲	"	厚物
1938	堀 辰雄	風 立 ち ぬ	岩波文庫	風立
1938	舟橋 聖一	木 石	新潮文庫	木石
1939	岡本かの子	河 明 り	"	河明
1940	織田作之助	夫 婦 善 哉	"	夫婦
1943	中島 敦	李 陵	"	李陵
1947	丹羽 文雄	厭がらせの年齢	"	厭が
1948	大仏 次郎	帰 郷	"	帰郷
1948	田宮 虎彦	落 城	"	落城
1949	円地 文子	女 坂	"	女坂

1949	小林 秀雄	私の人生観	角川文庫	私の
1949	井上 靖	闘 牛	新潮文庫	闘牛
1950	獅子 文六	自由学校	〃	自由
1950	井伏 鱒二	本日休診	〃	本日
1951	大岡 昇平	野 火	〃	野火
1952	野間 宏	真空地帯(上)	岩波文庫	真空
1952	伊藤 整	火 の 鳥	新潮文庫	火の
1954	三島由紀夫	潮 騒	〃	潮騒
1954	中野 重治	むらぎも	〃	むら
1955	石原慎太郎	太陽の季節	〃	季節
1959	石川 達三	人間の壁(上)	〃	の壁

2) 論説文など

(作品年代)	(執筆者)	(作品名)	(出典)	(略号)
1916	河上 肇	貧 乏 物 語	岩波文庫	貧乏
1929	出 隆	哲 学 以 前	新潮文庫	哲学
1920~41	三木 清	人生論ノート	〃	人生
1919~22	阿部 次郎	人 格 主 義	角川文庫	人格
1950	笠 信太郎	ものの見方について	〃	もの
1937	石原 純	社会事情と科学的精神	現代日本思想大系25・科学の思想Ⅰ(筑摩書房)	社会
1946	武谷 三男	革命期における思惟の基準	〃	革命
1948	湯川 秀樹	物質世界の客観性について	〃	物質
1947	坂田 昌一	原子物理学の発展とその方法	〃	原子
1936	長岡半太郎	総長就業と廃業	〃	総長
1948	渡辺 慧	原 子 党 宣 言	〃	宣言
1961	梅棹 忠夫	高 崎 山	現代の教養6・学問の前線(筑摩書房)	高崎

1965	小尾 信弥	宇宙の謎はどこまで解けたか	現代の教養6・ 学問の前線 (筑摩書房)	宇宙
1964	藤田 信勝	物質の根源と 宇宙を結ぶ	"	根源
1965	高瀬 良夫	生命の暗号を 解く	"	暗号
1965	柴谷 篤弘	生命の謎はどこまで解けたか	"	生命
1964~65	朝日新聞学 芸部	学 問 の 動 き	"	学問
1965	藤森 栄一	旧石器の狩人	"	旧石
1966	関 つとむ	未知の星を求めて	"	未知
1966	渥美 和彦	人工心臓を体内に	"	人工

3) シナリオ

シナリオ作家協会編「年鑑代表シナリオ集」

(年代)	(脚本作者)	(作品名)	(略号)
1971	東 陽一・前田 勝弘	やさしい日本人	やさ
"	土本 典昭	水俣 患者さんとその世界	水俣
"	鈴木 尚之	婉という女	婉と
"	森崎 東・熊谷 勲	女生きてます	女生
"	藤田 敏八・峰尾 基三	八月の濡れた砂	八月
"	今子 正義・伊藤 昌洋	遊び	遊び
"	山田 洋次・朝間 義隆	男はつらいよ 寅次郎恋歌	寅次
1972	石森 史郎	約束	約束
"	長谷部慶次・熊井 啓	忍ぶ川	忍ぶ
"	神波 史男・松田 寛夫	女囚七〇一号 さそり	女囚
"	石森 史郎	旅の重さ	旅の
1973	別役 実	戒厳令	戒厳
"	橋本 忍	人間革命	間革
"	松田 昭三	時計は生きていた	時計
"	土方 鉄	狭山の黒い雨	狭山
"	中島 丈博・斉藤 耕一	津軽じょんがら節	津軽
"	橋本 忍	日本沈没	日本

1974	山田 信夫	華麗なる一族	華麗
"	原 一男	極私的エロス・恋歌1974	極私
"	内田 栄一	妹	妹
"	新藤 兼人	わが道	わが
"	橋本 忍・山田 洋次	砂の器	砂の
"	長谷川和彦	宵待草	宵待
"	寺山 修司	田園に死す	死す

引用例の略号のあとにそえた数字は、2 作品をのぞいて場面番号である。「やさしい日本人」と「田園に死す」は、場面番号がなかったので、「P」をそえてページをかきいれた。

4) 録音資料（ラジオの実況放送）

(種 類)			(略号)
プロ野球	阪神—広島	1981. 4. 8.	神広
"	巨人—阪神	1981. 4. 10.	巨神
選抜高校野球	1981. 4.		81
大相撲夏場所	1981. 5.		5 月
" 名古屋場所	1981. 7.		7 月
東京競馬	1981. 11. 8. 6 R~11R		○R

第4章 参考文献

引用した文献，直接参考にした文献は，つぎのとおりである。

- 荒井孝一[※]1984「酒田方言の動詞のアスペクト」(日本方言研究会報告5.18.)
- 奥田靖雄 1977「アスペクトの研究をめぐって——金田一的段階——」(宮城教育大学『国語国文』8)[松本1978にある]
- 1978「アスペクトの研究をめぐって(上)・(下)」(『教育国語』53・54)
- 角張新治[※]1976A「動詞のアスペクト〈～していた〉」(言語学研究会報告1.29.)
- 1976B「動詞のアスペクトNo.2」(言語学研究会報告9.16.)
- 教科研東京国語部会・言語教育研究サークル 1963『文法教育——その内容と方法——』(むぎ書房)
- 1955「日本語動詞のテンスとアスペクト」(『名古屋大学文学部研究論集』X〈文学4〉)[金田一1976にある]
- 金田一春彦編 1976『日本語動詞のアスペクト』(むぎ書房)
- 工藤 浩 1982「叙法副詞の意味と機能——その記述方法を求めて——」(国立国語研究所報告71『研究報告集』3 秀英出版)
- 工藤真由美[※]1976「宇和島方言のヨルとトル」(東京大学大学院レポート)
- 1982「シテイル形式の意味記述」(武蔵大学『人文学会雑誌』13—4)
- 1983「宇和島方言のアスペクト(1)」(『国文学解釈と鑑賞』48—6)
- 鈴木重幸 1957「日本語動詞のすがた(アスペクト)について——～スルの形と～シテイルの形」(言語学研究会報告)[金田一1976にある]
- 1965「現代日本語動詞のテンス——言いきりの述語に使われたばあい——」(国立国語研究所『ことばの研究』2 秀英出版)
- 1972『日本語文法・形態論』(むぎ書房)
- 1977「日本語文法形態論の問題点」(『教育国語』51)
- 1979「現代日本語の動詞のテンス——終止的な述語につかわれた

- 完成相の叙述法断定のばあい——」(言語学研究会編『言語の研究』むぎ書房)
- 1983 「形態論的なカテゴリーとしてのアスペクト」(『金田一春彦博士古稀記念論文集 第一巻 国語学編』三省堂)
- 須田一郎 1979[※] 「日本語動詞のアスペクト・テンス——のべたて法・いいきりのばあい——」(言語学研究会報告8.20.)
- 高橋太郎 1969 「すがたともくろみ」(教育科学研究会国語部会文法講座テキスト)[金田一1976にある]
- 1974 「連体形のもつ統語論的な機能と形態論的な性格の関係」(『教育国語』39)[松本1978にある]
- 1975 『幼児語の形態論的な分析——動詞・形容詞・述語名詞——』(国立国語研究所報告55 秀英出版)
- 1983A 「動詞の条件形の後置詞化」(渡辺実編『副用語の研究』明治書院)
- 1983B 「スルともシタともいえるとき」(『金田一春彦博士古稀記念論文集 第一巻 国語学』三省堂)
- 1983C 「構造と機能と意味——動詞の中止形(～シテ)とその転成をめぐる——」(『日本語学』VOL.2—12)
- 寺村秀夫 1971 「‘タ’の意味と機能——アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ——」(岩倉具実教授退職記念論文集出版後援会編『言語学と日本語問題』くろしお出版)
- 藤井 正 1966 「『動詞+ている』の意味」(『国語研究室』〈東大〉5)[金田一1976にある]
- 藤井由美 1978～1984[※] 「すがたをあらわすあわせ動詞」78.11.30.,「局面動詞～はじめる.～だす.～かける.」79.3.15.,「局面動詞 ～はじめる」6.21.,「局面動詞」9.20.,「局面動詞 ～つづける」80.3.13.,「局面動詞 ～おわる」6.19.,「局面動詞——～はじめる——の意味について」82.11.18.,「——局面動詞——『～つづける』について」83.11.24.,「局面動詞 『～つづける』と『～シテイル』の《継続性》をめぐる」1984.2.9.(以上,言語学研究会報告)
- 松本泰丈編 1978 『日本語研究の方法』(むぎ書房)

- 三上 章 1953 『現代語法序説——シンタクスの試み——』（刀江書院）
- 山田小枝 1984 『アスペクト論』（三修社）
- 吉川武時 1973 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」（『Linguistic Communications』〈Monash大〉9）〔金田一1976にある〕

なお※印は、ガリ版ずりプリントである。

第II部 完成相のアスペクト

現代日本語動詞は、アスペクトのカテゴリーをもち、完成相と継続相に対立する。^(注1)そして、その両形式は、さらにテンスによって非過去形と過去形にわかれる。このことによって、動詞は、アスペクト・テンスの観点から、つぎの四つの語形をもつことになる。

テンス アスペクト	非過去形	過去形
完 成 相	する	した
継 続 相	している	していた

この第II部は、完成相の語形「する」と「した」のアスペクト的性格について記述するものである。「完成相」という名づけは、この二つの語形の基本的なアスペクトの意味にもとづいておこなわれたものであるが、これは、この形式を名づけた用語であって、派生的な意味になるばあいも、形式としては完成相である。^(注2)したがって、この部では、完成相の形式である「する」と「した」がもつ、いろんなアスペクト的性格についてのべることになる。

第1章 動作のまるごとのすがた

第1節 完成相の基本的な意味

1) 「まるごと」の意味

完成相の基本的な意味は、動詞のあらわす動作(広義)、または、その一定の局面を、分割することなく、始発から終了までふくめて、まるごとのすがたでさしだすことである。完成相は、動詞のあらわす動作過程の運動または結果の局面をとりだして、その局面のなかにあるすがたをあらわす継続相と対立する。

(注1) 完成相と継続相の名づけと、そのとらえかたは、奥田靖雄1977にしたがった。

(注2) 金田一春彦1955は、アスペクトの意味に名づけられているので、記述の体系がことになっている。

たとえば、ア)の「はしった」は、はしりはじめてからはしりおわるまでの全動作過程を、分割することなく、まるごとのすがたでさしだしているが、イ)の「はしっていた」は、はしりはじめてからはしりおわるまでのあいだつづいた持続過程のなかのどこかにあったことをあらわしている。

ア) 太郎はさっき運動場をはしった。

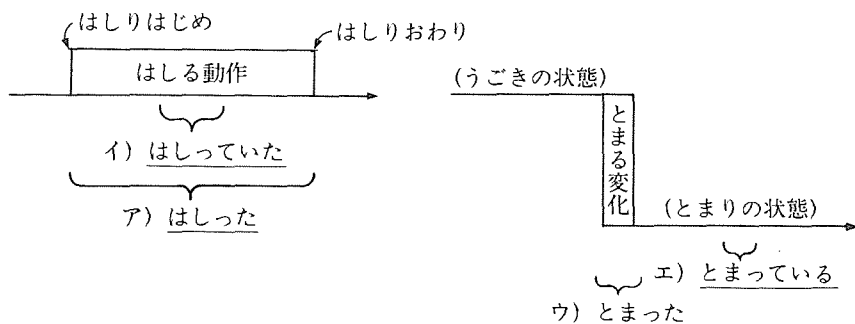
イ) 太郎はさっき運動場をはしっていた。

また、ウ)の「とまった」は変化過程をまるごとあらわしているが、エ)の「とまっている」は、その変化のあとに生じた結果である持続過程をなす局面のなかのどこかにあることをあらわしている。

ウ) とけいがとまった。

エ) とけいがとまっている。

動作動詞のばあい、継続相であらわされるすがたは、完成相のあらわす全過程のなかにふくまれている。「はしっていた」がとりだしているのは、はしりはじめよりあとであり、はしりおわりよりまえである。この点で、「まるごと」といういいかたの意味がとらえやすい。それに対して、変化動詞のばあいは、完成相であらわされる部分と継続相であらわされる部分がはなれているので、「まるごと」ということがとらえにくい。

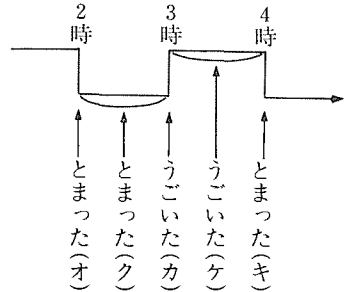


けれども、変化動詞のあらわす語的な意味は変化過程であり、この完成相「とまった」は、その変化のはじまりから変化のおわりまでをすべてふくんでおり、「変化をまるごとのすがたでさしだす」ということもできる。

2) 局面のとらえかたによる多義性

完成相の動詞は、一定の環境（文、文脈、場面）のなかで、動作の特殊な局面をさしだすことがある。このため、完成相の動詞がさししめすことがらが、局面の点で多様になることがある。

- オ) とけいが2時にとまった。
 カ) 3時にうごいた。
 キ) 4時にまたとまった。
 ク) とけいが2時から3時までとまった。
 ケ) 3時から4時までうごいた。



このうち、オ), カ), キ) は変化の局面をさししめしているが、ク) とケ) は、持続過程をなす局面をさししめしている。この点で、「とまった」も「うごいた」も、とらえる局面によって多義的になるといえる。「とまった」のばあいには、オ) やキ) では変化の局面が、ク) では結果の局面がとりだされており、「うごいた」のばあいには、カ) では始発の局面が、ケ) では運動の局面がとりだされている。

このことについては、鈴木重幸1983もとりあげ、つぎのようにのべている。

変化動詞のうちのあるタイプでは、完成相は、あたらしい状態への変化(a)と、そうした変化およびその結果の維持(b)とをそれぞれひとまとまりの変化としてあらわすことができる。

- a 赤ちゃんがやっとねむった。
 もうすぐ赤ちゃんがねむる。
 b 赤ちゃんが三十分ねむった。
 赤ちゃんはあしたまでねむるよ。

これらのちがいは、文や連語のレベルで、また、文脈、場面によってしめされる。そして、その「変化動詞のうちのあるタイプ」には注があって、つぎのようにのべている。

注 「(車に) のる、すわる、たつ、ねる (=横になる/ねむる)、こしかける、よりかかる、しゃがむ、……ねむる、…… (手に) もつ、にぎる、ぶらさがる、…… (花が) さく、……」などの類 (鈴木1979十三ページ参照)。

鈴木1983のあげたものよりは、もうすこし一般的なかたちで局面のとりだしかたによる多義性をとりあげることができるだろう。

3) 「2時から3時までとまった」と「とまっていた」のちがいは

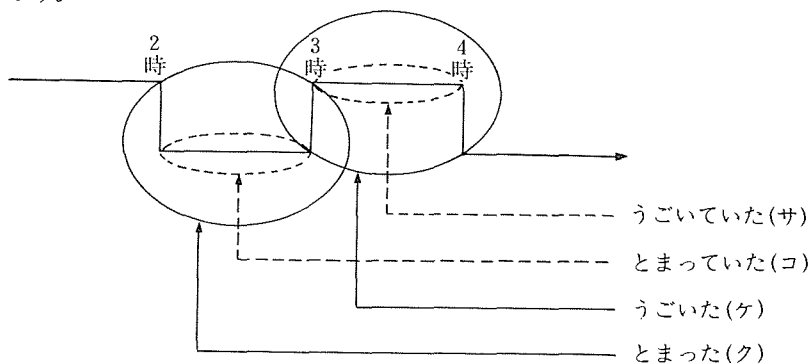
うえのク) やケ) のように持続過程をなす局面をとりだすばあいには、それがさしめす事実を継続相でいうこともできる。

コ) とけいが2時から3時までとまっていた。

サ) とけいが3時から4時までうごいていた。

同様に、鈴木のものも、「ねむっていた」「ねむっているよ」といいかえることができるだろう。

けれども、こうした持続過程をなす局面をとりだすばあいの完成相と継続相は、おなじアスペクトの意味をあらわしているのではない。完成相のばあいは、その持続過程をなす局面の始発と終了をふくめてまるごとのすがたであらわすのであり、継続相のばあいは、その両はしをふくまず、その両はしにはさまれた時間のなかにあるすがたをあらわすのである。これを図にすれば、完成相は実線にかこまれた部分を、継続相は点線でかこまれた部分をあらわすことになるだろう。



おなじく「2時から3時まで」といっても、ク) は $(2 - \frac{1}{\infty})$ 時から $(3 + \frac{1}{\infty})$ 時までであり、コ) は $(2 + \frac{1}{\infty})$ 時から $(3 - \frac{1}{\infty})$ 時までであるともいえる。さきにひいた鈴木1983が「そうした変化およびその結果の維持(b)」とかれているが、その「そうした変化」というのは、その結果の局面の始発のことを意味するのである。

このコ) やサ) のように継続相がつかわれたばあいは、その状態が、そのあいだじゅうずっとつづいていることをあらわしている。鈴木1983は、さきほど

の引用のあとでこの問題を取りあげて、「継続相の基本的な意味がとりたてている過程の側面は、そのどこをとっても、主体は原則としておなじ状態にあるのである。」といている。このことは、コ) やサ) には、つぎのように「いつみても」という句をおぎなえるのに、ク) やケ) ではそれができないことからわかる。

シ) とけいは、2時から3時まで、いつみても、とまっていた。

ス) とけいは、3時から4時まで、いつみても、うごいていた。

完成相のばあいには、持続過程をなす局面をとりだしても、その局面の始発と終了をふくめて、まるごとあらわしている。完成相は一定の条件のもとに、動詞のあらわす動作のことになった局面をとりだすけれども、その基本的なアスペクトの意味が実現しているかぎり、どの局面をとりだしても、まるごとのすがたでさしだしているのである。

4) 事象の過程のいろんな部分

いま3) でちょっと中断したが、2) でのべかけた「局面のいろいろ」のほうへ、はなしをもどさなければならない。さきに2) の図でしめした、とけいの例でもわかるように、事象の過程は、いくつかの部分からなりたっている。

- a 2時 トマルという変化
- b 2時～3時 トマルという変化の結果＝トマッテイルという状態
- c 3時 トマッテイルという状態の終了＝ウゴクという動作の始発
- d 3時～4時 ウゴイテイルという動作持続の状態
- e 4時 ウゴイテイルという動作持続状態の終了＝トマルという変化

そして、そのどの部分をとりだしても、それを完成相であらわすばあいには、その始発と終了をふくんで、まるごとのすがたでさしだすことになる。bにとっては、aとcがそれぞれ始発と終了の局面をなし、dにとっては、cとeがそれぞれ始発と終了の局面をなす。a, c, eは瞬間過程なので、その前後の部分全体を始発、終了の局面とするのではないが、それぞれ前の部分の最終とあとの部分の最初が、始発の局面、終了の局面としてふくみこまれることになる。つまり、「2時にとまった」というのは、 $(2 - \frac{1}{\infty})$ 時から、 $(2 + \frac{1}{\infty})$ 時までを、まるごとのすがたとしてさしだしている。

このようにみてくると、完成相のアスペクトは、事象の過程のどこかの部分

をとりだして、その前後の部分にひっかかるところを、始発、終了の局面としてひっくるめ、まるごとのすがたでさしだすものだとということになる。

5) 動作動詞と変化動詞の局面の構成

いま4)でa~eを事象の過程の部分として対等にみてきた。けれども、これは事象のレベルからみたからそうだったのであって、言語のレベルでみると、それは、ちがったものとなる。

「うごく」という動詞は、動作動詞であって、基本的に動作の部分(d)をあらわす。そうすると、その過程は、始発の局面(c)、動作(運動)の局面(d)、終了の局面(e)からなることになる。また、「とまる」という動詞は、変化動詞であって、基本的には変化の部分(a, e)をあらわす。そうすると、その過程は、変化の局面(a, e)と結果の局面(b, f)からなることになる。動作動詞のあらわす動作過程は、始発の局面、動作(運動)の局面、終了の局面からなりたち、変化動詞のあらわす変化過程は、変化(運動)の局面と結果の局面からなりたちなのである。

このように整理したあとで2)の例をみると、ケ)は動作動詞を動作(運動)の局面でとらえたものであり、カ)は動作動詞を始発の局面でとらえたものである。また、オ)とキ)は変化動詞を変化(運動)の局面でとらえたものであり、ク)は変化動詞を結果の局面でとらえたものである。それらは完成相アスペクトとして実現しているの、それぞれその始発から終了までをふくみこんで、まるごとのすがたでさしだしている。

なお、ここでもっときちんというならば、「始発の局面から終了の局面までをふくみこんで」といわなければならないだろう。けれども、局面の局面というのははんぎつであり、「動作の局面の局面」と「事象の局面」が混乱するおそれもあるので、この報告では、かんたんに「ある局面の始発と終了」ということにしておく。

6) アスペクトと局面

アスペクトは、動詞のあらわす過程のなかのどこかの局面をとりだして実現している。たとえば、完成相の基本的なアスペクトのなかでは、動作動詞は動作の局面を、変化動詞は変化の局面をとりだして、完成相が成立するが、カ)

の例では動作動詞の完成相が始発の局面をとりだしているし、ク)の例では変化動詞の完成相が結果の局面をとりだしている。

ということは、局面は、過程の部分であるとともに、アスペクトを成立させる土台にもなっているということである。だから、完成相の意味記述は、いかなる局面をとりだしてまるごとのすがたでさしだすかがのべられなければならない。(継続相のばあいには、いかなる局面をとりだして、その局面のなかにあるすがたでさしだすかがのべられなければならない。)

もっとも、動作動詞の完成相の基本的用法では、動作(運動)の局面をとりだして、その始発と終了をふくめてまるごとさしだすので、けっきょく「動作をまるごとのすがたでさしだす」とおなじになる。したがって、後者のような記述がゆるされる。けれども、変化動詞の完成相のばあいは、全過程のうち、結果の局面の始発ののちの持続過程がきりすてられるので、やはり、「変化(運動)の局面をまるごとのすがたでさしだす」といわないと、完全にならない。

1) 局面動詞について

動詞のあらわす動作(広義)の過程のいくつかの局面については、それをあらわすための形式が分化している。「しはじめる」「しかける」「し^(注1)おわる」「しつづける」などがそれであり、それらは「局面動詞」とよばれる。局面動詞は、
(注2) 動詞のあらわす動作過程の一定の局面をかたちづくる動作をあらわす動詞である。

局面動詞の性格が語会的であるか文法的であるかは問題のあるところであるが、アスペクト形式からみれば、相対的に語会的である。それらは、他のふつうの動詞とおなじように、完成相と継続相の対立をもつからである。シハジメル $\longleftrightarrow$ シハジメテイル、シツヅケル $\longleftrightarrow$ シツヅケテイル、シオワル $\longleftrightarrow$ シオワッテイル、など。この報告では、これらを他の動詞と同様にひとつの動詞としてあつかう。

(注1) 局面動詞については、藤井由美による1978～1984の一連の研究があるが、いずれもガリ版ずりで、出版されていない。なお、山田小枝1984では、これを「局相アスペクト」とよんでいる。

(注2) 高橋太郎1969では、アスペクトを、「動詞のあらわす動作過程のどの部分にあるかをあらわすかに関するカテゴリー」と定義していたので、局面動詞もアスペクト形式としてとらえていた。

第2節 運動の局面でとらえる完成相

前節で完成相の基本的な意味は、動詞のあらわす過程の運動の局面、つまり動作動詞では動作の局面、変化動詞では変化の局面に中心をおいて、その始発から終了までをふくめてまるごとのすがたであらわすものが多いことをのべた。この節では、そういうものをあつかう。

1) 動作動詞と変化動詞^(注)

ここで動作動詞というのは、継続相シテイルの形式にしたばあい、その基本的なアスペクトの意味が動作の局面をとりだして実現する動詞であり、変化動詞というのは、そのばあい、基本的なアスペクトの意味が結果の局面をとりだして成立する動詞である。たとえば、つぎの「よむ」や「ながれる」は動作動詞であり、「あく」や「おちる」は変化動詞である。動作動詞は、主体の動作をあらわす動詞であって、動作後、主体の状態はもとにもどる。それに対して、変化動詞は、主体の変化をあらわす動詞であって、運動終了後、主体の状態がかわっている。

(1) へやのすみに、電灯をひくくおろして、ねまきすがたの志乃が、てがみをよんでいる。(忍ぶ72)

(2) 林中の道はしめり、露出した泥岩のかたむいた層理にそって、水がながれていた。(野火72)

(3) 窓があいている。(砂の27)

(4) 四十五才の重治の白いゆたかなほおにはかすかに青黒いかげがおちていた。(落城14)

「よむ」や「ながれる」は完成相では動作の局面を、また、「あく」や「おちる」は完成相では変化の局面をとらえて、そのアスペクトの意味が実現する。

(5) 私はろう下の本ばこから、きょうはチェーホフをひっぱりだしてよんだ。(放浪16)

(6) とめどないなみだがほおにながれた。(落城28)

(注) この用語は、奥田靖雄1977による。金田一春彦1955の「動作動詞」や吉川武時1973の「変化動詞」は、べつの概念をもっている。

(7) そのとき勝手口のほうの戸があいた。(友情32)

(8) 石塊ははずれて闇におちた。(ない90)

動作の局面であるか、結果の局面であるかということは、継続相のアスペクトの意味のあらわれかたにとって、ひじょうにだいいなことである。けれども、動作の局面であるか変化の局面であるかということは、完成相のアスペクトの意味のあらわれかたにとっては、それほど重大ではないとおもわれる。なぜなら、それはともに運動の局面であり、しかも、その動詞の基本的な語の意味があらわす過程のなかで中心的な局面だからである。つまり、完成相のアスペクトの意味は、その動詞のあらわす過程の運動の局面をとりだして、その始発と終了をふくめてまるごとあらわすことであるといえよう。そして、それは、また、その動詞のあらわす動作（や変化）をまるごとのすがたでさしだすといっても、（記述の精密さが要求されないばあいには）よいだろう。

なお、つぎの例のような力学的な運動をとまなわな^(注)い状態変化も、運動としてとらえておく。

(9) なかの話しごえがぴたりとしずまった。(伸子13)

(10) いく時かすぎて、ぱっと電灯がともった。(多情58)

(11) なにごともなかったように、ふたたび静寂がよみがえった。(約束1)

(12) 熱の昇り下りが断続し、松子のからだがよわった。(無限133)

2) 再帰的な動詞のばあい

継続相のばあい、動作動詞と変化動詞の区別は、その運動がおわったあと、主体に変化を生じないか生じるかによってきまる。動作主体の部分にはたつきかける他動詞のばあい、動作動詞として実現するか、変化動詞として実現するかが問題になる。つぎのはじめの2例は動作動詞として、あとの2例は変化動詞として実現している。

(13) ポスターのままで、野口、ひげをそっている。(やきp41)

(14) ふろからあがって、すがた見をみながら、おびをまいていた。

(15) 駅ままで次郎にあったら、めずらしく、きれいにひげをそっていた。

(16) ふだん着の久留米がすりに、へこおびをまいている。(忍ぶ98)

(注) 哲学では「力学的運動のみでなく、広く化学変化・生物進化・社会発展などを含めて、物質の存在と不可分に結びついた変化一般」(広辞苑)

このように、継続相のばあいは、動作動詞としてはたらくか変化動詞としてはたらくかがアスペクト的意味のちがいにおよぶのだが、完成相のばあいは、要するに、運動の局面をとりだして、その始発と終了をふくめてまるごとあらわすのであるから、そのようなちがいは問題にならない。動作でも変化でも、どちらでもよいのである。

(17) 野口はひげをそった。

(18) 私は手からみついた母の髪の毛を指にぐるぐるとまきつけた。

(死すp296)

これは、運動の局面がまるごとのすがたでさしだされているかどうかに関心があるのであって、そのあとの結果が主体の変化にあらわれているかどうかには無関心である。だから、つぎのような再帰的でないばあいと区別する必要がある。

(19) ふみ台にのって、柱時計のねじをまく。(時計13)

3) 運動の局面

以上にみてきたように、完成相のアスペクト的な意味が動詞のあらわす過程の運動の局面をとりだすばあいには、動作動詞と変化動詞の区別の必要はない。

なお、このことは、すべてのばあいに動作動詞と変化動詞の区別が必要でないことを意味しない。その運動の局面以外の局面がとりだされるばあいは、両者のちがいが生じる。このことについては、第3節以下でのべる。

第3節 動作の局面と始発の局面

動作動詞の完成相は、動詞のあらわす過程の動作（運動）の局面をとりだしてアスペクト的意味が実現するのがふつうであるが、動作の始発の局面をとりだすばあいがある。このことについてのべる。

1) 瞬間過程と持続過程

動作動詞があらわす動作は、瞬間的に成立しておわるばあいと、一定の時間を要するばあいとがある。つぎのまえ3例は前者であり、あと3例は後者である。

- (20) 蛍子の左手がピクッとうごいた。(約束74)
- (21) 彼は、その日も、朝の五時に起床した。(ない42)
- (22) くらいなかで敵味方もわからぬほどの乱闘のうちに、李陵の馬が流れ矢にあたつたとみえて、ガックリまえにのめった。(李陵165)
- (23) 白痴は首をまげて、かのへそをもてあそびながらうたった。(高野59)
- (24) 彼女は、スラスラと《真相》をかたった。(自由40)
- (25) 母と^{おんな}と婢と三人さびしくこの家にすんだ。(思出31)

瞬間過程のばあいには、その始発から終了までが瞬間的に成立する。持続過程のばあいには、その両端のあいだに時間はばがある。しかし、その動作の局面が瞬間的であっても持続的であっても、完成相は、要するに、その始発と終了をふくめてまるごとのすがたでさしだすのであるから、その両者によって、アスペクト的な意味がかわるわけではない。実際問題としても、瞬間過程なのか持続過程なのかかわからない例もたくさんある。

- (26) 宮池がはげしく内部からおした。(ない71)
- (27) 駒子は、すこし、色をなして、叔父のことははばんだ。(自由76)

完成相の動作動詞は、動作の局面をとりだすかぎり、その局面が瞬間過程をなすか持続過程をなすかにかかわらず、その始発と終了をふくめて、まるごとのすがたをあらわすのである。

2) 動作の局面と始発の局面

つぎのふたつの「みる」は、前者が瞬間過程を、後者が持続過程をあらわしている。

- (28) 玄関に、蛍子がたっていた。中年男一村井晋吉、ジロッとみた。
(約束30)

- (29) 安川は、めずらしそうにじろじろ伸子をみた。(伸子13)

このふたつは、1)でのべたように、どちらも動作の局面をとりだして、質的にことならない。ところが、つぎのようになると、事情がかわってくる。つぎの2例も、さしめしているのは瞬間過程である。けれども、それは、瞬間過程をなす動作の局面なのではなくて、持続過程をなす動作の、瞬間過程をなす始発の局面である。

- (30) 男の子は、なんともいわずに、ふと女の子の眼をみた。女の子もじっ

とみかえした。(多情12)

- (31) 「君は何をいうのだ。」と私は高のほうをみた。彼の口はゆがんだ笑いのかたちをつくっていたが、眼は憎悪でもえていた。(冬の56)

これらの例では、「みる」という動詞は、まだみていない状態からみている状態への移行をさしめしている。

この「みる」を語法的な意味のレベルで基本的な意味からずれているというかんがえかたも、いちおうできるかもしれない。しかし、そういうためには、あまりにもあいまいである。前2例のうちのまへの例は「ふと」という副詞があってはっきりしているが、あとの例になると、あるいは、あとの見ている過程もふくめて、「みた」といったのかもしれない。そして、じっさいにそういう例も多いのである。

さきに第1節の1) であげたカ) の「とけいが3時にうごいた」という例も始発の局面をとりだして、動作の局面をとりだすケ) の「3時から4時までうごいた」とちがっているが、これを語法的意味のレベルでのちがいとみるより、おなじ語法的意味をもつ動詞のあらわす動作過程の局面のちがいとみるほうがわかりやすい。野球の実況放送での「ランナーははりました。」などについても、やはりそうだろう。

3) 始発の局面をとりだすばあい(1)

始発の局面に中心がおかれるのは、ふたつのばあいがあるが、そのひとつは、その動詞のさしめす動作が瞬間過程であったり持続過程であったりするような動詞（みる、うごく、だまる、など）のばあいである。これらの動詞は、一定の文脈のなかで始発の局面をあらわす。2) であげた(30)や(31)がこれである。

- (32) この時、私のレンズにも、あわいピンク色の雲をつらぬいてかがやく、銀色の星がうつった。(ホーキ星だ!) 私は、いきをのんでみつめた。

(未知333)

- (33) 「うん」と信行はちょっとおじぎでもするようにうなずいてだまった。
ふたりはしばらくだまった。(暗夜70)

この、はじめの「だまった」がこれである。あとの「だまった」は、持続過程をなす動作の局面をとりだしている。

- (34) ある日、こちらからたのみもしないのに、だしぬけに白い顔をみせた。

(夫婦50)

(35) あかるい声とともに黒目がかがやいた。きえていたほのおが急に息をしてもえたように、その刹那に左衛子はあたらしいのちの燃焼をおぼえ、例になく野性的なちからづよい表情をみせていた。(帰郷312)

始発の局面か動作の局面かはっきりしないものもある。

(36) あい、あぶねえと彼はさげんだが、ことばほどからだをずらさず、そのまたたみにひじをついてシミーズ一枚の秋子を下からうちながめた。

(故旧59)

(37) 螢子、感謝するように中原をみて、それに線香をたてて、……しゃがむと合掌した。中原はその背後にたってみている。(約東27)

4) 始発の局面をとりだすばあい(2)

もうひとつは、持続過程をなす動作をあらわす動作動詞のばあいであるが、このばあいは、そこから観察しうる動作にかぎられ、その動作がはじまったとたんにそれをみつけて話すという場面の制約がある。ひとにたべてもらいたくないものにだれかが手をつけたときに「あっ、たべた。」といったり、あかんぼうがはじめてあるきだしたのをみて、「あるいた、あるいた！」というようなばあいであるが、実況放送のなかでよくあらわれる。

(38) 佐藤第2球、ランナーがはしりました。ボー。うった。(81)

(39) ワンスリーからピッチャー第5球。ランナーはしった。……エンドランは3るいフェアフライになりました。(神広)

(40) 佐多の海でた。佐多の海でた。^{おおずつ}巨砲こらえた。(5月)

(41) 岩波、あたまであたって、ほんと……岩波がよった。右がはいりました。(7月)

この用法は、動作のない状態からある状態への変化をあらわすという点で、動作動詞の変化動詞化というかんがえもなりたつかも^(注)もしれない。

(注) このかんがえかたは、奥田靖雄との個人的な会話(1981)のなかで示唆されたものである。なお、このとき、奥田は、飛行場をながめていて、「とんだ、とんだ。」という例などもあるだろうとつけくわえた。

第4節 結果の局面をふくみこむばあい

1) 結果の局面をふくみこむばあい

さきに第1節の2)で、つぎのような例をあげた。

オ) とけいが2時にとまった。

ク) とけいが2時から3時までとまった。

この「とまる」は変化動詞であって、うごいている状態からとまっている状態にうつる過程をあらわす。したがって、オ)のように変化の局面をとりだす例がおおいのだが、ク)のように結果の局面をとりだして、基本的なアスペクトの意味が成立するばあいがある。変化動詞の完成相が結果の局面をとりだすためには、結果の局面の成立する時間的な位置をしめす状況語、または、時間はばをしめす修飾語でかざられることが必要である。

サ) あすは、屋上のタンク清掃のため、午前ちゅう水道がとまります。。

シ) 教授の外遊中は、授業にあながあく。

ス) 主人がかえるまで閉店した。

セ) しばらくのあいだくにへかえった。

以上は、その動作によって主体の状態の変化する変化動詞のばあいであるが、対象の状態を変化させる対象変化動詞のばあいにも、このことがおこりうる。

ソ) 変圧器の修理のため、五時まで電気をとめます。

タ) おもてがさがわがしかったので、二時間ほど門をしめた。

この種のものは、わりあいよくつかわれるようにおもうのだが、小説やシナリオのなかには、ひじょうにすくなかった。

(42) 小よしをつれて、鈴むらさんは、大阪から京都のほうへしばらくあそびにでた。(末枯44)

(43) 私はしばらく先生のことをわすれた。(ここ13)

ただし、文末述語でないものは、変化動詞にしても、対象変化動詞にしても、わりあいにあるようである。

(44) お品は勘次がちよつとの間いなくなったので、ひどくさびしかった。

(±35)

(45) それにしても、よくまあながいあいだお母さまがおてばなしになった

とおもいますよ。(真知26)

2) あいまいなもの

結果の局面の成立時間の位置やながさが明示されていないもので、変化の局面をとりだしているのか、結果の局面をとりだしているのか、はっきりしないものがある。

- (46) 武子がきてからは杉子もよくあそびにきた。いっしょに海にもはいった。野島もいままでより杉子とのんきに話すことができるようになった。
(友情50)

この例では海からでたことについての記述がない。だから、はいってからでるまで、ぜんぶのことをいっているともいえる。けれども、こんなばあいは、はいればでるにきまっているのであるから、そのようにかんがえなくても、ただ、はいることだけがのべられてあるのだといえるかもしれない。この種の例はたくさんある。

- (47) 秋には、二人はまたやってきた。こんどは伊谷君もくわわった。
(高崎28)

- (48) 数年後、いま一度李陵は、北海のほとりの丸木小屋をたずねた。
(李陵196)

- (49) いつもは衛律がそうしたばあいの接待役をひきうけるのだが、こんどは李陵の友人がきたばあいとて、彼もひっぱりだされて、宴につらなった。(李陵198)

こうしたものがどちらなのか、かんがえればかんがえるほどわからなくなる。おなじ「くわわった」というのでも、「きょうからあらてがくわわった」なら変化の局面だし、「はじめの三日間はベテランがくわわった」なら結果の局面だということになる。(47)がそのどちらかということがわからないのである。たぶん、その結果の局面を動作の局面とする動作動詞のようになりかけているのだろう。その点で、つぎにとりあげる3)や4)との中間だといえるだろう。

3) 動作動詞化(1)——瞬間的な動作

もともと変化動詞であるものが、積極的にははじめの変化をあらわしながら、消極的には、そのあと、もとへもどるところまでをふくんでいるものがある。

たとえば、「おどろいてとびあがった」というばあい、あがったあと、地球の引力ですぐまた下へおちるのだが、おちるほうのことは、ことばづらにはあらわれない。この「とびあがる」は、「台のうえにとびあがった」の「とびあがる」とちがって、あがってからおちるまでをひとつの動作としてとらえている。だから、動作動詞化しているといつてよいだろう。

- (50) 老婆は、ひとめ下人を見ると、まるでいしゆみにでもはじかれたように、とびあがった。(羅生12)

「かおをしかめる」のばあいは、しばらくその状態をつづけることができないわけではないが、もしそうなら「しばらくかおをしかめたままでいた」のようにいわなければならないだろう。「しかめる」は、もとにもどるところまでをふくめた動作動詞になっている。

- (51) あたまをなでると、(むすめは) かおをしかめた。(夫婦42)
 (52) 行友は須賀のかおに眼をうつして、なにかにおどろかされたようにかおをそむけた。(女坂200)
 (53) 少女はかるくまゆをひきしめた。(潮騒9)
 (54) 彼は春光のみちあふれた海の反射に目をほそめた。(潮騒56)
 (55) 「ごめいわくではごさいしょうが、なにぶんよろしくねがいます」と、またつむりをさげた。(或る93)
 (56) ことばはでそうになってのどにつまった。(潮騒67)
 (57) 中原のかおがかなしくゆがんだ。(約束98)
 (58) いたさにたえる蛍子のまゆがキュッとよった。(約束86)
 (59) 「(略)」とていねいなあいさつをはじめたので、駒子は、赤面した。

(自由74)

これらは、変化のはじまりから結果のおわりまでを動作とする動作動詞になっているといったほうがよいだろう。

4) 動作動詞化(2)——持続的な動作

いまここでとりあげる動詞は、継続相では、変化の結果の局面の持続か、動作の局面の持続かが問題にされてきたものである。(吉川武時1973などが問題にした「たっている」「すわっている」「ねている」など)

これらの動詞は、完成相のばあいにも問題になる。第1節でとりあげた鈴木

重幸1983のaとbがそれぞれこれにあたる。

a 赤ちゃんがやとねむった。

b 赤ちゃんが三十分ねむった。

これらは、もともと変化動詞であり、結果の局面に中心をおいてアスペクト的な意味があらわれる用法をへて、動作動詞化してきたのだといえないだろうか。

文脈があっても、どちらかわからない例もすくなくない。

(60) 寢床はもう一組おなじこたつにしてあったが、旅僧はこれにはきたらず、よこにまくらをならべて、火の気のないねどこにねた。(高野10)

(61) 佐蔵は、その晩は、いつものように、太一をだいてねた。(子を175)
慣用句や形象的ないいまわしになると、動作動詞化がすすむようである。

(62) 彼が白石をもった。(無限41)

(63) 飯がおわると、ねるまでのちょっとのあいだ、ストーブをかこんだ。
(カニ81)

5) 対象変化動詞のばあい

対象変化動詞のばあいも、はっきりとそれとわかる例がみつからなかった。つぎのようなものは、あいまいであるが、結果の局面までふくんでいる可能性がある。

(64) 1936年北海道で皆既日食があるといえは、石井千尋氏や山崎文雄氏らを派遣した。(根源106)

(65) そして、その出身母胎を氏はそれぞれ大和、九州、越前の地方勢力においた。(学問256)

(66) 東京日日も、朝日も、読売も、報知も、東毎も、全東京市のすべての新聞が、こうした同じような記事を掲載した。(ない26)

(67) 東大でははじめてのゼミナールだったが、朝永氏は正規のゼミナールのほかに、「愚問会」というあつまりをひらいた。(根源110)

そして、慣用句や形象的ないいまわしになると、結果の局面のおわりまでをふくめるものがおおくなって、動作動詞化がすすむことも、変化動詞とおなじである。

(68) 福永太兵衛の声がのどをつんざくと同時に、二人はむちをピシリとあ

てた。(落城21)

(69) おくみはこういつてまぎらしながら、ほしてあるふとんをそばへやってうらがえて、もう一度たたみのうえへほうきをあてた。(桑の118)

(70) 山国川の清流に沐浴して、観世音菩薩をいのりながら、渾身の力をこめて第一の槌をおろした。(中略)第三、第四、第五と、市九郎はけんめいに槌をおろした。(恩讐74~75)

(71) ロシア人たちはおわると、なにか叫声をあげて、かれらの手をちからいっぱいにぎった。(カニ47)

第5節 変化の局面と変化完成の局面

変化動詞の完成相は、変化の局面をとりだして、その変化の始発から終了までをふくめて、まるごとのすがたをあらわす。ところが、ある種の変化動詞は、変化完成の局面をとりだして、その完成のすがたをあらわす。

1) 変化の始発から終了までの局面

変化動詞は変化のはじまりから変化のおわりまでを運動過程としてあらわす。この運動過程を変化の局面として、その両端をふくめて、まるごとのすがたでさしだすのが、変化動詞の完成相の基本である。つぎの諸例は、そうした基本的な用法を実現している。

(72) 久下は、ズボンのかくしに両手をつっこんで、できるだけ背後のかざり窓から放射されてる電灯の光線からからだをかくすようにしゃがんだ。
(ない83)

(73) そのとき勝手口のほうの戸があいた。(友情32)

(74) 先生はくつをぬいだ。(本日96)

(75) 私はおもわず目をふせた。(風立100)

変化動詞のさししめす変化には、瞬間的な変化とすこしずつの変化がある。つぎのまえ3例は前者であり、あと3例は後者である。

(76) 二人はまたまえの沈黙にかえった。(多情18)

(77) なかの話しごえがびたりとしずまった。(伸子13)

(78) 安吉のあたまに疑問のかけがうかんだ。(むら33)

(79) しだいにスピードをました。(約束87)

(80) 駒子の幻想は、だらだら坂をおりとともに、下落した。(自由27)

(81) 多数のポリオ患者が発生し、大きな社会問題に発展した。(暗号154)

この両者のちがいがあっても、これらは、完成相として、その変化の局面をまるごとのすがたでさしだしているのであって、アスペクトの点からは区別する必要がない。また、つぎの2例のように、おなじ動詞が瞬間的な変化をさしめしたり、持続的な変化をさしめしたりすることがあるが、これも、アスペクトの面で区別する必要はないだろう。

(82) 林中の道ですら、頭上にひくく飛行機の爆音をきき、機銃掃射があった。兵隊たちはいそいで四散し、あたらしい死者と傷者が道ばたにふえた。(野火96)

(83) その後、高崎山のサルは、ふえにふえた。(高崎15)

以上のように、変化動詞のさしめす変化にはいろいろのものがあるのだが、それらが変化の局面をとりだして、それをまるごとのすがたでさしだしているかぎり、これらのあいだにアスペクト的なちがいはみられない。

2) 変化の局面と変化完成の局面

すこしずつの変化のばあい、これを事象のレベルでとらえると、その変化がすこしずつすすんでいって、ある時点で一定の水準に達する。このばあい、言語的な表現がこの事象のレベルの変化のどこをとらえているかということを問題にすると、1)にあげた変化のはじまりからおわりまでを変化とみるとらえたほかに、水準に達したところを変化とみるとらえたかがあるようにおもう。シミのついたハンカチをあらって、だいぶきれいになっても、完全にとれるまでは「まだおちない」といい、完全におちたところで、「ああ、おちた」というようなことがあるだろう。今回の資料にはほとんどなかったが、もしそのようないいかたがあるとすれば、局面のとらえかたに2種類あるといえるかもしれない。つぎの「できる」の4例のうち、まゑ2例は変化の局面を、あと2例は、変化完成の局面をとりだしている。

(84) 先生のお宅から渋谷の駅まであるくあいだにまめができた。(私の25)

(85) だんだんなれてくるうちに、二桐にも女を観察する余裕ができた。

(木石63)

(86) うん、もうすこし……できた。(やさp35)

(87) 御飯、もうすぐできます。(むら259)

今回は可能動詞をはずしたが、「かけた!」「もうすぐよめます。」のようなものがあるはずである。これらを変化の局面の最終段階ととらえるか、変化の局面の実現形式ととらえるかは問題のあるところであるが、このことが〈完成相とはなにか〉の問題ともかかわるとおもうので、可能動詞のばあいをふくめて、今後の課題としてのこしたい。

3) 経過をあらわす動詞のばあい

「経過する」「たつ」「へる」など、経過をあらわす動詞の完成相は、その経過の過程をまるごとあらわすのがふつうである。

(88) その間五年を経過した。(総長356)

(89) 五百助が家をでて、もう、一週間をへた。(自由23)

(90) そうして、いまだ音さたなしで二時間ほどたった。(無限57)

ところが、このなかの「経過する」が経過の終了の局面をあらわすことがある。野球放送では、つぎのようなことがよくいわれる。

(91) ただいま 3 時間を経過しました。

(92) あと 3 分で 3 時間20分を経過します。もう延長の可能性はありません。

これは、あきらかに経過の終了に到達することをあらわしている。これがふつうのことか、それとも特殊なことかは、いまのところわからないが、いちおうあげておく。

なお、「ただいま先頭が一周します。」のようなものもあるとおもうが、例がみつからなかった。

第 6 節 移動動詞の局面

移動動詞は、継続相形式をとるばあい、変化動詞としてはたらき、その基本的なAspectの意味を実現する。完成相のばあいも、現在の目の動作をあらわす用法を(注)のぞけば、やはり変化動詞としてはたらき、完成相の基本的な意味を実現する。ただ、このばあい、どの局面をとりだすかが複雑なので、その

(注) この用法については、第2章でのべる。

ことについてのべる。

1) 出発, 移動, 到着

移動動詞のあらわす移動の過程は、出発、移動、到着の三つの局面からなる。語彙的な意味としては、この三つの部分をふくみこんでいて、「AからBへいく」「CからDにかえる」のように、その全過程をあらわすことができるのだが、実際の使用のなかでは、そのどこかの部分に焦点をあてることがおおい。

継続相のばあいには、変化動詞としてはたらいいていて、結果の局面のなかにあることをあらわすのだが、その結果をひきおこすモメントになるのは、「いく」「くる」のばあいには到着のモメントであり、「かえる」のばあいには、出発または到着のモメントである。

これに対して、完成相のばあいには、出発、移動、到着のどの局面をもとりだすことができる。

[出発の局面]

(93) りんごはよくよくふきんでふいてつやをだすこと、水蜜桃には手をふれぬこと、果物はほこりをきらうゆえ、始終はたきをかけることなど、念おしていった。(夫婦39)

(94) 彼は、教室にでる時間のつごうがあるといっ、まもなく中座してかえった。(伸子22)

[移動の局面]

(95) 駅のまえにまたせてあった古い、ちいさな自動車のところまで、私は節子をささえるようにしていった。(風立91)

(96) 神田から^{おなりみち}御成道をしゃべりながらきた。(無限88)

[到着の局面]

(97) あさの9時ごろ、私はなにをもとめるでもなしに、その教会へいった。
(風立153)

(98) あ、君、いいところへきた。(ない80)

(99) 親娘は、十二時すこしまえにホテルにかえった。(伸子18)

これらの移動過程のなかのどこをさすかは、文脈や場面によってきまる。しかし、どれであっても、完成相の基本的な意味ははたらいっている。

2) 結果の局面をふくみこむばあい

移動動詞がつかわれるばあいも、結果の局面をふくみこむことがある。

(100) 彼は会社の用事で、わずか三か月ばかり、この都市にきた。(伸子9)

(101) これからしばらくくにへかえる。

移動動詞はまた、片道の表現だけで往復をふくめてあらわすことがある。このばあいは、動作動詞化しているといえるだろう。

(102) 船長はまず照吉の家へいった。それから安夫の家へいった。夜に入つて新治の親方の十吉の家へいった。さいごに新治の家へきたのである。

(潮騒131)

第2章 進行過程のなかにあるすがた

「いく」「くる」などの移動動詞は、完成相非過去形のかたちで目のまえの進行動作をあらわすことができる。このばあい、動作の局面のなかにあって、始発と終了の局面をふくんでいない。その点で、これは完成相の基本的なアスペクト的意味が実現されていない。これは、完成相の形式をとっているが、特殊なアスペクト的意味を実現することになる。

第1節 進行過程のなかにあるすがたをあらわす「いく」と「くる」

1) テンスのうえでの特殊性

のりものやひとがむこうからくるのをみつけたとき、そして、それをすぐさまひとにつたえるとき、「くる」と「きた」のどちらでもいうことができる。

(103) なんだ、いたよ、むこうからくるよ、にこにこして。(寅次75)

(104) 「きた、きた！」急短な爆音をたてて、サイドカーがはしってきた。
(ない10)

また、めのまえの動作を「いく」と「いった」のどちらでもあらわすことができる。

(105) 千代の富士があたまをつけにいく。(7月)

(106) 右はず、岩波がきりにいった。(7月)

目前の動作を非過去形であらわせることは、以前から非過去形の特殊な用法として注目されてきた。^(注)なぜなら、日本語動詞の非過去形は、アクチュアルな用法では、ふつうは現在をあらわさないからである。

完成相の動詞が現在の動作をあらわすことができないのは、完成相が始発と終了の両局面をふくみこんでまるごとあらわすために、現在という瞬間には、そのまるごとの動作がおさまりきらないからである。この説明は奥田靖雄1977によってあたえられたものであって、原則的にはただしい。けれども、特殊なばあいには、完成相非過去形が現在の動作をあらわすことができる。それは、

(注) 金田一春彦1955, 鈴木重幸1965, など。

始発から終了までがまるごと発話時のなかにおさまるような動作のばあい、Aspectの意味が基本的でないばあい、Aspectから解放されているばあいである。このことについては、第IV部第3章でくわしくのべるが、この章の「いく」「くる」は、いまのべた第2のばあいに属する。

2) 進行過程のなかにあるすがた

この用法で「いく」「くる」と発言するときは、移動動作はすでにはじまっており、また、まだおわっていない。つまり、ここでは、この形は、移動動作が進行過程のなかにあることをあらわしている。この「いく」「くる」のAspectの意味は、始発と終了をふくまず、その過程を分割するすがたでさしだしている点において、継続相の基本的な意味と共通である。けれども、継続相がとりだす局面の特徴が持続性であるのに対して、こちらは、進行性である点がちがっている。つまり、持続性のばあいは、基準時間（ここでは発話時）の直前と直後がおなじ状態であるのに対して、進行性のばあいは、直後のほうが直前よりもすすんだ状態にある。

「していく」「してくる」という形式があるが、この形式のばあいも、同様に、進行過程のなかにあることをあらわす。

(107) さらに大外からはグロリヤターフがあがってまいます。(6R)

(108) その右からユイ……ユアースダイナがあがってまいりました。(6R)

この形はかなりの動詞がこれになりうるもので、これを進行相として、ひとつのAspect形式とみとめられるかもしれない。もしそうだとすれば、この「いく」と「くる」は、「している」「してある」に対する「いる」「ある」のように、「していく」「してくる」となんらかの関係をもつものとして、特殊にあつかう必要があるだろう。しかし、このことは「してくる」「していく」のAspect的な性格を検討したうえでないとあきらかにならないので、ここでは考察を保留しておく。^(注)

3) 「くる」と「きた」がおなじになる理由

「くる」や「いく」が進行過程のなかにあるすがたをあらわすばあい、その進行の局面をとりだしている。それに対して、過去形であらわすばあいには、

(注) 「してくる」「していく」については、高橋太郎1969と吉川武時1973にくわしい記述がある。

進行の局面ではなくて、始発の局面をとりだして、それをまるごとのすがたでさしだしている。つまり、すでにおわった始発の局面を過去形であらわすのと、いま実現している進行の局面を非過去形であらわすのとが、おなじ動作をさしめすことになるのだといえないだろうか。

第2節 「いく」「くる」に準じる動詞

「前進する」「バックする」のような方向性のある移動動作、「おう」「(すもうで) よる」のような移動の側面をもつ動作、「はしる」のような移動のしかたである動作などをあらわす動詞は、目前のうごきをあらわすばあいには、「いく」や「くる」とおなじ特徴をもつ。「むかう」「つっこむ」なども、文のなかで移動動作をあらわすときには同様である。これらは、「いく」「くる」に準じる動詞として位置づけることができるだろう。

けれども、これらは、「いく」「くる」とちがって、基本的には動作動詞であり、継続相「している」は、その動作の持続過程をなす局面のなかにあることをあらわす。そのため、「する」と「している」がおなじことをあらわすことになる。

実況放送などでは、このふたつの形がともにあらわれ、また、始発の局面に中心をおいた完成相の過去形があらわれ、さまざまな形がみられる。

なお、そのばあい、サ変動詞にあっては語幹だけの形もでてくる。そのことから、これらは要するに語法的な意味をあらわすだけであって、文法形式には無関心なのだというかんがえもできるかもしれないが、目前の他の動作にはこのような現象が生じないとすれば、進行性の動作の特徴としてとらえなければならぬだろう。

- (109) ぐんぐん打球はのびる。センターバックする。とった。(81)
- (110) ショートバック。ショートバックしている。とりました。(81)
- (111) レフト岩井けんめいにおう。ファールグラウンド、とれません。(81)
- (112) レフト、センターがおっている。ずうっとおっている。レフト、センターがおっている。センターがおいついた。(81)
- (113) センターがおっていく。ずうっとおっていく。ワンバンド。ワン……ぬかれました。(81)

- (114) セカンドけんめいにつつこむ。なおつつこむ。なおつつこんだ。とった。一るい送球。(巨神)
- (115) 二るいから三るいへむかう。(81)
- (116) 隆の里よる。隆の里よった。正……東よった。ぎやくにすくいなげ。巨砲のかち。(7月)
- (117) 闘竜つっぱった。闘竜おした。闘竜おした。おしだし。闘竜のかち。(5月)
- (118) 土俵中央、はげしくつっぱっている。(5月)
- (119) 佐田の海でる。佐田の海でる。うわてがとれない。おっ、佐田の海でた。佐田の海でた。巨砲こらえた。佐田の海でる。佐田の海よった。よりきり、佐田の海のかち。(5月)
- 実況放送以外にも、つぎのような例がある。
- (120) ああ、血がながれる。ちょっとまってね、あかちゃんだけちょっとソにやらにゃあ。(極私26) ……お産のばめん。

第3節 進行のようすをしめす副詞にかざられるばあい

前節の例文(109)には「ぐんぐん」という副詞があるが、「していく」「してくる」の形式をとる動詞は、「ぐんぐん」「どンドン」「だんだん」「じりじり」「しだいに」「つぎつぎと」「徐々に」のような進行をあらわす副詞でかざられることが多い。

完成相非過去形の動詞が述語になっていても、この構造にくみこまれて、この種の副詞にかざられるばあいには、その述語になっている動詞が、その動作が進行過程のなかにあることをしめすことがある。

- (121) 輸出港にりっぱなサル¹の収容所があり、全国に配置された捕獲人から、そこへ定期的にサル²がおくられてくる。サルはそこから、どんどんとアメリカやヨーロッパへおくられる。(高崎46)
- (122) 私たちの生活って、どンドン変化するのね。毎年ちがってるもの。(くれ7)
- (123) そうですか。だんだんこういうところがすくなくなりますわ。

(寅次48)

このいいかたは、現実を一般化してのべているともかんがえられるが、現実
にそうであるという報告の面をかねていることもたしかであって、ここでは、
その側面に注目して、とりだしてみた。その側面では、現在進行過程のなか
にあることをのべている。あるいはいいすぎかもしれないが、問題提起として、
このような節をもうけておく。

これらは、「していく」または「してくる」の形にかえることができる。その
ばあいも、アスペクト的な意味はそんなにかわらないとおもう。

また、継続相「している」にもかえられる。継続相にしたほうが、つかえる
動詞のはばがひろがるようである。というのは、完成相でこのようなアスペク
ト的な意味になるのは特殊な用法であって、なんらかの条件にしばられている
のだとおもう。その条件はまだみつかっていない。

なお、継続相のばあいは、その動作が持続のなかにあることをあらわす。

(124) それに、強制開墾で山ろくはどどんひらかれている。(旧石309)

第3章 状態の持続のなかにあるすがた

第1節 「みえる」「きこえる」 「においがする」など

1) テンスのうえでの特殊性とアスペクトのうえでの特殊性 (準アスペクト)

「みえる」「きこえる」「においがする」などの動詞の非過去形が、話し手の知覚によってとらえられたものや現象の現在の状態をあらわすことについては、テンス研究のがわからすでに指摘されている。つぎの例は、鈴木重幸1965からかりたものである。

(125) ほら、トラックがまだみえるよ。(石坂洋次郎「青い山脈」)

これは、完成相の形式をとりながら現在のことをあらわす点において、テンスのうえで特殊なのだが、同時に、完成相の形式をとりながら持続過程のなかにあることをあらわす点において、アスペクトのうえでも特殊である。

(126) 七八軒先のスキー製作所からかんなの音がきこえる。(雪国48)

(127) 「なんだかリンゴのにおいがする。ほくいまりんごのことをかんがえたためだろうか。」カムパネルラがふしぎそうにあたりをみまわしました。「ほんとうにリンゴのにおいだよ。それから、野いばらのにおいもする。」(銀河287-288)

(128) あれ、へんなこえがする。(時計15)

(129) においます。かいでみてごらんなさい。(戒嚴10)

(130) バイバイして零君、まだみえる。(極私24)

これらの完成相形式によってあらわされている状態は、発話時よりまえから存在しており、また、そのあとにも存在しつづける。つまり、発話時という基準時間が持続過程のなかにある。その点において、これらは、継続相アスペクトと共通である。非過去形によって現在のことをあらわすことができるのは、そのためである。

けれども、継続相アスペクトは、動詞のあらわす動作過程から一定の局面をとりだして、その局面のなかにあるすがたで動作をさしだすのである。だとす

れば、この「みえる」や「きこえる」のように、動作から局面をぬきだしたのではなく、はじめから状態である持続過程のなかにあるすがたをさしだしているものは、継続相の基本的なアスペクト的意味とおなじ意味をあらわしているとはいえない。

継続相のばあい、分割か非分割かで完成相と対立する。それは、その動詞が動作過程をあらわすという前提のうえになりたつことである。ところがこの「みえる」や「きこえる」のばあい、動詞が状態過程をあらわしていて、形式的な対立をもっている、アスペクト的な意味のうえでは対立しない。ここにあげた例は、すべて「みえている」「きこえている」のように継続相形式にかえられるのだが、そのようにかえてみても、おなじことをあらわしてしまって、内容としては、アスペクト的な対立をもたないのである。そのことは、実をいって、これを継続相形式にかえても、その継続相形式が継続相の基本的なアスペクト的意味をもたないこととつながっている。奥田靖雄1977が、この「みえる」と「みえている」のような形式上の対立を「えせアスペクト」とよんだのは、このことを意味している。

この「みえる」や「きこえる」などがアスペクト的に特殊だというのは、完成相形式をとりながら継続相のアスペクト的意味をもっているから特殊だというのではなくて、アスペクトのうえで完成相の基本的な意味も継続相の基本的な意味ももっていないということが特殊なのである。

それでは、動作過程の分割・非分割の対立をもっていないということがアスペクトからの完全な解放を意味するかというと、それはそうでない。なぜなら、状態もできごと過程のひとつであって、基準時間がこの過程とかかわっているからである。そのことは、つぎの第4章でのべるアスペクトから解放されたものとくらべると、あきらかになる。この報告では、状態持続の過程のなかにあるすがたをあらわすものを「準アスペクト」として位置づける。

2) モーダルな性格

「みえる」「きこえる」などの知覚動詞の非過去形が現在の外界の状態をのべるとき、それは、現在の話し手の認識をのべるしかたでのべている。このばあい、現在の認識をのべるといふこととからんで、のべる形式としての陳述性がまじりこむ。「～とみえる」のような陳述的形式に発展する可能性は、この段階

でも、すでにめばえとして存在しているといつてよいだろう。

話しの内容としての対象に話し形式としての陳述性がわりこむと、対象のできごと過程を話し過程と客観的につきあわせることができなくなって、そのできごと過程のアスペクト的なすがたをあらわせなくなる。こうして、第4章でのべるように、「おもう」「かんがえる」などは、アスペクトから解放される。

けれども、「みえる」「きこえる」などは、「おもう」「かんがえる」などどちがって、はなしの内容である知覚の対象が外界の現実として客観的に存在している。このため、「みえる」「きこえる」のばあいは、アスペクトから完全には解放されないで、状態持続のなかにあることをあらわすのだろう。

おなじ「みえる」「きこえる」であっても、知覚そのものをあらわすばあいには、アスペクトからの解放の度あいがたかくなるといってよいだろう。つぎの2例は、電話の会話であって、これにちかいとおもわれる。

(131) こちらはひどいふぶきですよ——はなしがきこえますか。(伸子93)

(132) ——またご病気。いいえ——ええ、きこえます。(真知169)

第2節 「存在する」「すむ」「つづく」など

存在や持続をあらわす動詞も完成相の形式で持続のなかにあることをあらわすばあいがある。

(133) この問題は、依然として残存する。(人格82)

(134) (四月×日)ベニの帰らない日がつづく。(放浪205)

これらは、その単語のあらわす意味が動作でなく、状態であるので、動作過程の分割・非分割が問題にならず、本来のアスペクト性をもたないのだろう。これらも、継続相形式にかえて「残存している」「つづいている」にすることができるが、その意味はおなじである。この対立もえせアスペクト的な対立である。

実際のはなしや文章のなかでは、完成相形式で準アスペクト的になるものは、終止形をとることはひじょうにすくない。終止形であっても、ほとんどの例は、文の終止につかわれていない。

(135) これに反して、枯尾花なるものは実在すると信じられている。

(哲学 218)

(136) この山にサルがすむといううわさだけはあったが、(高崎32)

第3節 「ある」「いる」について

「ある」や「いる」は存在をあらわす動詞であって、「ある」「あった」、「いる」「いた」の形で状態持続のなかにあることをあらわし、アスペクト的な意味の点から、準アスペクトであるといえることができる。金田一春彦1955がこれを状態相にいられたのは、この性質に注目したからである。

「ある」「いる」は、「あっている」「いている」という形式がなく、形式的な面でアスペクトの対立をもたない。したがって、この「ある」「いる」を形式的にも完成相形式であるといえない。ただし、意味的にはアスペクトから完全には解放されておらず、準アスペクト的な性格をもっているのです、ここにとりあげた。

第4章 アスペクトからの解放

第1節 現在の直接的な心理体験を そのままのべるばあい

1) 「おもう」「かんがえる」「信じる」「気になる」など

「おもう」「かんがえる」「信じる」「気になる」など、かんがえやおもいをあらわす動詞の完成相非過去形が一人称につかわれると現在の動作をあらわすことは、すでにしられている。^(注)

(137) なあ健ちゃん。わかいうちはいろんなことがあってもいい、とほくも
おもう。(八月59)

(138) このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽とおなじようにじぶ
んで光っている星だとかんがえます。(銀河246)

(139) あなたの信心は堅固なものだと存じます。(出家52)

(140) しかし私どもがかんがえましても、先生のような人格者がでてくだ
されば、政界浄化のために、このうえないことだと信じます。(帰郷317)

(141) ぼくはそのひとにほんとうに気のどくで、そしてすまないような気
がする。(銀河292)

(142) 私も気になります。(本日57)

(143) わかる、本当、わかる！(カニ45)

のべたて文では一人称だけがこの用法をもつが、それがたずねる文になると、二人称になる。

(144) そんなことばを信じるほど、われわれがあまいとおもうか。(宵待45)

これらは、テンスのうえでも特殊であるが、アスペクトのうえでも特殊である。アスペクトのうえでの特殊性がテンスのうえでの特殊性をひきおこしているのである。

(注) 鈴木重幸1965で指摘されている。

2) 分割・非分割からの解放

「わたしはそうおもう。」というとき、そうおもうのは、まさに、それをいうときのことであり、そのまえのこともあとのことでもないで、話しの時点のことだという意味で瞬間的といえるかもしれない。けれども、その瞬間に始発から終了までふくんだまるごとの動作としてのべているわけではない。それが話しの瞬間のことをのべているとしても、その動作がそのまえからつづいてたのかどうか、そのあとまでつづくものかどうかが考慮にはいっていない。このことは、その〈おもう〉〈かんがえる〉などの動作の過程が基準時間である話しの時点とどうかわるかが問題になっていないということである。つまり、それは、基準時間によって動作過程が分割されるか分割されないかということと関係がない。したがって、この「おもう」は、アスペクト的な意味において、完成相でも継続相でもないのである。

このことは、完成相の基本的な意味をもちながら現在の瞬間的な動作をあらわすものとくらべてみると、よくわかる。たとえば、手品の動作をしながら「こうして、ひもをひっぱりだします。」というばあいには、そのすぐあとに「はい、ひっぱりだしました。」といえる。つまり、この「ひっぱりだします。」は、始発から終了までをふくめて、まるごとのすがたでさしだされているのである。

また、つぎのような、「おねがいします」「さんせいする」など、発言そのものが行為となっているもののばあいでも、アスペクト的には、完成相の意味をもっている。

(145) ちょっと、でかけますから、おねがいします。(自由25)

(146) いそがしんだから、はやくたのみます。(わが75)

(147) わたしはさんせいする。

このばあいも、すぐあとに「たのみましたよ」「おれ、さんせいしたぞ」ということができる。けれども、「おもいます」や「信じます」は、そのようにはならない。「おもいます」や「信じます」は、完成相の意味をもっていないのである。

つぎの「感謝する」なども、「おもいます」のグループだろう。もし、「感謝の念をささげます」なら、完成相かもしれない。

(148) 諸君の協力を感謝する。(宵待66)

3) モーダルな性格

一人称現在の「おもう」や「かんがえる」が動作過程の分割・非分割に無関心であるのは、これによってつくられる述語の内容としての動作過程の対象性と、形式としての発話過程の陳述性とが未分化だからである。

「ひもをひっぱりだします。」というとき、その動作はことばのそとにある。だから、その客体としての動作とそれをのべることばは分化していて、動作過程と発話時とのあいだにアスペクト的な関係が成立する。ところが、「わたしはそうおもいます。」というときは、その内容としての心的過程は、そのことばを成立させている心的過程とおなじものであるために、関係以前のものとなってしまっ、アスペクト的な関係が成立しないのである。

こういうと、「おねがいします」のばあいにも、ことばそのものが動作ではないかという問いがかえってくるかもしれない。けれども、「おねがいします。」ということばの内容は、ことばそのものではない。それは、話し手の聞き手に対する行為であって、そのことばをはなすという動作として、そのことばを成立させている心的過程のそとに、客観的に存在する。したがって、その内容である動作と発話時とのアスペクト的な関係が成立するのである。

「おもう」ということばの内容はこころのなかにあって、音声形式をもったことばからみれば、そとにあるのではないかという反論があるかもしれない。けれども、思考活動は、ことばのかたちで存在するのである。過去におもったということをはなすときはべつだが、一人称現在のばあいは、おもいながらはなすのであり、思考活動としての内言と表現活動としての外言が分化していない。まさに、そのことばが思考活動と表現活動の統一として存在するのである。話し手の現在の思考活動の表現がアスペクト性をもちえないのは、そのためである。

「おもう」や「かんがえる」などがmodusの要素をもっていることは、文法形式のいろんなところにその証拠がみられる。そのひとつとして、陳述副詞「まさか」「よもや」との呼応のことにふれておこう。「まさか」や「よもや」は、「まさか死なないだろう」「よもやいくまい」のように、うちけしと推量のあわさった述語形式と呼応するのだが、「おもう」「かんがえる」などが述語になるばあいには、「まさか死ぬとはかんがえなかった」「よもやいくとはおもわなかった」のように、推量形式を必要としなくなる。そのようなモーダルな性格が

これらの動詞の語意的意味のなかにひそんでいるからである。また、「おねがいします」というかわりに、「おねがいたいとおもいます」というばあいの「おもいます」なども、陳述的な性格のほうが勝っているといえるだろう。

(149) けれども、そのまえに、われわれはここで、全員でですね、ここで黙とうをささげたいとおもいます。……黙とう！（水保207）

これは、日本語だけのことではない。「おそらく」の意味でつかう英語の“I think,”なども *mortal word* 化しているといえるだろう。それから、「おもう」がアスペクトから解放されているということは、英語で“I am thinking.”といわないこととも無関係ではないだろう。

寺村秀夫1971も「おもう」がムード・テンズ的に特殊である点をとらえ、「彼ハ死ヌト思ウ」のようなものは、一人称しかないのに、「日本語を学んで日の浅い外国人は、実際、上の文を‘He thinks……’と解釈しがちである。」とのべている。

以上、「おもう」や「かんがえる」がアスペクトから解放されていることについてのべてきたが、われわれの関心は、それらがアスペクトから解放されていることよりも、むしろ、アスペクトというものが、ムードやテンズよりも客体的なものだということを確認することにある。つまり、これらが陳述的なものに対する客体性の欠如によってアスペクトから解放されたのだということを、うらがえしにしていえば、アスペクトから解放されないものは、客体的なものだということである。このことは、アスペクトというものをとらえるために、だいじなことである。

4) 「おもった」「おもっている」について

おなじ一人称であっても、「おもった」や「おもっている」は、アスペクトから解放されていない。過去におもったということは、「おもった」ということばを言うときの言語活動のそとに存在する。この完成相過去形は、過去の心的動作を始発から終了までまるごとのすがたでさしだして、完成相の基本的なアスペクトの意味を実現している。また、「おもっている」は、現在をふくむ持続過程がことばのそとに存在していて、動作を、その持続過程のなかにあるすがたでさしだしている。ここでは、継続相の基本的なアスペクトの意味を実現しているのである。

- (150) そのときの私ははらのなかで先生をにくらしくおもった。(ここ81)
 (151) かれは杉子と一軒家をもつことをかんがえた。(友情70)
 (152) 安吉はほっとして助かった気がした。(むら24)
 (153) おれはうまいとおもっている。(末枯40)
 (154) これが実にまた、武蔵野第一の特色だろうと自分はしみじみ感じている。(武蔵19)
 (155) ぼくはただ理くつなしに民子はどんな境涯にはいろうとも、ぼくをおもっている心はけっしてかわらぬものと信じている。(野菊45)

5) 「つかれる」「すつとする」など

「つかれる」「すつとする」「はらがへる」など内的な感覚をあらわす動詞は、完成相非過去形で一人称現在の内的な状態をあらわすことができる。

- (156) 「つかれるわ、わたし。……ねむらせて。ねむらせて」彼女はうわごとをいいつづけつつ、ひんぱんにひきつけた。(伸子66)
 (157) ときどきなまあくびをして、かすかなかすれごえで、「ねむい。」という。「のどがかわく。」という。(本日98)
 (158) どういうものか、ふしぎなほどいたみます。(本日77)

これらは思考活動ではないので、ことばとその内容である対象とがひとつのものではない。感覚活動でとらえる対象は、その感覚活動を統括する大脳の活動のそとにある。その点で、これらは第3章の第1節でとりあげた「みえる」や「きこえる」などの知覚活動のばあいとおなじである。けれども、それは、ことばのそとにあっても、話し手のなかにある。そのために内容が対象化しにくく、現在のばあいは、「おもう」「かんがえる」と同様に活動の側面が強調されて、アスペクトから解放されるのであろう。

6) 「おどろく」「よわる」など

「おどろく」「よわる」など、感情活動、または、感情的な態度をあらわす動詞も、完成相非過去形が話し手の現在のことをあらわすことができる。

- (159) 「まァ、おどろきますわ……」これは、駒子が、ぼう然とするのが当然であろう。(自由113)
 (160) おまえのごへいかつぎにもあきれるよ。」(出家27)

- (161) ほんとに、むしゃくしゃするよ、はらたつよ、ころしてやりたいくらいだよ、あの男は。(極私20)
- (162) まよってばかり。自分でも、いやになりますわ。(自由331)
- (163) 女子高生A「またちごうた」女子高生B「あたまいとうなるねえ、こまったあ。」(旅の3)
- (164) 「十四日の日一日だけ。」「こまるな。」「午後からでもいいわ、半日。」(闘牛107)
- (165) ミナコ「おばさん、つれてきたわよ。」まさ子「(見もせず) あアたすかるよォ」(妹67)

感情活動、とくに感情的な態度のばあいには、その感情のむけられる対象は、話し手のそとにある。けれども、それは知覚活動のようなコピー的な反映活動ではないので、感情の対象は対象にすぎず、けっきょく、そのことは、うちなる感情活動をあらわすことになって、思考活動と同様、内容が対象化されず、そのため、アスペクトから解放される。

7) 「つかれた」「いやになった」などについて

感覚活動や感情活動をあらわす動詞のばあいは、完成相過去形でも、話し手の現在の状態をのべることができる。

- (166) ああおなかがすいた! (伸子72)
- (167) 哲郎「つかれた?」志乃「いいえ」(忍ぶ149)
- (168) ああ、せいせいした。(銀河283)
- (169) おどろいたな。これが当年の園田だとおもうと。(波20)
- (170) あきれた。こりゃてばなしだ。(波18)
- (171) おれはあたまにきた。あんたはキタナイ。(八月27)
- (172) おらあ、おまえがいやになった。(野火39)
- (173) しかしよわたな。あッしゃアこのごろ、すっかり奥方をしくじってるひとなんだから。(多情32)
- (174) こまったね。だからわかい空想家はだめだというんだ。(蒲団43)
- (175) たすかった。(宵待55)

これらは、変化動詞のばあい(「はらがへる」「つかれる」など)には変化の局面が、動作動詞のばあい(「おどろく」「あきれる」など)には始発の局面が

現在以前にまるごと成立したことをあらわすのだが、その変化なり始発なりの局面のあとにつづく局面が話し手の内部の心的現象であるので、ふたつの局面のさかいめがはっきりせず、結局は、変化と結果、あるいは始発と動作をともにあらわしてしまって、基準時間との関係がわからなくなる。こうして、アスペクトから解放される。

なお、この考察のまとめは、第V部第4章第2節にある。

第2節 過程的な側面をうしなった動詞

1) できごと過程にかかわらない属性

文の名づける意味において、述語ができごと過程のなかにない属性をあらわすばあい、その述語をかたちづくる単語は、アスペクト的な意味から解放されている。その典型は、名詞述語文である。

ア) クジラはほ乳動物である。

イ) これはペンです。

形容詞述語文は、このばあいと、状態というできごと過程のなかにある属性をあらわすばあい(準アスペクト)とがある。つぎのウ)は前者であり、エ)は後者である。

ウ) きこのうのかれの話しはおもしろかった。

エ) へやにはいると、まっくらだった。

動詞述語文であっても、できごと過程から解放された属性をあらわすばあいがある。つぎのオ)は名詞述語文にちかいものであり、カ)は形容詞述語文にちかいものである。

オ) 精神は性格とことなる。

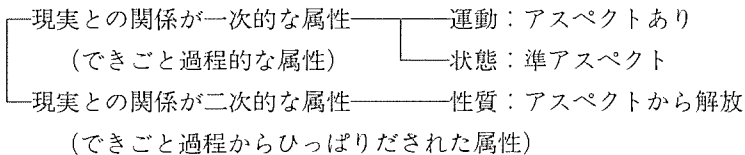
カ) あんなことをするなんて、ばかげている。

アスペクトは、動詞のあらわす動作の過程を分割・非分割のどちらのすがたでとらえてのべるかにかかわるカテゴリーである。したがって、動作過程をあらわさない単語はアスペクトのカテゴリーをもたない。けれども、動作過程でなくても、状態過程をもったできごとをあらわすばあいには、一定の時間(基準時間)とのかかわりのなかでそれを分割的にあらわす。たとえば、エ)では、へやにはいった時点が、まっくらであるという状態持続のなかにあって、それ

を分割している。これは、動作ではないけれども、アスペクトに準ずるものとして位置づけることができる。現実をできごと過程としてとらえている文の述語は、すくなくとも、なんらかのしかたで基準時間による分割または非分割のすがたでとらえていて、アスペクト的な側面をもつ。

ところが、ものごとをできごと過程のなかで直接にとらえるのではなく、そのできごと過程からひっぱりだした二次的な属性としてとらえると、できごと過程の側面がきりすてられることによって、特定時間とのアスペクト的な関係が成立しなくなる。たとえば、〈クジラが子どもをうむ〉あるいは〈クジラが子どもにちちをのませる〉などというできごとから、個々のできごと過程の側面をきりすてて〈ほ乳動物である〉という属性をひっぱりだしたばあい、できごと過程の側面がきりすてられているために、特定の時間とのアスペクト的な関係が成立しない。ウ)の例のばあいも、〈ああ言った〉〈こう言った〉というできごとからひっぱりだした属性をのべていて、できごと過程としてのべていない。そのため、特定時間とアスペクト的な関係を取りむすぶことができない。ここに過去形がつかわれているのは、その属性のもちぬしが過去に存在したという時間的位置の問題であって、過程と時間とのかかわりはない。テンスはあるが、アスペクトからは解放されているのである。

このように、文が、そして、その属性の表現者としての述語が、現実とのかかわりの一次的な属性をしめすか、二次的な属性をしめすかによって、アスペクト性のありなしがきまるのである。このことは、つぎのようにまとめられるだろう。



動詞はほんらい運動をあらわす単語であるが、動詞のなかには状態や質をあらわすものもあり、そうしたものは、アスペクト性がよわまったり、なくなったりすることになる。この節では、質をあらわす動詞を取りあげる。こうした動詞のなかには、継続相のかたちで質をあらわすもの、完成相のかたちで質をあらわすもの、両方のかたちで質をあらわすものがあるが、ここでは、後二者の完成相であられるものを取りあげる。

2) ものごとの特徴をあらわす動詞

ものごとの特徴をあらわす動詞は、形式としては動詞であっても、意味的には、形容詞にちかい。形容詞語幹に「すぎる」のついたものなど、動詞に転成していても、依然として形容詞性をつよくのこしていて、「～すぎている」という継続相形式をもたない。つまり、完成相と継続相の対立をもたず、はじめから、アスペクトから解放されている。

(176) おかさんがあんまりあますぎる。(野菊32)

(177) することがあまりに良心がなさすぎる。(暗夜71)

(178) しかしそれもあるかもしれないが、それだけで解決をつけるのは簡単すぎる。(友情57)

(179) 今まではあまり木がなさすぎた。(高野22)

継続相形式のばあいには意味が形容詞的になるものがおおいが、完成相形式のばあいは、そういう例は、あまりみつからなかった。

(180) 山の手電車のなかで、彼のふうがわりのさげている笠がめだった。

(無限5)

(181) 翌日からの胡軍の攻撃は猛烈をきわめた。(李陵162)

(182) そこの木の間をとおして見はらしがよくきいた。(生活137～138)

(183) あの子はよくできる。

(184) 「(略)」と二本ある釣竿の一本を徹男のほうへよこす。徹男「ふん、気がきくな」(津軽38)

3) 関係をあらわす動詞

動詞には関係をあらわすものがあるが、その関係は、動作過程をふくんでいない。

(185) われわれの誤謬は第一の部類に属する。(人格35)

(186) そのかぎり現象は偶然性をふくむ。(革命143)

(187) 双方がかみそりの刃のようになるとく対立する。(もの114)

(188) しかし、この意味の価値意識を現実とよぶことは、われわれの従来もちいて来た用語例に反する。(人格38)

(189) 芸術はこれとことなる。(むら14)

(190) いえ、そんなのとちがいます。(本日99)

(191) あんたの笑顔をみたかった……わらったかおのほうが、あんたには
にあう。(約束9)

(192) 城のような家ばかりがすきまもなくなっている閑静な町の外観は、
 失望に値した。(帰郷15)

(193) 哲郎「せっかちでなければ、そでにしないか」 志乃「(くすつとわ
 らって) おひとによります。」(忍ぶ10)

これらの動詞はたいてい継続相にかえることができる。そして、かえても、意味がかわらない。これらの動詞のあらわす関係はできごと過程性をもっておらず、アスペクトから解放されているので、完成相と継続相の形式的な対立が意味的な内容をともなわないのである。つまり、えせアスペクトである。

これらの動詞は、非過去形のばあいには完成相もつかわれるが、過去形になると、継続相がつかわれることがおおい。

4) 動詞述語文から名詞述語文へ

関係をあらわす動詞は、コンピュータのようにはたらいて、それとくみあわさる名詞といっしょになって、あわせ述語のようになることがよくある。たとえば、(185)は、つぎのようにいいかえてもよいだろう。

(185') われわれの誤謬は、第一の部類である。

もし(185)をこれとおなじ構造としてとらえることができるとすれば、そのばあいの「属する」はコンピュータ化しており、この文は名詞述語文化していることになる。(189)や(190)は、もっとコンピュータ化しているといえるだろう。

(189') 芸術はこれではない。

(190') いえ、そんなものではありません。

つぎのような動詞も、かなりのていどにコンピュータ化しているとおもわれる。

(194) そもそもは佐渡のうまれ、この山国におちついたは今から十年ほど
 まえにあたる。(破戒101)

(195) 大企業が、中小企業などを圧迫するのもこれにあてはまる。

(間草147)

(196) ここはシンガポールの銀座、ハイ・ストリートといいます。(河明302)

(197) 五、人……これは人とかく。六、天。七、声聞……声を聞くとかく。

(間草142)

(198) 伯父は野田大作といった。(思出46)

つぎのような「なる」は、過去形「なった」のばあいは、変化をあらわす動詞としてはたらいでいて、完成相の基本的なアスペクト的意味が実現しているが、非過去形になると、コピュラ化して、アスペクトから解放される。

(199) ほうら、おひるにになりました。(波75)

(200) おまえさん、いくつになんなすったっけな今年……ウム二十七か、なるほど。(二代目柳家小さん「不動坊火焰」『口語速記明治大正落語集成』)

(201) おや、もう九時になる。(波22)

(202) 同行一「おいくつにおなりなされますか。」親らん「七十五になります。」(出家80)

(203) 国をでてから十年になります。(出家80)

(204) へえ、もうそんなになりますかね。(厚物12)

つぎの「たつ」も、コピュラ化して、アスペクトから解放されているといつてよいだろう。

(205) あかんぼがうまれて、三時間半もたちます。おたすけなすって、死ぬのかしれない、あのとおりです。(本日96)

(206) ほほう、九年たちますかなあ。(厚物13)

第3節 過程的な側面を要求しない 述語のなかで

第2節では、語い的意味のレベルでできごと過程性をうしなっている動詞をとりあげた。第3節では、語い的な意味の点ではふつうの動詞としてできごと過程性をもった意味があるのに、述語のレベルで、その動詞ができごと過程の側面をきりすててアスペクトから解放されるばあいのことをとりあげる。現実を、できごととしてでなく、ありさまとしてとらえてのべる文は、そういう述語を要求するのである。

1) ものごとの質的な属性をのべる文のなかで

ものごとの質的な属性をのべる文の述語は、典型的には、性質をしめす形容詞、または、コピュラとくみあわさった名詞によってつくられる。また、語い

的な意味においてできごと過程性をうしなった動詞もこれに参加する。第2節にあげた例文は、ほとんどがこれであった。ところが、このタイプの文は、さらに、語的な意味のなかにできごと過程性をもったふつうの動詞を述語にくみこんだばあいにも、その動詞に対して、そのできごと過程の側面をきりすてさせて、その動詞をアスペクトから解放する。

鈴木重幸1979が「完成相現在未来形（非過去形のこと）」の「非アクチュアルな現在」のなかの、「(その2) コンスタントな属性の現在」にあげているもののうち、「一般的な条件がしめされるばあい」をのぞいたものがここにあてはまるので、その例文をかりてあげておく。

76) 水は100°でふつとうする。

78) あさがおは夏さきます。

82) 世間はいろいろなことをいいますわ。(徳田秋声「縮図」137)

91) うちの子はマンガばかりよむ。

98) 彼はじょうずに英語をはなします。

99) 「あの人はたいへんにぎやかなひとですね。」「ええ、よくしゃべります。」

(夏目漱石「三四郎」143)

これらの文の述語は動詞でできているが、一定の時間とむすびついたできごと過程をあらわしていない。たとえば、鈴木のもの(78)は、つぎのようにかえても、意味するところは、それほどかわらない。

78') あさがおは夏さくという性質がある。

78'') あさがおは夏さく植物である。

2) 特定のできごとをさしめして、質的な属性としてのべるばあい

鈴木重幸1979が「非アクチュアルな現在」の「(その3) 一時的な状態の現在」でべていることがちょうどここにあたるので、そのまま引用させていただく。ただし、(122)～(125)、(130)は、つぎの3)のほうにまわしたほうがよいだろう。(その3) 一時的な状態の現在

(20) 性質をあらわす形容詞は現在未来形（あるいは現在形）において一般にコンスタントな属性の現在をあらわすが、現在の比較のみじかい時間帯における主体の状態をあらわすこともある。

121) a) ○○温泉のお湯はあつい。

b) きょうのお湯はばかにあついね。

これによく似た用法が動詞の現在未来形のコンスタントな属性の現在にもみられる。

- 122) 併しそれから半月ほどすぎて訪ねていった時には、駿は少しも泣かずに、彼に抱かった。「きょうはよく抱っこしますね。～」(波151～152)
- 123) 「思ったより沢山出る」医者は綿を巻いた針金を差し込んで、中の水を何本も、それへ吸い取らせた。綿には血がついて来た。(暗夜220)
- 124) 「眠ってますね、相変らず」「随分眠るな。もう十時間近く眠っている」(まぼろし8)
- 125) 「ああ、いい風がくるね」

このようなばあい、動きや変化は発言の瞬間にすでにおこったことか、現におこっていることであるが、これらの文は、主体の個々の動きや変化の実現をあらわしているのではなく、その質的、量的な側面を主体の属性として表現しているといえるであろう。そして、その属性は単に潜在的なものでなく、現に目のまえに顕在化している点で、コンスタントな属性の現在とことなっている。これをコンスタントな属性の変種とみるか、それから派生したものとみるかについてはなお検討を要する。

つぎの例も、この類であろう。さきの例119とくらべよ。

- 126) 「あら、この氷のう、もるのかしら。もりますわね。」(体の中を106)
- 127) 「ほら、みてごらん、ほく、かもいに手がとどくよ。」
- (21) 話し手の目の前でおこなわれた聞き手または第三者の動作をとりあげて、非難、意外、あきれ、感心など感情的な評価の気持ちをこめて、現在未来形がもちいられることがある。
- 128) 「六さんは怪しからん。女学生と組むと、実力以上のプレーをする……」(青い74)
- 129) 富永の足首には、一ヶ所、かわいたドロのあとがついていたが、彼はそれを発見すると、人差指にツバをタツプリなすって、こすり落してしまった。「ネコみたいな真似をしますね。富永さんは——」と、おとくはあきれて嘆声をもらした。(青い107)
- 130) 「なんですって!」と、田中教師は色をなして、テーブルに身体を乗り出させた。「聞きすてならんことをいいますね。どうして私が生徒をたきつけたというんです?」(青い88)
- 131) 「お前は本当に俺を馬鹿にするね。」(その妹107)
- 132) 「だからやっぱし、あなたが好きになっちまうんだわ、あたし。」～。「君はまたすぐ常談をいう——」(波272)

133) キャディを呼んでクラブを選ぶ松尾。若松「……（話を中断して）しかし、よくお飛ばしになりますな、総裁は」（金環蝕p294）

この種の文は、直接、直前の動作を表現しているのではない。直接表現しているのは、非アクチュアルな現在の意味（主体の習慣、くせ、性質、くりかえしの動作）である。そうした文を、目の前でおこった動作に関連して発言したという場面との関係で、上にあげたモーダルなニュアンスがつきまとうのだろう。

これらは、文のタイプは、1)とおなじである。ただ、さししめしているのが現在の状態や動作である点がちがうだけである。このちがいは、さしかたのちがいであって、意味のちがいではないだろう。なお、鈴木は「状態」とっているが、述語がのべているのは状態ではなくて、質的な属性である。アスペクトから解放されているのは、そのためである。

鈴木1979の126)～133)の諸例は、目のまえのできごとをあらわしながらも、コンスタントな属性としてのべている。けれども、121)のb)がそうであるように、その属性が現在時に限定されていても、その属性が質的な属性であれば、やはりアスペクトから解放されるだろう。^(注)

(207) それにしても、きょうの海はよくしゃべる。(旅の52)

さししめすことがらが過去のことであって、述語が非過去形であるばあいには、質的な属性をあらわすことになる。

(208) 「そのとき、あいつが“そんなことは、こどもがすることだ”って、いったんだよ。」「さすがにいいことをいうね、あいつは。」

(209) 「おれ、30キロオーバーで、免許証とりあげられた。」「おまえも、らんぼうなことするなあ。」

これを過去形にすると、できごと過程性がでてきて、完成相の基本的なアスペクトの意味が実現する。

(210) そうだ、君はあたまのいいことをいいました。(冬の50)

(211) ひでえことしたな……(女生43)

3) できごと過程からひっぱりだした質的な属性をあらわす文のなかで

鈴木重幸1979の「(その3) 一時的な状態の現在」の最後のところには、「な

(注) 鈴木1979の「コンスタントな」という用語は、「質的な」にかえると、よくわかる。いつも同じであるということよりも、質的であるということのほうが、より本質的なだから。

お、どこに位置づけたらよいか不明であるが、次のような現在未来形の用法がある。」として、つぎの3例をあげている。

134) 「この本しってる?」「いやはじめてみる。」

135) 「そんな話きいてない。今はじめてきく。」

136) 「あ、あなたがつぎ子さんですか。…つい、かけ違^{ちが}って、——はじめてお眼にかかります。」(波178)

これらの文は、述語が主語のあらわすものの質的な属性をのべているのでない点において、いままでのべてきたものとはちがったタイプの文である。これらは、できごとをできごと過程としてさしだしているのではなく、そのできごとの特徴的な側面をひっぱりだしてのべているのである。134)や135)は、「いや、はじめてだ」といっても意味が通じる。主要な情報伝達のやくめは「はじめて」のほうがひきうけている。だから、「みる」「きく」のほうは、述語をつくるためのコンピュータのような側面をもっているのだといってもよいかもしれない。また、これらの文は、つぎのようにくみかえると、1)や2)であつかったものとおなじタイプの文になる。

134') みるのははじめてだ

135') きくのははじめてだ

136') おめにかかるのははじめてです

この3)であつかう文は、主語でしめされたものごとの属性でなく、できごとそのものの属性をのべている点が1)や2)とちがうのだが、現実から二次的な属性をひっぱりだしてのべている点において共通している。ともにアスペクトから解放されるのは、そのためである。

完成相非過去形が二人称につかわれて、あいての直前の、または、直前からつづく行為に対するなじりをあらわすばあいがある。このばあい、なじりという話し手のきもちがくっついているのだが、できごと過程としてのべておらず、アスペクトから解放されている点は、まえのものと共通である。

(212) これこれ、またしゃべる。(時計44)

(213) また、あんたいらだつ、いらだつとうちしゃべる気ないぞ。(極私11)

(214) また、あんたうそいうわ。(雪国65)

(215) きみはかくしますね。(冬の31)

疑問詞がつくばあいもある。

(216) ワ、わりや……なにぬかす! (女囚38)

(217) とつぜん、彼女の右手があがり、彼のほおが、したたかな音をたてた。「なにをする?」(自由377)

(218) ペイ患でもねえてめえがなぜ麻薬をほしがる? (女囚22)

この3)であげたものは、すべて現実のできごとを、その過程的な側面をきりすててのべている。デキゴトの属性をのべている点で、1)や2)であげたモノゴトの属性をのべた文とことなる。また、1)や2)が、属性のもちぬしであるモノゴトと、モノゴトの属性とを部分として分化させてくみだてているのに対して、3)の文が、デキゴトとデキゴトの属性とを部分として分化させないでくみだてられている点も、両者をことなつた文のタイプにわけている。2)で引用した鈴木1979の122)や124)などは、この両者の中間かもしれない。

この3)にあげた例文のおおくは、過去形にかえることができる。

(219) そうなの、ああはじめてきいた。(極私5)

(220) いや、これは旦那、よいところでおめにかかりました。(貧乏35)

(221) 寅「(かんかんになって)またわらったなこの野郎、ばかにしやがって、おぼえてろ!」(寅次9)

(222) 野郎! なんてわらった。(寅次54)

過去形のばあいにはできごと過程性がある、アスペクトから解放されていない。

4) ものごとの性格、特徴を記述した箇条がきのなかで

箇条がきのもののなかでは、完成相形式の動詞がテンスやアスペクトから解放されることが多い。

辞書のはんれいや図・表のあらわしかたの説明のなかなどでは、スル、シタの両形がかなり自由につかわれる。

(223) 親見出しは、1 かな表記、2 品詞別、3 和語漢語の別、4 漢字表記、の順にそれぞれ一定の配列法にてらして配列する。(日本国語大辞典)

(224) 項目の配列は、現代かなづかいによる五十音順とした。(国語学大辞典)

(225) 図2-19に日鉄建材の職階別年齢分布を示す。また図2-20に、各職階の回答者の5%以上が属する年齢のはばを図示した。(国立国語研究

所報告73「企業の中の敬語」67)

過去形のばあいには、その作業の事実をできごととしてのべているので、テンス・アスペクトから解放されていない。非過去形のばあいには、その説明される内容の性格をのべたものであって、このばあいには、テンス・アスペクトから解放されている。

箇条がきは、モダリティーの面で述語性（陳述性）が希薄である点において、1)～3)にのべたものとちがっている。

第4節 アスペクトからの解放と テンスからの解放

1) アスペクトからの解放とテンスからの解放

アスペクトから解放されているもののなかには、テンスからも解放されているものがある。たとえば、ものごとのコンスタントな質的属性をあらわす文や、ものごとの性格、特徴を記述した箇条がきなどには、そのようなものがあらわれる。

(226) つばめは、なつにくる。

(227) あのながれは、どんなやまいにでもよくききます。(高野57)

(228) 分類語彙表における分類の大体をしめすために、本表の各項に与えた見出しの語句を、分類番号の順で掲げる。(分類語彙表)

けれども、いつもそうなるのではなく、アスペクトからは解放されていてもテンスからは解放されていないものや、ぎゃくに、テンスからは解放されていてもアスペクトからは解放されていないものなどもある。この問題は、必要におうじて、またのべるが、完成相のアスペクト的な性格の理解をたすけるとおもわれるものにかぎって、ここで、かんたんにのべておく。

2) アスペクトから解放されていて、テンスをもつもの

a) 「おもう」「かんがえる」など

「おもう」「かんがえる」など心的活動をあらわす動詞の完成相非過去形が一人称の現在の心的活動をあらわすばあいには、その活動が現在実現しているというテンス的な意味をあらわしているが、アスペクトからは解放されている。

(229) あたし……どんなひとだって、なにかあるとおもう。(忍ぶ76)

(230) だけど、君とはなんだかわかりあえるような気がする。(日本81)

b) 「めだった」「ちがった」など

形容詞またはコピュラにちかい意味をもった動詞の過去形が、主語であらわされるものごとの過去における質的な属性をあらわす述語のなかでつかわれるとき、テンスはあるが、アスペクトからは解放されている。

(231) そのころは、洋服すがたの女はよくめだった。

(232) 無口で愛嬌がないかとおもえば、急に娘らしくわらいだし、ぼうっとしているようでいて、なかなかよく気がついた。(潮騒42)

(233) 夏目漱石は幼名を金之助といった。

(234) 恋という字は、むかしは、イトシイトシトイウココロ（戀）とかいた。

c) 現在の質的な属性

現在存在するものごとの現在あらわれている質的な属性をあらわす文のばあいも、その述語につかわれている動詞は、テンスをもっていて、アスペクトからは解放されている。

(235) ほら、このポンプすごくとぶ。

(236) 波のうねりがさっきとちがうね。

d) 「5才になる」「5年たつ」など

コピュラ化した「なる」「たつ」の完成相非過去形が、現在の時刻、年齢や、現在までの経過時間などをあらわすときは、はっきりと現在のことをあらわす点でテンスをもっているのだが、アスペクトからは解放されている。

(237) 「いまなん時ですか。」「6時半になります。」

(238) この子は5才になる。

(239) あれから3年になる。

(240) しごとをはじめてから、5時間たちます。

e) 「はじめてみる」「なにをいう」など

現在、または、直前のできごとを、そのできごと過程的な側面をきりすててのべる文のばあい（第3節の3）の述語になる動詞は、アスペクトからは解放されているが、テンスはもっている。このばあいのテンスのあらわれかたは、完成相がその基本的なアスペクト的な意味をあらわすときとくらべて、精密さ

がゆるやかである。^(注)

(241) 「まえからしっていたの?」「いや、いまはじめてみる。」

(242) また、そんなことをいう。

(243) なにをいうか、いまごろになって。

3) テンスから解放されていて、アスペクトをもつもの

a) 一般的な命題の文のなかで動作をあらわす動詞

なりたつ時間的位置に関係のない命題をあらわす文は、テンポラリティーから解放されている。

(244) およぎの上手は川で死ぬ、で気象者は気象でかえってしくじります。

(思出48)

(245) 天気の良い日は、ここから富士山がみえる。

(246) 水は酸素と水素からなる。

うえの3例は、一般的な命題をあらわして、時間的な位置から解放されている。この3文の述語のあらわす属性の性格はことになっていて、それぞれ運動、状態、質をあらわしている。述語が運動をあらわすばあい、その運動の過程をどのようなすがたでとらえるかによって、アスペクトが実現する。たとえば、つぎのア)とイ)は、それぞれ、「なくなる」と「なくなっている」をとりかえることができない。

ア) おたまじゃくしは成長すると、しっぽがなくなる。

イ) おとなになったかえるは、しっぽがなくなっている。

ここでは、完成相と継続相が対立しているのである。

一般的な命題の述語になる動詞は、テンスから解放されていて、特定の時間的な位置とかわからない。けれども、すべての時間性をうしなうわけではない。一般的な命題の述語になった動詞も、それが運動をあらわすかぎり、その運動の過程が基準時間とかかわりをもつのである。ただ、その基準時間の発話時との位置関係が特定されないだけである。だから、テンスから解放されても、アスペクトからは解放されないのである。

b) 完成相があらわす非連続のくりかえし

鈴木重幸1979は、「非アクチュアルな現在」の「(その1) 非連続のくりかえ

(注) このことについては、第IV部第4章第2節および第V部第1章第1節4) b) を参照。

しの現在」で、非連続のくりかえしを、完成相でも継続相でもあらわせることにふれ、つぎの i) と ii) は両方ありうるが、「たとえば、職業としての動作は、ふつう継続相だけがもちいられ、完成相はもちいられないようである」とのべている。また、「職業のばあい iii) と同様に完成相ではいいにくい」として iv) の例をあげている。

i) このごろは毎朝6時におきます。

ii) このごろは毎朝6時におきています。

iii) 寅「何してるんだい、商売は」 リリー「私? ……歌うたってるのよ。」

(年鑑代表シナリオ集'73「男はつらいよ・寅次郎忘れな草」p64)

iv) このごろは英会話をならっている。

継続相がくりかえしをあらわすことについては、第Ⅲ部第2章でのべるが、そのばあいは、ある動作がくりかえしておこるような持続過程のなかにあることをあらわしているのである。つまり、アスペクト的な意味として、その持続過程をあらわしているのである。ii) ~ v) が継続相でいえるのは、そのためである。

v) あいつは毎日あそびあるいている。

これに対して、完成相がくりかえす動作をあらわすのは、アスペクト的な意味の変容ではなくて、テンス性のうすまりによる。つまり、その動作の成立する時間的位置がひとつに固定されないでくりかえすことをあらわしているのであって、アスペクト的にみれば、そのひとつひとつの動作は、まるごとのすがたでさしだされているのである。iii) ~ v) は、くりかえしがまとまることによって生ずる継続相の派生的なアスペクト的な意味が実現しているので、ひとつひとつの動作について基本的なアスペクト的な意味の実現してしまう完成相形式ではあらわせないのである。

このことは、つぎのふたつをくらべてみると、よくわかる。

ウ) 彼女はわたしがいくと、いつもないた。

エ) 彼女はわたしがいくと、いつもないていた。

この2例は、どちらも、一次的には、それぞれの基本的なアスペクト的な意味がいきでいて、おたがいにいれかえることができない^(注)。けれども、エ) のほうは、継続相の派生的な意味に転ずると、ウ) と同じ事実をさししめすことも

(注) エ) のようなものについては、第Ⅲ部第2章第2節でのべる。

できる。それに対して、ウ)のほうは、エ)と同じ事実をさししめすことができない。つまり、継続相がくりかえしをあらわすときは、アスペクトからは解放されず、テンスが変容されるばあいと、アスペクトが変容し、テンスは基本的にはたらくばあいがあるのに対して、完成相がくりかえしをあらわすときは、いつも前者のばあいだけにかぎられるのである。

なお、くりかえしがテンスの問題として生じるということは、アスペクトと関係をもたない名詞述語文のばあいにもそれがあることによっても、はっきりするだろう。

オ) かれが会社につくのは、いつも11時だった。

カ) このところは、勝つのはいつも西軍だ。

ク) モーダルな性格によって変容されたテンスをもつ動詞

つぎの例は、過去のできごとを非過去形でのべている。

(247) ま、ジイさんも、立場上ああいうわさ。(宵待47)

これは、それが当然だという気持ちをこめて、のべている。このばあい、過去形にもできるが、ふつうは、非過去形がつかわれる。この文では、その動作がまるごとのすがたでさしだされているから完成相になっているのである。そのことは、つぎの例を完成相にかえられないこととくらべると、よくわかる。

(248) ま、ジイさんも、立場上あそこになっているわさ。

モーダルな性格によって、テンスは変容するが、アスペクト的な意味はかわらない。たとえば、非現実の仮定に対する帰結の文は、未来のことでも、過去形をつかったりする。

サ) もしきみが(中止を)おしえてくれなかったら、おれ、あしたいくよ。

シ) もしきみがおしえてくれなかったら、おれ、あしたいったよ。

なお、このことに関連して、第VI部第4章を参照されたい。

第Ⅲ部 継続相のアスペクト

第1章 持続過程をなす局面の なかにあるすがた

第1節 継続相形式があらわすアスペクト的な意味

1) 持続過程をなす局面のなかにあるすがた (基本的な意味)

継続相のもつ基本的なアスペクト的な意味は、動詞のさししめす動作が、その動詞のあらわす動作や変化の過程の、持続過程をなす局面のなかにあるすがたをさしだすことである。

さきに第Ⅱ部第1章第1節でつぎのような図と例文をしめした。

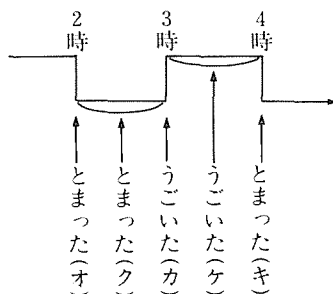
オ) とけいが2時にとまった。

カ) 3時にうごいた。

キ) 4時にまたとまった。

ク) とけいが2時から3時までとまった。

ケ) 3時から4時までうごいた。



これらの完成相が成立するのは、これらが動詞のあらわす動作またはその局面を、始発から終了までふくめてまるごとのすがたでさしだすことができるからである。そして、そのク) やケ) のさししめしている局面が継続相でもあらわせることもべた。

コ) とけいが2時から3時までとまっていた。

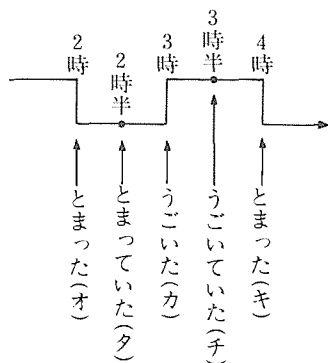
サ) とけいが3時から4時までうごいていた。

そして、そのちがいは、それらの局面の両端をふくみこんでいるかないかのちがいだということもべた。つまり、完成相がその局面の両端をふくみこんであらわすのに対して、継続相は、その両端のあいだにわりこんだすがたであらわすのである。

さて、これからこちらのはなしにうつるのだが、第一にいわなければならないのは、オ), カ), キ) のさししめしているような局面は、継続相ではあらわせないことである。なぜそうなるかという、それらの局面が瞬間過程をなして、始発から終了までが時間的にくっついてしまっているの、そのあいだにわりこむ余地がないからである。つまり、継続相が実現するためには、そのさししめす局面が持続過程をなすことが必要条件なのである。

いままでみてきたことだけをながめると、この五つの局面はすべて完成相であらわせるのに対して、継続相は持続をなす局面しかあらわせないのであるから、完成相のほうが継続相よりも、さししめしうる領域がひろいかにみえる。けれども、事実はそのでない。そのことをつぎにのべる。

第二にいわなければならないのは、始発と終了の時点には含まれた持続のなかにあるすがた(タ、チ)は、継続相であらわすことができて、完成相ではあらわすことができないことである。



タ) とけいは、2時半にはとまっていた。

チ) 3時半には、とけいはうごいていた。

これをなぜ継続相であらわせるかといえ、それが、その局面の始発と終了のあいだにわりこんだすがただからである。そして、完成相でなぜあらわせないかといえ、そのわりこんだ時間は、その局面を始発から終了までまるごとふくみこむことができないからである。

ここで、第一のことに第二のことをあわせてながめると、完成相と継続相の対立が、まるごととわりこみの対立、つまり、非分割と分割のちがいであることが、はっきりとあらわれてくるのである。奥田1977がみじかいことばでのべている完成相と継続相の対立は、ひきのばしてのべると、このようになるだろう。

ここで、いままでつかってきた「2時」「2時半」「2時から3時まで」などを「^(注)基準時間」とよぶことにする。そうすると、完成相では、動作の一定の局面が成立する時間が基準時間をまたいでおらず、継続相では、それが基準時間

(注)「基準時間」については、第1部第2章第4節4)に(注)がある。

をまたいでいることになる。つまり、アスペクトは、動作の局面の基準時間による非分割と分割の対立だということになる。

なお、テンスは、その基準時間の時間的位置が発話時よりまえかあとか、または同時かの対立である。

2) 継続相と局面

継続相の基本的なアスペクトの意味が実現する局面は、動作動詞のばあいと変化動詞のばあいでことになっている。動作動詞というのは、動作（運動）の局面がおわったあと、主体の状態がもとにもどるような運動をあらわす動詞であり、変化動詞というのは、変化（運動）の局面がおわったあと、主体の状態が変化しているような運動をあらわす動詞である。^(注) 継続相の形式をとるばあい、動作動詞は、動詞のさししめす動作が、持続過程をなす動作（運動）の局面のなかにあるすがたをさしだし、変化動詞は、動詞のさししめす、変化（運動）の局面がおわったあと、持続過程をなす、結果（静止）の局面のなかにあるすがたをさしだす。つぎの前2例は動作動詞、あとの2例は変化動詞のばあいである。

- (1) 子やぎはたったままのしせいで口だけをうごかし、さも満足らしくくっている。(暗夜38)
- (2) むこう岸の暗い土手にも灯が七つ八つうごいていました。(銀河261)
- (3) ながいあいだのるすではこりがたまっている。(日本36)
- (4) 二階にしずかにあがってみると、へやに灯がともっていた。(冬の136)

完成相のばあいには、動作動詞は動作の局面、変化動詞は変化の局面をとりだして、その始発から終了までをふくめて、まるごとのすがたでさしだすのであるが、動作の局面も変化の局面もともに運動の局面であるので、そのちがいは基本的には問題にならない。けれども、継続相のばあいには、一方が運動の局面（動作の局面）であり、他方が静止の局面（結果の局面）であるので、そのちがいが大きなものとなる。

このため、従来のアスペクト研究がこの点に中心をおいて展開され、完成相と継続相の対立のほうがおろそかにされてきたことは、奥田靖雄1977の指摘したとおりである。

(注) この二つの用語は、奥田靖雄1977によるものであって、金田一春彦1955の「動作動詞」、吉川武時1973の「変化動詞」は、それぞれべつの概念をもっている。

3) 「進行の状態」というとらえかたについて

これまでの記述では、おおくのものが継続動詞^(注1)は「進行の状態」をあらわし、瞬間動詞^(注2)(結果動詞)は結果の状態をあらわすといってきた。この「進行の状態」というとらえかたは、英語の“be+~ing”という形式を「進行形」とよぶのをうけついだものとおもわれるが、これが適切かどうかは、検討にあたいする。

動作動詞の継続相は持続過程をなす動作の局面のなかにあることをあらわすのであるが、この、持続過程のなかにあることを進行の状態にあるといつてよいかどうかは問題である。たとえば、「やぎが草をたべている」というばあい、たべる動作が進行しているといえるだろうか。その動作は一定の単位的な運動をくりかえしているだけであって、時間とともに状態がかわっていくような動作ではない。その点では、「まどがあいている」という状態が時間とともに変化していかないのとおなじである。そして、もしある時間からつぎの時間へうつることを進行とよぶならば、それは、たべている状態もあいている状態もおなじであって、前者を後者から区別する理由はない。

動作のなかには、結果として、なんらかの意味で進行につながる動作がある。たとえば、〈あるく〉という動作は、結果として位置をかえて進行することになる。けれども、「あるいている」というのは、そのような運動の持続のなかにあることをあらわすだけで、進行することをあらわさないだろう。だから、エスカレーターにのって、その進行方向と反対の方向にそれと同じ速さであるくばあいも「あるいている」ということができる。

ほんとうに進行をあらわすためには、「あるいていく」「あるいてくる」といわなければならない。そして、この「あるいていく」や「あるいてくる」がうえのエスカレーターのばあいに適用できないこととくらべると、「あるいている」が進行を積極的にあらわさないことがわかる。

しだいに^(注3)変化する変化をあらわす変化動詞の継続相は、一定の条件のもとに、変化の局面のなかにあるすがたをあらわして、動作動詞のようにつかわれることがある。つぎの2例のうち、あとの例がそれである。(教科研1963から借用)

(5) 海がみえた。潮はあながいひいている。

(注1, 2) この「継続動詞」、「瞬間動詞」は、この報告では、奥田1977にしたがって、それぞれ「動作動詞」「変化動詞」とよんでいる。「結果動詞」は、藤井正1966および高橋太郎1969でつかわれた用語である。

(注3) 吉川武時1973では、このような動詞を「変化動詞」とよんだ。

(6) 潮はいまさかんにひいている。

この例も、それを「ひいていく」「ひいてくる」とくらべると、進行性のよいことに気づかれるだろう。

進行のすがたをあらわすのは、「していく」「してくる」のような形式であって、「している」ではない。その点で、「している」を「進行の状態にあることをあらわす」というのはまずいだろう。やはり、「運動の局面のなかにある」というほうが事実をただしくとらえており、しかも、結果の局面のなかにあることとの共通性も、もつめやすい。

なお、第II部第2章でとりあげたのは、まさに進行のすがたである。

4) 「結果の状態」というとらえかたについて

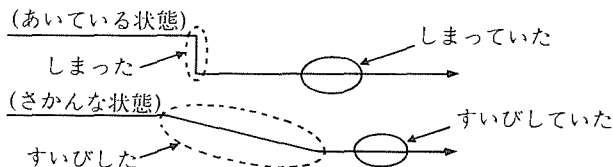
これまで変化動詞の継続相は結果の状態をあらわすといわれてきたが、このいいかたはあいまいで、あいられない二様のものをともにふくみこむ可能性をもっているので、そのことについてのべる。

継続相の基本的なアスペクトの意味は、その動作が持続過程をなす局面のなかにあるすがたをあらわすことである。したがって、変化動詞が結果の局面のなかにあるすがたで動作をさしだすとき、その局面の片はしである始発つまり変化の局面は、きりおとされている。

(7) 家にかえった。家は園田がいうように戸がしまっていた。(波10)

(8) まえにもかいたように、当時京都の町はひととおりならず衰微していた。(羅生7)

これらの例の戸がしまった局面、衰微という変化が進行した局面は、きりおとされたカスのほうにはいって、このすがたとは、きれている。図示すると、この継続相は、つぎの実線にかこまれたところだけを取りだすことになる。

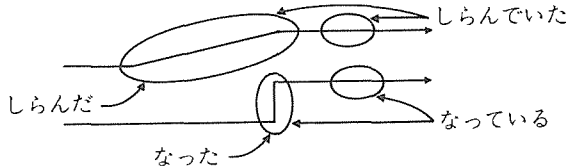


ところが、つぎのようなばあいには、その結果の局面の始発、つまり変化の局面がいっしょにいいこめられている。

(9) つめたいあけがたの空気が、いつのまにか、しらんでいた。(ない71)

(10) 隠居^{さんさいそうりゆう}三齊宗 立もまだ存命で、七十九才^{ななふた}にな^なっている。(阿部26)

これらは、図示すると、つぎのようになるだろう。このばあい、変化の局面をへて結果の局面のなかにあることがのべられているのであって、^(注1)それぞれ二つの実線部があらわしこめられている。なお、二つの実線部が接しているかはなれているかには、このばあい関心がない。



こちらのばあいには、結果の局面のなかにあることだけがのべられているのではないので、継続相の基本的なアスペクト的な意味が実現しているとはいえないのである。^(注2)

ところで、「結果の状態をあらわす」といういいかたがされたとき、このふたつが、はっきりと区別されないことがおこった。その点で、前者、つまり変化動詞の継続相の基本的な意味が実現されるばあいには、「結果の局面のなかにある」ということをきちんとのべておくほうがよいだろう。

5) 動作の断続的なくりかえしについて

いままでのアスペクト研究では、断続的なくりかえしは、継続相の派生的な意味として記述されてきた。この用法は、たくさんの動作をひとつの動作相当にしていること、これになる資格として、動作動詞と変化動詞を差別しないことなどで、たしかに、派生的用法といえる。けれども、基本的なものはずれる度あいは、前項であげた変化の局面と結果の局面とをともにあらわすものにとくらべると、ずっとひくい。なぜなら、それは、たくさんの動作をひっくるめてひとつのようにあつまっている点が基本的でないだけであって、そのひっくるめてひとつにしたおおきな持続過程のなかにあるすがたをあらわしている点は、基本的なものと、まったくかわらないからである。その点では、動作の

(注1) この文法的な意味は、伝統的な言語学において完了(perfect)とよばれてきたものであるとおもわれるが、完了をめぐるでは、いろんなとらえかたがありうるので、誤解をさけるため、この報告では、「完了」という用語をつかわなかった。

(注2) このちがいは、工藤真由美1973、1976、角張新治1976Bや、荒井孝一1984がのべている。

断続的なくりかえしは、継続相の基本的な意味のヴァリエーションであるにすぎないといえるかもしれない。この用法の名づけは、「断続的な動作のくりかえし」といってより、「断続的なくりかえしの持続過程のなかにあるすがた」といったほうがよいだろう。

まえの4) にあげたものが、相対的テンスとアスペクトとの複合したものをあらわしているのに対して、こちらは、純粋なアスペクト形式である。(例は、教科研1963から)

- (11) 十日に一ぺんぐらいのわりでけんかをしていた。(坊ちゃん)
- (12) 実母をうしなった当時は私は毎日ないていた。(母の死と新しい母)

6) 「単なる状態」について

変化動詞の継続相は動詞のあらわす変化の結果の局面のなかにあるすがたをあらわす。その局面は静止の局面であり、しかも、そのあらわすすがたは、変化の局面をきりおとしたすがたである。その点で、変化動詞の継続相は、静止的な状態の持続過程のなかにあるすがたをあらわすといえるだろう。この側面だけに注目すると、それは、つぎのような、いわゆる「単なる状態」をあらわすものと共通である。

- (13) 山がそびえている。
- (14) 道がまがっている。

けれども、単なる状態というのは、変化の結果としてそうなったのではなくて、はじめからそうなのである。この点が継続相の基本的な意味とことなる。変化動詞の継続相があらわすのは、変化の結果の局面であるところの静止的な状態の持続過程のなかにあるすがたであって、変化の結果の局面であるかないかという点が両者をおおきくわけする。継続相は、動作の一定の局面を、その始発と終了のあいだのどこかできりとしてさしだすのであって、その点で、完成相がその始発から終了までをふくめてまるごとさしだすのとは対立するのである。それに対して、単なる状態のほうは、対立する完成相をもたない。だから、きびしくいうと、それは継続相でさえないのである。

つぎの(15)の例は、継続相の基本的な意味が実現しており、(16)の例は、単なる状態をあらわしている。

- (15) いつもの場所にぬぎすてたゆかたをきようとすると、どうしたわけか、

そのゆかたに砂がいっばいついていた。(ここ10)

- (16) カムパネルラは、ゆびでそっと、さぎの三日月がたの白いつむった眼にさわりました。あたまのうへの槍のような白い毛もちゃんとついていました。(銀河279)

単なる状態のばあいには、すくなくとも、基本的なアスペクトの意味をもたない。「単なる状態」といわれてきたもののなかには、状態の持続過程のなかにあるすがたをあらわすものと、アスペクトから解放されているものがあるが、そのことについては、あとで問題にする。

7) 状態が動作の局面か

状態をあらわしているか、動作の局面をあらわしているかということは、ここでは、文法の問題であって、単にさししめしていることがらの事象としてのありかたでそれをわけているのではない。たとえば、つぎのようなものは、一見状態をあらわしているようにみえるが、動詞のあらわす動作の局面のなかにあるすがたをあらわしていて、その局面をまるごとあらわす完成相と対立する。なぜなら、これらは、「光った」「ただよった」「しずまりかえった」の形で、まるごとのすがたをさしだすことができるからである。

- (17) 婉、目があやしくギラギラと光っている。(婉と41)

- (18) いなかまちをめぐっての行商の中途でもあろうか、寅の表情にはめっきりと疲労のかげがただよっている。(寅次98)

- (19) それらにかこまれた庭は、虫一びき、いきもののすんでいないかのよ
うに、しずまりかえっている。(婉と3)

第2節 持続過程をなす運動の局面の なかにあるすがた

1) この意味が実現する条件^(注)

この継続相形式は、そのさししめす動作が持続過程をなす運動の局面のなかにあることをあらわすが、それが成立するためには一定の条件が必要である。

(注) 継続相の基本的なアスペクトの意味が運動の局面と結果の局面のどちらをとりだすかをきめる条件については、工藤真由美1982に、動詞のリストをふくめて、くわしい考察がある。

この点は、「しつつある」という形式とことなる。「しつつある」は専門にこの意味をあらわす形式であって、変化動詞であっても「かわりつつある」「うえつつある」のようにその運動の局面をとりだすし、また、瞬間的な動作をあらわす動詞であっても、「まえにのめりつつある」「とまりつつある」のように、その動作を、高速度写真がそうするように拡大して、持続過程にもっていくことができる。これにくらべると、「している」はずっと制限がある。

第一に、動作動詞であることが基本的である。動作動詞というのは、動作後にその動作主体がもとの状態にもどるような動詞である。変化動詞も運動（変化）の局面をもっているが、継続相形式のばあいには、ふつうはその局面をとりださず、結果の局面をとりだす。

第二に、その動詞のさししめす動作の運動の局面が持続過程をなしうるものでなければならない。「つづく」「持続する」のような動詞は、その語意的意味から当然に持続過程をあらわすし、「はしる」「はたらく」のような動詞は、そのあらわす動作が瞬間的には成立しえないので、これも当然にこの用法をもつ。「みる」「さわる」のような動詞のあらわす動作は、瞬間過程をなすものもあるが、持続過程をなすものもあるので、この用法をもつ。「たたく」「切る」のような動詞は、1回の瞬間的な動作もあらわすが、連続動作をひとつの持続過程としてあらわすこともできるのでこの用法をもつ。

けれども、その動詞のあらわす動作がどうしても瞬間的にしかなりたないようなものであれば、このアスペクト的な意味を実現しない。「はっとする」「直覚する」「でくわす」「命中する」などは、持続過程のなかにあるすがたをあらわすことができない。

第三に、動作の局面を始発、終了からきりはなしてさししめすことのできる動詞でなければ、この用法をもたない。たとえば、「かすめる」「急停車する」「名づける」「こみみにはさむ」などは、現実には持続時間をもつばあいがあり、その動作をべつの動詞で「すぐそばをとおっていた（＝かすめる過程）」「そのとき名まえをつけていた」（＝名づける過程）、「きこえていた」（＝こみみにはさむ過程）などということができるとは、はじめにあげた動詞は、そういういいかたをすることができない。

第四に、第一から第三にのべたような条件にあわない動詞でも、一定の環境があれば、この用法になることがある。たとえば、「すこしずつかわっている」

「どんどんつもっている」のように進行性の副詞にかざられると、変化動詞が運動の局面をとりだすし、持続過程をまるごとしかあらわせない動詞でも、持続過程をあらわす名詞をかざる連体的な用法のなかでは「かすめている途中の高速度写真」のようなものも、ありうるだろう。しかし、これは、ひじょうに特殊である。

2) 動作動詞であるばあい

動作動詞は、つぎのようなばあいに、持続過程をなす運動の局面のなかにあるすがたをあらわす。

a) 持続をあらわす動詞

- (20) 戸田の声がつづいている。(間草176)
- (21) それでも、国民の間の不和は、ずっとひきつづいている。(もの111)
- (22) こうした始末で、皮ふ泌尿器科病室のまえにいくまで、かれは舌うちをずっとつづけていた。(故旧24)
- (23) ~研究会は、(中略)あいかわらずの討論をかさねている。(根源131)
- (24) 風立ちぬ、いざいきめやも。ふと口をついてできたそんな詩句を、私は私にもたれているおまえのかたに手をかけながら、口のうちでくりかえしていた。(風立72)

b) 持続的なうごきをあらわす動詞

- (25) 森をぬけたところに浅瀬の川がながれている。(婉と135)
- (26) 荒川車庫ゆきの都電がゆらゆらと不安定にはしっている。(妹65)
- (27) まどの外のまっくらななかに、どこかの村の灯が、ゆるやかにあとずさりしていた。(帰郷309)
- (28) 西田が電話をかけている。(戒嚴48)
- (29) あくるあさ目をあくと、駒子がつくえのまえにきちんとすわって、本をよんでいた。(雪国108)
- (30) ある日、梅田新道にある柳吉の店のまえをとおりかかると、^{あつし}厚子をきた柳吉がでっちあいてに地方送りの荷づくりを監督していた。(夫婦11)
- (31) ほそい雨は、空から、しずかにまっすぐにふっていた。(むら36)
- (32) コンピューターランプがいっぱいに点滅し、記憶装置のテープやドラムがまわっている。(日本50)

(33) おれはうまいとおもっている。(末枯40)

(34) しかし、かれはこの不安をいられないものとかんがえていた。(暗夜65)

(35) 父はかれらのかげぐちを気にしていた。(ここ107)

「おもう」「かんがえる」などの完成相非過去形が話し手の現在の心のうごきをあらわすときには、その内容が対象化されず、アスペクトから解放されるが、継続相のばあいには、思いやかんがえが基準時間のまえからはじまって、あとまでつづく持続過程のなかにあることをあらわして、アスペクトから解放されていない。

c) 動作の連続的なくりかえし

ひとつひとつの動作は瞬間的であっても、それがつづげざまにおこなわれて、全体として持続的な動作になるものがある。

(36) 雨がまどをうっている。(八月55)

(37) 希四郎、やっぱり半裸でまきをわっている。(婉と123)

つぎのようなものは、副詞などの修飾語によって、くりかえし動作であることがわかる。

(38) 相手は函館からもってきたウィスキーを、くすりでものむように、舌のさきですこしずつつなめていた。(カニ53)

(39) 飛島さんはといえば、とおりがる一人ごとになにかあいさつしている。(火の75)

(40) 一機がスタート、つづいてスタートと、ひきもきらずにとびたっている。(日本100)

(41) つめたい風のなかをただいかなだからいかなへと、せわしなくとびうっている。(忍ぶ28)

擬声語の副詞のばあいもある。

(42) その光のなかで、職人がひとりはらばいになってカンカンとかなづちでたたいている。(冬の173)

(43) ドブーン、ドブーンとゆるくサイドに波があたっている。(カニ62)

つぎのようなものは、動作のくりかえし過程をあらわすが、そのくりかえし過程が全体として「酒をのむ」という持続動作をあらわして、慣用句的である。

(44) 田所重喜、女中をあいてにしずかに盃をあけている。(砂の97)

d) 力学的な運動のない動作

「だまる」「ひかる」などのあらわす動作は、力学的な運動はないが、くぎりはあって、それがおわるともとの状態にかえるので、やはり動作動詞の一種である。この種の動作には、瞬間的にも持続的にもなるものがおおい。完成相では、この種の動詞は、持続過程または瞬間過程をなす局面をとりだしたり、持続過程の始発の局面をとりだしたりするが、継続相のばあいには、動作を持続過程としてとらえ、その持続過程をなす動作の局面のなかにあることをあらわす。

(45) 裕佐はことばもなくだまっていた。(青銅53)

(46) 戸田、じっと検事のかおをにらむようにしている。(間革164)

(47) 信之の目は、けれども、正面に姉の視線をうけとめていた。(多情105)
うえの例は人間の動作のばあいであるが、ものの作用のばあいもある。

(48) ね、きれいでしょ。あんなにひかっています。(銀河289)

(49) つぎに目をひらいてみると、まどのそとは、あおおとかがやいていた。

(冬の165～6)

(50) あさつゆをおいたりんどうの花に、朝日があたっている。(寅次42)

e) 動作と状態のあいだ

動作と状態は現実には連続的であって、どこまでを動作といい、どこからを状態というのかかむずかしい。けれども、ことばの問題としては、その現実をあらわす表現形式がどのような体系のなかにあるかということでみわけなければならない。おなじ状態を完成相でも継続相でもさしめすことができ、しかも、完成相のほうは始発から終了までをふくめてまるごとのすがたで、継続相のほうは始発と終了のあいだにわりこんだすがたでそれをさしだすとき、その状態は、動作の持続過程をなす局面としてとらえなければならない。つぎの諸例は、そのばあいである。

(51) 地上は草のあわいまでも紫のかげにみち、陽の熱のなごりと、土と、水蒸気とからうまれる、あまずっぱいにおいがあたりにただよっていた。

(野火29)

(52) 病室には爆発による重軽傷者とその家族であふれ、ごったがえしている。(華麗161)

(53) そのうえあたりには、黒いけむりともみえるものが一面にわだかまっ

ていた。(生活141)

- (54) 寺の廃虚の内部にはいると、屋根はなく、つつぬけの青天じょうで、
四方のかべのすきまにも、小さい木が枝をのばしてひげをはやしたよう
にしげっていた。(帰郷9)

つぎのようなものは、完成相「さむぎむとした」がないので、状態持続のなかにあるすがた(準アスペクト的なすがた)をあらわしているといわなければならないだろう。これについては第4章でのべる。

- (55) 寝台のうへは、わらぶとんをむきだしにして、さむぎむとしていた。

(真空63)

f) 「たっている」「すわっている」など

吉川1973は、「たっている」「すわっている」などが結果の状態なのか進行の状態なのかを検討して、結局は結果の状態なのだといっている。

「たつ」「すわる」などの動詞は、その完成相がふつうは変化過程をあらわす。この動詞の語法的な意味が変化なのだとすれば、「たっている」「すわっている」は、変化の結果の局面のなかにあることをあらわすのだが、もういっぽうで、そういう状態を維持する動作をあらわすという意味をもっているのだとすれば、状態を維持する動作過程のなかの動作の局面のなかにあるすがたをあらわしていることになる。

現在の筆者は、これを両者の中間にあるものとみているが、一定の使用のなかでは、動作の局面のなかにあるとみたほうがよいとおもわれる。つぎの諸例では、状況語がデ格であらわれたり、「～ながら」という副動詞や、その他の動作性の語にかかる修飾語があったりするので、動作の局面のなかにあるとみななければならないだろう。

- (56) 私はひとり茶の間でねころんでいた。(暗夜11)

- (57) お安さんは、なすび歯をみせてわらいながらそとにたっていた。

(桑の59)

- (58) ふたりはしばらくじっとかおをみあわせながらすわっていた。

(青銅25)

- (59) おくみは下目になってえりのあたりをかきあわせながら、きまりわる
そうにすわっていた。(桑の77)

- (60) えんのしたに、ビーグル犬がすましてすわっている。(時計25)

- (61) おもてでためらっていた中年の女が、やっとおもいきって中へはいり、
 カウンターのまえにおずおずたっている。(間革33)

これが動作性をおびるのは、いったん変化動作でつくりだした結果の状態を維持するためには、主体自身が一定のちからをくわえつづけなければならないからであろう。他動詞のばあいには、このことがもっとはっきりするものがある。

- (62) あばれるのをふたりの団員がおさえこんでいる。(宵待39)

この動作の過程をみると、まず、おさえこまない状態からおさえこんだ状態への変化である動作があり、そのあと、その状態を維持する動作がある。そして、この文では、継続相の「おさえこんでいる」は、状態維持の動作の局面のなかにあることをあらわしている。

「あける」「あげる」なども、対象の変化をひきおこすことをあらわす動詞であるが、その対象の変化の結果を維持する動作をあらわすことがある。

- (63) みんながおりるまで、エレベーターの戸をあけていた。

- (64) おれは、しばらく手をあげていた。

このように完成相と継続相で中心をおく局面がかわってくるのはおもしろい。こうしたことは、対象の状態を一時的に変化させることをあらわす他動詞のばあいには、たくさんある。

- (65) よくふとってはいるが、実際の病人のようなわるいかおいろをして、
 スパズムでたえかねるように、なかばまえこごみになりながら両手で腹部をおさえていた。(本日69)

- (66) ……やっとおきあがった男は上くちびるをきって口をおさえている。

(季節43)

すこしくどくなるようだが、これらが維持の動作をしていることをはっきりさせるために、「しておく」と対比させてみよう。「しておく」のばあいは、対象の変化後は、動作として自分の力をくわえている必要がない。

- ア) かぜがふくので、手でおさえていた。

- イ) かぜがふくので、文鎮でおさえておいた。

- ウ) 坂道で車をとめているあいだ、からだでささえていた。

- エ) 坂道で車をとめているあいだ、石でささえておいた。

さて、ひるがえって、「たっている」「すわっている」にもどろう。この「た

つ」や「すわる」も、うえの他動詞と同様、二局面の動詞だといえそうである。つまり、姿勢の変化の局面と変化結果の維持の局面とからなる動作過程をあらわす動詞である。そして、完成相または継続相で文の述語になるばあいには、そのどちらかの局面をとりだして、アスペクトの意味を実現する。完成相形式では、多くのばあい変化の局面をとりだし、ときに結果維持の局面をとりだす。そして、継続相形式では、いつも結果維持の局面をとりだす。いずれにしても運動の局面であり、「たっている」や「すわっている」は、この意味で、持続過程をなす動作の局面のなかにあるすがたをあらわすというほうがよいだろう。

(56)~(61)もそうであるが、実況放送のなかにも、この種のおおくの例をみつけだすことができる。

(67) ライトずうっとバック。フェンスぎわ。かまえている。池田とった。(81)

(68) この蒲原監督を中心として、いぜんとして白いダッグアウトのまえて円陣がくまれています。(81)

(69) 3 るいがわ先取得点をあげました印旛高校の蒲原監督もたちあがっています。(81)

(70) 4 回のうらのカーブはノーアウトでランナー 2 るいという絶好の追加得点のチャンスをつかんでいます。(神広)

(71) 6 回表印旛高校、1 点をあげ、なお追加点のチャンスをむかえています。(81)

(72) 栃光いいかっこうになりました。右をさしている。(5月)

(73) そとにリーガルファミリー、うちにはピーチシャダイ。馬体をあわせています。(9R)

(74) サンエイソロンは現在、先行馬群のちょうどうしろへつけている。(9R)

(75) 人気のサクラサワヤカが一馬身半から 2 馬身のリードをとっています。(9R)

g) 「いきている」「くらしている」など

「いきる」「くらす」「住む」などは、ながい期間の持続をあらわす動詞である。これらも動作をあらわす点でいままでのべたものとかわらないが、量的に大きい持続過程をあらわすので、ここにとりあげておく。

- (76) しかし、老人は生きている。(厭や284)
- (77) 実は私も唯円とおなじ心もちでくらしています。(出家76)
- (78) 孫四郎は(中略)それを自家の製作のうえにいかし、ゆうゆう自適している。(青銅13)
- (79) ふたりのお嬢さんが玄関の洋風のへやにすんでいる。(本日93)
- (80) 彼は(中略)施療病院に奉仕的にかよっている。(冬の45)
- (81) おれは神田で日本正学館というのをやっている。(間革38)

これらは、ひとつひとつの具体的な動作はいろいろであるが、全体をとおして、ひとつの動作としてあらわしているのである。

つぎの「がんばる」「うまくいく」などは、みじかい持続の動作もあらわすが、つぎのようなものは、ながい持続のなかでなりたっている。

- (82) 吉郎は平穩に店ではたらいていた。(無限84)
- (83) 君らは、戒嚴部隊に編入されたんだろう？ うまくいったじゃないか……(戒嚴48)
- (84) 最近も、わたしのほうの大学院学生あざましげるの東 滋 君というのが、ずっとこゝでがんばっていた。(高崎23)
- (85) そんなに、まえから、あたしをあざむいてたのね。(自由21)

3) 変化動詞であるばあい

a) 瞬間的な変化をあらわす動詞

変化動詞の継続相は、ふつうは、変化の結果の局面のなかにあるすがたで動作をさしだすのであって、変化(運動)の局面のなかにあるすがたで動作をさしだすことはしない。とくに、瞬間的な変化をあらわす動詞がこの意味を実現することはまれである。けれども、まったくないわけではない。

- (86) とびらがしまっていますから、むりな乗車はやめてください。

(鈴木重幸1972)

- (87) ぼとぼととおちている水は、十分間でやく1デシリットルになりました。(教科書3下—吉川武時1973)

(86)の例は瞬間を拡大したものであり、(87)の例は、副詞にささえられてくりかえし運動になっている。いずれにしても、こういう例はあまりない。この例は、どちらも文の終止につかわれていない。終止形式のなかでは、ほとんどないと

いってもよいのではないかとおもわれる。

b) すこしずつの変化をあらわす動詞

「かわる」「ふえる」「へる」「つもる」などは、変化動詞のなかでも、徐々の変化をあらわす動詞である。この種の動詞があらわす現実の変化過程は持続性をもっているが、その継続相は、ふつう結果の局面のなかにあることをあらわし、変化(運動)の局面にあることをあらわすばあい^(注)は「してくる」になる。

この種の動詞の継続相は、ふつうは変化の局面のなかにあることをあらわさないのであるが、「ぐんぐん」「どンドン」「徐々に」のような修飾語をうけると、変化の局面のなかにあることをあらわす。

(88) それに、強制開墾で山麓はどンドンひらかれている。(旧石309)

(89) 汽車は徐々に進行をゆるめていた。(或る20)

(90) 今ではその知恵はしだいにとぼしくなっている。(人生54)

継続相の意味をはっきりさせるために、「してくる」「していく」の例もあげておこう。「してくる」「していく」は進行をあらわす。

(91) あたりはしだいにくらくなってきた。(高崎15)

(92) 木谷の声はしだいに、ゆるくのんびりしたものになっていった。

(真空115)

「していく」「してくる」が継続相になったものもある。

(93) そうして、ビタミンとかホルモンとかいう、微量でありながら生活に不可欠な物質の一覧表が、その欠乏によっておこる異常状態を検出の手がかりとして、しだいにととのってきてもいたのである。(生命177)

c) 主体の状態をかえる他動詞

他動詞は、ほんらい対象に対するはたらきかけをあらわすものであるが、その対象が動作主体に所属するものであって、その動作によって主体の状態がかわるばあいがある。このばあい、この他動詞は変化動詞としてはたらくわけである。こういうばあいの継続相は、ふつう変化結果の局面のなかにあることをあらわす。

(94) 彼女は、男のようにかみをみじかくきっていた。(高橋太郎1969)

(95) はいいろの地に黒い糸をおりこんだ細い格子のせびろをきていた。黒いくつしたをはいていたとおもう。(故旧172)

(注) 吉川武時1973では、この種の動詞を「変化動詞」とよんでいる。

けれども、また、この種の動詞は、変化（運動）の局面のなかにあることをあらわすばあいもある。

(96) ポスターのまえで、野口、ひげをそっている。(やさp41)

(97) [足がたくさんあって速いかとおもって、むかでにつかいを命じたが、なかなかどってこない。ようすをみにいこうと思って、]玄関へでてみると、むかでが玄関の土間で百本の足にいっしょうけんめいにわらじをはいていた。(昔ばなし)

4) 動作過程をあらわしていても、この用法をもたない動詞

動作過程をあらわす動詞であっても、継続相で動作の局面のなかにあるすがたをあらわすことのできないものがある。たとえば、「一礼する」は、「いま一礼している」といえない。これは、一見、動作が瞬間的だからだとかんがえられそうであるが、一礼する動作はかならずしも瞬間的ではない。たとえば、つぎの例では、あるていど時間をかけているはずである。

(98) はかまをつけた老主人があらわれて、「手料理で、とにかくふうしたものをさしあげべきですが、なにしろ、てまえのからだがこのようでは、ろくにさしずもできません。それで失礼ですが、略式にねがって、料理屋のものでごめんをいただきます。」とていねいに一礼した。(河明263)

このときの主人の動作をみている途中での発言として、「ていねいに一礼している」はいえないけれども、「ていねいにおじぎしている」ならいえるだろう。このばあいに「一礼している」がいえないのは、その瞬間性によるのではなく、動詞の意味に原因がある。それは、「一礼する」が、始発・動作・終了のような局面に分析することのできない意味をもっているからである。この動詞は、物理的な動作をあらわすのではなく、そのまるとの動作をひとつの行為として意味づけてあらわしているのである。「まると動詞」といえばよいだろうか。

「一泊する」「三泊する」などになれば、それが瞬間過程でないことがもっとはつきりするが、これも「そのときかれは、その旅館で一泊していた」などとはいわない。「失笑する」なども同様で、「いまわらっている」とはいえても「失笑している」とはいえない。「名づける」という動詞は、つぎのように継続相でつかうことができる。

(99) われわれは、この文の部分を状況語と名づけている。

けれども、これは、「名づける」「よんでいる」「よぶ」「いっている」「いう」などにかえても、意味がかわらないように、すでにアスペクトから解放されていて、名まえをつけている過程のなかにあることをあらわさない。これに対して、完成相のばあいには、完成相の基本的なアスペクトの意味でつかうことができる。

(100) われわれは、これを「状況語」と名づけた。

完成相は、まるごとのがたでさしだすからである。

「成功する」「失敗する」もまるごと動詞である。それから、「ぬすみをはたらく」「こみみにはさむ」「うやむやにする」などの慣用句も、まるごと動詞である。ある基準時間がその動作の持続過程をなす局面のなかにあったとしても、「かれは、そのときそれをうやむやにしていた」「ぬすみをはたらいていた」などとはいえないのである。

まるごと動詞の継続相については、例がないので、事実にもとずいて結論をだすことが困難なのだが、いまかんがえているのは、このていどである。

第3節 持続過程をなす結果の局面の なかにあるすがた

1) 結果の局面をもつ動詞

継続相は変化の結果の持続過程をなす局面のなかにあるすがたをあらわすことができるが、これが成立するためには、その動詞があらわす運動が変化であり、その結果は、動作主体の状態の変化でなければならない。すなわち、変化動詞がこれをあらわすのである。

変化動詞は、そのおおくが自動詞である。

(101) 門のかんぬきにかけられた錠もさびついている。(婉と3)

(102) 長火鉢にはびかびかにみがいた吉原五徳に鉄びんがかかっている。

(つゆ73)

(103) 彼がでていったあとで、つくえのひきだしをあけてみたら、一万七千余円が、はいっていた。(自由24)

(104) 嘉門がこしかけた石材も雪にうもれていた。(冬の98)

(105) よごれた雪がドロドロにとけている。(津軽6)

(106) 麻のロープが鉄管でもにぎるようにバリバリにこごえている。

(カニ25)

(107) 風雨にあらわれた門扉はふるびている。(婉と3)

(108) のちほど、青木さんが外のはこからだしてきてくださった郵便物のなかに、青山にいる養母からおくみへ久々できた手紙もぬれてまじっていた。(桑の105)

(109) それよりも彼がそれほどに苦心をした飯は、なにか用具についていたのか、彼の手にあったのか、とにかく石油のにおいがしみこんでいた。(田園77)

(110) ふりかえると、かおなじみの安田という中年の病兵の、表情のない顔があった。熱帯潰瘍でかた足がこん棒のようにふくれあがっていた。

(野火25)

他動詞であっても、その動作の結果として、主体に一定の状態をつくりだすものは、このグループへはいつてくる。

(111) 大木のたおれたのが草がぐれにその幹をあらわにしている。

(高野38)

(112) やかんのふたのうちがわは、冷気がこって、ちいさな玉をむすんでいた。(生活11)

(113) 今日一日の漁の仕事着のまま、死んだ父親の形見のズボンとそまつなジャンパアを身につけている。(潮騒8)

(114) [初対面の田代は]部屋にはいつても、これだけは貧相な黒いぺらぺらなマフアラをなぜか首にまきつけていた。(闘牛78)

(115) 藤村も、先刻のいやなはなしは、わすれたように、一ぱいの酒で、きげんよく、ほおをそめていた。(自由297)

2) 結果の局面をもつ動詞であっても、この意味を実現しないばあい

変化の局面をもつ動詞が継続相のかたちをとっても、この意味が実現しないばあいがある。そのひとつは、変化(運動)の局面のなかにあるすがたをさしだすばあいだが、これについては前節でのべたので、ここでは、その他のばあいのことについてべる。

a) 変化の局面の完成をふくんでいるばあい

継続相の基本的なアスペクト的意味は、動詞のあらわす動作過程の一定の局面のなかにわりこんだすがたをあらわすことである。そこでは、その局面の始発と終了はきりおとされている。ところが、変化動詞は、「もう」「いつのまにか」などにかざられると、その動作過程のなかの変化の局面がまるごと完成して、そのあとの結果の局面のなかにあることをあらわすことになる。こうなると、継続相の基本的なアスペクト的意味からぬけだすことになる。

(116) 三人は霞ヶ浦基地でのりかえ、もう海上へでている。(日本47)

(117) そして、すこし人ごちがついたので、おびのあいだから懷中鏡をとりだしてかおをなおそうとすると、鏡がいつのまにかまっぶたつにわ
れていた。(或る60)

主体の変化をあらわす動詞のなかには、「もう」や「いつのまにか」などにかざられなくても、継続相のかたちがいとも変化の局面の完成をふくみこんでしまうものがある。

(118) プルトーザーが数台はいって、整地工事をはじめている。(華麗64)

(119) 哲郎さん、セーターできてたえ。(忍ぶ138)

これらについては、第3章でのべる。

b) 状態の持続過程のなかにあるすがたをあらわすばあい

「そびえている」のようなものは、変化のモメントをふくまず、いつも状態持続のなかにあることをあらわすのだが、動詞そのものは語一的な意味のレベルで変化(運動)のモメントをもっているにもかかわらず、一定の環境のなかで、状態の持続過程のなかにあることをあらわすばあいがある。これは、以前から「単なる状態」といわれてきたもので、「道がまがっている」「かおのまんなかにはながついている」などはその典型である。これらは、文のさししめす事実との関係でこの意味を実現するので、変化のモメントがあるのかないのかわかりにくいものもある。

(120) さやをぷちんとおしわると、うすみどりいろのはちきれるような、まるいまめが三つふはいていた。

中間的なものについては、工藤真由美1982がいろいろと例をあげている。

c) 変化の質をあらわす動詞

「急停車する」「自殺する」「即死する」などは、語一的意味のなかに変化のモメントをもっており、完成相のかたちで述語のなかにつかわれると、その変

化がまるごとのすがたでさしだされる。これらの動詞があらわす動作が完成すると、主体の状態は、あきらかに変化する。けれども、これらの動詞は、継続相のかたちで、変化の結果の局面のなかにあるすがたをあらわさない。

これらの動詞は、その変化の過程を変化・結果の両局面に分析できない点で、まるごと動詞である。それから、始発・運動・終了という局面にも分析できない。したがって、運動の局面のなかにあるすがたもあらわさない。その全過程に対して、その変化のしかたを意味づけているのである。ところで、その質なのだが、これは、結果の質でなく、変化過程の運動の側面についての質である。そのような運動の側面から質をあらわしているこれらの動詞は、変化をあらわしているにもかかわらず、動作動詞的であるということができよう。

「しぬ」のような動詞は、継続相のかたちで結果の局面のなかにあることをあらわさないが、いまa)でのべた、変化の完成をふくめて結果の局面にあるすがたをあらわすことができる(第3章)。ところが、これらの動詞は、それもあらわさない。「すでに急停車している」「かれは即死している」といったときは、発話時以前に動作が完成していることをあらわすだけ(第VI部)であって、結果の局面のなかにあることはあらわさない。つまり、「いまはしんでいる」「いまはとまっている」という寸法で「いまは自殺している」「いまは急停車している」とはいえないのである。つぎのようにいえても、その意味は、相対的テンスまたはそのテンスから解放された用法になっている。(第VI部)

(121) あの男は、五年まえに自殺している。

「病死する」「そつとうする」「失敗する」「成功する」「落第する」「及第する」「かけおちする」など多くの漢語動詞やあわせ動詞がこのグループにはいってくるとおもわれるが、いまのところ、はっきりしたことがいえない。

第2章 くりかえしの過程のなかにあるすがた

第1節 くりかえしの過程のなかにあるすがた

1) 「くりかえしの過程」について

ここで「くりかえしの過程」とよんだのは、非連続にくりかえして成立する動作を、全体としてひとつの過程ととらえてあらわす、その過程のことである。

(122) 彼は漢方医が調合してくれる安価な煎薬を持薬にしてのんでいた。

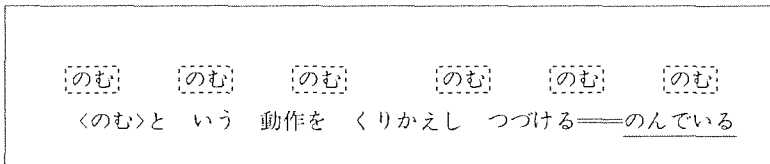
(厚物17~18)

(123) 不平で不平でたまらないが、いちいち弁解してもおられんから、私はまことによんどころなく不承不承に小狐家の書生にされてしまって、そうして月々食料をはらっていた。(平凡72)

(124) こうして打開がもとめられていた1950年ころ、5メートル望遠鏡によるあたらしい観測事実がつぎつぎあらわれていた。(宇宙92)

これらは、ひとつひとつの動作は局面に分解せず、それらをあわせて〈そういう動作をくりかえすという状態をつづける〉という過程のなかにあることをあらわしている。

この過程を図でしめすと、つぎのようになる。



このばあいのアスペクト的な意味は、点線でかこまれたひとつひとつの動作でなく、実線でかこまれた過程に関して実現している。この全体をあわせた過程がひとつの大規模な持続的動作に相当し、基準時間は、この大規模な動作の持続過程をなす局面にわりこんで、その始発と終了の局面をきりおとして、局面のなかにあるすがたをあらわしている。その点で、この用法は、継続相の基本的なアスペクトの意味と共通した局面を実現しているといえよう。

けれども、たくさんの動作をひとつにまとめるとか、また、そのひとつひとつ

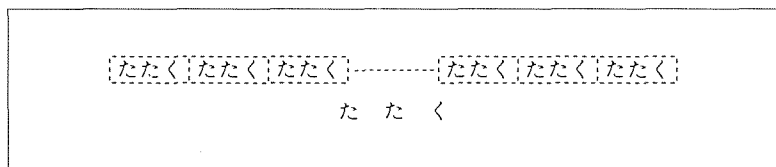
つの動作について、動作動詞が変化動詞かに無関心であるといった点で、この用法は派生的だといわなければならない。ただし、他の基本的でない用法とくらべてみると、その派生のどあい、そんなにいちじるしくないといえるであろう。

おなじくりかえしであっても、連続的なくりかえしであるばあいは、たいていの研究者が、ひとつの動作としてとらえている。

(125) その光のなかで、職人がひとり腹ばいになってカンカンと金づちで
たたいている。(冬の173)

(126) 「あら、いいわね。ヨウ、ヨウ。」そばでみんなが、手をたたいた。
(ない31)

これらの例では、動作の連続をひとつの動作としてとらえ、それを、前者は分割のすがたで、後者は非分割のすがたでさしだしている。



連続と断続の間のようなものがある。つぎのようなばあい、現実には、バッターがかわり、また攻めのとき（先攻なら、オモテ、後攻なら、ウラ）は、やすんでいるが、それでも、アナウンサーは、その投球を連続にちかいものとして、のべているといえる。

(127) ピッチャー山根、たんたんと投げております。(神広)

このような例をとおして、連続的なくりかえしと断続的なくりかえしは連続しているのだとかがえられる。

2) 大規模な動作とのあいだ

「愛読する」や「かよう」などは、動作としては、はっきりなしにつづくわけではない。けれども、こういう動詞は、そうした非連続のくりかえしをひとまとめにしたものを、ひとつの動作としてあらわすのである。この種の動作は、第1章第2節2) g) であげたが、大規模な動作といえる。

ところで、心理活動をあらわすつぎのようなものは、どうとらえたらよいだ

ろうか。

(128) かれは街道すじにおおきな宿屋稼業をいとなんでいる客商売の彼の実家より、酒づくりの養家のほうを稼業の格が上のようにかんがえていた。(厚物17)

(129) 高枝は以前から、宮池とお加代の恋仲を知っているだけに、姉らしい気持で、かるい嫉妬ににた気もちもまじえながら、団員のうわさにものぼるほどの、好一對の恋愛の行く末に、なんとなく不安を感じていた。(ない22)

(130) 宮池は、高枝を信頼していた。(ない69)

これらの心理活動も四六時ちゅうつづいているわけではない。それに、この種の動詞は、「愛読する」や「かよう」のように大規模な持続過程をさしめずとはかぎらない。その点で、これは、くりかえしのような感じがする。しかし、この種の動詞のあらわす状態はつづいているようにもおもえる。このようなものが存在することは、この両者がちかい関係にあることをものがたっているのだといえるだろう。

3) くりかえしの過程になって、つけくわえられる意味

動作のくりかえし過程を全体としてひとつの過程としてさしだすとき、そのことによって、あたらしい意味がつけくわえられることがある。

(131) 春三の話では、この家の主人は元軍人で、現在は会社につとめるかたわら、にわとりをかって卵をうっている。(本日93)

(132) その隣は竹林寺で、門の前のむかって右がわでは鉄冷鉱泉を売っており、左がわ、つまり共同便所にちかいほうではもちを焼いてうっていた。(夫婦23)

これらの例のなかにある「うっている」は、〈カネをうけとってモノをわたす〉というひとつひとつの〈うる〉という動作があつまって、〈そのような商売をしている〉、〈そのような店をだしている〉という意味がつけくわえられている。

[うる] [うる] [うる] [うる] [うる] [うる]

商売を している, 店を だしている——うっている

「うっている」だけが職業をあらわすわけではない。つぎの例もそうである。

(133) 私んところでは農機具を農村にだしています。(闘牛130)

これは、職業だけのことではない。その全体をひとつにまとめた過程が一定の生活を意味するような例はおおい。

(134) 大一郎は当年十五才、これは東京の叔母——伯父の妹だ——にたくして某学校に勉強している。(思出48)

(135) 元軍人のご主人と奥さんは真黒になってはたらくのに、お嬢さん二人は、にわとりにえさをやる手つだいもしないであそびあるいている。
(本日93)

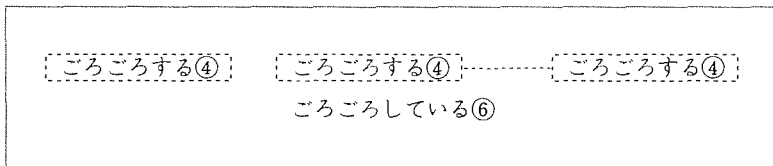
さきに第Ⅱ部第4章第4節3) a)でのべた継続相と完成相のちがいも、このことと関係している。

いまうえにあげた諸例は、実際の使用のなかで臨時的にあたらしい意味がつけくわえられるばあいであるが、それが、語い的な意味のレベルでの派生におよんだものもある。「日本国語大辞典」の「ごろごろ」の項には、つぎの記載がある。

④あちこちに、物が雑然とところがつているさまをあらわす語。……※趣味の遺伝
〈夏目漱石〉「播鉢の中に攪き廻される里芋の如く紛然雑然とゴロゴロして居ては」

⑥比喩的に、仕事をしないで、むだに暮らしているさまをあらわす語。……※虞美人草
〈夏目漱石〉一八「勉強もしない。落第もする。ごろごろして居る」

これを図にすると、つぎのようになるだろう。



このようになって、語い的な意味のレベルであたらしい意味ができてくると、それは、大規模な動作の持続過程をなす局面のなかにあるすがたをあらわすことになって、ふたたび継続相の基本的なアスペクト的意味にもどるわけである。つぎの諸例は、そういうものである。

(136) あたしが(中略)はたらいでるあいだに、あんたは、ひと月も、ブラ

ブラあそんでたのね。(自由22)

(137) 又七郎は平生阿部弥一右衛門が一家と心安くして、主人どうしはもとより、妻女までもたがいに往来していた。(阿部61~62)

(138) うわやくに対し、形容もできないほどペコペコしている。(間革146)

(139) 東京の東寄りをながれる水流の両国橋あたりから上を隅田川といい、それから下を大川といっている。(河明244)

このようにみえてくると、非連続のくりかえし過程のなかにあるすがたは、継続相の基本的なアスペクトの意味にかなりちかいとおもわれる。

なお、(139)は、さらに発展して、コンピュータにちかくなっている。

第2節 すがた的なもののくりかえし

いま第1節で、非連続のくりかえしをひとつにまとめて継続相であらわすことについてのべた。このばあいには、ひとつひとつの動作のすがた的な性格は問題になっていなかった。けれども、これとはちがって、ひとつひとつの動作について継続相の基本的なアスペクトの意味が実現して、それがくりかえすことをあらわすものがある。

(140) このごろ、私はよく夜の明けかかる時分に目をさます。そんなときは、私はしばしばそっとおきあがって、病人のねがおをしげしげとみつけている。(風立137)

つぎの例のほうがはっきりしているだろう。

(141) わたしがのぞいたときは、先生はいつも机のまえにすわっていた。このことについては、工藤真由美1982がつぎのようにのべている。

次のように一見、反復の用法とみられるものがある。

●何時行っても画をかいていた。(その妹)

●あの頃のことを思うと、百円ぐらいのお金はしょっちゅう紙入れの中に入っていたんですがねえ。(家)

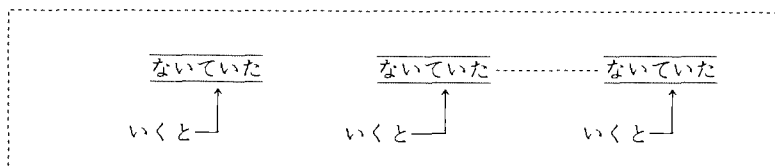
前者は「動きの継続の反復」であり、後者は「変化の結果の継続の反復」である。この場合には、シテイルの意味が動き動詞が変化動詞かで対立すると同時に、スルにおきかえることができない。これも文のアスペクチュアリティとしては反復であるのに違いないが、「動きの継続」「変化の結果の継続」という基本的意味がかわらないままに、「何時行っても」「しょっちゅう」という反復を示す形式が

ついたことによって反復の意味がでてくるのであるから、基本的意味の一バリエーションとして、あるいは基本的意味と派生的意味の中間として位置づけられなければならないだろう。

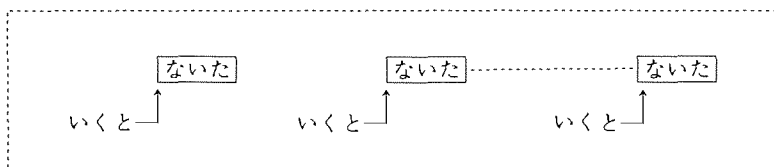
工藤1982の指摘するように、このばあいのシテイルはスルにかえられない。これは、継続相の基本的なアスペクト的な意味がいきているから、完成相にかえられないのである。ここでは「バリエーション」とか「中間的」とかいわなくても、はっきりと継続相の基本的な意味がいきていて、完成相と対立しているのである。

このことをしめすために、つぎのア)とイ)を図であらわして、かんがえよう。

ア) わたしがいくと、彼女はいつもないていた。



イ) わたしがいくと、彼女はいつもないた。



この種のものは、図の実線でしめした、ひとつひとつの動作について継続相ア)または完成相イ)の基本的なアスペクト的な意味が実現しているのであって、くりかえし過程は、アスペクトとしては、とらえられていない。

これらがくりかえしをあらわすのは、時間軸上の特定または不特定の位置にくりかえしおかれるというテンスの問題であって、アスペクトの問題ではない。このことについては、第II部第4章第4節3) b) でものべたが、第IV部第5章、第V部第2章第2節、第VII部第5章、第VIII部第1章第6節でものべる。

第3章 ある局面の完成後につぎの局面の なかにあるすがた

第1節 ある局面の完成後につぎの局面の なかにあるすがた

1) そのアспект・テンズ的な性格

継続相の基本的な意味は、その動作を基準時間が持続過程をなす局面のなかにわりこんだすがたでさしだすことである。それは、動作の局面をとりだすばあいにも、結果の局面をとりだすばあいにも共通していえることである。

(142) 飛行機が音もたてずにとんでいる。(やさp21)

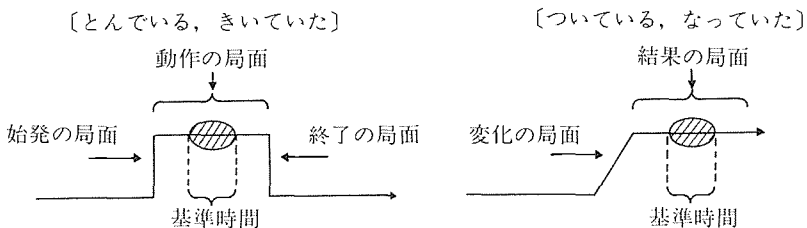
(143) 上原はみじろぎもせずだまってきいていた。(生活101)

(144) そののはなのあたまには赤や青のインクがべったりついている。

(寅次9)

(145) 市太夫や五太夫の宅はあき家になっていた。(阿部60)

これらは、基準時間において動作がその持続過程をなす局面の始発と終了のあいだにあることをあらわしている。



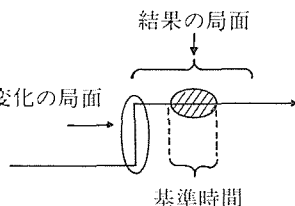
つぎのばあいにも、基準時間においては動作は持続過程をなす局面のなかにあるのだが、それを、ただその局面のなかにあるということだけでなく、そのまへの局面が基準時間のまえに完成したととあわせてさしだしている。

(146) 研究会はとじていた。雑談がはじまっていた。(むら56)

ここでは、〈とじる〉(または〈はじまる〉)という変化の局面が基準時間よりまえに完成したとと、基準時間においてその結果の局面のなかにあることと

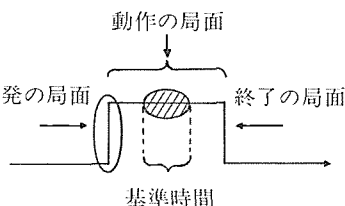
が、あわせてあらわされている。

これは変化動詞のばあいだが、つぎのような動作動詞のばあいには、始発の局面が基準時間よりまえに成立したことで、基準時間において動作の局面のなかにあることが、あわせあらわされることになる。



(147) 駿介はびっくりして老人をみつめていた。(生活114)

これらは、動詞のあらわす動作過程（変化過程をふくむ）のあいづく二つの局面にかかわっているが、さきだつ局面については、始発の局面その始発から終了までをふくめてまるごとのすがたでさしだし、あとをおう局面については、その始発と終了のあいだにわりこんだすがたでさしだしている。つまり、あいづく二つの局面を完成相と継続相の二つのすがたでさしだしているのである。



つぎに、この用法が成立するばあいのテンシ的な意味のことにうつるが、このばあい、この形式は二つの局面をさしだしているので、そのそれぞれについて検討しなければならない。さいしょにあとをおう局面についてのテンスであるが、これは基準時間におけるすがたであるから、その基準時間が時間軸上のどこに位置するかが、そのテンシ的な意味になる。この時間軸上の位置は、この継続相形式が非過去形をとるか、過去形をとるかによってきまる。前者のばあいは現在であるし、後者のばあいは過去である。

(148) 業務がすでにはじまっている。(華麗14)

(149) お島はこのごろよく口にするお株を、またはじめていた。(あら162)

これは継続相が基本的なアスペクト的意味を実現するばあいにも成立することであって、このことは、継続相形式をとっているということ自身は、テンスをあらわすためには、はたらいていないことをものがたっている。

ところが、さきだつ局面のテンスのことになると、この形式そのものがそれにかかわってくる。というのは、さきだつ局面の完成する時間軸上の位置が基準時間よりまえであるということは、この形式をとること自身によってきまるからである。基準時間が現在に位置するか過去に位置するかにかかわらず、さ

きだつ局面が完成するのは基準時間よりまえである。これは、発話時を基準とする絶対的テンスではないけれども、一定の時点を基準にして、それよりまえかあとにかかわる相対的テンスである。そうだとすれば、きだつ局面のことに關しては、この形式が相対的テンスをあらわすというテンス形式としてはたらいっていることになる。

以上をまとめると、この用法のなかでは、継続相形式は、動詞のあらわす動作過程の、あいつづく二つの局面とかかわっていて、きだつ局面を、アスペクティブ的に完成相の意味、テンス的に相対的過去の意味でさしだし、あとをおう局面を、継続相の意味でさしだしているといえよう。ここで、テンス的な意味がかわることは、継続相というアスペクト形式がテンス形式としての側面をもちはじめをもののがたっており、注目すべき現象である。

なお、この意味については、角張新治1976Bが「предел達成後の状態^(注1)」として、「継続の状態」から区別してくわしく記述している。^(注2)
^(注3)

(注1) このことは、第VI部でのべるような、さらにテンス形式的側面をつよめたものへとつながっていくものとおもわれる。

(注2) пределというのはロシア語で「限界」のことで、英語の terminal にあたる。

(注3) 角張1976Bは、ガリ版ずりで公刊されていないので、ここにその部分を全文引用しておく。それから、方言についてではあるが、工藤真由美1976、1983、荒井孝一1984は、これにふれている。

② П(предел) 達成後の状態(T.C.—temporal centerがうごきの П のあとと相関している状態体はさらに、いくつかの下位区分される)

1. 完了の直後の状態

どうしがうごきの瞬間性をあらわす単語、あるいは単語のつらなりとむすびつきながら、瞬間的に終わるうごきをあらわし、T.C.がそのうごきの完了(うごきのおわりの П の達成)の直後と相関しているばあい、それは、完了の直後の、主体の状態をあらわす。図式するとつぎようになる。

これも前回、報告している。例をいくつかあげる。

11) そんなこと、我慢なんか出来るものですか！茜は胸の中で、反射的にこう叫んでいた。

(一の糸296)

12) あの女は芸者ではないと思うと同時に、お常は本能的に無縁坂の女だということをさとっていたのである。(雁65)

13) 新子は無意識に白いボールを六助にさし出していた。(青62)

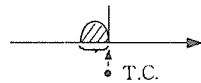
14) 突然震えを帯びた、低い、重い声が焼きつくように耳近く聞こえたと思うと、葉子は倉地の大きな胸と太い腕とで身動きも出来ないように抱きすくめられていた。(或る女138)

15) 思わず茜は膝の上の律子を抱きしめていた。(一213)

16) 「まあ、志渡寺を」茜も思わず叫ぶように云っていた。(一370)

2. П 達成のあとの状態

(1). 任意の線、点をのりこえることをみずからの意味とするどうしの状態体は、②の意味、すなわち П 達成後の状態をあらわす。



- 17) なんとか鼻をあかしてやる方法を考えたしたいと、めいめい思っているのだが、なに一つ思いつかないうちに岬の道を出はずれていた。(二十四16)
- 18) 参吉は六十を五つ六つも過ぎていた。(金環295)
- 19) このお三輪が震災に達した頃は最早六十の上を三つも四つも越していた。(嵐211)
- 20) 大塚さんは五十を越していた。(旧主人188)
- このばあい、のりこえられる線、点は、を格の名詞によって表現されている。
- (2) どうしの状態体に、まもなく、やがてなど、T.C.の移動をあらわす単語がむすびつくと、そこには／Πの達成／という意味、ニュアンスがつくわわる。
- 21) その気配は、やがて、蒲団の上をちょんちょんとふんづけて歩いていた。(林220)
- 22) まもなく、富永と和子は星空の下の夜道を歩いていた。(青111)
- 歩行の状態とそれ以前の状態のあいだには Π (これは歩行の状態にとってははじめの Π をなしている) があって、この状態体は／主体はこのはじめの Π をこえて、所与のT.C.において歩行の状態にあったこと／をあらわしている。
- 23) 敬策が、九度山の誰と名をいわぬのに、花は息を呑み、やがて彼の暗い眼から祖母だということを悟っていた。(紀71)
- ここにも／主体は、まださとしていない状態と、さとした状態のあいだの Π をのりこえて、所与のT.C.においてさとした状態にあったこと／という Π のりこえのニュアンスがつくわわっている。
- 24) そうして時間が経過していったとき、修一郎は、頭のなかでひとつの夢を組みたてていた。(冬284)
- 経過していったときがあらわすT.C.において、主体はおわりの Π を達成した、すなわちうごきが完了したあとにあったことをあらわしている。
- (3) 動作体と状態体を両方もつすべてのどうしは、状態体のかたちで、もう (すでに、いつか、いつのまにかetc.) ～しているという構文論的な構造のなかにおかれると／あらわされている状態はどうしのもつ、なんらかの Π を達成したあとの時点における状態である／ということであらわしている。
- (4) 継続するうごきをあらわすどうしは、前にものべたように、本質的には①継続の状態をあらわすのだが、これがもう～しているという構文論的な構造のなかにおかれると、Π (はじめの、あるいはおわりの) 達成後の状態をあらわすものへと移行する。
- 25) たか子の室で、寝ころんでラジオをきいたりして、十時ごろ自分の室に帰ってみると、宴会のあととばかりに片づいて、床が二つ並べてしかれ、トミ子はもう休んでいた。(陽225)
- 26) 「え？」ときき返す声しがしたが、伸子はもう黙って揺られていた。(伸下259)
- 27) 既に堂庭の方から消燈ラッパがなり渡っていた。(真空上232)
- 28) もう岡は涙ぐんでいた。(或る128)
- 29) それとともに、妄りに自分でこしらえたこの一場の架空劇をよそ目に見て、その荒誕をせせら笑う理知の力が、もう彼の中心に働いていた。(明下209)
- 30) 車はいつか、人家のない山道のような所を走っていた。(陽314)
- 31) 曾田の考えは、いつの間にか木谷を思想犯として考えて行く方にはしっていた。
(真空上234)
- 32) しかし、相手の車が横転したのを見届けたときには、彼はもう自分の車を走らせていた。
(冬195)
- 33) 「もう見てる。……」(田舎39)
- これらの例においては、／主体は、非活動の状態と活動の状態とのあいだにある、はじまりの Π をのりこえて、所与のT.C.において活動の状態にあること／をつたえている。
- 例25)～33)はアクションスアルトのひとつである／～しはじめている／とあらわす現実にはに

ている。もちろん、両者はちがっている。このことはアクションスアルト全体を問題にしているなかであきらかにしていく。

- (5) 継続するうごきをあらわすどうしは状態体のかたちをとって、本来①の意味をあらわすわけだが、それがもう～しているという構造のなかであってうごきの経過の時間的な量をあらわす単語とむすびつくと、うごきの継続におわりの $\square$ がもたらされることになり、その状態体は②の意味をあらわすものへと移行する。

34) 真知子はそれを知って来て、もう二十分待っていた。(真知274)

35) 「その女のひとは、もう随分永いこと勉強しているんです。」(伸上32)

36) 私達が坂の下の石段を降りるのを足音で聴き知るほど、最早三十年近くもお徳は私の家に奉公していた。(嵐151)

もし、もうという単語がなければ、二十分、ながいこと、三年ちかくもはその時間的な巾にわたって主体がうごきの継続の状態にあったわけだから、それらはT.C.としてはたらいっていることになる。ところが、ここではそれらはT.C.としてはたらいっているわけではない。

T.C.は、それらの単語がしめしている時間が経過したあとの時点にある。

さらに本来継続するうごきをあらわすどうしが、うごきの対象の量、移動の距離をあらわす単語とむすびついて、やはり②の意味をあらわすようになる。これらの単語がうごきにおわりの $\square$ をもちこむからである。このとき、もう、すでにという単語がなくてもこの意味は実現されるが、あればその意味がはっきりと表現される。

37) 例によって、西日は、もう畳三分の一ぐらいのところまで、まぶしく躍りこんでいる。(伸下8)

38) 昨日の午後これが配達されてから、もう半日以上の時間が空費されている。(開き158)

39) そこには銀杏と伊吹 柏植の丈たかい木が二列にならんでおり、銀杏はすっかり葉が黄ばんで、すでに半分以上が落葉していた。(冬216)

40) 顧みるとその時からもう半年以上経過していた。(明上202)

41) けれども私が家を出て、方々漂浪して帰って来た時には、その喜久井町が十分広がり、何時の間にか根来の方まで延びていた。(硝57)

42) 門を出て急ぎ足に宅へ帰ると、毎朝出る時刻よりも、もう三十分ほど遅れていた。(門88)

43) 手術後の夫を、やっと安静状態に寝かしておいて、自分一人下へ降りた時お延はもう約束の時間をだいぶおくらせていた。(明上126)

44) 銭湯の上り場で秤にかかると一月ばかりの間に一貫目近くやせていた。(妖155)

例44)をつぎの例45)と比較すると、44)は一定の量をこなしたあとの時点(T.C.)において主体の状態をとらえているが、45)は変化とときはなして、主体の一定の状態をそれ自体としてあらわしている。

45) 少年院で飼っている豚は、養豚業者の飼っている豚よりやせていた。(冬515)

結果の状態をあらわす状態体についても37)～44)までの例とおなじことがいえる。

46) ～時計に眼をやった。八時に二十分からあった。もうそれくらい、彼女は河井の前にかけていた。(真知244)

- (6) うごきがおこなわれた結果として主体あるいは対象のうちに、一定の状態がのこるようなうごきをあらわすどうしが状態体のかたちをとって、もうすでにetc.とむすびつくと、単に／主体が、T.C.においてうごきの結果の状態にあること／をあらわしているのではなく、その状態をうごき、変化の実現との時間的な関係のなかでとらえているのである。主体に一定の状態をもたらした変化の契機は、視野のなかにとりこまれている。

47) もう、荷物は出来ていた。(素足184)

48) 何時の間に動いたともなく船は棧橋から遠ざかっていた。(或る79)

49) おさえられた手をはね返した彼女は、もう最初の目的を忘れていた。(明上203)

50) 寝苦しさのあまりに戸を開けて見た頃は、雨も最早すっかり止んでいた。(旧主109)

2) 基準時間のはじまりとのちがい

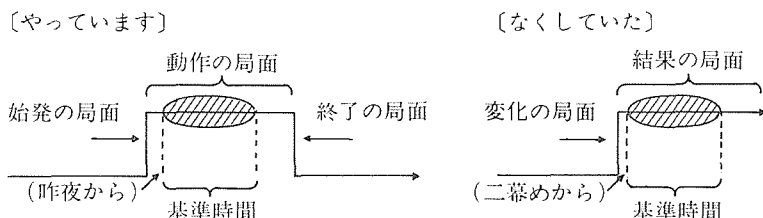
さきだつ局面の完成をあらわすことは、基準時間のはじまりをしめすこととはちがう。つぎの「～から」は、基準時間のはじまりをしめしているのであり、始発の局面をしめしているのではない。

(150) ばあやはもう昨夜から行李をだしてごそごそやっていますよ。

(桑の21)

(151) 私は二幕めからおちつきをなくしていた。(火の29)

これらを図でしめすと、つぎのようになる。



これが始発の局面を問題にしていらないことは、始発の局面をもっていない準アスペクトをしめす状態動詞や状態形容詞でも、これが可能であることとかがえあわせると、わかるだろう。

ア) さっきからここにあるよ。

イ) きのうからいました。

ウ) だいぶまえからくらかった。

この第3章に属するものは、「いつのまにか」「いつか」のような状況語でひろげることができる。この「いつのまにか」「いつか」は、さきだつ局面の完成するときをしめしている。

(152) ちゅうちょなく、二台の自動車も、線路をふみきった。——板橋町の家並も、しだいに空隙ができ、いつか、両がわともたんばの街道をはしっている。(ない88)

けれども、うえのア)～ウ)は、この状況語で拡大することができない。なぜなら、それらには始発の局面がないからである。もし、このような状況語にかざられさせたいならば、運動過程(変化過程)をもつ動詞の継続相の形式にかえてやらなければならない。

エ) いつのまにかおかれていた。いつのまにかおいてあった。

オ) きのうのうちにきていました。

カ) いつのまにか（いつしか）くらくなっていた。

この章でのべている用法は、ふたつの局面をもっているのである。

3) 前現在, 前過去とのちがい

この用法は、おなじ継続相形式の、べつの用法である、現在以前または過去以前に動作が完成したことをあらわすものとはちがう。それは、いままで「経験・記録とされ、この報告では第VI部で「完成相のテンス形式に準じる継続相」としてとりあげるものであるが、それは、つぎのように、動作がまるごとのすがたで以前に完成したことをのべているだけであって、局面に分析していない。

(153) かれは二十代に画期的な論文をかいている。

(154) かれは去年の三月に彼女と結婚しています。

(以上2例、鈴木1972から)

この種のもの(キ)を、この章で問題にしているもの(ク)とくらべてみよう。

キ) 島崎藤村は1872年に長野県でうまれている。

ク) わたしが産院についたときには、あかんばうはもううまれていた。

あとの例では、基準時間がしめされていて、基準時間のまえに、さきだつ局面、つまり〈うまれる〉という変化の局面がまるごと完成し、基準時間には、その結果の局面、つまり〈母体のそとに存在している〉という状態のなかにあったことをしめしている。それに対して、まえの例では、結果の局面は問題にならず、その動作が以前に完成したことだけをのべている。このようなものは、すでに意味的にはテンスしめしに移行しており、この章のものがテンスとアスペクトの合成的な意味をあらわしているのより徹底している。

第2節 この意味を実現する条件

この意味を実現するためには、その動詞が一定のカテゴリカルな意味をもっているか、または、一定の状況語や修飾語でかざられているか、すくなくとも、そのどちらかであることが必要である。

1) この意味を実現させる動詞

角張新治1976Bは、「任意の線，点をのりこえることをみずからの意味とする動詞」の継続相がこの意味をあらわすことをのべているが，もうすこしくわしく，いろんな動詞をあげておこう。

a) とおりこしをあらわす動詞

- (155) ふと，気がつくと，列車は，横浜をすぎていた。(自由352)
- (156) 食事をおえて，店をでたのは，二時すぎていた。(自由65)
- (157) しかも彼らを「中ボス」とよぶほうも，大部分の人が三十をこえている。(根源130)
- (158) 胎児は四か月をこしている。(季節68)

b) 経過をあらわす動詞

- (159) 前シーンから十二年の月日がたっている。(婉と86)
- (160) 私が水辺に家をさがしはじめてから二か月半かかっている。
(河明246)

c) 到達・接近をあらわす動詞

- (161) そのうわきはかれらの耳にもとどいている。(李陵156)
- (162) 彼女の猜疑の目は，るすばんと台所のてつだいのために同居している妹のおよねのうえにさえおよんでいた。(生ま192)
- (163) 電車は，橋の中ほどにさしかかっている。(忍ぶ4)
- (164) 初江が灯台長の家へいかなければならない時刻がせまっていた。
(潮騒29)

- (165) 夜になっている。

- (166) ベッドも洋服だんすもすべて荷造りされて，発送されるばかりになっている。(華麗256)

d) 始発をあらわす動詞

- (167) 事務所のなかはあいかわらず通信教授でいそがしいが，一部ではあたらしい小説発行の準備が，はじまっている。(間革47)
- (168) 野口たちの芝居は，もう立ちげいこにはいっている。(やきp36)
- (169) 下のほうの雑木林のなかでは，たいへんなさわぎがおこっている。
(未知333)

- (170) 「(略)」あきっぱいようなお島がいいだしていた。(あら162)

e) 終了をあらわす動詞

- (171) ホテル・一室(夜) 少年と少女, 食事をおわっている。少年, 大きくノビをして「(略)」(遊び60)
- (172) 読経の声やんではいる。出棺。(時計20)
- (173) 高枝がかおをだしたときは, 議案はなかばすんでいた。(ない48)

f) 出現, 発生, 消滅をあらわす動詞

- (174) 安吉とおばさんとのあいだには, ほかの学生とはいくらがちがった点での親しさもうまれている。(むら9)
- (175) 日ごろ, 池氏愛用の望遠鏡も, ながい道路をゆられたため, いたるところ故障を生じている。(未知325)
- (176) 哲郎さん, セーターできてたえ。(忍ぶ138)
- (177) 「(略)」とふりむくと, 少女のすがたはきえている。(遊び36)
- (178) それしか気力がなくなっていた。(カニ68)
- (179) ことにかれらは屍体であることすでにながく, あらゆるその前身の形態をうしなっていた。(野火77)

g) 発見をあらわす動詞

- (180) つよい発ガン性物質は, 百種類以上みつかっている。(暗号150)
- (181) 駿介は, 初対面のあいさつをかわすまえに, 彼がこの村のタバコ耕作者組合長の松川で, 洋服の男は, 専売局の局員であることに気づいていた。(生活120)
- (182) ユキは本能的になにかをかぎつけている。(津軽88)

h) 変化そのものをあらわす動詞

- (183) ウインチにつるされた雑夫はかおの色がかわっていた。(カニ65)
- (184) 駒子の心は, 先刻のおどろきが, 腹だちに転じていた。(自由350)

i) その他

- (185) もちろん, 五菱とははなしがついている。(間草260)
- (186) 火がすぐそばの家にもえうつっている。(時計72)
- (187) で, どうせ, みっともない女ばかりならと, 二桐はすすんで希望して, いちばん年上の道川初を自分の女助手にえらんでいた。(木石55)

以上の各項は分類結果として, そうならべたのではなく, てきとうにくくって, られつしたものである。したがって, すこしみかたをかえれば, べつの項がた

ったり、べつの項にうつったりするものもあるはずである。

2) この意味を実現させる状況語、修飾語

a) 「～のあいだに」「いつのまにか」など

さきだつ局面の完成する時間のはんいをしめす状況語でひろげると、継続相はこの意味を実現する。

(188) 半月ばかりみないうちに、家々にはもう冬ごりの用意、軒たけほどの高さに毎年つくりつける粗末なよしずの雪がこいがすっかりできあがっていた。(破戒173)

(189) かえてみると、十年のあいだに世の中はまるっきりかわっていた。

(末枯23)

(190) むぎばたけは、知らぬまにいろづいている。(無限5)

(191) みとれているうちに、あたりはいつしかとつぷりとくらくなっていた。(田園68)

(192) 二桐もいつか泣いていた。(木石90)

(193) いつのまにか事務所のなかがシーンとなっている。(間草27)

(194) 段々畑をのぼり、あるいているあいだにいつか岡の高みに達していた。(厚物41)

これらでは、状況語はさきだつ局面の完成する時間のはんいをしめしているが、その時間をきちんとしめす状況語になると、以前に完成したことをしめすだけで、あとの局面のなかにあることは、あらわさないようである。

(195) 監督は実はけさはやく、本船から十海里ほどはなれたところにとまっていた××丸から「突風」の警戒報をうけとっていた。(カニ37)

こうしたものについては、第Ⅵ部でのべる。

b) 「やがて」「まもなく」「もう」「すでに」など

これらの副詞は、さきだつ局面の完成時を相対的に位置づける。「やがて」「まもなく」は、ある時のあとに、「すでに」「もう」「とつくに」は、現在または、あるときよりまえに成立したことをあらわす。

(196) ひとはみな結婚生活にはいるとき、あいてと自分に「こうあってほしい」「こうありたい」という期待をもつ。そして、その期待がみたされないと、結婚生活への違和感に苦しみ、やがては夫婦関係の危機にお

ちている。(学問266)

- (197) そして二人は、まへのあの河原をとおり、改札口の電灯がだんだん大きくなって、まもなく二人は、もとの車室の席にすわっていま行ってきたほうをまどからみていました。(銀河276)

この例は、あるいは「まもなく→すわって」かもしれない。つぎのような文なら、この意味がはっきり実現している。

○まもなく二人はもとの座席からまどのそとをみていました。

- (198) 太陽はすでに高くのぼっていた。(風立120)

- (199) 「だめです」といかにも絶望的な調子でいったが、その目はすでにわらっていた。(或る199)

- (200) そらにはもうひばりがないている。(思出38)

- (201) 男の子はまるでパイをたべるように、もうそれをたべていました。
(銀河295)

- (202) 東海道はもう春になっていた。(冬の172)

- (203) 三人は霞が浦基地でのりかえ、もう海上へでている。(日本47)

- (204) 腹案はとうにできあがっていた。(李陵171)

- (205) もうとっくに就寝時間の九時はすぎていた。(風立103)

c) 「やっと」「とうとう」など

期待や反期待の変化の完成の実現とかかわる「やっと」や「とうとう」なども、ほんらいは完成相にかかる副詞であるが、継続相にかかる、この意味が実現する。

- (206) このごろでは、かれの駒子に対するふきげんも、やっと、とけていた。(自由345)

- (207) 彼はとうとうびっこになっていた。(或る229)

これは程度副詞であるが、「すっかり」も完成相とくみあわさる副詞で、おなじことがいえる。

- (208) すっかり日がかげっている。(忍ぶ35)

- (209) 気がついてみると、へやのなかはもうすっかりうすぐらくなっていた。(風立87~8)

d) 「また」「あたらしく」など

「また」「ふたたび」「あたらしく」などは、問題のことがらが、(まえと同じ

種類か別の種類かはともかく) あらためて成立したことをあらわす。そのため、これらにかざられると、継続相はこの意味を実現することになる。

(210) 私は小店員の去ったあと、また河の雪をながめていた。(河明278)

(211) 係長がふたたび気をとりなおしてきいている。(砂の42)

(212) 朝わたしがここをでたときにいた六人から一人が去り、二人があたらしく到着していた。(野火25)

つぎの例は副詞ではないけれど、「また」「あたらしく」「こんどは」などとおなじはたらきをしている。

(213) 今西が係長にかわってきいている。(砂の42)

e) 「おどろいて」「急に」など

「おどろいて」は動作をおこす原因であり、「おもわず」や「なにげなく」などは、その原因が意図的でないことをのべているが、いずれにしても、それは動作をおこすことにかかわるものであって、そのために、継続相がこの意味を実現することになる。

(214) 駿介はびっくりして老人をみつめていた。(生活114)

(215) おもわず鷹夫は縁の欄干に両手をかけて高い声でよんでいた。

(女坂159)

(216) 彼はごろんとひじまくらをつき、なにげなく欄間の額をみていた。

(青銅64)

(217) 彼はそれを聞きいりながら、ついその口まねを口のなかでして、そのうえ、ねている自分のからだをすこしうきあがらせる心もちにして、からだ全体で拍子をとっていた。(田園89)

修飾語の「急に」も動作をおこすことにかかわるので、おなじことがおこる。

(218) はげしい敵がい心が急にもえあがっていた。(或る152)

つぎの「日にやけて」は原因をあらわす。

(219) ふかいしわのなかまでが日にやけて、手などは、よごれのしみいったしわとふるい漁のきずあとが見わけのつかないようになっていた。

(潮騒 15)

これは「なっていた」で始発の完成もふくみそうであるが、「日にやけてまっくろであった」のようにもいうことができ、こうなると始発の局面が表現されていないことになる。このあたりが境界であろう。

第4章 状態の持続のなかにあるすがた

第1節 状態の持続のなかにあるすがた

1) 状態の持続のなかにあるすがた

継続相のかたちで持続過程のなかにあることをあらわしていても、その持続過程が動作の局面でないばあいがある。

(220) 寝台のうえはわらぶとんをむきだしにして、さむぎむとしていた。
(真空63)

(221) 額はややふとめの赤い絹のうちひもでつるすようになっている。
(桑の114)

(222) 路地のしき石にはうち水があり、そうじがゆきとどいていた。
(無限81)

これらは、基準時間がその持続過程のなかにあることをあらわしている点において、継続相の基本的なアスペクト的意味と共通である。けれども、アスペクトというものが動詞のあらわす動作（変化）の過程のなかの一定の局面を取りだして、そのすがたをあらわすものであるとすれば、ここであらわしているものは動作の局面ではないので、アスペクトだといえない。これは、第II部第3章でのべたものと同様、アスペクトに準じるものとしてとらえるほうがよいだろう。

この準アスペクトの用法は、完成相にくらべて継続相のほうがはるかに多くの用例をもっている。それは、この用法のもつ意味が継続相の基本的なアスペクトの意味と共通の側面をもっているからだだろう。じっさい、この二つのあいだには、中間的なものもかなりあるのである。

2) 結果の局面のなかにあるすがたと、状態持続のなかにあるすがた

結果の局面のなかにあるすがたと状態持続のなかにあるすがたとの間には中間的なものがあって、きちんとふたつにわけきるのはむりである。

おなじ動詞の継続相の形式がどちらの意味を実現する用法をもっているの

は、ふつうにみられることである。つぎのア) や ウ) は結果の局面のなかにあることをあらわしているし、イ) や エ) は、状態持続のなかにあることをあらわしている。

- { ア) くぎがまがっている。
- { イ) みちがまがっている。
- { ウ) ほったにめしつぶがついている。
- { エ) はなはかおのまんなかについている。

ここで、それぞれ両者のちがいをきめているのは、統語論的なレベルで、できごとをのべているか、ものの状態的な性質をのべているかのちがいである。ア) や ウ) のばあいには、変化の過程があるので、ここでは、結果の局面をとりだしていることになるし、イ) や エ) は、それがコンスタントな属性(状態的な性質)をあらわしているので、状態の持続過程のなかにあることになるのである。

けれども、じっさいには、どちらかわからないこともある。たとえば、あるひとをゆびさしてオ) のようにいうとき、事実問題としては、ホクロなのかゴミなのかが、いつもわかっているわけではない。

オ) あのひと、ほったにくろいものがついているね。

こうしたことは、この両者がきわめてちかいことをものがたっている。けれども、こうしたことがあるからといって、この両者の区別が無意味なわけではない。変化動詞の継続相は、ほんらい結果の局面のなかにあるすがたで動作をさしだすものであり、この章のような用法は特殊だということを、いつもこころえていなければならないだろう。

3) 運動の局面のなかにあるすがたと、状態持続のなかにあるすがた

動作と状態をわけるものは、動格的か静的かという属性のありかたのちがいである。つぎのカ) は動作の局面のなかにあることを、キ) は状態持続のなかにあることをあらわしている。

- カ) あしがつるつるすべっていた。
- キ) 表面がつるつるしていた。

運動のあるものは、動作過程としてとらえることができる。

(223) だが、清原と泉田がかおをみあわせ、もじもじしている。(間草145)

(224) 「あ、そう」高^{こうぎょう}業さんはちょっとどぎまぎしていた。(無限120)
けれども、つぎのようなものは、動作か状態かよくわからない。

(225) ながいことクリームをかおへぬらないので、かおのひふがひりひり
している。(放浪35)

(226) 灯台長の家は、ひるねでもしているのか、ひっそりしている。

(潮騒25)

動作ならば、そのおなじ動作の局面を、完成相をつかって、まるごとのすがたでさしだすことができるはずである。そのような点から完成相へのいいかえをこころみてみると、「ひりひりした」のほうはいえそうだが、「ひっそりした」のほうは、いえそうでない。このへんにさかいめがあるのだろう。

4) 状態である性質と、性質の実現した状態

継続相形式でものごとの質的な属性をあらわすことがある。

(227) 世のむかうところにしたがうが、むしろ当を得ている。(総長348)

(228) このまよいのために、死をはやめるのはばかげている。(野火61)

この2例のような属性は、現実のできごと過程からひっぱりだした二次的な属性であって、アスペクトから解放されている。けれども、おなじく質的な属性であっても、その属性のもちぬしであるものごとが長期にわたって存在し、そのものごとがコンスタントに呈している状態がそのものごとの属性となっているばあい、その属性はできごと過程をなしており、そのなかに基準時間がおかれると、この用法になる。従来「単なる状態」といわれてきたものは、おおくがこれである。

(229) 竹矢来をむすぶなわもくちた色をしている。(婉と3)

(230) みると、彼のくつしたには、赤い線が二本はいていた。

(231) 華喬の町は、その橋をわたってから、海岸にそってながくつづいている。

(帰郷14)

ほんらいは、できごと過程から解放された関係をあらわす動詞であっても、この種の文の述語のなかでつかわれると、アスペクトから完全に解放されないで、準アスペクトの様相をていする。

(232) この門は、ほかの門とちがっている。

「ゆきとどいている」なども、ほんらいは状態をあらわす単語ではないが、

(222) のようにつかわれると、状態持続のなかにあることをあらわす。

5) コンスタントな質的属性をあらわすもののAspect的な性格

まえの項でのべた「状態である性質」と「性質の実現した状態」は、ともにコンスタントな質的属性であるということができる。この種のものは、コンスタントである点で準Aspectの側面をもち、性質である点で脱Aspectの側面をもつ。そして、どちらかいっぽうにおしこめると、すこしかたよりがあるようにおもえる。いまのところ、これを両者の中間のどこに位置づけるのがよいかについて、確信がない。そこで、この報告では、両方のたちばをとってみた。つまり、この第Ⅲ部では、第4章、第5章をとおして、かなり準Aspectよりも位置づけてみたが他の部では、だいたい、Aspectから解放されたものとしてあつかったわけである。そのため、全体としては、記述に矛盾を生じることになった。

こうしたくいちがいは論文としては、みぐるしいことであるが、研究段階の正直な反映であり、統一的な記述は、今後の研究の成果にまきたい。

第2節 状態持続のなかにあるすがた をあらわす継続相形式

1) 「している」の形で状態をあらわす動詞

「している」の形でいつも状態をあらわす動詞がある。こうしたものは、形容詞化しているということができるだろう。

(233) [患部のでざわりが] こんにやくよりざらついている。(本日97)

(234) かれのすることは、しばいがかっている。

(235) 九郎兵衛は、九十ちかい老人だが、かくしゃくとしている。(婉と105)

(236) あおざめていたが、自若としていた。(帰郷323)

(237) 古藤はくり戸のガラスごしに、切りわりのがけをながめて、つくねんとしていた。(或る9)

「(部分を) している」「(側面を) している」などは、この連語形式が状態または状态的性質をあらわす形式となっている。

(238) 婉はまるで二十才の娘のはだをしている。(婉と125)

- (239) 隠岐達三はやや甲高く、年齢よりも若い声をしていた。(帰郷315)
 (240) 電子顕微鏡写真でみると、タバコモザイクウイルスは、マッチ棒のよ
うな形をしている。(暗号156)
 (241) 彼は怜悯なかおをしていた。(冬の44)

2) 「している」の形で質をあらわす動詞のばあい

「している」の形で質をあらわす動詞は、その質のもちぬしが持続過程のなかに存在するものであるばあいにこの意味が実現する。

- (242) とにかく、主人はかわっている。(機械12)
 (243) イギリスのほこりとする大学町は、ケムブリッジとオックスフォードだ。いずれも片いなかに偏在して、俗塵を超脱している。(総長351)
 (243) 彼は怜悯なかおをしていた。(冬の44)

3) 「みえている」「きこえている」など

知覚活動をととしてモノや現象の存在をあらわす動詞は、継続相の形で状態持続のなかにあることをあらわす。

- (244) どことなく不安の色がみえていた。(本日83)
 (245) 黒菅の城内では、琴の音がきこえていた。(落城17)
 (246) その花のにおいだけでなく、どの木も草もにおっている。土もにおっている。(帰郷8)
 (247) それにぶた小屋そっくりの、むねがすぐゲエときそうなにおいがしていた。(カ=10)
 (248) そとでははげしい雨音がしていた。(暗夜51)
 (249) その初秋の一日、赤城山麓は、まだ草いきれがむんむんしていた。
 (旧石305)

これらは、非過去形のばあい、完成相の形をとったものとおなじことをあらわすことになる。(第II部第3章第1節)

4) 「存在している」「すんでいる」など

存在をあらわす動詞の継続相は、状態持続のなかにあることをあらわす。

- (250) 私たちはうまれている。そしてこの世界は存在している。(出家48)

- (251) ばかはおなじところになお形を存している。(高野49)
- (252) そのとき安吉はまだ小石川金富町にすんでいた。(むら63)
- これらも、非過去形のばあいには、完成相があらわれることもある。

5) モノの状態・質的な属性をあらわすばあい

モノの状態・質的な属性をのべる文の述語につかわれると、運動性をうしなって、継続相は状態だけをあらわすことになる。

- (253) 牛はひずめがふたつにわれている。
- (254) 予が時々着用するを余儀なくさるケムブリッジ理博の学位服は、
緋色で僧衣におなじく、ながいそでがついている。そのそでが日本流
のものとことなって、ほそながいふくろになって左右にぶらさがって
いる。(総長352)
- (255) DNAは、糖と燐酸と塩基という三つの物質からなりたっている。
(暗号160)

6) 空間的な配置の述語

空間的な配置をのべる文の述語につかわれると、運動性をうしなって、継続相は状態をあらわすことになる。移動性の動詞と変化動詞がよくつかわれるが、前者が動作の局面のなかにあることをあらわす用法にちかひのに対して、後者は、結果の局面のなかにあることをあらわす用法にちかひ。

- (256) 海底を何条ものリップルマーク(波状痕)がはしっている。(日本12)
- (257) 山と海にはさまれて、自動車道路と電車の軌道と国鉄とが、せまいお
びのようにはしっていた。(高崎9)
- (258) 足もとから、かけおりた森林は、ただ一色の枝葉をさしちがえたま
ま、またむこうの山までひといきにかけのぼっている。(ない11)
- (259) そこから階段が二階にある家族たちの居間や寝室にのぼっている。
(帰郷21)
- (260) 榊の生垣は背丈がふぞろいになって、その一列になったあたまの線
がぶかっこうにうねっている。(田園23)
- (261) 片がわの斜面がつきて横谷があらわれ、ながれでる水がおちあって、
河原をひろげていた。(野火48)

- (262) 鉾脈は途中の断層できれていた。(厚物22)
- (263) 河口は三角形にひらいている。(日本120)
- (264) 北が高く、南が低い傾斜になっている。(野菊23)
- (265) しかもこの湊稽山は、もっともちかい漢塞の居延からでも優に一千五百里ははなれている。(李陵153)
- (266) 山は、海岸ぎりぎりまでせまっている。(高崎9)

7) 状態のかたちで存在する関係

関係そのものは動作でも状態でもない。けれども、その関係のもちぬしが時間の持続のなか存在するものであれば、その関係も持続過程をもつことになる。たとえば、つぎのア)は時間性が問題ではなく、アスペクトから解放されているが、イ)は持続過程のなかにある。

ア) きこの彼の意見は、彼女の意見と一致している。

イ) 彼の持論は彼女の持論と一致している。

このようなばあい、ふつうは継続相になるようである。

(267) この一家はいわゆる一任派に属している。(水俣151)

(268) 私の座敷にはひかえの間というような四畳が付属していました。

(ここ204)

(269) 三戸式、田戸式、子母口式、田戸上層式、茅山式など、回転捺型文系とひっかけ条痕文系の二系統をふくんでいた。(旧石313)

(270) こっけいなことには、〔奈良公園のシカの〕オスの交尾なわばりの境界線は、公園の、写真屋やせんべい売りのおばさんたちの「なわばり」と、完全に一致していた。(高崎30)

(271) 積取人夫はカニ工船の漁夫と似ていた。(カニ61)

(272) 総長と予とは意見が隔絶している。(総長341)

第5章 アスペクトからの解放

第1節 継続相の脱アスペクト化

1) 継続相の脱アスペクト化

継続相の動詞が動作過程との縁をきって、動作の局面でない状態過程のなかにあることをあらわすと、前章でのべたような準アスペクトになるのだが、状態過程からもはなれて、ただ特徴的な側面をひっぱりだすと、アスペクトから解放される。

継続相の脱アスペクト化は、つぎのふたつのばあいにおこる。そのひとつは、質的な属性のもちぬしが持続性をもたないアクチュアルな存在であるばあいであり、もうひとつは、そのもちぬしがアクチュアルな存在でないばあいである。つぎの2例は、それぞれ前者と後者の例である。

(273) 妻のことばは図星をさしていた。(無限123)

(274) 懷疑はひとつのところでとどまるというのはまちがっている。

(人生29)

前者の例をすこしあげる。

(275) 「姉さん、代ってまいてください。」と、Kは同いどしの松子をそうよんだ。お国なまりがついていた。(無限120)

(276) ただ「畜生！」とどなった。くらがりて、それは憎悪にみちた牡牛のうなりごえににていた。(カニ69)

(277) かんじょうしてみると、先生が毎月例として墓参にいく日が、それからちょうど三日めにあたっていた。(ここ18)

(278) あのひとの今の身じろぎはいっている。おまえは動物だ、動物のめすだ。本能のはたらきだけでもえる。(火の42)

後者の例には、つぎのようなものがある。

(279) したがって、評判を気にすることは名誉心でなくて虚栄心に属している。(人生48)

(280) 青年はべつにヤミ物資のボスではなく、単なる売り子にすぎなかつ

たので、歩合の収入は、要するに足まめであるかどうかにかかっていた。(旧石305)

- (281) われわれは順序としてまず古典物理学によって定立された客観的世界について考察する。ものがあるということは、そこでは空間においてある一定の位置をしめるということを意味していた。(物質258)

なお、さいごの2例は過去形で過去のことについてのべているが、それは、アクチュアルなかたちで過去にべったりつづいていたのではない。個々のことについては、特定の時間とむすびついていない。

継続相でアスペクトから解放される動詞は、ほとんどのものが語彙的意味のレベルで動作的な側面、状態的な側面をうしなっている。

- (282) 嘉門のつとめかたは、いっふうかわっていた。(冬の26)
- (283) しずかなこえで、まちかまえていたというほどではないが、おどろいてねとほけた調子ともちがっていた。(厭や264)
- (284) それは形をつくるという生命に内的な本質的な作用に属している。
(人生31)
- (285) それは恋愛によくにてている。(河明261)
- (286) 彼は(中略)正月の飾支度をしていたが、億劫で、御飾はばかげていた。(無限142)
- (287) 歌のなかに五助としてあるから、二重に名をかかなくてもよいと、すなおにかんがえたのが、しぜんに故実にななっていた。(阿部45)
- (288) 目をさました母おやの最初の印象はあたっていた。(潮騒59)

2) 完成相の脱アスペクト化とのちがい

完成相の脱アスペクト化は、完成相と継続相というアスペクト的な分化が問題となる以前のもののような感じがする。モデルなもののばあいには、始発と終了に対する関心が生ずるまえであるし、質的な側面をひっぱりだすもののばあいには、完成相と継続相の対立をよびおこすもとなる動作の過程性がはじめからきりすてられている。

それに対して、継続相の脱アスペクト化は、継続相の特徴である持続性をとおして、さらに、それをなくしていく方向で脱アスペクト化している。つまり、完成相と継続相が分化したのちの脱アスペクト化である。

なお、このことは、形つくりのてつづきとも関係するだろう。つまり、完成相のほうは、てつづきのマークされておらず、継続相のほうにマークされている。そこで、未分化性という意味的な特徴とマークされていないというてつづき上の特徴が完成相のほうにあらわれるのだろう。

第2節 アスペクトからの解放と テンスからの解放

1) アスペクトから解放されているものとテンス

過去に存在した特定の個別的なものごとの質的な属性をのべる述語は、過去形、非過去形の両様になりうる^(注)ことがある。

- ア) 1945年は敗戦の年であった。
- イ) 1945年は敗戦の年である。
- ウ) あのしごとは失敗であった。
- エ) あのしごとは失敗である。
- オ) 陸上のちちのみ動物のなかではマンモスがいちばんおおきかった。
- カ) 陸上のちちのみ動物のなかではマンモスがいちばんおおきい。

このばあい、過去形のつかわれているものは、その形式によって過去というテンスの意味が実現しており、非過去形のほうは、テンスから解放されているといえるだろう。継続相が質的な属性をあらわす述語のなかにつかわれるばあいにも、このことがいえる。

- キ) きのうの会議でのかれの発言は当をえていた。
- ク) きのうの会議でのかれの発言は当をえている。

前節の(273)(275)(276)(277)などはテンスをもっている例であるが、テンスから解放されている例をつぎにあげておこう。

- (289) 逮捕後、唾液をださせたということは、石川君の血液型がわからずに、まったくの見込みによる逮捕であったことをものがたっている。

(狭山31)

属性のもちぬしが現在存在しているものであるばあいには、現在というテンスをもっているのか、テンスから解放されているのかわからない。

(注) このことについては、寺村秀夫1971もかいている。

ケ) (はなしをききながら) このはなし、おもしろいね。

前節の(278)はそれである。これがもし、つぎの3例のように過去のはなしと対比されているばあいには、そのあいてとの関係でどちらであるかがわかるだろう。コ) は現在をあらわし、サ) や シ) は、テンスから解放されている。

コ) きのうのはなしもおもしろかったが、このはなしもおもしろいね。

サ) きのうのはなしもおもしろいけど、このはなしもおもしろいね。

シ) きのうのはなしと、このはなしと、どっちがおもしろい?

その属性のもちぬしが個別的なものでないばあいは、その文の性格からいって、述語であらわされる属性も個別的な時間に特定されるものでない。それは、非アクチュアルなものである。しかし、これにも、過去形であらわれるものがある。それは、過去に特定された時間におこったことをあらわしているのではなく、その属性の成立したはんいが、過去のひろげられた時間帯に属していることをあらわしているのである。

ス) そのころは、男女が手をつないであるくことはまれであった。

セ) そのころは、手づかみでたべるのが習慣にあっていた。

前節の(280)は、これである。

2) テンスから解放されていても、アスペクトからは解放されていないもの

このことはテンスの部であつかうべきことであるが、アスペクトの理解に役だつとおもわれるので、ここでもふれておく。

そのひとつは、なりたつ時間的位置に関係のない命題である文の動作的な属性をあらわす述語のなかにつかわれたばあいである。このばあい、完成相と継続相が対立していて、そのアスペクトの意味が実現している。

ソ) 秋になると、つばめは南の国へかえります。

タ) 冬のあいだ、つばめは南の国へかえています。

つぎのようなものは、完成相にかえられないだろう。

チ) ふきなガしのしっぽが南にむいているときは、風は北からふいていま
す。

ツ) 一月には、かえるは土のなかでねている。

もうひとつは、どの時点を基準にしても持続過程のなかにあるすがたをあらわすばあいである。

(290) 主人によく似た老人が、店先にいつもすわっていた。
このことについては、第2章第2節でのべた。

第Ⅳ部 完成相非過去形のテンス

第1章 完成相のテンス

第1節 テンス語形

1) テンスとアスペクトの語形

(注)
現代日本語動詞の終止のべたて形は、そのあらわす動作過程と時間とのかかわりのなかで、つぎのような語形変化の体系をもつ。

動詞のテンスは、動詞のあらわす動作（または、その一定の局面）が、発話時を基準として、それよりまえ（過去）か、それと同時（現在）か、それよりあと（未来）か

テンス \ アスペクト	アスペクト	
	完成相	継続相
非過去形	スル	シテイル
過去形	シタ	シテイタ

をあらわしわけることについてのカテゴリーである。発話時を基準とする時間は、論理的あるいは意味的には、過去、現在、未来にわかれるのであるが、現代日本語動詞は、非過去形と過去形のふたつに対立している。

それぞれのテンス語形のあらわす基本的なテンス的意味についていうと、非過去形と過去形の対立は、完成相では未来と過去の対立であり、継続相では現在と過去の対立である。完成相非過去形は、動詞のあらわす動作（または、その一定の局面）がまるごとのすがたで未来に成立することをあらわし、完成相過去形は、それが過去に成立したことをあらわす。また、継続相非過去形は、動詞のあらわす動作・変化過程の一定の局面が現在（発話時）において持続していることをあらわし、継続相過去形は、それが過去に持続していたことをあらわす。

ア) かれはあした試験をうける。

イ) かれはきのう試験をうけた。

(注) 第Ⅰ部第1章第1節参照。

- ウ) かれはいま試験をうけている。
- エ) きこの正午、かれは試験をうけていた。
- オ) やがて戸がしまる。
- カ) さっき戸がしまった。
- キ) いまは戸がしまっている。
- ク) さっき戸がしまっていた。

テンスは発話時を基準にして過去、現在、未来をあらわしわけることを基本とするが、テンスのなかには、過去や未来の一定時を基準にして、以前、同時、以後をあらわしわけるものがある。これを相対的テンスという。相対的なテンスと対比するばあいには、原初的なテンスは、絶対的なテンスとよばれる。

相対的なテンスは、従属節のなかにしばしばあらわれる。

- ケ) 彼女は夫が戦地からかえる日をまちわびていた。(以後)
- コ) 彼は試験のおわった日のつぎの日から三日間旅行にでかける。(以前)

けれども今回の報告はいいおわり形のテンスとアスペクトを研究の対象にしているので、このように従属節のなかにあらわれるものはあつかわない。とはいえ、もしいいおわり形式のなかに相対的なテンスをあらわすものがあれば、それは、今回の報告のなかにいれなければならない。

ところで、継続相形式のなかには、つぎのように、動作が以前に成立したと(成立すること)をあらわすものがある。

- サ) 彼女は、ほん訳がでるまえに、原書でそれをよんでいた。
- シ) おれのとしをかんがえてみる。おまえなんか死ぬよりずっとまえに、おれがしんでるよ。

これらの例では、過去または未来の一定の時点よりまえに動作が成立することをあらわしている。そして、そのアスペクト的な性格をみると、その〈よむ〉とか〈しぬ〉とかの動作なり変化なりは、まるごとのすがたでさしだされており、完成相の基本的なアスペクト的意味とおなじ意味が実現している。そうだとすると、この用法のなかでは、継続相の形式が、完成相のアスペクト的意味と、以前というテンス的意味とを実現していることになる。そこで、こういうものをここでは「完成相のテンス形式に準じる継続相」として、継続相についての他の一般的な記述からとりだしてのべることにした。

第IV部 完成相非過去形のテンス

第V部 完成相過去形のテンス

第VI部 完成相のテンス形式に準じる継続相

第VII部 継続相非過去形のテンス

第VIII部 継続相過去形のテンス

2) ムードのなかにあるテンス

テンス語形として分化している「する」と「した」(あるいは「している」と「していた」——以下、継続相についても同様のことがいえるが省略する。)の形は、また、ムード語形でもある。つまり、それは、「するだろう」「しただろう」とともに、「しよう」「しろ」に対して、^(注)のべたてのムード語形であり、また、そのなかで、「するだろう」「しただろう」と対立して、いいきり形としてムード上の位置をしめている。

機能	ムード	テンス	〔完成相〕	〔継続相〕
	(通達の側面)	(現実反映の側面)		
終止形	のべたて形	いいきり形	非過去形	スル…………シテイル
			過去形	シタ…………シテイタ
		おしはかり形	非過去形	スルダロウ…シテイルダロウ
			過去形	シタダロウ…シテイタダロウ
	さそいかけ形			ショウ…………シテイヨウ
	めいれい形			シロ…………シテイロ

いいきりは現実を直接にとらえてのべるのであり、おしはかりは、現実を直接にとらえられないばあい、話し手の推量をとおしてとらえてのべるのである。つまり、いいきり形とおしはかり形の対立は、現実反映の側面における対立である。また、のべたては聞き手にただつたえるのであり、さそいかけやめいれいは、聞き手に行動を要求するのである。つまり、のべたて形、さそいかけ形、めいれい形の対立は、通達の側面における対立である。というわけで、いいきり形は、ムード的には、現実を直接にとらえて、そのままつたえるという、もっとも平叙的なのかたとして、他のムード語形と対立しているのでは

(注) 第I部第1章第1節参照。

る。

いいきり形の基本的なムード・テンス的な意味は、平叙的なのかたのなかで成立するのだが、そのムード的な意味が基本的でないばあいには、そのことがテンス的な意味に影響をもたらすことがおおい。たとえば、非現実の仮定の帰結をあらわすばあいには、テンス的な形式と意味の関係が、基本的な意味のばあいからずれる。(たとえば、第Ⅵ部第3章第4節)

第2節 完成相のテンス

1) 完成相のテンスと継続相のテンス

完成相のテンスは、その基本的な用法において、未来と過去に対立する点が、継続相のそれが現在と過去に対立するのとちがっている。完成相がなぜ現在のうごきをあらわせないかといえは、現在つまり話しの時点という瞬間のなかに始発から終了までをふくめたまるごとのすがたの動作過程がおさまりきらないからであり、継続相がなぜ現在のことをあらわせるかといえは、それは、現在という瞬間におさまるのではなく、それをまたいだ、持続過程をなす局面としてさしだせばよいからである。^(注)

継続相のテンスは、その動詞のさししめす動作の一定の局面が基準時間をまたいで持続していることをしめすのであって、その局面の持続がいつからいつまでつづいているかには、基本的には無関心である。このことと関連して、金田一春彦1955は、「状態相のテンス (一)」のなかでつぎのようにのべている。

「一た」の形は、過去を表わすこと以上のとおりであるが、これは決して同時に「現在はそうでない」という意味を表わすわけではない。

この椅子はきのうここにあった。

という場合、その椅子は現在そこにはないかもしれないが、あるかもしれない。

これに対して、完成相のテンスのばあいは、その動詞のさししめす動作(あるいは、その局面)が、全体として基準時間のなかにおさまっている。動作(あるいは、その局面)は、その時間のなかであって、そこにはないのである。

つぎに、完成相のテンスが運動の時間をしめすのに対して、継続相が静止の時間をしめすということも、両者の重要な対立点である。完成相が始発から終

(注) 奥田靖雄1977による。

了までをふくめてまるごとのすがたで動作をさしだすということは、時間の推移の観点からのべるならば、一定の時間的位置において、動作（または、その局面）を、始発から終了まで一過程ぶんすすませるということである。継続相は、その時間において、過程が存在することをあらわすだけであって、過程がすすむことはあらわさない。この、動作過程をすすめるかすすめないかという対立は、文章のなかで文がならべられるばあいには、あいならぶ文が、順次的なことがらをあらわすか、同時的なことがらをあらわすかの対立となってあらわれる。

須田一郎1979は、これを発見して、つぎのようにのべた。

運動動詞の使用されているひとつのまとまったはなしのなかで完成相はそのすがた的な全体性という特徴にもとづいて、他の完成相に対する時間的な前後関係を表現する。完成相のこの積極的な特徴は、ついになる継続相の時間的な前後関係を表現しないという消極的な特徴によって補完される。ふたつの特徴は時間という観点で統一し、前後関係をあらわすかあらわさないかで対立する。

つぎに、このことをしめす段落例を、須田1979のあげたものから、それぞれひとつずつかりて、あげておく。

◎ 余が寤寐の境にかく逍遙していると、入口の唐紙がすとと開いた。あいたところへまぼろしのごとく女の影がふうとあらわれた。余は驚きもせぬ。恐れもせぬ。ただ心地よくながめている。ながめるといっては、ちとことばが強すぎる。余がとじているまぶたのうらに幻影の女がことわりもなくすべりこんできたのである。まぼろしはそろりそろりと部屋のなかへはいる。仙女の波をわたるがごとく、畳の上には人らしい音もたたぬ。閉ずるまなこのなかから見る世の中だからしかとはわからぬが、色の白い、髪はのこい、えりあしのながい女である。近ごろはやる、ぼかした写真を灯影はかりにすかすような気がする。

まぼろしは戸だなのまゝでとまる。戸だながあく。白いうでがそでをすべって暗やみのなかでほのめいた。戸だながしまる。畳の波がおのずから幻影をわたしかえす。入口の唐紙がひとりでに閉たる。余がねむりはしだいにこまやかになる。人の死して、まだ牛にも馬にも生まれかわらない途中はこんなであらう。(夏目漱石「草枕」)

◎ ところがこの女の表情をみると、余はいずれとも判断にまよった。口は一文字にむすんで静かである。目は五分のすきさえ見いだすべく動いている。顔は下ぶくれのうりぎねがたで、ゆたかにおちつきをみせているにひきかえて、ひ

たいはせまくるしくも、こせついて、いわゆる富士びたいの俗臭をおびている。
のみならず眉は両方からせまって、中間に数滴のはっかを点じたるごとく、ぴ
くぴくじれている。鼻ばかりは軽薄にするどくもない。遅鈍にまるくもない。

画にしたら、美しかろう。(草枕)

もっとも、テンスから解放されているばあいには、完成相も順次性をうしな
う。須田1979は、そういうものは、ここからはずさなければならぬとして、
いくつかの例をあげている。そのなかのひとつを、ここにあげておく。

◎ 智にはたらけば角がたつ。情にさおさせば流される。意地をとおせばきゅう
くつだ。とかくに人の世はすみにくい。(草枕)

完成相のもつこの運動性、順次性という特徴は、その時間的な位置が現在に
ちかい過去や未来にあるばあいには、現在とかかわる一定のニュアンスをうみ
だす原因となる。なぜなら、現在をふくんだ、ひとまとまりの大きなできごと
過程のなかで、完成相過去形によってさしめされた小さなできごと過程は、
その順次性によって、そのあとにつづく小さなできごと過程としての現在ので
きごと過程にかかわり、完成相非過去形によってさしめされた小さなできごと
過程は、その順次性によって、それに先だつ小さいできごと過程としての現
在のできごと過程^(注)とかかわるからである。現在となんらかのかかわりをもつペ
ルフェクト的過去や、直後未来のもつニュアンスは、このことによって説明で
きるであろう。

2) 完成相のテンスとモーダルな性格

完成相非過去形の基本的なテンスの意味は、動作が未来に成立することであ
る。ところが、その未来の動作は、発話時において、まだ現実のものとなっ
ていない。ということは、未来の動作をのべたて・いいきり形でのべるとい
うことが、現実を直接にとらえて、そのままのべるのがのべたて・いいきり形の基
本的なムードの意味であるということと矛盾するということである。このこと
が、未来をあらわすばあいの、いろんなニュアンスとなってあらわれる。

完成相非過去形が一人称の現在の心理活動をあらわすとき、認識の対象と認
識の活動が分化しにくいいため、現実反映の側面で、話し手がわの要素がまじり
こんでくる。そのために、アスペクトの表現形式になりえなくなることについ
ては、第Ⅱ部第4章第1節でのべたが、ムードの点からみても、名づけ的な意
(注) 鈴木重幸1979による。

味のなかに陳述的な意味がくわわって、いいきり形としてはモーダルに特殊なものとなる。

いいきり形がムード的意味において、おしはかりの性格をおびると、おしはかり形がそうであるように、テンス形式がテンス形式としての弁別性をよわめて、非過去形と過去形の形式的な対立が、その意味的な対立をになわなくなる。この傾向は、非現実仮定の帰結のばあいには、もっともいちじるしい。

第2章 未 来

第1節 未来をあらわすことのモーダルな性格

1) 現実反映の側面におけるモーダルな性格

a) 未来の動作とモーダルなニュアンス

完成相非過去形の基本的なテンス的意味は、未来において動作が成立することである。ところが、未来の動作は、発話時にはまだ成立しない。このことは、この形がいきり形であることと矛盾する。このことについて、鈴木重幸1979は、つぎのようにかいている。

- (12) アクチュアルな未来の意味のばあい、発言の瞬間には動きや変化は、(10)のわりにあげたばあいのほかは、まだ実現していない。したがって、話し手は、その情報をなんらかの方法で認識して聞き手につたえるのである。未来の特定の時間に確実に起こることが予定されていることをはっきり認識してつたえるばあいのほかは、未来における実現を話し手がなんらかのしかたで予測してのべるわけである。また、それが話し手自身の意志的な動きや変化であるばあい、未来における実現を意志としてのべるのである。したがって、アクチュアルな未来の意味は、未来における実現が確実なものとして予定されていることを話し手がしているばあいのほかは、話し手の予測的な態度、または意志的な態度というムード的な（モーダルな）ニュアンスが、おおかれすくなかれ、つきまとう。

ここで鈴木が「確実に起こることが予定されていることをはっきり認識しているばあい」というのは、鈴木が(11)であげているような例をさすのだとおもわれるが、ここでは、つぎの例をあげておこう。たとえば、(1)は予測や意志をこえてきまっていることだし、(2)も、話し手は話すとき、死ぬかもしれないという可能性を考慮にいれておらず、きまったこととしてのべている。

(1) あと15分で、あたらしい年がやっってまいます。(ラジオ放送)

(2) わたしは、来年の三月で、二十七になります。(忍ぶ71)

また、現実には100%の確実さをもって実現するとはかぎらなくても、予定が

きまっておれば、当然実現することとしてのべる。

(3) 父は病気でこれませんが母と姉とはいきます。(青銅45)

(4) ソ連よりTU輸送機が明日七時より、各飛行場に六十機ずつ百八十機はいる。(日本115)

けれども、予定されているものでないばあい、予測的な態度のニュアンスがつく。

(5) いい陽気になったから。——これからまただんだん酒がうまくなる。
(末枯31)

(6) 専務、熱風炉の爆発です。早くしないと二次爆発がおこります！
(華麗159)

(7) もうすぐ“わだつみ2号”が竣工します。そうしたらローテーションがすこし楽になります。(日本5)

(8) 私がわかったのでございます。襟子のようにそだった娘は、ここにいたら、また、ゆく道をあやまります。明日から、襟子はここへつれてまいりますまい。(木石71)

また、つぎのようなものは、意志的な態度のニュアンスがつく。

(9) じゃ先にいってろ。あとからいく。(忍ぶ6)

(10) ぼくは、おっかさんがほんとうにさいわいになるなら、どんなことでもする。(銀河270)

(11) いや、なんとしてでもたのみこむ！(日本32)

(12) うばえ。志乃をうばう！(忍ぶ90)

現在や過去のことはなすときには、現在や過去の現実、あるいは、その現実を再現した現在像や過去像をみてのべることになる。しかし、未来のことはなすときには、現実がないのであるから、未来像をつくりだしてはなさなければならない。ただ、そのばあい、その未来像をつくりだしながらのべるのと、すでにつくりあげられた未来像をみながらのべるのとでは、ちがったいいかたになる。鈴木1979が「予定されていることをはっきり認識しているばあい」といったのは、「すでにつくりあげられた未来像をみながらのべる」といいかえてもよいだろう。つまり、(1)～(4)のようなばあいは、未来のできごとをはなすのに、すでにつくられた未来像を、現実をみるようにみながらのべているのである。予定表を現実とみなして、見ながらのべているのである。

未来像をつくりながらのべるばあいには、典型的には、おしはかり形がつかわれる。ゆうやけぞらを見て、「あしたははれるだろう。」というのは、未来像をつくりながらのべているのである。新聞の天気予報をみながら「東京はあしたあめがふる。」というのは、天気予報という未来像をみて、そのままのべているのである。天気予報を信用しないで、天気図をみながら、それを材料にして話し手じしんの未来像をつくりながらのべるばあいには、天気予報をみながらであっても、「あしたは、雨がふるだろう。」ということになる。

いいきり形がいいきり形の基本的なムードの意味でつかわれるばあいには、未来像をみながらのべるのである。(5)で「酒がうまくなる」といっているのも、現実の言語活動では、未来像をみながらのべているのである。これがいいきり法とおしはかり法の基本的なちがいである。

ところが、社会的に未来像がまだ通用していないものばあいには、話し手が未来像をみながらはなしていても、未来像をつくったという発言前の過程までが言語外的につたえられることになるので、その未来像づくりの過程がニュアンスとしてくつつくことになるのであろう。そして、それが認知活動であるばあいには予測のニュアンスになり、一人称の行為に関するものであれば、意志の態度のニュアンスになるのである。

b) 未来の動作の確定性とモーダルな性格

完成相非過去形が「きつと」「かならず」のような陳述副詞と共起するばあいには、これがニュアンスの段階にとどまっているかどうかが問題になる。

工藤浩1982は、陳述副詞の「もちろん」「むろん」の類を「断定（あるいは確定）」とよんで、「推量」の一種としての「確信」をあらわす「きつと」と区別している。（つぎのうち前2例は工藤1982から借用）

(13) 退職勧告？ もちろん拒否したよ。（の壁57）

(14) むろん、ぼくは、あなたの病気を、重要な研究対象とかんがえている。

（木石89）

(15) もちろん私はやります。（の壁283）

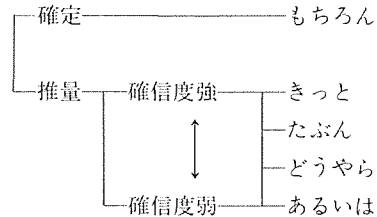
(16) ありがとう。きみがそうしてくれるなら、ぼくはやるよ。きつとやる。（の壁262）

(17) そのほうがいいよ。さっぱりして。きつと明子はわくなるよ。

（くれ83）

このかんがえによれば、モーダルな性格は、まず確定と推量にわかれ、その推量のなかに確信度のていどの対立が存在することになる。

これを動詞のムード的な意味の対立にあてはめると、確定と推量の対立は、現実あるいは現実のかわりである過去像、現在像、未来像をみながらのべるか、それとも、それをつくりながらのべるかの対立であり、確信強と確信弱の対立は、つくりながらのべるばあいの度合の対立となる。そして、



いいきり形は、「もちろん」「きっと」「たぶん」と共起するので、いいきり形のムードの意味も、確定のばあいと、確信度強の推量のばあいとにわかれることになるだろう。このようにみえてくると、推量のばあいは、ニュアンスではなくて、ムード的に第二の意味だということになるだろう。

- (18) くる！ きっとあのひとはきてくれる。いつかの、あの日のように！
(約束100)

- (19) わしが死ねばきっと赦免がくる。(婉と15)

- (20) おっかさん、かんにんしてください。きっと私が、私が勉強して、おっかさんをまたかごにのせてここにきます。(思出41)

- (21) 新さん、すまない。そのうちにきっといくよ。(末枯28)

- (22) 神国日本はかならずかつ。(時計56)

- (23) この男をマークすれば、かならず奴はあらわれる。(女囚68)

- (24) あそこにみえるあの旅館に、十二時……かならずいく。(約束28)

この研究は、ムードの分析を目的にしていなので、これ以上つつこまないが、いいきり形のムード的な性格については、ムード研究として、べつにおこなう必要があるだろう。

2) 通達の側面におけるモーダルな性格

未来の動作が聞き手の参加によってはじめて成立するようなものであるばあい、完成相ののべたて形である非過去形が、さそいかけ形やめいれい形と同様に、聞き手へのはたらきかけの側面をもつことになる。

- i) 動作の成立が聞き手になんらかの影響をあたえるばあい

(25) 阪神銀行と大同銀行の頭取には、おりをみて私からはなす。(華麗132)

——だから、おまえは、はなさなくてもよい。

(26) ついては、近いうちに新社長の就任祝いをかねて、ちょっとしたパーティーをします。(火の66)

——だから、こい。

ii) 聞き手が動作対象になるばあい

(27) のちほど、おむかえに参じます。(婉と133)

——あなたを

(28) 今夜はいそがしい。ビジネスは銀行できく。(華麗25)

——おまえから

iii) 話し手と聞き手がいっしょに動作をするばあい

(29) よし、おれたちはいもをほれるだけほったら、出発する。(野火92)

(30) われわれの行動については、現在あるたしかなすじを通じて上層部に連絡中であるが、その確認がとれしだい、決行する。(戒厳16)

iv) 聞き手が動作をするばあい

(31) 多摩発電所だ。これを爆破する。時間は五月十五日、午後三時。できるか？(戒厳24)

(32) 看守「裁判所との往復は規則をまもっておとなしくする。さわいだり、てこずらされたりすると、あとでどうなるか、わかってるな。」(間草92)

このうち、i) は、言語表現としては、あいてのことをなにもいっていないし、ii) も、主たる動作は話し手じしんがおこなうものである。

iii) は、話し手と聞き手がいっしょにおこなう動作をあらわしている点が、「しよう」のはたらきかけの用法と共通である。

(33) 百合ちゃん、ここの酒は、まずい。席をかえよう。(自由259)

(34) 貴様だって生きる権利はある。のもう、どこかでいっぱいやろう。

(帰郷334)

(35) まあ、君、宿屋へいってはなそう。(破戒126)

これらをiii) とつきあわせてみると、たがいに「する」あるいは「しよう」にかえられないことがわかる。「しよう」は話し手と聞き手が対等のたちばにあるか、または対等のたちばであるとしてきそいかけているかであるのに対して、「する」は、たかいたちばから行為を指示している。(33)～(35)は、この文脈のな

かで「する」にかえることは不可能だし、(29)、(30)は、「しよう」にすると、話し手と聞き手がなにか関係のようになってしまう。iii) は、さそいかけるのではなくて、もうかえることのできない未来像をさししめして、聞き手をそのまま未来像のなかにくみこんでいるのである。その結果として、聞き手は自分の行為をおこなさなければならないのであって、聞き手に行為をおこせといっているのではない。それが、のべたて法とさそいかけ法のちがいである。

iv) は、聞き手がおこなう動作をしめしている点が、「しろ」と共通する。

(36) ××沢をぬけて、××山へでろ。あっちにゃだれもまわっていねえ。

(宵待72)

(37) 二度とこんな不詳事をおこさぬよう管理体制に気をつけろ。(女囚8)

(38) おまえたちは、おまえたちでやれ。(戒厳42)

このばあいも、これらが動作をはたらきかけているのに対して、iv) は、未来に実現するはずの動作を、すでにある未来像としてさしだしているのである。その点で、これものべたてのムードであるということが出来る。

以上のように、聞き手の動作を要求するものもあるが、これらが未来の動作をあらわしている点については、すべておなじである。つまり、テンス的な意味はみなおなじである。ただし、モーダルな点では、さらに検討すべき問題をかかえている。この点については、やはりムード研究が必要である。

第2節 未来の動作の種々相

1) 「アクチュアルな未来」と「非アクチュアルな未来」について

鈴木重幸1979は、完成相現在未来形（非過去形のこと）のあらわす未来を、アクチュアルな未来と非アクチュアルな未来にわけている。アクチュアルな未来というのは、「未来すなわち発言の瞬間よりのちのある一つの時間(時点あるいは期間)に完成相のあらわす動きや変化が実現することをあらわす」ものであり、これに対して、非アクチュアルな未来というのは、「特定のひとつの時間と直接関係づけられない」動きや変化をあらわしていて、ただ、未来であるというだけの時間的限定のあるものである。そして、「資料にあらわれたのは非連続のくりかえしだけである」として、つぎのようなものをあげている。

(39) これから一週間に一回ずつ頭の洗濯をしてやる。(井上靖「あすなろ物

語」)

(40) だからときどきでてくるさ。番町の先生の話などもききにくるよ!

(島崎藤村「分配」)

けれども、未来の動作の特定、不特定をわけることは、現在のばあいとくらべて、あまり積極的な意味をもたないのではないかとおもわれる。その理由は、つぎの三つである。第一に、現在のばあいは、特定時にしぼられるのは特定の動詞にかぎられ、他のものが現在をしめすためには非アクチュアルにならざるをえないという制約があるのに対して、未来のばあいは、そういう制約がない。第二に、未来の動作というものは、第1節でのべたように、なんらかの意味で不確定な要素があり、そのこととかかわって、こういう対立として二分することがむずかしいことである。第三に、これを二分するというかたちでなく、もうすこしこまかくわけたほうが、記述としては、みのりがおいとおもわれることである。

2) 未来の動作の種々相

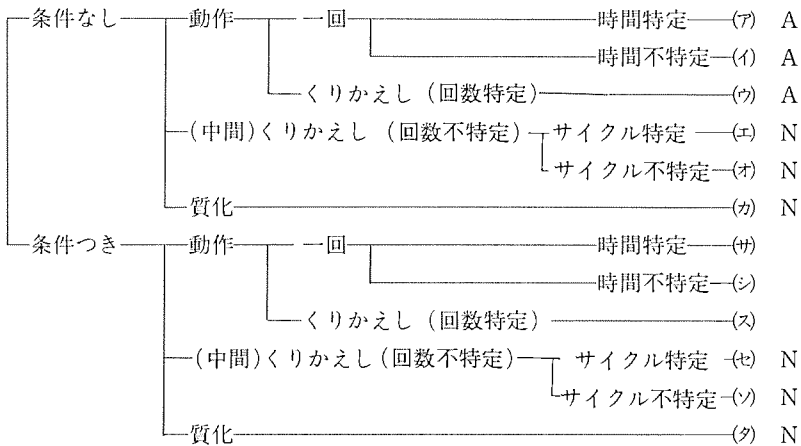
未来の動作を記述するばあい、つぎの諸点を考慮にいれておくことがのぞましいとおもわれる。

- ・未来の動作には、一定の条件があれば成立し、なければ成立しないというものがあること。
- ・未来の動作には、時間的に特定されているものと、特定されていないものがあること。
- ・くりかえしには、回数特定されているものと、そうでないものがあること。
- ・くりかえしには、サイクルの特定されているものと、そうでないものがあること。
- ・完成相非過去形で、未来の質的な属性をあらわすものがあること。

この最後のことについては、説明がいるだろう。たとえば、18才の少年が「はたちになったらタバコをすう。」といったようなばあい、その未来の時間はばは、20才になった時点からあとということになる。そして、個々の具体的動作は、それ以後くりかえされることになる。けれども、この「タバコをすう」は、個々の動作のくりかえしをあらわしているのではなく、そういう習慣をもつこ

とをあらわしている。つまり、アスペクトから解放されて、質的な属性をあらわしている。

以上のようなことを考慮にいれて、未来の動作の種々相をかかげることにする。なお、つぎの「A」「N」は、鈴木重幸1979でそれぞれ「アクチュアルな未来」「非アクチュアルな未来」とされるとかんがえられるものである。A、Nの記号のないものは、筆者によって、そのどちらかを判断できなかったものである。



ア) アシタ ニワノ ソウジヲ スル。

イ) マタ キマス。

ウ) 定年マデ アト 三回 定期昇給スル。

エ) コレカラ 毎日 ココヘ クル。

オ) 火事ノ トキ 出動スル。

カ) コレカラハ サケヲ ノム。

サ) アシタ アメガ フラナケレバ、ニワノ ソウジヲ スル。

シ) イキテ イタラ、マタ キマス。

ス) モシ 定年マデ ツトメルナラ、アト 三回 定期昇給スル。

セ) モシ 大学ニ ハイレタラ、毎日 ココヘ クル。

ソ) モシ 消防署勤務ニ ナッタラ、火事ノ トキ 出動スル。

タ) モシ カネモチニ ナッタラ、ジョウトウノ サケヲ ノム。

ア) に属するもの

- (41) じゃ、あしたもくる。(忍ぶ10)
(42) 八時間後にはソ連の極東艦隊が輸送船舶とともに、舞鶴と敦賀に入港する。(日本114)
(43) じゃ先にいってろ。あとからいく。(忍ぶ6)
(44) しかし、ぼくは一月一日にはお山へあがる。(間革107)
(45) ×時の汽車でいく。(生ま211)
(46) 政府発表は二週間後になる。(日本80)

イ) に属するもの

- (47) じゃあ、またくる。(生活76)
(48) 私やめるわ、こんどは。(伸子77)
(49) 適当な時期をみてうちきる。(間革44)

ウ) に属するもの

- (50) ……の問題について三回にわたってはなしていただきます。

(ラジオ放送)

エ) に属するもの

- (51) 私は当分毎日お墓へまいります。(野菊58)

オ) に属するもの

- (52) 「ずっと世話するつもり?」「あゝ、ずっとする。」(故旧57)

カ) に属するもの

- (53) そりゃこれからのちどっかで生きてはたらく。(生活119)

サ) に属するもの

- (54) あしたもし雨がふったら、へやのかたづけをします。

シ) に属するもの

- (55) 先生が転宗されれば、ぼくも転宗する。(間革94)
(56) なにかありましたら、またれんらくします。(戒厳4)

ス) に属するもの

- (57) ことしは、あと2回きます。

セ) に属するもの

- (58) あなたにたのまれたら、もちろん毎日きます。

ソ) ～タ) に属するもの

- (59) ぼくはおっかさんが、ほんとうにさいわいになるのなら、どんなことでもする。(銀河270)
- (60) だから私のやりたいように、やるんだったら、やっぱり、つきあう。
(極私20)
- (61) 大学にはいったら勉強するさ。

第3節 直 後 未 来

1) 直後未来

未来の動作や変化をのべるもののなかには、発話の直後に成立する動作や変化をのべるものがある。これらは、現実反映の側面でいいきり性がつよく、通達の側面で通知性がつよいという特徴をもつ。

現実反映の側面においていいきり性がつよいのは、成立のための準備や前兆がすでに見えていることが多いからである。このことは、完成相のもつ順次性とかかわる。このばあいの完成相非過去形であらわされる小さなできごと過程は、大きなできごと過程のなかで、現在の小さなできごと過程（それは、ことばにあらわされていないが、見えている。）のつぎに成立するものであり、その点において、現在とつながるのである。

通達の側面で通知性がつよいのは、発言の動機とかかわっているのだろう。そのきざしがすでに存在するということは、すこしまてば、聞き手じしんによっても観察、認知できるはずのできごとだということである。それなのに、これをあえて聞き手につたえるのは、つたえなければならない理由があるからである。すぐわかることをあえていわなければならないというところに通知性のつよくなる理由があるのだろう。しかも、すぐあとで実現する動作や変化を、その成立のまえにつたえなければならないとすれば、そこでまた、その通知性をつよめる原因ができるだろう。

このいいきり性と通知性は、どちらも「のべたて」「いいきり」というこの形式の本来のムード的な意味のなかにあり、ムードの面からみたばあいに、けっして質的に特殊なものではない。けれども、その程度において、それがかなりぎょう縮されている点は特徴的だといえるだろう。

また、この用法のばあい、多くが無主語文のなかでつかわれる点も、特徴的

である。これは、この用法が、話し手と聞き手の共存場面のなかでつかわれるということと関連している。その点では、通達活動のなかでかなり特殊なものであるといえる。

この用法は、完成相非過去形が未来をあらわすというワクのなかからとびだしてはいない。ただ、その場面と関連して、これのつかわれる無主語文が独立語的な要素を多少もつとすれば、そのぶんだけ述語性がよわまることになり、さらに、それに応じて、そのぶんだけ脱テンス化することになる。けれども、まだ、独立語文化するところまではっていないだろう。それにしても、ほんのちょっとだけでもテンス性がよわまっているということは、この用法のテンスの問題として、いちおう注意しておいてもよいだろう。

2) 前兆を知覚して、しらせるばあい

直後に成立する動作や変化の前兆を、話し手が知覚してのべるばあいがある。このばあい、聞き手に対して、その動作や変化への対応をよびかける面がつよく、そのために通知性がつよくなる。つよい語調ではなしたり、くりかえしたりすることがおおい。

(62) ひとがくる。(やきp35)

この文が、もし人のすがたをみて発せられたものならば、現在の動作をあらわすことになるのだが、この例は、気はいを感じてのべたものであるので、ここにおいた。なおこの例のばあい、けっきょく、そのあと、だれもこなかったことになっている。

(63) [お産のばめん] 小林「いたい、いたい」アリ「でる、でる」(極私28)

(64) 「なあーなあ、なあー、おーい、やってよおー、いくいくいく!」

(真空99)

(65) [がけに気づかずあとずさりするあいてをみつけて]おちる!おちる!

(66) [枝にぶらさがりながら] おちる!おちる! たすけて!

3) 自分がこれからする動作を宣言するばあい

自分ではわかっていることなので、いいきり性がつよい。また、あいてに心がまえや対応を要求するばあいには、通知性がつよくなる。語調は、かならずしもつよくない。

(67) 徹男、いきぐるしくなって立ちあがる。徹男「かえる！」(津軽38)

(68) ボーイ、水をもってちかづく。研二「あ、いいの。でる。」(妹48)

(69) 克之「泳ぐべや」守「うん、泳ぐべ」健「おれも泳ぐ。」(時計58)

(70) 「今、火をおこします。」(波27)

つぎの例は、自分の動作でないが、あいてに対応をせまる点で通知性がつよい。

(71) 「(ひくいこえで) 専務、頭取がおかえりになります。」(華麗133)

4) 聞き手の参加によって成立する自分の行為を宣言するばあい

これは、自分の動作である点で3)と同様であるが、動作の対象が聞き手である点が3)とことなる。通知性が非常につよく、言語活動のレベルでは、あいてにはたらきかけている。

(72) 下士官A「では、血判をとる。」(戒厳16)

(73) もう一度だけ、役員諸君にきく。諸君らは綿貫専務とほんとうに意見、行動をともしているのか？(華麗217)

(74) ちょっと診察します。(本日49)

(75) 私が、おつぎします。(忍ぶ145)

5) 聞き手といっしょにする行為を宣言するばあい

このばあいの動作主体は話し手と聞き手である。つまり、inclusiveな一人称複数である。つよい通知性のほかに、あいての行動を要求するはたらきをもっている。

(76) われわれはこれより、昭和維新にむかって前進する。(戒厳38)

(77) それでは、一括して、採決します。(ない50)

6) あいての行動を指示するばあい

あいてに直後の行動を指示するのである。この発言の内容は、聞き手の行動によって成立する。したがって、つよい通知性とはたらきかけ性をもっている。

(78) 護送巡査は、すぐまえの室のとびらをあけて、「はいる！」とかれをおした。(自由366)

(79) なにをもたもたしてるか！ つぎは火炎ビンをやる！ 位置につい

て！（やさp15）

この種のもは第1節2）でもあげたが、そのはたらきかけ性は、こちらのほうがつよく感じられる。それは、こちらは直後で、そのテンス的意味が言語外的条件によってよくつたわるため、その役めから解放されるぶんだけ、はたらきかけ性をつよめているからだろう。だとすれば、あるいは、もうこちらは、はたらきかけ性のほうへ、この文のモダリティーの重点がうつっているのかもしれない。もしそうだったら、これは、完成相形式の特殊な用法として、この第2章から、とりのぞかなければならない。

第3章 現在(1)——現在の動作，状態

現代日本語動詞の完成相非過去形が基本的に未来の動作をあらわすことは、すでにのべた。けれども、それが現在の動作をあらわすことがないわけではない。完成相非過去形は、つぎのばあい、現在の動作をあらわすことができる。

- i) 瞬間的な動作であって、始発から終了までの全過程が、話しはじめから話しおわりまでのあいだにまるごとおさまるばあい
- ii) 完成相形式であっても、完成相の基本的なアスペクト的意味を実現せず、進行過程のなかにあるすがたをあらわしているばあい
- iii) アスペクト的な意味の側面で、継続相との分化がすすんでいないものなお、このほかに、現実との関係が二次的となって、質的な特徴をあらわすものへ移行しているものがある。これは、現在の質をあらわすのだが、それについては、つぎの章でのべる。

第1節 発話時のなかにおさまる動作

1) 発話時のなかにおさまる動作

完成相は、動詞のあらわす動作（または、その一定の局面）を、始発から終了までふくめてまるごとのすがたでさしだすため、その全過程が発話時という瞬間におさまりきらないので、テンスの面で、非過去形が現在の動作をあらわせないのがふつうなのであるが、特殊なばあいには、その全過程が発話時のなかにおさまって、非過去形で現在の動作をあらわすことができる。なぜかという、発話時は、マクロにとらえれば瞬間であるが、数学でいう「点」のように長さがゼロではないからである。発話時は、話しはじめから話しおわりまでの時間であるが、これには多少のはばがある。大きくとれば、それは一会話としての発話の時間であるが、そこまでひろげなくても、文をはなす時間、あるいは、その動詞の発音しはじめからしおわりまでの時間でも、やはりゼロでない。そして、ある種の動作は、そのなかにもまるごとのすがたでおさまることが

できるのである。

それには、つぎの3種類がある。

- i) 成立時を予測できる瞬間的な動作の成立
- ii) 自分の瞬間的な動作に説明をつけるばあい
- iii) 発言そのものが、その発言の内容としての行為になっているばあい

2) 成立時を予測できる瞬間的な動作の成立をのべるばあい

その成立時を予測できる瞬間的な動作の成立と同時に発話するばあい、その動作を完成相非過去形でのべることができる。

(80) 一るいをけて二るいをまわる。……二るいをまわります。(81)

この例のはじめの「まわる」は未来の動作をしめしている。あとの「まわります」がここの例なのだが、アナウンサーは、「まわります」の前半の「まわり」の部分、ランナーがまわりはじめるよりちょっとまえから比較的ゆっくり発音しはじめ、ランナーがまわる瞬間に後半の「ます」をはやく発音する。この「ます」のところで発話時を動作の成立時にあわせているのである。

瞬間的な動作ならば、その成立時間が発話時間のなかにおさまるわけであるが、いくら瞬間的な動作でも、動作が成立してはじめてそれを認識するばあいには、発話時には動作がすでにおわっていて、過去形でのべざるをえなくなる。だから、非過去形がつかえるためには、その動作の成立する時期を予測しておいて、その動作の成立の多少ともまえから発話のかまえにはいっていることが必要である。たとえば、野球放送で、投手の投球はいつも「なげました」になり、野手がボールをとって、一るいに送球するばあいには「なげます」になることが多い。前者はタイミングをくわすため、あるいはランナーをけんせいするため、なげる動作の時点が予測しにくいからである。

(81) ピッチャーがとって、一るいの吉村におくりまします。(81)

(82) ファーストがとった。一るいベースふみます。アウト。(81)

(83) 伊三郎軍配をかえします。(5月)

なお、これらのばあい、過去形もつかわれる。

(84) 水谷がけんめいに三るいをまわった。さあボールがバックホームされる。タッチできません。(神広)

(85) サードがとった。ベースカバーがおくれた。ショートにおくれた。(81)

- (86) ーるいへオーバースロー。たまがそれたか。ベースをふんだ。アウト。
(81)

- (87) 錦太夫軍配をかえました。(5月)

このばあいの現在点は発話の終了時であり、動作と発話がかさなっても、発話の終了時が動作の終了を確認したのちであれば、過去形がつかえるのである。^(注)

3) 自分の瞬間的な動作と同時の発言

自分がおこなう瞬間的な動作に説明をつけるばあい、動作とことばの成立時間がほぼ一致するので、非過去形でべることができる。

- (88) [手品で] これをここに、こういれます。

- (89) 一円ここへおきますよ。(つゆ102)

- (90) ぼくはりっぱな機関車だ。ここは勾配だから速いぞ。ぼくはいまその電灯をとおりこす。そうら、こんどはぼくのかげぼうしはコンパスだ。
あんなにくるっとまわって、まえのほうにきた。(銀河252)

鈴木1979は、つぎの2例について、「現在の動作をあらわすようにみえるが、これもアクチュアルな未来のとくべつなばあいとみてよいだろう。」とのべているが、この例は、いまここでのべているもののなかにいれてもよいのではないかとおもう。

- (91) 「約束を実行するからね。これ、ごほうびにやるよ。」いつもちだしたのか、六助は上衣のう치가わからあたらしいたちバサミをとりだしてみせ、それを新子のしょったリュックのなかにいれてやった。

(石坂洋次郎「青い山脈」)

- (92) 相子「(感情をおさえ)あなたにとって、わたしは単なる愛人ではなかったはずですわ。(小切手の封筒を手にとる)これは十九年間の退職金としていただきますわ。」(華麗257)

手品の説明などでは、じっさいに動作をするひとと話すひととがべつのばあいがある。しかし、そのへんまでは、「自分の動作」を拡大してもよいだろう。

テレビ体操で、「手をこしにあてます。」「くびをまえにまげます。」などの説明者のことばと、その動作とが同時に進行する。このばあい、もし、モデルの動作を説明者がのべているのだとすれば、それはここにはいる。しかし、もし、

(注) 第V部第1章第1節4)参照。

ことばと動作が共同して、動作のしかたを説明しているのなら、提示的なことばであって、テンスから解放されているといわなければならない。そのばあいの動作は、はなしの対象なのではなくて、ことばといっしょにはたらく伝達のメディアだということになる。飛行機のなかでの、救命具のつけかたの説明なども同様である。

4) 行為の実現となる発言

「おねがいします」や「さんせいします」などは、そのように発言することじしんがその内容としての行為を実現したことになる。これは、表現される内容と表現がおなじものである点で、モーダルに特殊な用法だということになる。けれども、テンスの面からは、ここに属するものとしてとらえてよいだろう。つまり、動作の始発と終了が発話の始発と終了に一致し、現在の動作をまるごとのすがたでさしだしているのである。

(93) あとを万事おねがいする。(暢気13)

(94) ナミッ！たすけてくれッ……たのむ！（女囚92）

(95) そんなことはできない。わたしはことわる。(戒厳48)

(96) 戸田「どうだね、三島君！」三島「(ギュッとくちびるをかみ) みとめます！」(間草108)

(97) けさのミーティングはこれでおわる。(華麗62)

(98) これより説明会にうつります。(水俣209)

(99) (前略) 徴役七年の刑を宣します。(約束63)

(100) (前略) 和賀英良に対し、逮捕状を請求致します。(砂の128)

(101) 野中寛、婉、将、右のもの、このたび格別のご慈悲をもって幽獄をとき、門外一步をさしゆるす。(婉と9)

このうち、(97)のようなものは、過去形にかえることができる。このことについては、第Ⅴ部第1章第1節4) c) でのべる。

第2節 動作の進行のすがた

「いく」「くる」、またはそれに準ずる「むかう」「おう」「ながれる」のような移動動詞、「～していく」「～してくる」の形をとるもの、「どんどん」「ぐん

ぐん」のような進行性の副詞にかざられた変化動詞が現在つまり発話時において進行過程のなかにあるすがたをあらわすことについては、すでに第II部第2章でのべた。このアスペクト的な意味が実現するばあい、進行過程のなかにあることをあらわして、動作の始発から終了までの全過程をあらわすのではないから、非過去形で現在の動作をあらわすことができる。

- (102) ちょっときてごらん。およめさんがいくよ。(鈴木重幸1979)
- (103) なんだ。いたよ。むこうからくるよ、にこにこして。(寅次75)
- (104) 千代の富士が頭をつけにいく。(7月)
- (105) ぐんぐん打球はのびる。センターバックする。(81)
- (106) 佐田の海でる。佐田の海でる。(5月)
- (107) ああ、血がながれる。ちょっとまってね。(極私26)
- (108) さらに大外からはグロリヤターフがあがってまいります。(6R)
- (109) そうですか、だんだんこういうところがすくなくなりますわ。

(寅次48)

- (110) (四月×日) ベニの帰らない日がつづく。(放浪205)

この、基準時間において進行過程のなかにある、というアスペクト的な意味が実現されるのは、その基準時間が現在のときだけであって、過去のばあいには、「していた」になる。このように基準時間が現在にしばられているということは、このアスペクト的な意味が、完成相の意味として基本的でないことをしめしているのだということは、第II部第2章でかいたが、このアスペクトの意味をもつものが完成相の形で非過去形と過去形の対立をもたないことは、完成相非過去形のテンスの意味としても基本的でないことをものがたっている。

第3節 意味的に継続相と未分化なもの

1) 意味的に継続相と未分化なもの

形式のうえでは完成相形式をとっていても、継続相と対立する完成相としてのアスペクトの意味をそなえていないものは、全動作過程を現在の瞬間におさめることが要請されないので、非過去形で現在の動作または状態をあらわすことができる。

これにはつぎのようなものがある。

- i) 話し手のかんがえやおもいをあらわすもの
- ii) 話し手の感覚をあらわすもの
- iii) 話し手の知覚によってとらえた外的現象をあらわすもの
- iv) 存在をあらわすもの

このうち、i) は動作的であり、iii), iv) は状態的であって、ii) は、その中間である。アスペクトの観点でいうと、i) はアスペクトから解放され、iii), iv) は状態過程のなかにあることをあらわす、つまり準アスペクト的であり、ii) は、その中間である。なお、これらは、第Ⅱ部の第3章と第4章第1節とでとりあげた。

2) 「おもう」「かんがえる」など

「おもう」「かんがえる」「信じる」「気になる」「感じる」など、話し手の現在のこのころのうごきをそのままのべるばあいには、完成相非過去形をつかう。これらは、話し手の時間と動作(心的活動)の時間が一致している点で、「たのむ」「さんせいする」などと共通であるが、動作の始発と終了に関心がない点で、これらとことなる。このことは、第Ⅱ部第4章第1節でのべたとおりである。

(111) なあ健ちゃん。わかいうちは、いろんなことがあっていい、とほくもおもう。(八月59)

(112) あなたの信心は堅固なものだと存じます。(出家52)

(113) わたしも気になります。(本日57)

(114) このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽とおなじように自分で光っている星だとかんがえます。(銀河246)

(115) おれは若い日の軽率妄動をくいる。(帰郷33)

3) 「つかれる」「はらがへる」など

「つかれる」「はらがへる」「のどがかわく」「すっとする」などは、話し手の感覚活動そのものと感覚活動の対象である話し手の内的状態とを未分化にあらわすが、完成相非過去形が一人称の現在のことをあらわすばあいには、その感覚活動の側面がおもてにでて、思考活動や感情活動そのものをあらわす「かんがえる」「おもう」「感じる」などと同様、アスペクトから解放されている。

(116) つかれるわ、わたし……ねむらせて。ねむらせて。(伸子66)

(117) ゾクゾクする。(極私7)

(118) ほんとに、むしゃくしゃするよ。はらたつよ。ころしてやりたいくらいだよ、あのおとこは。(極私20)

4) 「みえる」「きこえる」など

「みえる」「きこえる」「においがする」などは、話し手の知覚活動と、その知覚の対象である外界の現象が未分化な点で前項とにているが、対象が外界の現象であるので、その客観性によって状態をあらわすことになる。そこで、アスペクトから完全に解放されず、状態過程のなかにあるすがたをあらわすことになる。このことは、第II部第3章でのべた。

(119) バイバイして零君。まだみえる。(極私24)

(120) [電話で] またご病気。いいえ——ええきこえます。(真知169)

(121) なんだかりんごのにおいがする。(銀河287)

(122) あれ、へんな声がする。(時計15)

5) 「存在する」など

「存在する」「点在する」「現存する」など、存在をあらわす動詞も、完成相と継続相のアスペクト的意味の対立がほとんどなく、完成相でも持続過程をなす状態のなかにあることをあらわすので、完成相非過去形が、現在の状態をあらわす。

(123) この問題は依然として残存する。(人格82)

6) 「ある」「いる」について

標準語の「ある」「いる」は「あ^(注)っている」「い^(注)ている」という形式をもたないので、完成相といえないという意見もある。けれども、この対立は、動詞というグループにおける対立であるので、個々の動詞については、どちらかの形式しかないものがあるが、いともかんがえられる。「ある」や「いる」は完成相形式しかなく、また、アスペクト的な意味の点からみると、状態過程のなかにあるという準アスペクトをあらわす特殊な動詞である。そして、これは、そ

(注) 奥田靖雄1977。

のようなアスペクト的な意味（準アスペクト）をもつおかげで、非過去形が現在の状態をあらわす。

(124) わかったな……それからここにボタンがある，用事があったら，これをおすんだぞ。（間革91）

(125) お婉どの……わしには……妻子がある。（婉と133）

第4章 現在(2)——現在の質的な属性

文の名づける意味において述語ができごと過程にない属性をあらわすばあい、あるいは、できごと過程からその特徴的な側面をぬきだしてのべるばあい、述語となる動詞はアスペクトから解放される。このことは、第II部第4章の第2節と第3節でのべた。こうしたもののなかには、テンスからも解放されているものもあるが、アスペクトからは解放されていても、テンスからは解放されていないものもある。このばあい、動詞のさししめす質的な属性のもちぬしが現在にしばられた時点において存在していると、テンスとしては、現在をあらわすことになる。

この種のものは、二種類ある。ひとつは、動詞が語意的意味のレベルでできごと過程性をうしなうばあいであり、もうひとつは、語意的意味のレベルでできごと過程性をうしなわず、述語のレベルで、そのできごと過程からぬきだした特徴をのべるばあいである。

第1節 できごと過程にかかわらない動詞

1) 質的な属性をあらわす動詞

「ちがう」「にあう」「気がきく」「おおきすぎる」などは、語意的意味のレベルでものごとの質（関係をふくむ）の意味をもち、いわば性質形容詞にちかいものになっている。これらは、テンスから解放されたり、ひろげられた現在にもちいられたりすることがおおいが、その属性のもちぬしが現在点に存在するものであるばあいには、現在の質的な属性をあらわすことになる。

(126) 「(略)」と二本ある釣竿の一本を徹男のほうへよこす。徹男「ふん、気がきくな。」(津軽38)

(127) おい、こえがおおきすぎるよ。

(128) わかった！ 日やけがこわいんだ。ちがう？ (八月106)

2) 「よく」「いやに」などにかざられるばあい

「よく」や「いやに」でかざられると、動詞ができごと過程性をうしなって、その動作をするような性質をもっているという、形容詞的な意味に転じることがある。そのばあい、その性質のもちぬしが現在存在するものであり、その性質が現在にしばられて実現する性質であると、現在の質的な属性をあらわすことになる。鈴木重幸1979で「コンスタントな属性の現在」(129はそこから借用)とよんでいるのは、これである。

(129) きょうはよくだっこしますね。(波152)

(130) それにしても、きょうの海はよくしゃべる。(旅の52)

(131) いやにおやじぶるな。(波20)

3) 「九時になる」「半年たつ」など

つぎのように、現在における時間量的な到達をあらわすのに、「なる」と「なった」の両形がつかわれる。

(132) 国をでてから十年になります。(出家80)

(133) もう日もくれてだいふになるな。(出家28)

(134) もうそんなになりますかね。(厚物12)

(135) おや、もう九時になる。(波22)

(136) 同行一「おいくつにおなりなされますか」親らん「七十五になります。」

(出家80)

(137) こちらへきて十年になった。

(138) ひさしぶりだな。おまえいくつになった。

この「なる」が変化動詞としてつかわれると、「なった」になるはずなのだが、実例は「なる」のほうがおおかった。非過去形になるのは、たぶんコンピュータ化しているためで、「十年だ」「もう九時です」とおなじだろう。だとすれば、名詞述語文相当だということになる。ともあれ、これは、現在の時間的な属性をしめしている。なお、時間をあらわすばあいには、無主語文になる。

また、つぎのような「たつ」も同様にかんがえてよいだろう。

(139) あかんばがうまれて、三時間半もたちます。おたすけなすって。死ぬかもしれない、あのとおりです。(本日96)

(140) ほほう、九年たちますかなあ。(厚物13)

第2節 できごと過程の特徴的な側面

さきに第II部第4章第3節3)で、できごと過程の特徴的な側面をぬきだしてのべる文の述語になる動詞のことについてのべたが、そのときにあげた鈴木重幸1979の3例をもういちど借用する。

(141) 「この本知ってる?」「いや、はじめてみる。」

(142) 「そんな話きいていない。今はじめてきく。」

(143) 「はじめてお目にかかります。」(波178~179)

これらの文は、その動詞のあらわす語意的意味をとおしてさししめす動作のできごと過程的な側面をきりすてて、二次的にひっぱりだした特徴的な側面をのべている。つまり、それらが2回めでも3回めでもなく、はじめてだということのをのべている。そして、そのことによって、アスペクトから解放されている。

これらの文でさししめされているできごと過程は、精密にみると、発話の直前に成立している。だから、これを完成相過去形でのべることもできる。

(144) そうなの。ああ、はじめてきいた。(極私5)

(145) いや、これは旦那、よいところでおめにかかりました。(貧乏35)

直前におわった動作、あるいは、直前にはじまったあいての動作をなじるばあいにも、非過去形と過去形の両方がつかわれる。

(146) これこれ、またしゃべる。(時計44)

(147) また、あんたいらだつ。(極私11)

(148) また、あんたうそいうわ。(雪国65)

(149) 君はかくしますね。(冬の31)

(150) ペイ患でもねえてめえがなぜ麻薬をほしがる? (女囚22)

(151) 寅(カンカンになって)「また笑ったな。」(寅次9)

(152) そら、また、わるいくせをはじめたね。(自由7)

(153) 野郎! なんてわらった。(寅次54)

これらのアスペクト性については、第II部第4章第3節3)でのべた。高橋太郎1983Bでは、「その事実ができごととしてもつ時間性をきりすててその質的な側面だけをとりだしたのものとしてとらえる。」とのべた。つまり、テンスから

解放されているものとしてとらえた。けれども、この報告では、これ（非過去形でのべられたもの）を現在のこととしてとらえる。なぜなら、話し手によるテンスのとらえかたには精密度があって、できごと過程がきりすてられたばあいの現在は、それをきりすてない^(注)現在よりも、前後に多少のはばのひろがりができるとおもわれるからである。

つぎのようなばあいは、できごとの時間が多少かわる。(154)は、あきらかに現在だが、(155)は、現在までなのか、現在もそうなのかがはっきりしない。

(154) ほら、みてごらん。ぼくかもいに手がとどくよ。

(鈴木重幸1979から借用)

(155) 君子さんのかおをみると、やっぱりいろいろなことをおもいだすよ。

むかしのことはさっぱりわすれてしまうつもりでいたんだが……

(つゆ109)

(156) どうもとんだごめいわくをかけますな。(伸子59)

これらは、アスペクトから解放されていて、始発と終了の時点に関心がいかないので、時間的位置があいまいになるのである。

つぎのような、なじりのたずね文のばあいには、直前の動作であっても、非過去形でしかいえないものがある。

(157) ワ、わりや……なにぬかす! (女囚38)

(158) とつぜん彼女の右手があがり、彼のほおが、したたかな音をたてた。

「なにをする?」(自由377)

こうしたものも、現在の動作の質的な属性をあらわすものとしてとらえたい。

(注) 時間はばの精密度については、第Ⅴ部第1章第1節4)でのべる。

第5章 ひろげられた現在

1) ひろげられた現在

ひろげられた現在というのは、発話時をふくんで、過去と未来の両方向に、ある程度のながさでひろがっている期間のことである。

このはばがかぎりなくひろがると、現在という限定をつけることと矛盾するので、そうしたものは、テンスから解放されたものとしてとらえて、第6章でのべる。けれども、実際には、それをわけきれないことがおおい。たとえば、法律の文章は、時間の限定をうたず、一般的な時間を設定している。

(159) 火炎びんを製造し、又は所持した者は、三年以下の徴役又は十万円以下の罰金に処する。(火炎びんの使用等の処罰に関する法律第3条)

これは、時間が限定されず、テンスから解放されているが、つぎのようなものならば、ひろげられた現在に限定されることになる。

(160) 現行の法律では、火炎びんをつくると、三年以下の徴役か十万円以下の罰金に処せられる。

これがなぜ脱テンス化しないかという点、それはつぎのような、過去と対立するからである。

(161) この法律ができるまでは、刑法にふれるばあいだけ刑に処せられた。

このちがいは、うえの例のようなばあいははっきりしているが、どちらかわからないばあい中間的なものもおおい。つぎの例などがそうである。

(162) 火炎びんをつくると罰せられるよ。

この報告では、積極的に限定されているばあい、その述語のしめす属性のもちぬしが時間的に限定されているばあいに、ここにいた。

完成相非過去形でひろげられた現在のことをあらわすものには、つぎの三つのタイプがある。

- i) ひろげられた現在においてくりかえされる動作
- ii) ひろげられた現在において、一定の条件のもとに一般的に成立する動作
- iii) ひろげられた現在のあいだ持続する性質

このうち、i) と ii) は、完成相の基本的なアスペクト的意味をもっているが、iii) は、アスペクトから解放されている。i) と ii) は、せばめられた現

在において、その動作が成立するかどうか問題にされない点で、ふつうの現在とことなる。それに対して、iii) は、せばめられた現在においてもその質的な属性は成立している。その点では、ふつうの現在とおなじである。けれども、完成相の現在、ふつうは、前後へのひろがりをもっていない。その点でこれは特殊である。けれども継続相の現在、前後へのひろがりがあるのがふつうなので、これを継続相のテンス相当であるとして位置づければ、それほど特殊ではない。なお、継続相のテンスの性格については、第Ⅶ部でのべる。

2) 非連続のくりかえし

ひろげられた現在において、おなじ動作や変化が断続的に、くりかえし成立することをあらわす。

(163) このごろは毎日八時間ぐらいけいこするわ。(真知87)

(164) いつもこういってあるのに、このひとは毎日のようにあそびにくる。
(放浪194)

(165) かれは、いつも、そのとき、じつにためらわずにいう。(旧石317)

(166) おれはすきで、よくのぞきにくる。(帰郷137)

(167) あなたは、罰せられるたびによわくなります。(戒厳45)

これらがくりかえしをあらわすのはテンスの問題であって、アスペクトとしては、完成相の意味が実現していることは、第Ⅱ部第4章第4節3)でのべた。

3) 一定の条件のもとになりたつ動作や変化

ひろげられた現在において、一定の条件があれば、いつも動作や変化がなりたつことをあらわすものである。

(168) おれはあの男のはなしをきいていると、なんだかなみだがこぼれてくるような心もちになる。(末枯40)

(169) もともとわしはまずしい漁師の家にうまれ、かなしければなき、おかしければわらい、はらのたつことがあればひどくおこる……ごくふつうの人間だ。(間草118)

(170) さいきんは、ひとがあつまると、そのはなしをする。

4) 性質の持続

述語が一定の質的な属性をさししめし、その属性のもちぬしであるものがひろげられた現在に存在するものであるばあいである。アスペクトからは解放されている。

つぎのようなものは、動詞が語意的意味のレベルで質的な属性をあらわす。

(171) そうさ——その子がまたよくできやがるんだ、兄貴の子よりずっと
できる。(野火38)

(172) あんたのえがおをみたかった……わらったかおのほうか、あんたに
はにあう。(約束9)

(173) 婉はちがいます！ まことこの流れが世の中なら、流れにさかろう
てでも生きてみとうございます。(婉と95)

(174) することがあまりに良心がなさすぎる。(暗夜71)

つぎのようなものは、動詞そのものは特殊でないが、このタイプの文にくみこまれることによって、これになる。

(175) このごろ、またかれはタバコをすう。

(176) この子はよくねむる。

以上、この節では、その属性のもちぬしが現在をまたぐ有限の期間のなかに存在するので、これらの例をここに入れたのだが、もし、その有限の期間ということが表現のなかにはっていないのだとすると、テンスから解放されていることになる。このことについては、今後の課題である。

第6章 テンスからの解放

完成相非過去形の形式をもつもののなかには、テンス的な意味から解放されているものがある。これには、いくつかの種類がある。

第1節 なりたつ時間が限定されていないもの

1) コンスタントにくりかえされるできごと

なりたつ時間を限定せず、コンスタントにくりかえされる動作や変化をあらわすばあいである。鈴木1979でのべられた「この時間帯が無限にひろげられれば、いわゆる一般時あるいは超時間的なものとなる」といういいかたにもっともふさわしいものである。

(177) 地球は太陽のまわりをまわる。

(178) 毎年春になると、つばめがやってきます。

(179) あさがおはなつさく。

これらと前章のひろげられた時間におけるくりかえしとのあいだには中間的なものがある。

(180) むかしは一年を十日でくらすといわれたすもうとりも、現在では、一年に六場所、九十番をとる。

2) なりたつ時間に関係のない命題のなかでの動作

なりたつ時間的位置に関係のない命題である文の述語になると、完成相非過去形の動詞はテンスから解放される。それが動作性をうしなわないばあいには、アスペクトからは解放されない。

(181) 水は100℃でふつとうする。

(182) いたずらな、ういた心でこの関所にむかえば、ひとは盲目になり、ぐうたらになる。(出家71)

(183) よごれなら、あらえばおちる！(死すp295)

(184) 恋というものは、人間をわかくする。(河明300)

(185) きれいなくつをはいていたものは心してぬかるみをよける。だが一

- 且くつがどろにそまると、だんだんぬかるみをおそれなくなる。(青銅35)
- (186) くらやみのなかで、政府軍とゲリラがうちあいをしてるときは、その鉄砲のうちかたをきいていれば、どちらがゲリラかわかる。(やさp40)
- (187) いえ、だれでもそうもうします。(高野39)
- (188) およぎの上手は川で死ぬ、で気象者は気象でかえってしぐじります。
(思出48)
- (189) それにこの世のなりたちが、私たちに悪をしいます。(出家48)

3) なりたつ時間に関係のない命題のなかでの質的屬性

なりたつ時間に関係のない命題である点で前項とおなじであるが、それが、できごとでなく、ありさまをあらわす文であり、述語が質的な属性をあらわすばあいである。動詞は、アスペクトから解放されている。動詞が形容詞化またはコピュラ化しているといってもよいだろう。

- (190) 太平洋のあおさは、やはり瀬戸内海とはちがう。(旅の52)
- (191) 大企業が、中小企業などを圧迫するのもこれにあてはまる。
(間草 147)
- (192) その町はずれに蛇堀川というすながわがありまして、橋をわたると
むかいまち
向町になる。(破戒200)
- (193) (くすつとわらって) お人によります。(忍ぶ10)
- (194) しかしそれもあるかもしれないが、それだけで解決をつけるのは簡単すぎる。(友情57)
- (195) 芸術はこれとことなる。(むら14)
- (196) そのかぎり現象は偶然性をふくむ。(革命143)
- (197) 女給さんのほうがとにかくうわべだけは素人なんですからね。なに
をするにもごまかしがききますよ。(つゆ64)

第2節 過去のことの、時間の側面を きりすてた質化

事実そのものは過去の特定の時間のことであるのだが、そのできごとの時間的な側面はきりすてて、そこからぬきだした質的な側面だけを問題にしたばあ

いに非過去形をつかうことができる。これらは、時間の側面をきりすてないで過去形でのべることのできるものもおおい。

1) 名詞述語文に相当するもの

過去のあるものごとが、どんなものごとであるか、また、なにであるかをのべる。動詞が動作をあらわさず、コピュラのようにつかわれて、それとくみあわさる名詞といっしょになって名詞述語をつくっているものがおおい。ただし、「AとBはことなる」のようなタイプの文になると、コピュラではないだろう。

(198) そもそもは佐渡のうまれ、この山国におちついたは今から十年ほどまえにあたる。(破戒101)

(199) 明治二十年前後の自由民権時代には、当時のインテリの一部が、自由自由、とさげんだ。そこが、今度の時代と、ちがうといえばちがう。

(自由41)

(200) [捜査中に過去の事実に気づいて]「え? (思わず声をあげる)すると、六月の二十日と二十一日の映画はちがう!」(砂の103)

(201) わたしたち夫婦は同じ日にうまれたのですが、うまれた時刻はちがいます。

名詞述語文にこのことがあることは、寺村秀夫1971がつぎのような例をあげてのべている。

(202) 昭和二十二年ハ戦後最大ノ飢饉ノ年ダ。

2) 過去のことについての解説, 評価的ないいかた

過去の事実が成立した事情を理解して、ナルホドという気もちをこめて解説的にのべるばあい、非過去形でいうことのほうがおおい。

(203) ま、ジイさんも立場上ああ言うわさ。(宵待47)

(204) 男B「おやじににげられてから欲求不満らしいぜ」 兄貴「これじゃ男もずらかるさ。しっかりしろよ。」(遊び23)

評価をこめていうばあいもある。

(205) さすがにいいことをいうよ、あなたは。(多情48)

(206) こんな小さい子に焼酎をのませるなんて。あのおやじもひどいことをするねえ。

- (207) 野宮「おれな……彼女と婚約したよ。」(中略)まぶしげにみかえす宏
「やるう。」(ジェームス・三木「さらば夏の光よ」47, 年鑑代表シナリオ集'76)

3) 過去の仮定

過去の仮定に対する帰結をのべる述語は、過去形と非過去形の両形をつかうことができる。ふつうは—ハズダ、—カモシレナイ、—ダロウ、—トオモウ、—ナ、—ネのような形になるが、なにもつかないばあいもあるだろう。

- (208) これなら十七時二十一分に米原を通過して名古屋ゾーンへはいるが、
発信ゾーンは一致したはずだ。(森村誠一「新幹線殺人事件」)

- (209) 「おれなら暗殺するナ……」 安吉にかまわずに斉藤は一気につづけた。(むら47)

このことについては、あらためて第VI部第3章第4節でとりあげるが、過去の仮定に対する帰結の文の述語には、つぎのようなものがある。

- ア) オレナラ、ソウスルナ。
イ) オレナラ、ソウシタナ。
ウ) オレナラ、ソウシテイルナ。
エ) オレナラ、ソウシテイタナ。

第3節 そ の 他

1) 操作てつづきの説明, 指示

操作てつづきの記述や図表のあらわしかたなどには、完成相非過去形がよくあらわれる。

凡例や注記のなかでの動作には、非過去形と過去形の両方があらわれる。過去形のばあいは、操作したことをできごととしてのべているが、非過去形のばあいは、アスペクトからも解放されているだろう。

- (210) 図2-19に日鉄建材の職階別年齢分布をしめす。また図2-20に、各職階の回答者の5%以上が属する年齢のはばを図示した。(国立国語研究所「企業の中の敬語」67)

- (211) 分類語彙表における意味の分類の大体を示すために、本表分類各項目に与えた見出しの語句を、分類番号の順で掲げる。(国立国語研究所

「分類語彙表」)

ルールのなかで、動作は非過去形でしめされる。

- (212) 五、人……これは人^{にん}と^{ひと}かく。六、天…七、声聞……声を聞くとかく。

(間革142)

- (213) 「勉」とかいて、ツトムとよみます。

- (214) カケアシシテネ、シートネ、フクロヲネ、アシニ イレル。

(年長幼児―「幼児語の形態論的な分析」)

- (215) 学問の自由は、これを保障する。(憲法23条)

方法を指示する文のなかでも、動作が非過去形でしめされる。

- (216) ★図を参照して前身ごろを左右つづけて裁つ。4.5cm裁ち出したところのえりぐりぬいしろは、身ごろえりにあわせて裁つ。★そでは、図のようにそで丈を延長する。★前あきの始末は図を参照。★前身ごろの左右にふたつきのポケットをつける。(主婦の友'80.7.付録)

- (217) 「すきみだら」は、表面をさっとあらい、水(流水のほうがよい)に3～4時間つけます。(写真①)もどったら、残り皮をとり、小骨もとって、きれいに掃除します。(写真②)(主婦の友'72.12.付録)

これらは、ムード的な性格がよわいのではないかとおもわれる。

2) 提示文のなかでの動作

まえの文でことがらを提示し、あとの文がそれをうけてはなしを展開する。そうしたまえの文につかわれる動詞のばあいである。これはいちおう文のかたちをしているが、その陳述性はあとの文にまかせている。ということは、陳述性の点からみると、不完全な文である。こういう文のばあい、脱テンス化していることがおおい。

これらは、ムード、テンス、ていねいさのどれについても欠陥があるので、ふつうの文とみとめる必要はないかもしれないが、いちおうあげておく。

- (218) 自由ほんばうにやりたいことをやる。いいだろう。(八月59)

- (219) まつるまつらないはべつにして、うけとるだけはいちおううけとる、
こういうことでいいのではないかと(間革85)

- (220) はい、とにかくA子さんとの結婚だけについてかんがえる……こういうことですね。(間革173)

- (221) ポストの争奪をめぐって死闘する、これが企業合併の大前提で、合併はポスト次第ということです。(華麗141)
- (222) からだが衰弱して、職務を執るにたえないから退職する——それをこちらでとめる権利はありません。(破戒25)

3) その他

新聞の見出し、日記の文章などにもテンスばなれしたものがあるが、これらは場面が特殊なので、今回の調査からはずす。

また、小説の地の文のなかでもテンスから解放されたようにみえるものがありある。しかし、小説のばあいには過去の事実が非過去形でかかれていても、現在のことのようにしてかくことに意味があるばあいもある。そうしたことは、文脈のなかで位置づけなければならないので、これも今回の考察からはずした。

第Ⅴ部 完成相過去形のテンス

第1章 過去(1)——過去の動作

完成相過去形の基本的なテンス的意味は、過去に動作が完成したことをあらわすことである。完成相の基本的なアスペクト的意味は、動詞のあらわす動作またはその一定の局面を始発から終了までふくめたまるごとのすがたでさしだすことであり、その過去形は、時間的位置を過去にもつ基準時間をまたがないで、動作またはその局面をまるごとのすがたでさしだしているのである。

完成相の過去形は過去の動作をあらわすことを基本的な任務とするが、そのばあい、つぎの二点において、いろんな様相を呈することになる。

そのひとつは、過去という時間位置が、悠久のむかしから、発言の直前、あるいは、発言終了の直前にまでひろがっていることとかかわる。といっても、時間量を問題にするとときりがなく、ここでは、主として、質的にみた発話時との関係が問題になる。というのは、発話時とはなれているか、接しているか、かさなっているかということで多少ことになったおもむきを呈するからである。このことは、非過去形との対立のありかたに影響をおよぼす点で、言語的である。

もうひとつは、完成相アスペクトが、動詞のあらわす動作過程全体でなく、その一定の局面をとりだすこととかかわる。現在をふくむ大きなできごと過程のなかで、現在以前に位置する小さなできごと過程としての変化の局面を、完成相過去形の変化動詞がさしだすと、そこにはたらく順次性によって、現在という時点がその結果の局面のなかにあることまで視野にいれてしまう。それが鈴木重幸1979のいう「ペルフェクト的な過去」である。

完成相過去形のテンス的な意味をあつかうばあいには、これらのことにふれなければならない。

第1節 とおい過去から同時過去まで

1) 過去形であらわす動作の時間的な位置

過去という時間は、とおいむかしから発話の終了までにわたっている。このながい時間はいろんなしかたでわけることができ、歴史家や地質学者たちは、それぞれに時代を区分している。

けれども、現代日本語の完成相のテンスという観点からみると、それは、非過去形との対立のありかたによって、わけることになり、発話時に接するあたりのことが問題になる。たとえば、野球放送で、バッターがたかいフライをうちあげたあと、「センターバック、バックした。落下点にはいった。かまえます。トリマー—シタ。」というとき、「トリマシタ」という語形は、ボールがおりちつつあって、まだグローブにおさまらないうちから発言されはじめている。この「トリマー—シタ」は、発言と動作との機械的な対応をとると、その動作がまだ未来であるときからはじめられ、現在をとおって、過去のものになったとき発言しおわっている。また、たとえば、三遊間にゴロがころがったとき、「ショートとりました。一塁いになげる。アウト。」というのは、よくきかれる表現であるが、これは「なげた」にかえることができる。このように、話しの内容である動作の時間的位置が発話時とからんでくると、問題がでてくる。

そこで、ここでは、過去をつぎの3種にわけて、かんがえる。

i) 現在ときりはなされた過去の動作

ii) 現在と接する過去の動作

iii) 現在といりまじった過去の動作

なお、この節では、その結果が現在におよんでいるかどうかは問題にしない。

2) 現在ときりはなされた過去の動作

ここで「現在ときりはなされた」といっているのは、動作がおわってから話しはじめるまでのあいだにすきまがあるということである。そのすきまのながさは、どんなものであってもよい。ずっとむかしから、すぐまえまでのひろがりをもっている。

この用法は、完成相過去形のもっともふつうの用法であって、資料の大部分

は、ここにおさまる。

時をしめす語があると、この用法であることがはっきりする。

- (1) 戸田城聖は、明治三十三年二月十一日に、ここでうまれた。(間草51)
- (2) 春あさい二月の末、先生が江戸へ遊学されたことを風のたよりにきいた。(婉と127)
- (3) 父はこのあいだの伊豆地震で死にました。(日本36)
- (4) きのうぼくは新聞でよんだ。(破戒187)
- (5) 今くるとき、あのひとにあったわ。(真知85)
- (6) 時間におくるとわるいって、つい今しがたでかけました。(ここ43)

時をしめす語がなくても、特別の条件がないかぎりこの用法であり、じつは、時をしめす語がない例のほうが多い。

- (7) しかし母は十何年ぶりに蒲田に帰ったのだといってよろこびました。
(本日57)
 - (8) わしもはじめはそう思った。そうして何人かすくいだしてみた。だが、いまはもうやめている。(波65)
 - (9) 「きつぷを拝見いたします。」あかい帽子をかぶったせいの高い車掌が、いつか三人の席のよこに、まっすぐに立っていていいました。鳥捕りはだまってかくしから、小さな紙ぎれをだしました。車掌はちょっとみて、すぐ目をそらして(あなたがたのは?)というように、指をうごかしながら、手をジョバンニたちのほうへだしました。(銀河284)
- その動作は、みじかい時間のものもあるし、つぎのように、ながい時間はばのものもある。
- (10) この十日間、おれと黒木さんでじっくり計画をねった。(宵待31)
 - (11) わたしは女給もやったし、かつぎ屋もやった。女中もやったし、ホステスもやった。(死すp297)

3) 現在と接する過去の動作

発話の直前に成立した瞬間的な動作、また、発話の直前におわった持続的な動作は過去形であらわす。厳密にいうと、動作がおわってから発話までに多少のすきまがあるばあいもあるが、ここにふくめておく。現在ときりはなされた過去の動作と、過去という点でのちがいはない。

a) 直前過去の動作

発話時の直前に成立した瞬間的な動作を完成相過去形であらわす。実況放送のばあいが典型的である。

(12) バッター月山に対して投球2球め。第2球。なげた。うった。ファウル。(81)

(13) あっと、けたぐりにいった、鷺羽山。北の湖、これはのこした。見ている。北の湖はたいた。ひいた。北の湖おした。おしだし、北の湖のかち。(7月)

(14) 先頭はアスキットダイオー。ふみきってジャンプしました。(7月)

眼前描写のばあい、全動作過程のうち主体の動作の始発、または始発から終了までだけをあらわしている。「なげた」というのは、ボールがピッチャーの手をはなれるまで、「うった」は、ボールがバットをはなれるまでをさしている。このような、対象に変化をあたえる動作をあらわすのに、対象の変化の成立ではなく、主体の動作の終了までを一局面ととらえるのは、眼前描写の特徴である。ふつうのばあいには、「ホームランをうった」とか「ストライクをなげた」のように、結果の成立までをふくめる。

ふつうの会話のばあいには、たぶん動作の成立から発話の開始までの時間がもうすこしあくだろう。

(15) 「いま、またおやじのこえがした。」「いま? なんにもきこえやなかったじゃないか。」

(16) 「あら、また、くりがおちた……」彼女は目をほそめにあけて私をみながら、そうささやいた。(風立126)

発話の直前にくりがおちたら、発話の時点では、くりは地上におちていることになる。しかし、この例の表現では、そうした結果の局面に無関心である。変化動詞のばあいには、直前の変化は当然に発話の時点での結果の状態をひきおこしているのだが、眼前描写のようなときには、多くのばあい、動作(変化)そのものに関心があって、結果がのこることは、あまり問題にしない。つぎのようなものは、すくない。

(17) 次長が角田の胸に耳をあてる。次長「死んだ……」(華麗55)

(18) うん、もうすこし……できた。(やさp35)

それが結果の局面に関係するばあいのことについては、第2節でのべる。

動作動詞のあらわす動作過程のうちの始発の局面だけを取りだして完成相の過去形でべることがある。このばあい、運動の局面はまだつづいているのだが、始発の局面は直前にまると完成している。

- (19) 佐藤第2球。ランナーがはしりました。(81)
- (20) ワンエンドワンから土屋、第3球。ランナーがはしった。(81)
- (21) ほっと、岩波がよった。(7月)
- (22) いま、家にいるもうひとりの姉ちゃんがいたでしょう。——ほら、きた、きた。(子を183)
- (23) ちょっと、あかちゃん、ああ、ないた。よしよしよし。(極私26)

b) 直前までの動作

鈴木重幸1979は、「話し手があたらしい情報をえたため、その時点で自分の考えや行為が過去のものとなったことをしめしている。」として、つぎのような例をあげている。

- (24) 「へえ、そう。あたしはまた、その方の魚がつれなかったんで、こんなところにきているのかと思ったわ。」(波248)
- (25) 「小野寺さん……ずいぶんさがしたわ。」(日本76)

また、「その動きが完了したこと(ひとまとまりの動きが実現したこと)をあらわすばあいとして、つぎの例などをあげている。

- (26) 「先生、かきました。」(作文の時間における子どもの発言)
- (27) 「ああ、よくねむった。いま何時?」

これらは、直前までつづいていた動作が終了したことをあらわしているといつてよいだろう。もうすこしあげておく。

- (28) しばらくごぶさしたね。(冬の167)
- (29) 先生、どうもお手数かけました。(本日72)
- (30) いや、長居をしました。(戒厳10)
- (31) じゃましたな。(雑誌)
- (32) くったね、じつに。(腹をおさえて)(間革49)
- (33) じゃあ、そのかたには恋でなくて、学問の好奇心でひかれていったのね。道理で、あなた、河川のことにくわしいとおもった。(河明290)

c) 現在途中まですんだ動作や変化

動作や変化そのものは現在をまたいでつづいているのだが、それを途中でち

よんぎってとらえ、現在までのぶんをまとめたのべるばあいがある。

(34) 「あれから十分たった。」といって自分でたしかめるようにうで時計をみる。(むら171)

(35) これで30分あるいた。

(36) ぼくははじめてこんな会議に出席したんですが、中央のようすがだいぶわかりました。(の壁235)

(37) ……鎌倉関係の本などよんで、だいぶ、くわしくなった。(帰郷124)

これらは、その動作や変化の、全過程のうちのあるていどが発話の直前までに成立したことをのべている。

d) 非過去形との対比

以上 a)～c)でのべたもののうち、a)とc)に、おなじ事実を非過去形でもあらわすことのできるものがあるので、そのことにふれておく。

i) うえのa)に属するもののうち、「岩波よった」のようなものは、「よる」ということもできる。非過去形のばあいは、第IV部第3章第2節でのべたように、進行のなかにあることをあらわしている。この両者をくらべると、過去形のばあいは始発の局面をとりだし、非過去形のばあいは進行の局面をとりだして、とりだす局面がちがっている。このことは、その動作過程が現在点をまたいでいるという、この進行動作の時間的位置の特殊性によって生じるのである。

ii) うえのa)に属するもののなかには、つぎのように、過去形と非過去形の両方でいえるものがある。

(38) そうだ、君はあたまのいいことをいいました。(冬の50)

(39) さすがにいいことをいうよ、あなたは。(多情48)

(40) 寅「(カンカンになって)またわらったな。」(寅次9)

(41) これこれ、またしゃべる。(時計44)

(42) そうなの、ああ、はじめてきいた。(極私5)

(43) 「この本しってる?」「いや、はじめてみる。」(鈴木重幸1979)

(44) どうだいちがったかね?(多情72)

(45) わかった!日やけがこわいんだ。ちがう?(八月106)

これらを過去形でいえるのは、直前過去の動作だからである。これらを非過去形でいうと、できごと過程のなかから特徴的な側面をひっぱりだしてのべる

ことになり、アスペクトから解放される。そうすると、始発、終了のきれめがぼやけるので、現在ワクが精密さをうしなうのである。これも、直前過去という発話時に接したできごとであるためにそうなるのである。

なお、評価的であっても、非過去形にできないものもある。

(46) 「ようきた。ようきた。」とよろこんで、(無限140)

これも、なじりならば、「また、くる!」のようにいえるだろう。

iii) うえのc)の経過をしめす「たった」は、「たつ」にかえることができる。これは第IV部第4章第1節でのべたことだが、非過去形のばあいには、コピュラ化しているのだろう。

4) 現在といりまじった過去の動作

発話の始発の時には、まだ動作が完成していないばあいがある。これを、発話の終了直前におわる動作と、発話の終了と同時に終わる動作にわけてのべる。

a) 発話の終了直前に完成する動作

瞬間的な動作が成立しそうになったときにいいはじめて、成立するやいなや、発話をおわりまでもっていくという言いかたがされるばあいがある。これは、きわめて特殊なばあいである。バッターがヒットをうって、2るいランナーが3るいをまわることをのべるのに、3るいベースにさしかかる直前に「マ」といいだして、まわった直後に「タ」まですすめておわる。「マワリマシタ」の「リマ」のへんで3るいをまわる動作が実現するようなばあいである。

刻々とかわる眼前のうごきをつたえるとき、時間においまくられることになる。つぎの例でもわかるように、「ベースをふみます」という情報のまえに「とった」という情報をつたえなければならない。

(47) ファーストゴロ。たかいバウンド。ファーストがとった。ベースをふみます。(81)

このばあい、「とった」という情報をはやくつたえねばならず、そのために、まちがいをおかすことがある。

(48) セカンド、右にはしった。とった。おてだま。とった。1るいへ送球。アウト。まにあいました。いったんグラブにあてておてだましましたが、辻本よくおちついてさばきました。(81)

これは、はじめの「とった」があやまりである。このようなあやまりをふせ

ぐために、疑問形にすることがある。

- (49) フェンスいっぱい、ジャンプ。とったか。とりました、とりました。
(81)

このようなテクニックをつかいそこなったとき、「トリマシタ」といいはじめで、まだと気がついて、「トリマーシタ」となるようなことがあるのである。

東京都町田市は神奈川県と接している。境川という川をはさんでいるところもあるが、道にただ標識が立っているだけのところもある。あるとき、そこをとったら、子どもが数人、足をおおまたにひろげて、東京都と神奈川県をいっしょにふんだといって、さわいでいたが、そのとき、ひとりが東京都がわから片足をあげながら、「××くん、ただいま神奈川県にハイリ」までいって、すこし動作をとめ、足をおろして「マシタ」といった。

以上、ひじょうに特殊な、とりあげるにたりないような例をあげたが、これは、過去形のあらわす過去とはいつのことかということを精密にかんがえてみたかったからである。

b) 精密な現在点はいつか

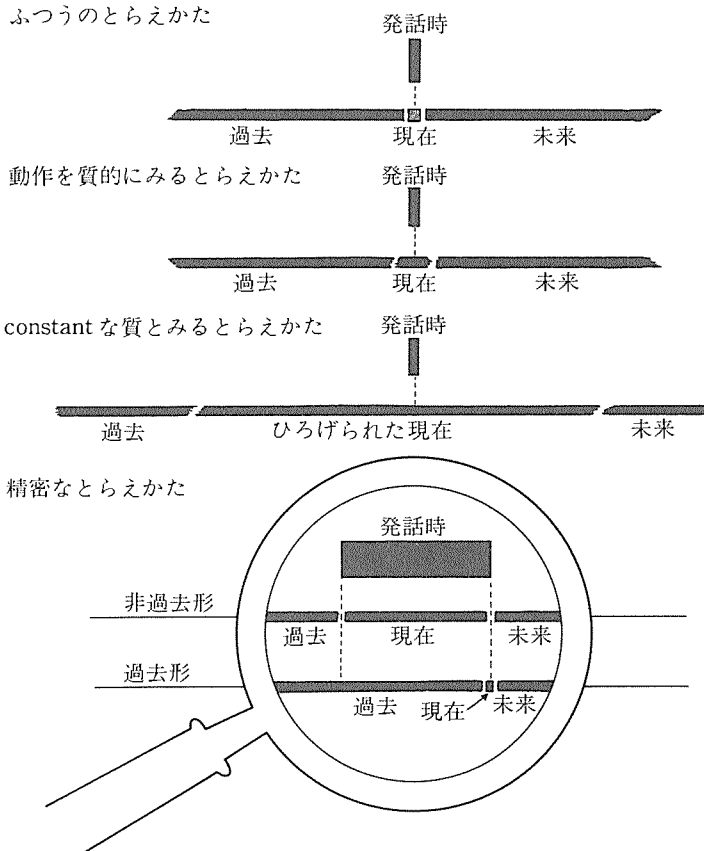
ところで、いまあげた「まわりました」「とった」「はいりました」は、「まわります」「とる」「はいります」のように、非過去形でもいいあらわすことができる。そうすると、このばあいの現在点はいつなのかということが問題になる。

さきに、第Ⅳ部第3章第1節において、発話時間のなかにおさまる瞬間的な現在の動作は完成相非過去形であらわせることをのべた。このばあいの現在点は、発話の瞬間、つまり、発話の始発から終了までの、みじかい時間はばである。ところが、「まわりました」「はいりました」などのばあいも同じ現在点だとすれば、現在という時間に動作がおわることになって、過去形の基本的なテンス的意味がくることになる。しかし、この過去形にも、現在以前の終了をみとめたい。そうだとすれば、現在点のとらえかたが、非過去形と過去形とでことなるとかんがえたほうがよさそうである。

こうしたちがいがなぜでてくるかについては、つぎのようにかんがえる。完成相の動詞は、動詞のあらわす動作またはその一定の局面を、始発から終了までふくめて、まるごとのすがたでさしだす。これを現在の動作としてとらえるためには、現在点にはばをもたせなければならない。けれども、過去の動作としてとらえるためには、現在点と関係するのは終了の時点だけであり、それと

の関係で、現在点も点であることがのぞましい。そのことが、このようなちがいをもたらすことになるのだろう。

これらは、いずれにしても、現在点をかなり精密にみたばあいのことである。さきに第IV部第4章でものべたように、できごと過程から質的な属性をひっぱりだすばあいには、現在のはががすこしひろがる。また、第IV部第5章でのべた、ひろげられた現在のばあいは、現在のはがが、もっとずっとながくなる。このようにみえてくると、現在点というものは、ばあいによって、かなりのちがいがあるようである。そういうことを考慮にいれて、これを、つぎのように図示してみた。



ここで、とくに精密なとらえかたについて、説明しておく、非過去形のばあい、発話の瞬間全体が現在点であり、過去形のばあいは、発話の終了時に現在点がある。このようにとらえるとき、非過去形と過去形の、事象のテンス的なあらわしかたのちがいが理解できるとおもう。

c) 発話の終了と同時に完成する動作

おにごっこの途中で「ヤーメタ」といってやめるとき、議長が「これでおわりました」といったとき、あいてに「ひきうけた」といったときなど、その発話の終了と同時に、その動作が成立することになる。

(50) (清, 真紀からからだをはなす) 清「ヤーメタ」(八月28)

(51) きょうの会議はこれでおわりました。

(52) あれにきめたッ, あれをのがしたらおまえら今夜酒をのまされねえから。
(季節23)

(53) 話の件は、しかと、おれがひきうけた。(帰郷31)

(54) 准尉は、「はあ、承知しました。」とつたつたまま言った。(真空20)

これらが発話の終了と同時に成立するのは、発言すること自身が発言の内容である行為を遂行することになるという特殊な用法のなかでつかわれているからである。その点では、非過去形であらわれるつぎのようなものと同類である。

(55) あとを万事お願いする。(暢気13)

(56) 懲役七年の刑を宣します。(約束63)

(57) 和賀英良に対し、逮捕状を請求致します。(砂の128)

そして、うえの例も、「やめる」「おわります」「きめる」「ひきうける」などにいいかえることができるし、実際につぎのような例もある。

(58) 三好先生あッしゃもうよしますよ。(多情92)

(59) けさのミーティングはこれでおわる。(華麗62)

けれども、これらは「おねがいする」「宣します」「請求します」などと、まったくおなじではない。「おねがいます」の類は、過去形にかえると、この用法にならないからである。

「おねがいする」の類は、語意的意味のレベルで発言行為をあらわす動作動詞であって、一人称の現在の行為をことばでのべれば、どうしても遂行的な発言にならざるをえないような種類の単語である。このことは、あいてのいない場面で内言として「おねがいする」といえば、どうしても未来のことになって

しまうということに考えをめぐらせば、わかるだろう。

それに対して、「やめる」の類は、語意的意味のレベルでは発言行為をあらわしておらず、一定の発言活動の環境のなかで遂行的な発言になるだけである。だから、あいてがいなばめんでも、内言で「やめる」といって、じぶんのしごとをやめることができる。ただ、共同のしごとのばあいには、一定の社会的ルールによって、「やめる」と発言しないとやめることにならないだけである。「やめる」という発言が一次的にあらわしているのは、〈やめる〉という行為であって、〈「やめる」と発言する〉という行為ではない。そこが「おねがいする」とちがっている。

もうひとつのちがいは、「やめる」の類があらわす運動は瞬間的な変化であり、「おねがいする」があらわす運動は持続的な動作だということである。「おねがいする」のあらわす動作は、発話動作と過不足なくかさなっている。だから、過去形にして、動作をすこし過去にずらすと、どうしても、そのときの発話動作でなく、それ以前の発言行為をあらわしてしまうのである。つぎの例では、前文がまえのたのみの発言行為である。

(60) 婉、谷どのによう札をいうてくれ。そして、わしにかわって文をつづけるのじゃ……。う、たのんだぞ。(婉と87)

「やめる」のばあいは、「やめる」あるいは「やめた」という発言と〈やめる〉という行為は、語意的意味の要請としては、ぴったりかさなる必要はない。精密な時間関係でみたばあい、「やめる」のばあいは、そのさししめす行為が発話時のなかであればよいし、「やめた」のばあいは、それが発話の終了までであればよい。そのことが、「おねがいする」とのちがいとなってあらわれるのだともいう。

第2節 結果の局面が現在存在している ばあいのこと

1) 変化動詞と結果の局面

変化動詞の完成相は変化の局面（運動の局面）を始発から終了までふくめて、まるごとのすがたでさしだす。そして、それが基本的なアスペクトの意味でつかわれているかぎり、結果の局面の持続過程まではあらわさない。

ア) その日もわたしは9時に家にかえりました。

けれども、ひとつの大きなできごと過程のなかでの小さなできごと過程として、変化動詞がひとつの変化をさしだすとき、その順次性によって、そのつぎの小さなできごと過程は、その結果の局面のなかにあることが前提としてみこまれる。

(61) 私は女ののろいが胸の底にこたえて夢中で山の上までかえった。その夜はまんじりとしなかった。(出家73)

この例で、あとの文がしめすその夜の状態は、まえの文のしめす〈かえる〉という動作の結果としての〈山の上にいる〉という状態のなかで成立している。

大きなできごと過程のなかに現在のことが小さなできごと過程としてくみこまれ、現在のまえの小さなできごと過程が変化動詞の完成相過去形でさしだされるとき、現在は、その変化の結果のなかにあることになる。

イ) Aくんですか。Aくんなら、さっき、ここをでましたよ。

こうして、イ)は、Aくんがいまここにいないことまであらわすことになる。

けれども、このような順次性によって、後続するできごと過程にまで結果がおよぶのは、その大きなできごと過程と小さなできごと過程の関係によるのであって、それをしめす形式は段落の構造であり、文のタイプは、その要素の一部にすぎない。^(注)そのような順次性は一定の段落の構造のなかでおこることであって、たとえば、つぎの文の「死んだ」は、後続の文に結果性をもちこまない。

(62) 翌日、志乃の父は、死んだ。私は、はじめて、ひとりの人間が尋常に死んでゆくさまをつぶさにみることができた。肉親の異常な死にかたになれた私は。(忍ぶ113)

変化動詞のしめす変化の結果が現在におよんでいることを、文のレベルでたしかにいいあらわすためには、それなりの形式が必要である。たとえば、つぎのように継続相をつかえば、それを動詞の形態のレベルでいいあらわすことができる。

ウ) 父はかえっています。

また、完成相であっても、つぎのように「今は」でかざると、そのことがあきらかになる。

(注) 段落の構造のなかでのテンスの研究は、言語学研究会において、奥田靖雄の提案によって、はじめられようとしている。

- (63) 十日まえまで発電機が故障しとって、村じゅうランプをつかつとった、
今はもうなおった。(潮騒56) (注)

このようなものになると、おなじ完成相過去形の形式をとっていても、ただ過去の変化をあらわしているだけでなく、その結果が現在におよんでいることまであらわしている。これは、すでに完成相過去形の基本的な意味ではない。これについては、第4章でのべる。

ここでは、現在とのつながりが感じられるものを、そのうすいものから、こいものへ、いろんな段階にあるものをならべておく。なお、このあたりのことについては、鈴木重幸1979がいろいろとのべている。

2) 現在の事態をもたらした過去の動作や変化の説明

つぎのようなものは、どうしてこの事態があるのかを説明している。

- (64) むこうの芋穴からこんなものがでました。(狭山7)
(65) 浜でこれひろいました。新治さんの名まえがかいてあったのオで…
(潮騒37)

(66) 話は県警からの連絡でききました。三木謙一さんのことでね。(砂の63)
これは、なにが現在の事態をもたらしたかをしめしているが、あきらかに過去のこととしてのべている。「さっき」とか「きのう」とかのような、はっきりした過去の状況語でひろげることができ、「いまは」などとむすびつかない。鈴木1979では、これは、アオリスト的過去のなかにいれている。

3) 直前の変化

発話の直前に変化のおわったものは、発話時には、当然に変化の結果の局面のなかにある。

- (67) そら、ふくらんだ。よいしょ、よいしょ。(死すp291)
(68) ホラ! ——あかくなつた! あかくなつた! つまったでしょ。(青銅29)
これらは、みじかい時間の徐々の変化の終了であり、つぎのようなものは、瞬間的な変化の成立である。
(69) あ、とまった。(死すp291)
(70) 目あいた、あいた。ああ、大丈夫。血の気がおびてきた。(極私28)

(注) 「つかつとった」は、方言では、「つかいおった」になるだろう。

また、つぎのようなものは、動作のおわりの成立である。

(71) ああ、やっとすんだ！(伸子90)

(72) さあ、できた。(波17)

自分の直前の変化動作をのべるものもある。

(73) 田川、ただいま、演習よりかえりました。(真空28)

(74) 課長、受話器をうけとる。「もしもし、かわりました。はい、はあはあ。」

(狭山18)

あいてに対するサービスの完了をのべるものもある。

(75) お嬢さま、お食事をおもちしました。(宵待21)

(76) 女中「全部おはこびしました。さめないうちにどうぞ」(遊び54)

これらは直前の変化をのべているのだが、直前というのは、現在と接する過去であって、その変化と結果をわけてとらえることができない。「いまはなおった」というばあい、この一つの形式のなかに、過去の変化と現在の状態という分離可能な二つの事態があわせてこめられているのだが、こちらは、それを分離することができない。これをムリに「いまは」でひろげてみると、その変化は、直前ではなくて、現在とはなれた過去のことになってしまう。これらの表現は、現在の状態をもたらす変化が直前に成立したことをのべているのである。これらの表現は、現在現象している変化の結果に無関心ではないが、それは、現在点が結果の局面のなかにあることをあらわしているのではなくて、結果を生じるといふ変化の最終点までをふくみこんで、変化をまるごとのすがたでさしだしているのである。その点で、完成相の基本的なアスペクトの意味が実現していて、テンス的にもひとつの変化しかあらわしていない。

4) 直前までの変化の成立

あるていどの時間、期間をかけて現在の状態が成立したことをのべるものがある。

(77) おふろわいたよ。

(78) ほんと、うちこのごろようやくわかった。(極私7)

(79) おばあちゃん、おらげにきてからふとったね。(厭が294)

これらは事実上現在の状態もあらわしているのだが、前項と同様に変化の終点を現在にもってきて、のべている。だから、やはり現在に終了点をもつ完成

相の過去としてとらえるべきであろう。

5) 現在に結果がのこっている過去の変化

大きなできごと過程のなかで、過去に変化が完成して、その結果が現在にのこっているばあい、その変化を完成相過去形でのべても、現在その結果の局面のなかにあることがつたわることが多い。

(80) 叛乱軍は、すべて帰順しました。(戒厳50)

(81) これは、昨夜、羽越の信用金庫をおそって現金を強奪した事件の一人と思われ、捜査本部では犯人たちの仲間われが原因とみて、傷害事件および現金強奪事件の両面から捜査を始めました。(約束74)

(82) 瀕死の重傷の男は、東京・新宿の暴力団明政会の幹部高野宏と判明しました。(約束74)

(83) ええ、さまざまな角度から調査しました結果、わが社としましては、あなたのお父さんと兄さんは故意に船を放置して難破せしめたとの見方をかためました。(津軽75)

この4例のうち、はじめの3例はラジオニュースであり、第4例は、保険会社がすでにとった処置をお客に説明している。これらは、いずれも過去のできごととしてのべているが、同時にその結果としての現在の状態もつたわっている。けれども、これらが過去のできごととしてのべることに重点があることは、これらの動詞を「帰順しています」「始めています」「判明しています」「かためています」のような継続相にかえたものとの対立としてみると、はっきりする。継続相にかえると、現在の状態をあらわすことに重点がおかれるからである。

けれども、どちらのいいかたにしても、そのさししめす事実はおなじであり、意味もそうかわらない点から、これらの両対立形式がかなりののていどに中和しているといえるかもしれない。

けれども、これらを時の状況語でひろげるとすれば、完成相のほうは「××日に」であり、継続相のほうは「××日から」あるいは「××日以来」となる。だとすれば、やはり、その対立は、いきているとみななければならない。

ただ、完成相のばあいでも、「今は」「現在では」のような状況語でひろげると、継続相と同じ意味になるという点で、あるていど継続相に近づいていると

はいえるだろう。

完成相のばあい「現在に結果がのこっている過去の変化」をあらわし、継続相のほうは、「過去の変化によってひきおこされた結果の状態」をあらわすといえ、そのちがいをあらわすことができようか。

第2章 過去(2)——過去の性質、 ひろげられた過去など

テンス的な意味をおおきくわけると、過去、現在、未来にわかれる。ところが、一定のテンス形式がさししめすテンスの意味は、かならずしもそれをきちんと反映しない。たとえば、完成相非過去形がひろげられた現在をあらわして、「最近毎日10時間ねる。」といったようなばあい、そのひろげられた時間帯は、実際の時間でいえば、過去や未来をふくんでいるし、また、起きてそれを話している現時点ではそれが実現していない。このように三つの区分のさかいめをこすところで、テンス語形のしめすテンス的な意味はいろんな問題をもたらす。ところが、おなじひろげられた時間帯でも、過去や未来のばあいは、「そのころは毎日10時間ねた。」にしても、「これから毎日10時間ねる。」にしても、過去、現在、未来のさかいめをまたがない。過去は過去、未来は未来である。そのようなことから、第IV部の完成相非過去形で未来をあつかったときには、「未来の動作の諸相」として、第2章で未来のことをのべるなかで、いろんなものを記述した。それとの関係で、過去のばあいもおなじようにあつかおうとおもったのであるが、資料がおおく、また、多様性にとんでいるので、基本的なものを、つまり過去の動作をのぞいたものを、第2章でのべることにした。未来とのあつかいのちがいは、そのような量的な差にもとづくものである。

第1節 過去の質的な属性

1) 過去の一時的な属性

過去に一時的に存在したものごとの質的な属性、あるいは、過去または過去から現在にかけて持続的に存在したものごとの過去の特定時における質的な属性をあらわすものがある。これは、アスペクトから解放されているが、アクチュアルである。

- (84) しかし、駒ちゃんは、よく戦ったね。あれで、わしは、よほど溜飲がさがったよ。わしのようにむやみに興奮しないで、するどく論理の欠陥をついてくところは、敬服にあたいたね。(自由347)

- (85) そんなへりくつをいう叔父まで、きょうは、軽蔑にあたいた。
(自由39)

(86) 翌日からの胡軍の攻撃は猛烈をきわめた。(李陵162)

- (87) 三日たつと柳吉はかえってきた。いそいそとした蝶子を見るなり、「あほやな、おまえのひとことで何もかもめちゃくちゃや」ふきげんきわまった。(夫婦32)

- (88) 山の手電車のなかで、彼のふうがわりの、さげている笠がめだった。
(無限5)

つぎのようなものは、現実にはコンスタントにつづいている属性だとおもう。けれども、この文が問題にしているのは過去の特定の時間のことである。一時的なものかコンスタントなものかという問題は、完成相には問題になることがすくないので、継続相のテンスのなかで問題にする。ここでは、それをみたときのこととして、ここにあげておく。

- (89) 午後に、駿介は、妹のじゅんといっしょに天神さんの山にのぼった。

そこの木の間をとおして、見はらしがよくきいた。(生活137～138)

- (90) というのは、目のまえに大森林があらわれたので。(中略) 今まではあまりに樹がなさすぎた。(高野22)

2) ひろげられた過去における質的な属性

過去または過去から現在にかけて存在していたものごとの属性で、その属性が長期にわたって存在していたばあいである。

- (91) あごがはりすぎるようにめだった。(河明283)

- (92) 灯台長も奥さんも、新入りの初江に好意をいだいた。無口で愛嬌がないかとおもえば、急に娘らしくわらいだし、ぼうっとしているようで、なかなかよく気がついた。(潮騒42)

- (93) 大宮は仏語と英語ができた。野島はドイツ語と英語ができた。

(友情101)

- (94) わかいころは、米だわらを二俵かついだ。

- (95) 秀吉は幼名を日吉丸といった。

- (96) 恋という字は、むかしは、イトシイトシトイウココロ(戀)とかいた。

これらは、アスペクトから解放されている。

第2節 ひろげられた過去における動作

1) 過去における非連続のくりかえし

過去の長期にわたる非連続のくりかえしをあらわすばあいがある。このばあいの、ひとつひとつの動作については完成相の基本的なアスペクトの意味がはたっていることは、すでに第II部第4章第4節3) a), および第III部第2章でのべた。

(97) 私は六角堂からの帰りによく三条の橋の欄干にもたれて往来のひとびとをながめた。(出家73~74)

(98) 三よしは柳生さんにはいろいろおせわになりました。(末枯52)

(99) 未亡人は正しい人でした。またはっきりした人でした。私は軍人の妻君というものはみんなこんなものかとおもって感服しました。感服もしたが、おどろきもしました。この気性でどこがさびしいのだろうとうたがいもしました。(ここ173)

2) 過去の、なりたつ時間に関係のない命題のなかでの動作

なりたつ時間に関係のない命題である文の述語になると、完成相非過去形の動詞はテンスから解放されるのだが、それが過去形になると、なりたつ時間のおおはばが過去に限定されるので、テンスから解放されなくなる。また、動作をあらわしていれば、アスペクトからも解放されない。

(100) むかしは、このあたりでは、大雨がふると、いつも橋がながれた。

(101) 戦前は、兄が死ぬと、弟がその家督を相続した。

第3節 過去の状態について

知覚によってとらえた外界の現象をあらわす「みえる」「きこえる」「におう」などや、存在をあらわす「存在する」「住む」などは、非過去形で現在をあらわすばあいには、その状態過程のなかにあることをあらわすことになって、アスペクトの側面において「みえている」「存在している」などの継続相との対立が中和するのだが、過去形のばあいには、ふつう、「みえた」と「みえていた」、

「存在した」と「存在していた」などが、そのアスペクト的な意味においても対立する。

ア) そこをとったとき、子どものすがたがみえた。

イ) そこをとったとき、子どものすがたがみえていた。

ウ) わたしは、はじめて東京にきたとき、高円寺にすんだ。

エ) わたしがはじめて東京にきたとき、かれは高円寺にすんでいた。

うえのイ)やエ)が継続相のアスペクト的な意味を実現しているのに対して、ア)やウ)は、完成相の意味をりっぱに実現している。このことは、「おもった」や「かんがえた」のばあいと同様だろう。

(102) 彼の決心がようやくかたまったところに、街道のかなたから、急ぎ足に近づいてくる男女のすがたがみえた。(恩讐65)

(103) 物おきの横手からまわっていくときに、うらの山羊がもうおきて小屋からでているのがみえた。(桑の37)

(104) たのしそうなわらいごえが、くりの下座敷のほうから、とぎれとぎれにきこえた。(破戒206)

(105) すると、彼の怒声とまつ子の悲鳴とがほとんど同時にきこえた。

(冬の103)

(106) 彼女は目をつぶりながら、頭をすこしうごかした。髪の毛がかすかににおった。(風立125～126)

(107) 徳川時代の儒教的教養にしても、それが明治以後の洋学摂取を可能にした基礎をなしていると同時に、その儒教的な思想や教養も、明治以後は半ばは洋学といれかわりながら、しかも半ばはそのまま共存した。(もの137)

(108) さすがに用心深い父はひとめにつかない村はずれをえらんだので、根津の西町から八町ほどはなれて、とある小高い丘のすそのところにすんだ。(破戒106)

この種の動詞の完成相過去形は、いつも完成相の基本的な意味を実現するとはかぎらない。

(109) びろうどに似たあつい布がおもたくたれて、窓のありかを目かくししていた。そのためにガラスの卓においた小さな花びんの花が、つよくおっている。くちなしの花に似た白色の花で、甘く、きつすぎる

くらいににおった。(帰郷48)

この例のばあい、完成相過去形がしめしている現象は、継続相「におっている」がさししめす現象とおなじであって、始発から終了までをまるごとさしだしてはいない。その点で、完成相の意味は実現していない。けれども、それは継続相とおなじ意味をあらわしているわけでもないだろう。この「におった」は、過去における現象の質的属性をしめしていて、アスペクトから解放されているといってよいだろう。

過去形になると、持続過程のなかにあるというアスペクトの意味は実現されないのだとおもう。

第3章 現在以前

動作動詞の完成相過去形が「もう」「すでに」などにかざられて、現在以前に動作が成立したことをあらわすことがある。これは特殊な用法であり、また、現在以前ということは事実上過去とおなじであって、過去の動作をあらわすという完成相過去形の基本的なテンス的意味の変種ともおもえるが、このあとの第4章でのべることと関連があり、また、第Ⅵ部でのべる、完成相のテンス形式に準じる「している」の形との対立のこともあるので、いちおう、ひとつの章をおこしてのべておく。

第1節 「モウタベタ」と「キノウタベタ」について

1) 寺村秀夫1971のとらえかた

寺村秀夫1971は、「動作・でき事動詞」の「…タ」に完了（アスペクト）と過去（テンス）をあらわすものがあるとしてつぎのようにのべた。

私は、動作・でき事を示す動詞のタ形には、

[5] モウ昼飯をタベタ

のように完了（アスペクト）を表わすものと、

[6] キノウハ昼飯ヲタベタ

のように過去（テンス）を表わすものがある、と考えるのであるが、タにこのような二つの異種のものがあるということは、次のような問いに対する答えを比べてみると分かる。

[7] モウ昼飯ヲタベタカ

[8] キノウ昼飯ヲタベタカ

に対して、肯定の答えは言うまでもなく‘……タ’だが、否定の答えは、それぞれ、

[7'] イヤ、(マダ) $\begin{cases} \text{食べテイナイ} \\ \text{食べナイ}} \end{cases}$

(×食べナカッタ)

[8'] イヤ、タベナカッタ

(×食べテイナイ／食べナイ)

でなければならない。

この事は、‘モウ’‘キノウ’というような副詞に助けられて、同じ‘～タ’という形式が、ある場合には現時点での動作が終ったか否かを、またある場合には現時点と（いかに短かい間であっても）隔絶した‘過去’における動作を表わすのだ、という事が、決して観察者たる文法家の頭の中だけにある区別でなくて、実際に話し手と聞き手の間で了解されているという事を示している。その異なる二つの面の、いずれかと限定するような補助的要素（上例では‘モウ’とか‘キノウ’とかの副詞）のない、例えば〔4〕のような文〔筆者注：〔4〕 昼食ヲタベタ〕は、だから、少なくとも二義的である、という事になる。

2) 鈴木重幸1979の批判

これに対して鈴木重幸1979は、二つの点から批判した。

（第1）テンスとアスペクトの対立とみるのはまちがいである。

この形に二つの意味をみとめるとしても、一方をアスペクトの意味、他方をテンスの意味とみとめることはできない。テンス的な意味とアスペクト的な意味は排他的でなく、終止的な述語動詞の意味として相互作用しながら共存しているものだからである。（とけあっていることはあっても）。

（第2）この両者のちがいは、意味のちがいではない。

わたしは、このようなばあいには二義的ではなく、単なる過去（アクチュアルな過去）であるとみとめるべきだとかんがえる。二義的ということはambiguityが生じるということであるが、この文のテンスの意味、アスペクトの意味は明確である。ただ、ペルフェクトのニュアンス、アオリストのニュアンスはついていないのだとかんがえる。つまり、〔7〕と〔8〕のちがいは、独立の文法的な意味の、文脈、場面、話し手の予期のありなしなどによって生じるニュアンスのちがいであるとかんがえるのである。

なお、きのうかきあげることになっていた原稿について、Bが

きのう原稿をかきあげましたか？

と発言したのに対し、Aは、

いや、まだかきあげていない。

いや、かきあげなかった。

の両方のこたえがありうるだろう。はじめの問いに対する

かきあげたよ。

は、どちらの意味とすべきか？

3) 現在以前と過去の対立

寺村秀夫1971の「モウタベタ」と「キノウタベタ」のちがいの指摘は、現在以前における動作の完成と過去における動作の完成のちがいを指摘したものとして重要である。ただし、これは、相対的テンスか絶対的テンスかというテンスのちがいであって、分割か非分割かというアスペクトのちがいではない。テンスとアスペクトは、鈴木1979がいうように、共存するもので、排他的なものではない。このふたつの「タベタ」は、どちらも完成相の基本的なアスペクトの意味を実現させている。その点では、鈴木1979の第1の批判はただしい。

けれども、鈴木はこの批判がただしいのは、用語レベルのことである。鈴木というテンスとアスペクトのとらえかた（筆者も鈴木とおなじとらえかたであるが）からすれば、テンスとアスペクトは共存するのだが、寺村1971は、相対的テンスのことを「アスペクト」とよんでいるのであるから、この両者は、一次的には、両立しなくてよいのである。

絶対的テンスというのは、発話時を基準にして、それよりまえを「過去」、それと同時に「現在」、それよりあとを「未来」として区別するものである。相対的テンスは、一定の時間的位置を規準にして、「以前」「同時」「以後」を区別するものであり、以前に関するものについては、過去以前(前過去)、現在以前(前現在)、未来以前(前未来)がある。

(前過去) かがうまれた時は、わたしはすでに大学を卒業していた。

(前現在) かれは、もう大学を卒業している。

(前未来) かが死ぬころは、わたしはすでに死んでいる。

この意味を実現する「している」については第Ⅵ部でのべるが、前現在の「もう卒業している」は、おなじ前現在の意味をもつ「もう卒業した」にかえてもよい。それが寺村1971の「モウタベタ」である。(ただし、前未来や前過去は、完成相の形式にできない。)

けれども、前現在と過去とは、事実上、どちらも同様に現在よりまえである。だからとくにマークがないかぎりには、それは、おなじになってしまう。いますこしまえで「一次的には」といったのは、二次的には、おなじになってもかまわないからである。

ここで形式の対立が問題になる。「した」は過去をあらわし、この意味での「している」が前現在をあらわすととらえるのが事実には忠実だろう。そして、完成

相過去形「した」が前現在をあらわすのは、「もう」「すでに」などでかざられたばあいにかざられるといったほうがよいとおもう。「モウ」も「キノウ」もつかない形にambiguityはないと鈴木1979がいうのは、そのとおりである。この章のはじめに「特殊な用法」とかいたのは、「すでに」や「もう」などでかざられたものだけがこの用法になり、そうでないものは、ここに属さないという意味である。

なお、寺村が「現時点と隔絶した‘過去’における動作をあらわす」といっているのは言いすぎで、第1章第1節にのべたように、「過去」は、発話の終了と同時にまでのひろがりをもっている。また、「モウタベタ」のほうも、事実上の動作の時は、「過去」のばあいと同様、何千年もまえのことでもよく、「現時点での動作」といわなくても、「現在よりまえに」といっておけばよいだろう。このあたりの寺村の記述は、肯定のばあいのテンスのありかたを否定のばあいといっしょにしているきらいがある。「まだ」が現在時にまでつづいていることをあらわすばあいは、それにかざられる動詞は継続相になる。「まだたべていない」だけでなく、「まだたべている」も、「まだたべる」にはできない。「まだたべる」にすると、「まだ」の意味が「もっと」の意味にかわってしまう。

「もう」にかざられる動詞のさししめす動作は、現在までにおわっていないなければならない。その点では、「過去」とおなじである。「モウタベタ」と「キノウタベタ」のちがいは、現在とくつついているかはなれているかの問題ではなく、動作成立の時間的位置を設定するばあいに、座標軸に現在点からの方向だけを設定しているか、軸上の定点に固定しているかのちがいである。アスペクトでなくて、テンスの問題であるというのは、その時間的位置の設定の問題だということである。そして、「もう」にかざられるばあいが特殊であるというのは、そのばあいには、時間軸のどこかに固定されることをきらうという積極的な性格をかなりつよくおびているからである。「すでに」のばあいは、この積極性はすこしよわくなる。(つぎの×○は可能性の程度をしめす。)

ア) 昼飯ハモウ十一時ニタベタ (××××○)

イ) 昼飯ハスデニ十一時ニタベタ (×××○○)

「モウタベタ」のもつ特殊性は、あまり強調しないほうがよいだろう。

第2節 現在以前の成立

完成相過去形が「もう」「すでに」にかざられると、現在以前に成立したことをあらわすことがある。

- (110) もうあたしベルをならした。(波295)
 (111) 床屋さんはもう廃業したのね。(生ま190)
 (112) おきぬはもう売っちゃったんだよ。くえねえからたたきうっちゃったんだよ (波56)
 (113) 物理学の中心が原子核から素粒子へうつったことはすでにのべた。
 (原子331)
 (114) 駒井先生はすでに故人となった。(思出111)
 (115) ここではすでに、数百例のサル of 病理解剖がおこなわれた。(高崎47)
 (116) 物質や因果性に関する哲学的概念の絶対性と、物理学の発展のある段階におけるそれらの物理学的概念の相対性を混同したところに哲学的混乱の発生する原因があったことはすでにみた。(原子328)

けれども、これらは特殊であり、「もう」「すでに」にかざられて現在以前の成立をあらわすものは、多くの例が「している」の形をとっている。

また、時間的な位置をしめす状況語と共存することもあって、第1章でのべた基本的な意味との差がちいさいことをものがたっている。

- (117) このことはすでにまえにものべた。(人格62)
 「もう」「すでに」にかざられていても、その「もう」や「すでに」が「はやくも」とおなじように、予想よりはよいことをあらわすばあいには、この用法ではない。

- (118) つぎの朝からもう勘次のすがたは林にみいだされた。(土104)
 (119) 岸子が、まだねむいというかおをわざと子どもっぽく強調して、まぶしそうに目をほそめて寝室からでてきた。「もうおきたの、いい天気ね。」(くれ14)
 (120) それから三十数年の時がながれた。明治維新からすでに一世紀がすぎた。ところが、そのはるかにとおいはずの明治が“明治百年”のこ
 とばとともに、急にみちかな問題となってきた。(学問262)

それから、「もう」にかざられても、変化動詞のばあいには、また、テンス・アスペクト的な意味をことにする。そのことについては、第4章でのべる。

第4章 過去から現在へ

変化動詞の完成相過去形がその動詞のあらわす動作過程の変化の局面が完成したことをあらわすばあい、現在点がその結果の局面のなかにあることまでつたわってしまうことがある。このことについては、すでに第1章第2節でのべた。そのばあい、段落のレベルでつたわるのではなく、動詞の形態のレベルで、あるいは、すくなくとも文のレベルでそれがつたわるものについて、ここでのべる。

これには、つぎの2種類がある。

- i) 変化がおわって、現在結果の局面のなかにあること
- ii) 内的な感覚や感情の変化の結果が現在あること

このうち、i)のほうがより文論的であり、ii)のほうがより形態論的である。また、i)は過去の変化に中心があり、ii)は現在の状態に中心がある。

この第4章は、ふたつの節をもつが、この両者の形式の実現するテンス・アスペクト的な意味はことなる。第1節のものは、テンスもアスペクトもダブルにはたらい、その結合としてさしだしている。ところが、第2節のものは、アスペクト的には変化の局面と結果の局面が未分化であり、テンス的には過去と現在が未分化である。テンスもアスペクトも未分化なひとつのものととしてさしだしている。この章は、この異質のものを「過去から現在へ」としてひとつにまとめたものである。

第1節 変化がおわって、現在結果の局面のなかにあること

変化がおわって、現在結果の局面のなかにあるということは、テンス的には過去と現在の意味が、アスペクト的には完成相と継続相の意味がそれぞれ共存していて、ダブルテンス、ダブルアスペクトの様相を呈しているということである。とはいっても、おなじことを継続相形式であらわすのとくらべると、こちらは過去の変化に中心があって、その点では、ダブル性がよわいという感じがする。たぶんこれは、継続相が形づくりのてつづきのうえで分析形式をとる

のに対して、完成相は総合形式をとるということと関係があるだろう。

このような意味になるのは、「今は」「もう」などでひろげられることによる面がつよいので、あるいは、文論の問題であって、形態論としては、そこまで記述しなくてもよいのかもしれない。けれどもそうしたものにカざられることができるという統語能力が、この形態のもつアスペクト・テンスの意味によるのだとすれば、それを記述しないわけにはいかないだろう。

これにもいろんな程度がある。ここでは、現在性のつよいものから順にならべるが、たぶん、ある線からあとは、ここでわざわざとりあげなくてもよいものがはいってくるだろう。

1) 「今は」でかざられたもの

「今は」(「今」)でかざられるということが、それが現在のことであることを要請している。

(121) 十日まえまで発電機が故障しとって、(中略) 今はもうなおった。

(潮騒56)

(122) でも 今は くぎりが つきました。(日本57)

(123) くわしくはわかりませんが、わすれましたが、右か左のうでじゃなかったかとおもいますが、すこし不自由なだけで、ほかは異常がないと、出発時間なども回答があったとおもいますが、今、わすれました。

(わが134)

2) 「もう」「すっかり」でかざられたもの

このばあいの「もう」は、「すでに」とちがって、変化の時をしめす状況語とは共起しない。なお、ここに属するのは変化動詞のばあいであって、「もうたべた」などは、第3章のほうに属する。

(124) 「気分は もう なおりましたね」とつけくわえた。(或る25)

(125) いや勝負は もう ついた。(間草32)

(126) 「ごはんは?」「もう すみました。」(暗夜39)

(127) わたしは、もう すっかり 心もちが なおった。(野菊43)

3) 現状をさして、のべるばあい

現状をさしているということは、まさに現在のことをいっているのだが、このばあい、形態論的レベルでそれがいえるかどうかは、はっきりしない。

(128) ごらんのとおり杖もすてました。(高野22)

(129) [へやのなかにはいってきた蝶をさして]「そらそらまたきたわ。……大兄さま、これつかまえてよ。」(女坂164)

4) 現状に気づいて、のべるばあい

(130) 豊美はあまりほがらかでない表情で、夫の頭を見、夫にくらべるとずっと骨太でがんじょうな指さきで毛髪をなでているうち、あらととんきょうな声をあげた。えっと言って首をあげようとする夫のくびすじをつかまえたまま、あら、あらと言った。あら、はげができたわ。(故旧22)

(131) やア、ずいぶん美しくめかしたね。ちょっと握手……(ない24)

(132) やあ、これやさっぱりしましたね。(田園33)

(133) おゝ、つもった、つもった。(高野62)

(134) [かごの戸があいていて、インコのいないのに気づく。]「あつ、にげた！」

つぎの例は、変化動詞ではなく、「買っているね」にかえることができない。それでも現状をあらわすことができています。とすれば、うえの例も、形態論的な記述からはおとしたほうがよいのかもしれない。

(135) 私のうではめられた腕時計に気がつく。少年「あ、買ったね。」私「五年まえにかった」(死す p302)

5) 副詞や感動詞と共起していない例

つぎのようなものは、第1章第2節5)であげたのと同種のものである。ここに属するものではないが、その連続性をしめすために、ここでもあげておく。

(136) お師匠さまもだいぶお年をめしましたね。(出家59)

(137) えらいことになったね。(砂の42)

(138) 話はついた。あすの×時出港だ。(宵待82)

(139) 武器調達のメドはついた。(宵待33)

6) 完成相過去形と継続相非過去形

うえの1)～4)にあげた多くの例は、おなじことを継続相非過去形のかたちでもあらわすことができる。

- ・今はなおっている。
- ・勝負はもうついている。
- ・ごらんのとおり、つえもすてています。
- ・あら、はげができてるわ。
- ・あ、にげている！

そしてそのほうが現在性がつよい。これらのアスペクト的な性格については、第Ⅲ部第3章でのべたし、またテンス的な性格は、第Ⅶ部第3章でのべる。

けれども、つぎのようなものは、過去の変化との縁がきれて、現在結果の局面のなかにあることだけをあらわしている。つまり、アスペクト的にもテンス的にも、その基本的な意味が実現している。

- ・やあ、ずいぶんめかしてるね。
- ・お、つもってる、つもってる。

このちがいが動詞のカテゴリカルな意味のちがいによることは、すでに第Ⅲ部第3章でのべたが、これが完成相のばあいはどうひびくのかということは、いまのところわからない。

第2節 内的な感覚や感情の変化の結果が現在あること

「はらがへる」「つかれる」のような内的感覚をあらわす動詞、「いやになる」「よわる」「こまる」のような態度的な感情をあらわす動詞の完成相過去形の形式は、話し手の現在よりすこしまえから現在にもちこされた内的感覚や感情の状態をあらわすことができる。

- (140) 腹へった。あたし、カメラなんてどうでもいいわ。(極私27)
- (141) ああおなかがすいた！(伸子72)
- (142) ああつかれた。クタクタ。おやすみなさい。(女生55)
- (143) じゃア君、ねよう。きょうはつかれた。(暢気20)
- (144) 「今晚はすこしあるきすぎたからくたびれた。」とおっしゃる。(桑の

53)

(145) おらあ、おまえがいやになった。(野火39)(146) おれはあたまにきた。あんたはキタナイ。(八月27)(147) しかしよわったな。あッしゃアこのごろ、すっかり奥方をしくじってる人なんだから……。 (多情32)(148) こまったね。だから若い空想家はだめだというんだ。(蒲団43)(149) 畜生、こまった！どうしたってねれないや。(カニ50)

これらのアスペクト・テンス的な性格が特殊になるのは、これらの動詞のさしめすうごきが話し手の内的活動であって、それを話し手が認識、表現する過程が、認識・表現活動とその活動の内容とにきちんと分化しきっていないからである。この過程については、第Ⅱ部第4章第1節7)でのべたが、ここで整理しておく。

- i) 表現内容の対象性の観点からみると、「つかれる」「よわる」の類は、「おもう」「かんがえる」の類と「みえる」「におう」の類の中間にある。
 - ・これらはすべて認識活動の側面をもっており、その側面では、認識内容（表現内容）が認識活動と一致していて、対象と活動が未分化である。
 - ・けれども、「おもう」「かんがえる」が認識活動の側面（思考活動）しかもっていないのに対して、「つかれる」「よわる」は認識活動の側面（感覚・感情活動）のほかにその対象としての内的現象の側面をもっているし、「みえる」「におう」は、認識活動の側面（知覚活動）のほかに、その対象としての外的現象の側面をもっている。
 - ・知覚活動の対象が外的現象であって、対象が活動と分化しやすいのに対して、感覚・感情活動の対象は内的現象であるので、対象が活動と分化しにくい。
 - ・「みえる」「におう」の完成相非過去形が現在の外的現象をあらわして準アスペクト的になるのに対して、「おもう」や「つかれる」の完成相非過去形が一人称の現在の活動をあらわしてアスペクトから解放されるのは、対象を分化しだすことができないからである。
- ii) 「つかれる」や「よわる」は変化動詞である。
 - ・「つかれる」「よわる」は変化動詞であり、その完成相過去形は、過去における、その変化の全過程(変化の結果がおわるまで)、または変化の局

面（結果が生じるまで）を、まるごとのすがたでさしだす。一人称であっても、過去のばあいは、その表現の内容は、おもいだしの内容として対象化されるので、アスペクトから解放されない。

- ・現在をふくむ大きなできごと過程のなかで、「つかれる」「よわる」の完成相過去形が、現在のまへの小さなできごと過程として、その変化の局面をまるごとのすがたでさしだすとき、現在は、その結果の局面のなかにあることになる。
- ・ところが、その結果の局面は、話し手の現在の内的現象であるので、対象化することができず、アスペクトから解放される。つまり、変化の局面の終了であり、かつ結果の局面の始発であるさかいめがはっきりしない。このため、変化とその結果が未分化となる。

iii) 完成相非過去形「つかれる」「よわる」と完成相過去形「つかれた」「よわった」はおなじことをあらわす。

- ・非過去形は、話し手の心的活動とその対象を未分化なすがたでさしだし、アスペクトから解放されている。
- ・過去形は、対象としての内的現象をその変化と結果の未分化なすがたでさしだし、こちらもアスペクトから解放されている。
- ・こうして、両方がおなじ内的現象をあらわすことになる。

第5章 モーダルな性格とテンス

テンス語形はムード語形のなかにある。第IV部第1章第1節でのべたように、テンス語形「する」「した」は、ムード語形の観点になつと、現実反映の側面において、いいきり形であり、通達の側面において、のべたて形である。いままでのべてきたテンス語形のテンス的な意味は、これらの語形が、ムード語形の側面からみた「のべたて形・いいきり形」としての基本的なムード的意味が実現しているばあいに実現するのである。ムード的に基本的な意味でなくなると、テンス的な意味のほうもすがたをかえる。このことは、ムードを正面にすえて研究したのちにおいて、あきらかになるものであるが、ここでも、めだつことだけについてのべておこう。

第1節 過去の推量

過去のことにについて推量するばあいは、「シタダロウ」という、おしはかり形の過去形をつかったり、確率を推定するコピュラとくみあわせて「シタカモシレナイ」「シタニチガイナイ」のような形式をつかったりするものがふつうである。

(150) まったくもし芸術がなかったら、ぼくは破滅したでしょう。(青銅50)

(151) 伯父の大音はおそらく四五丁はなれてもきこえたであろう。

(思出95)

(152) もし弥兵衛老人のみであつたら、あまりおのれをいさぎようするにすぎて、一家親類知己朋友の交際もずいぶん円滑をかいたかもしれぬ。

(思出74)

こうした過去の推量をあらわすのに、いいきり過去形「シタ」がつかわれることがある。ひじょうにすくないが、まったくないわけではない。

(153) これらの屍体の前身たる日本の敗残兵は、おそらく米兵が通過した後にこの村にあらわれ、掠奪して住民の報復をうけたのである。

(野火79)

これは「シタノダ」の形であるが、つぎは、「シタ」である。

- (154) したがってあがっただけの踵は靴からでるかんじようで、いただいた晩、先生のお宅から渋谷の駅まであるくあいだにまめができた。いやおそらくできたりつぶれたりした。(私の25)

つぎのようなものもあるだろう。

- (155) あいつのことだから、ゆうべきといったよ。

過去の非現実の仮定に対する帰結の述語にもあらわれる。

- (156) わたしならば、かならず、そうした！(帰郷323)

寺村秀夫1971も、つぎのような例をしめして、このことをのべている。

- (157) 広島側は野球ルールを引いて「妨害がなければ捕球できた」と抗議。

(朝日新聞)

- (158) スミス機長は……「『よど』の石田機長は福岡空港により、時間かせぎをしたり、金浦空港で機内に長時間とじ込められるハメになったが、私ならすぐいうことを聞いて平壤に飛んだ」という。(朝日新聞)

非現実仮定のばあいは、「スル」「シタ」「シテイル」「シテイタ」など、いろんな形がつかえるが、このことについては、第VI部第3章第4節でのべる。

第2節 決定の完成

1) 「買った！」と「やめた！」

バナナのたたきうりのようなばあいに、客が「よし買った」と意思表示をすることがある。このことについて、鈴木重幸1965は、「話の瞬間にはまだ金をはらっていないから、《買う》という動作はまだ過去のものではない」といつている。このように、動作は未来のものであるが、決定が成立したときに、それを完成相過去形であらわすことがある。

- (159) 先生「おらア、教師をやめた。」斉藤「そうだ、やめろ、おめえなんか教師の資格はねえ。」(わが26)

- (160) すが子「行くのやめた、行くのやめた、美由紀、行くのやめた。」

(極私5)

- (161) わるいけど、おれ、しばらく休暇もらったよ。(死すp301)

- (162) よしよしそれでなにもいうことはなし。早月さんはわしがひきうけ

た。(或る225)

これらは決定が完成したとたんに発しているが、いつも成立と同時に発言するとはかぎらない。つぎのようなばあいには、発言よりまえにきめている。

(163) 今度の旅行にいくの、ほくやめたよ。

(164) 「売約済のはり紙をみて」これはうれました。

これらは、どんな動詞でも、そうなれるわけではない。これになれる動詞のグループについては、まだわかっていない。

2) 「した」と「なった」

「することにする」「することになる」というのは、そのような形式が語句的意味のレベルで「することにきめる」「することにきまる」の意味になっている。

(165) 君の荷物はあした神戸へおくことにした。(華麗256)

(166) 諸君の洋服についている金ボタンを供出してもらうことになった。

ところが、つぎの「した」は、そのような形式ではない。

(167) 「船はきまったのかい？」しばらくして謙作が沈黙をやぶった。「十一月十二日の船にした。」(暗夜25)

つぎのようなものもあるだろう。

(168) 日曜日が運動会なので、来週の月曜はやすみになった。

(169) 教授は、学会出張のため、来週の授業を休講にした。

このつぎの会合が「一日くりあがった」「二日のびた」というようなものもあるだろう。これらが「することにした」「することになった」とちがうのは、きめた日をしめす状況語でひろげられないことである。

・きのう、十二日の船にのることにした。(○)

・きのう、十二日の船にした。(×)

ただし、時の状況語でなければよい。

・きのうの会議であしたから休みになった。

これをモーダルなものとしてとらえたのは、実現か決定かということが、文のあらわす意味と現実との関係にかかわるからであるが、あるいは、これは、「する」「なる」の何番目かの派生的意味に〈きめる〉〈きまる〉があって、そ

れが一定の環境条件のなかで実現するということかもしれない。

なお、疑問文とそのこたえのなかには、いろいろありそうである。

- ・いつにした? —— 来月の三日にした。
- ・あしたのパーティーどうなった? —— たちぐい会になった。
- ・どの服にした? —— こないだかったアレにした。
- ・旅行はハワイにした? —— いや、シルクロードにした。

3) 「する」と「した」

この「する」と「した」は、両方いえる。ところが、その意味がおなじかちがうかはきめた時と発言時との関係によってこととなる。

- ・きめてすぐ発言するばあいは、「する」と「した」がおなじ意味になる。
- ・きまったあと、実現するまでのあいだのばあいは、「する」が未来の実現をあらわし、「した」が過去の決定をあらわす。

しかし、これらの例が資料になかったので、両方いえることを証拠づけるために、つぎの調査をおこなった。被調査者は、日本語教育センターの研修生20名である。

つぎの各対の□のなかに次の要領で記号をいれてください。

- i) どちらかしかいえないとおもうものは、いえるほうに「○」、いえないほうに「×」
- ii) どちらもいえるばあいは両方に「○」
- iii) 一方がスゴクふつうのいいかただと思うものには「◎」
- iv) すこしあぶないとおもうものには「△」

A 休講の掲示をみてきた学生が同級生に

- ア) 来週の火曜は休講になるよ。 ☐
- イ) 来週の火曜は休講になったよ。 ☐

B 「休講にする」と学生にいつて、もどってきた先生が同僚に

- ア) 来週の火曜は休講にするよ。 ☐
- イ) 来週の火曜は休講にしたよ。 ☐

C 来年からの週休2日制がきまってから、社外の友人に

- ア) うちの会社、来年から土曜も休みになるよ。 ☐
- イ) うちの会社、来年から土曜も休みになったよ。 ☐

これの結果は、つぎのとおりであった。

A: ア) ◎3, ○12, △3, ×1, 無記入1

イ) ◎11, ○8, △1

B: ア) ◎1, ○15, △3, ×1

イ) ◎13, ○6, △1

C: ア) ◎5, ○13, △2

イ) ◎4, ○10, △1, △4, ×1

この調査の結果、このようなばあいには、たしかに「する」と「した」の両形式がなりたつことがわかった。

第3節 発見, 確認, おもいだし

現在持続過程のなかにあること, あるいは, 現在その質的な属性があることを発見したり, おもいだしたりして, すぐのべるばあい, あるいは, それを, あいてにたしかめるばあいには, 過去形がつかわれる。これは, 完成相の基本的な意味が実現しているばあいには成立しないので, このことについての説明は, 第VIII部の継続相過去形のところでおこなうが, 形式的に完成相過去形をとっているものについて, ここで例をあげておく。

1) 発見

現在存在しているものを発見したとき, 「あった」「いた」であらわすことがある。これは, 「ある」「いる」でもあらわせるのだが, 過去形にすると, 発見という認識活動が成立したということも, あらわすことになる。

(170) こんなとこにあった。ころんだとき, うしろのほうへ放ったんだろう。(潮騒48)

(171) あった, あった。なあんだ。こんなところにつっこんであったんだ。
(波14)

(172) 朝子「いた。」康「兄ちゃん」康, 兄たちのほうへとんでいく。

(時計55)

(173) 「いた!, いた!」声がして, 清がくる。(八月75)

2) 確 認

あいてにたしかめるばあいにも、過去形がつかわれる。

(174) ところで、はなしはちがうけれど、先生のクラスに浅井吉男という子がいましたね。(の壁201)

(175) 石川君とかいいましたね。きけば、あんたも死刑囚だそうだが、よくおちついていられますね。(狭山126)

つぎの例では、できごとは、未来にある。

(176) きょう職員会がありましたね。

3) おもいだし

存在をおもいだしたときに、すぐそれをのべるものである。

(177) ああ、そうだ。手りゅう弾があった。(野火149)

(178) そういえばそんなような歌があったなア。(故旧57)

(179) (ハッとおもいだして、まじまじみる) ああ、市さんの娘で……いたいた、女の子が……そだそだ、塚本の息子といっしょに東京サいったんだべ、あんた？(津軽9)

(180) あの人、なんとかいったね。(多情30)

第4節 いますぐの命令

「した」が命令をあらわすことがある。この用法は鈴木重幸1965によって「ぞんざいな命令」といわれたものであるが、ぞんざいというほかに、今すぐの成立を要求するという特徴をもっている。この点は、命令形や、それに準ずる形とことになっている。

- ・あしたいけ！(○)
- ・あしたいきなさい！(○)
- ・あしたいってください！(○)
- ・おまえは、あしたいく！(○)
- ・あしたいくんだぞ！(○)
- ・あしたいった！(×)

この用法の位置づけはむずかしい。けれども、いますぐでなければならぬ

ということと、過去形であるということとは、関係があるだろう。

寺村秀夫1971は、これを「さし迫った要求を、既に実現したことのよう
いなしで表わす」ものとしてとらえている。

(181) はなよめさん、こちらをむいてください。じゃまものはどいたどい
た。……ハ—イ…… (妹81)

(182) いそいだ, いそいだ。(時計65)

(183) ちょっと, まった。(約束27)

(184) 後家だよ。……まだ色気あるぜ。……はったはった! (津軽49)

(185) さアさ, のいたのいた。しごとのじゃまだ。(女生31)

(186) いいから, だんだんにはなす。のんだのんだ。(砂の50)

(187) いいな, ひっこんだ, ひっこんだ。(寅次8)

応答詞, または, かけごえにちかいものに, 「よしきた」「ほらきた」のよう
なものがあるが, これらは, この用法からの派生ではないかとおもわれる。

(188) よしきた, ひきうけた。(時計65)

(189) 思案六ポウ……ほいきた! (津軽62)

第Ⅵ部 完成相のテンス形式に 準じる継続相

第1章 完成相あわせテンス形に 相当する継続相について

第1節 前非過去形と前過去形に相当する 「している」と「していた」

継続相「している」「していた」は、ほんらい継続相アスペクト、つまり、動詞のあらわす動作をその一定の局面のなかにあるすがたでさしだすというアスペクト的な意味をもつ形式である。ところが、この形式は、一定の時以前に、動詞のあらわす動作またはその一定の局面がまるごとのすがたで完成したというテンス・アスペクト的な意味をあらわす形式として、はたらくことがある。つまり、アスペクト的には完成相の意味を、テンス的には相対的テンスとしての以前の意味をあらわす形式として、はたらくことがある。完成相の絶対的なテンスをあらわすテンス語形は、「する」「した」のように総合形式のでつづきでつくられるが、この相対的テンスをあらわす形式は、「して」と、「いる」または「いた」とがくみあわさる分析形式としてつくられる。あわせテンス形に相当するというのは、分析形によってつくられるテンス形式に相当するという意味である。このあわせ形式は、継続相の形式と同じである。したがって、この形式をおもんじて、継続相のひとつの用法としてとらえることにする。そして、意味的にテンス形式に準ずるものとして、この部のタイトルのようなかたちで、この形式を名づけた。

この「している」は、現在、または未来の一定時を基準として、それよりまえに完成することをあらわすので、完成相前非過去形に相当する継続相前非過去形とよび、また、この「していた」は、過去の一定時よりまえに完成することをあらわすので、完成相前過去形に相当する継続相過去形とよぶことにする。

(もっとも、このよびかたは長いので、適宜ちぢめてよぶ。)

この「している」は、現在または未来のある時点より以前に動作が完成すること、したことをあらわし、「していた」は、過去のある時点より以前に動作が完成したことをあらわすのが、テンス・アスペクトとしての基本的な意味である。

〔前非過去形に相当する形〕

ア) むすこはすでに大学を卒業している。……現在以前に完成（前現在）

イ) わたしが定年になるまえに、むすこは大学を卒業している。

……未来のある時以前に完成（前未来）

〔前過去形に相当する形〕

ウ) わたしが定年になるまえに、むすこは大学を卒業していた。

……過去のある時以前に完成（前過去）

「～まえに」というのは、それ自身がひとつの時をしめすので、イ)は「卒業する」に、ア)、ウ)は「卒業した」にかえることができるが、「現在では」「～ときには」にして、その以前に完成したことをあらわすためには、ふつう、この形式をもちいなければならないだろう。

エ) 現在では、むすこは大学を卒業している。

オ) わたしが定年になるとときには、むすこは大学を卒業している。

カ) わたしが定年になったときには、むすこは大学を卒業していた。

第2節 いわゆる「経験・記録」について

この用法は、従来、継続相アスペクトの派生的な意味として、「経験あるいは記録」をあらわすものとされていた。その例を、鈴木重幸1972からひく。

(1) かれは二十代に画期的な論文をかいている。

(2) かれは去年の三月彼女と結婚しています。

(3) かれはこれまでに保証人のことでなんどもひどいめにあっています。

この経験・記録は、継続相の基本的な意味のひとつである結果の局面のなかにあるすがたからの派生とし〔位置づけられていた。つまり、過去の動作が現在となんらかのつながりのあるものとしてとらえられていたのである。このとらえかたは、工藤真由美1982の「現在有効な、過去の運動の実現」という名づ

〔注〕 高橋太郎1969も、そのようにあつまっている。

けがよくあらわしてくれている。工藤は「この派生的な意味に二つの用法がある」としている。

①は過去に実現した運動が、記録として現在残されていることを表わしているものであり、②は、過去に実現した運動が現在の状態になんらかのかかわりをもっているものである。

工藤のあげた①、②の例から二つずつひいておく。

〔①の例〕

(4) 中山種が大室よしのに宛てた葉書きによると、種は昭和二十四年七月に霧積で八尾出身の人物×に会っています。(人間の証明)

(5) 具志顕文若は一七五七年に書いた「独物語」のなかで、「(略)」となげいている。(沖縄)

〔②の例〕

(6) これまでに幾つも見ているの。(星と祭)

(7) しかし君はおとしも出席が悪くて落ちてるぞ。(二十一才の父)

工藤1982は、これまで「経験・記録」といわれてきたものから、まさに記録の名にふさわしいもの(①)と、経験の名にふさわしいもの(②)を分けてとりだしたところに功績がある。工藤の①は、記録が現在にあるということで現在とむすびつけようとしているが、これは、かならずしも文書上の記録にむすびつけなくてもよいだろう。また、②も、現在と「なんらかのかかわり」という、その内容がはっきりしない。

たとえば、第1節のア)を、つぎのキ)とくらべてみよう。

ア) むすこはすでに大学を卒業している。

キ) むすこは大学を卒業している。

このキ)のほうは、ク)のようにかえても、その内容はかわらないとおもわれるが、ア)は、ク)のようにかえることができない。

ク) むすこは大学出である。

キ)のばあいには、その経験が経歴として現在のむすこの質的な属性になっているが、ア)は、そうはいえない。ア)に現在とのつながりをもとめるとすれば、現在以前であるということしかないだろう。そうすると、ア)は②でないことになる。しかも、これは現在記録がのこっているわけでもないから、①でもなく、ゆきばをうしなってしまう。この①②を、筆者は、どちらも、現在以

前の動作やできごとを質化したものとしてとらえる。それは、このあわせテンス形に相当する「している」のなかで派生的な意味であって、アスペクトから解放されている。このことについては、つぎの節でのべる。

この用法としての基本的なものは、アスペクト的には完成相の基本的な意味をそなえ、テンス的には、相対的テンスとしての以前をあらわすのである。それがアスペクトから解放されたものは派生的であるとかんがえられる。歴史的なプロセスはおっていないのでわからないが、現代語のなかでは、こちらの「している」は、そういう相対的テンスに中心があって、その派生として、アスペクトから解放された「経験」「記録」をあらわすものがあるとかんがえるほうが、とらえやすい。

なお、これをテンス形式相当ととらえることは、第5節、および、第3章第4節でのべる非現実の仮定のばあいには、ムードとテンスの関係としてのみあつかえて、アスペクトの側面をからませる必要がない点でも有利である。

第3節 現在以前の動作やできごとの質化

現在以前に完成した動作というのは、事実上、過去に完成した動作とおなじことである。このため、完成相前非過去形に相当する継続相非過去形が、完成相過去形とおなじ事実をあらわすことができる。

ケ) 今年の夏の大会は、A校が優勝している。

コ) 彼は三年まえに一度離婚している。

サ) 今年の夏の大会は、A校が優勝した。

シ) 彼は三年まえに一度離婚した。

このようにテンス的にシノニムであることが、その形式の内容を分化させる力としてはたらいたのであろうか、この「している」の形は、アスペクトから解放されて、質をあらわすものへと移行してくる。ケ)の文は、できごと過程としてA校が優勝したということよりは、優勝校がA校であることをのべている。つまり、できごと過程から、特徴的な側面をひっぱりだしてのべているのである。これは、第Ⅱ部第4章第3節でのべた「いや、はじめてみる」と同種の質化である。そして、非過去形「している」のばあいには、テンスからも解放されていることになる。これが記録であるとかんがえる。そして、この記録

に属するもののうち、述語が主語のさししめすものの質的な属性をのべることになるコ)のようなものは、主体の経歴をのべるものとして、とりだすことができるのだとおもう。これが「経験」である。

これらは、過去形「していた」にすることもできる。そのばあいには、アスペクトから解放されるだけで、テンスからは解放されないことになる。このあたりのテンスとアスペクトの関係は、第II部第4章でのべたのとおなじである。

こうしてできた(テンス・)アスペクトから解放された記録の用法は、実況放送の、事後の解説にさかんにつかわれる。

ス) ファール。バットのさきをかすめています。

セ) ファール。バットのさきをかすめていました。

工藤真由美1982のあげた例も、この質化したものに属するだろう。

第4節 発見、確認、おもいだしの ばあいの「していた」

完成相のテンス形式に準じる継続相も、ふつうの継続相と同様、過去形にして、発見、確認、おもいだしをあらわすことができる。

戸籍抄本をとりよせて、はじめてみつけたとき、過去形でいうことができる。

ソ) あいつ、三年まえに離婚してたよ。

このばあいは、発見であり、つぎのばあいは、おもいだしである。

タ) あ、そうだ。去年の正月Aさんのうちで、あのひとにあっていました。
また、つぎのばあいは、確認である。

チ) あなたもまえに、たしか、あのひとにあっていましたね。

第5節 非現実の仮定のばあいの テンスの諸形式

動詞は、「する」「した」「している」「していた」などの、いろいろのかたちになって、非現実の仮定の帰結の述語につかわれる。この四つの形は、形式的には、前二者が完成相、後二者が継続相であるが、アスペクト的な意味は、後二形も定成相相当である。

ツ) あのととき、もしおまえだったら、ないたね。

この文のなかの、「ないたね」は、「なくね」「ないているね」「ないていたね」にかえても、その意味するところはかわらない。同様に、つぎの文の「いくよ」も、「いったよ」「いってるよ」「いってたよ」のどれにでもかえることができる。

テ) おまえが知らせてくれなかったら、おれ、あした、いくよ。

さししめす時の面からみると、前文は過去のこと、後文は未来のことをいっているが、それは、そのテンス形式と一致しない。つまり、テンス的な意味がテンス形式から解放されている。

これらの例の「している」「していた」を、この部に属する、完成相のテンス形式に準じるものとしてとらえるとき、これらの四形のどれをつかってもよいということの理由として、このようにテンスから解放されるのは、反実仮想というムードによるものとして、つまり、ムードとテンスの関係による説明を適用することができる。この点からも、これをテンス形式相当ととらえることは、体系性になっている。

第2章 完成相前非過去形に相当する 継続相非過去形

第1節 現在以前における動作の完成

1) 現在以前の完成

前非過去形の基本的な意味は、現在以前に動作なりできごとなりがまるごとのすがたで完成したことをあらわすことである。

(8) 一雄君、君は横領もやってるね。(狭山40)

(9) ですが、叔父さんは久美子さんにおあいになっている。

(松本清張「球形の荒野」284, ポケット文春)

(10) 6回の表、印旛高校が待望の先取点をあげています。(81)

(11) 6回の表にタイムリーヒットをうたれて、1点をゆるしています。(81)

(12) 最初の障害で5ワクのパロンエイトが落馬しています。これから第1コーナー、第4コーナーにむかってまいります。(7R)

以上の例は、「すでに」をおぎなっても意味がかわらないだろう。じっさいに「すでに」や「はやくも」などのついたものもある。

(13) エンゲルスは、すでに自然弁証法のなかで物理学の常数は量が質へ転化する接合点を表示するものであることを指摘している。(原子334)

(14) いやわが国は、日本からの要請ですでに百万受け入れの内示をしている。(日本98)

(15) 連中は、重臣たちをすでに六人もころしている。(戒嚴42)

(16) 真弓が今シーズンははやくも2本のホームランをうっています。(神広)

2) 継続相とのちがい

ここでいう「継続相」は、第Ⅲ部第3章でのべた、継続相の「ある局面の完成後につぎの局面のなかにあるすがた」をあらわす用法である。

(17) 業務がすでにはじまっている。(華麗14)

(18) 日ごろ、池氏愛用の望遠鏡も、長い道路をゆられたため、いたるところ故障を生じている。(未知325)

これらの例は、その動作の変化過程がおわったことをあらわしている点では、前非過去形相当の形式と共通している。けれども、それと同時に、現在、持続過程をなす変化結果の局面のなかにあることをあらわしている点がちがっている。なぜなら、前非過去形相当の形式のばあいは結果の局面は問題にされておらず、動作の全過程が完成したものとしてさしだされているからである。

けれども、結果の過程がひじょうにながくつづくものについては、現在が、まだ大きなできごと過程のなかで結果の局面のなかにあるともとれ、中間的であると、いえるかもしれない。

(19) 強い発ガン性物質は、百種以上みつかっている。(暗号150)

(20) いえ、辺見時代は、とくにすぎてますよ。(自由333)

第2節 現在以前の動作やできごとの質化

1) 現在以前の動作やできごとの質化

つぎのようなものは、「すでに」をつけられない。なぜなら、それがそれ以前のことであるということは強調されておらず、現在以前におこったそれは、そういうものであったということのをべているのだからである。できごと過程から特徴的なものをぬきだすことによってアスペクトから解放され、過去の動作やできごとであるのに、非過去形でのべる点で、テンスからも解放されている。

(21) マキャベリの「君主論」はイタリア・ルネサンスの先駆をなすフィレンツェ自由都市のはつらつとした空気のなかで生まれている。(学問239)

(22) 「ライフ誌」はアメリカ軍では特攻隊のことを「バカ」というアダナをつけていたことを報じている。(革命144)

(23) 2月6日15時羽田発日航311便は、大阪伊丹空港に定時の16時55分についています。これは、17時10分に福岡板付にむかってたち、予定どおり、板付空港には19時10分についています。(松本清張「時間の習俗」光文社 KAPPA NOVELS85)

(24) 「その男はさいごまで一行と行動をとみにしたでしょうか?」「いや、やはり途中で帰っています。」(同上324)

(25) きていました。私はその人が葬儀委員の二人とあいさつをかわしていたのをみています。(同上57)

これらは、過去のできごとがそういうものであったことをのべているのである。動作が完成したことをのべているのではなく、そのような質であったことをのべているので、特徴が動作からぬきだされていて、アスペクトから解放されている。そして、それが過去のことであるにもかかわらず非過去形でのべられているのは、テンスからも解放されているということである。これは、つぎの(ア)とイ)がおなじことを非過去形と過去形のどちらででもいえるのとなっている。

ア) あのときのできごとは、そういうものである。

イ) あのときのできごとは、そういうものであった。

つぎのようなものは、もしこれが過去のある時(本件犯罪のとき)を基準にしてそれよりまえに完成したことをのべるなら、前過去形相当の形「ひっこししていた」にならなければならない。これは、本件の2か月まえにひっこしたという事実があるということのをべているのであって、質化して、テンスから解放されているのである。

(26) ところが証人は今年の四月、本件犯罪の二か月まえ、厚木から長後町へひっこしている。なぜですか。(新藤兼人「事件」79,年鑑代表シナリオ集'78)

2) 基本的ということについて

この第2節の意味をもつものは、第1節のそれよりずっと使用例がおおい。また、第1節のようなものが「すでに」「とくに」などの状況語との共起という構造にしばられることが多いのに対して、こちらはかなり自由である点からみると、こちらのほうが基本的だということになるかもしれない。

つぎのような例は、どちらにも解釈できるが、構造的に「すでに」がないので、こちらのように解釈してもよいだろう。

(27) 1963年の第9回米国人工臓器学会では、米国の一医学者が、つぎのように発言している。(人工372)

(28) その年の十二月に、今西・川村・井谷の三人は、さっそくに都井岬から高畑山をこえて市木にでて、幸島のサルの下しらべにいっている。

(高崎30)

こうしたこともふくめて、現代語のなかでは、質化しているもののほうが中心であるといえる。けれども、派生の過程をかんがえると、第1節のようなも

のがまずあって、それが変質して、アスペクトから解放されたととらえるほうが、全体の説明がしやすいので、このような記述をすることにした。

3) 解説的ないいかた

この用法は、実況放送において、以前の事実を解説的にのべるとき、ひじょうによくつかわれる。

- (29) ストライク。はいりました。インサイド、直球が、おもい直球がインサイドにはいっています。(81)
- (30) うった。ファウル。打球が足にあたっています。(巨神)
- (31) たかいところからすうっとキャッチャーの月山のミットにおさまるときには、ボールがすとんとおちています。(81)
- (32) ボール。ハーフスイングのバットをとめています。(巨神)
- (33) 蔵王錦、左のこしにくつつきまして、右からかいなをひきつけまして、さいごは右足で若島津の足をはらっています。(7月)
- (34) 富士桜の首すじをはたきますと、富士桜、足がながれて頭から土俵におちております。(5月)
- (35) 第52回東京障害オープンの手ハンデ戦がおこなわれました。二番人気のトキノツヨシが1番でゴールインしています。(7R)

第3節 未来のある時以前の動作の完成

前未来の用法は、じっさいの話しのなかでときどき耳にするのだが、今回の資料のなかでは見いだすことができなかった。そこで、いたしかたなく調査をこころみた。この調査は、女子短大生とOL35人に対しておこなったものである。結果は、解答らんの右にしめす。なお、第4問と第5問は、「していた」の形であるので、第3章でです。

いえるものには「○」を、いえないものには「×」を、いえるかいえないかわからないものには「△」をかきいれてください。(ぜんぶが○になっても、ぜんぶが×になってもかまいません。そんなことは、気にしないでやってください。)

1. 「あのひとは、いまでもすでにおばあさんなのだから、あなたが死ぬまえに

_____。」

- | | | | |
|---|-----------|----------------------------------|-------|
| { | 死にますよ。 | <input type="text"/> ○35 | 計 35名 |
| | 死にましたよ。 | <input type="text"/> ×35 | |
| | 死んでいますよ。 | <input type="text"/> ○32, △2, ×1 | |
| | 死んでいましたよ。 | <input type="text"/> △1, ×34 | |

2. 「あのひとは、いまでもすでにおばあさんなのだから、あなたが死ぬころには_____。」

- | | | | |
|---|-----------|----------------------------------|-------|
| { | 死にますよ。 | <input type="text"/> ○20, △8, ×7 | 計 35名 |
| | 死にましたよ。 | <input type="text"/> ×35 | |
| | 死んでいますよ。 | <input type="text"/> ○34, ×1 | |
| | 死んでいましたよ。 | <input type="text"/> ○3, ×32 | |

3. 「えっ? 十年後? 十年もたてば, その程度のことは、だれかが_____。」

A. 5年後ぐらいにやることを

想定して。

- | | | |
|---|--------|----------------------------------|
| { | やるよ。 | <input type="text"/> ○24, △6, ×5 |
| | やったよ。 | <input type="text"/> ○4, △4, ×27 |
| | やってるよ。 | <input type="text"/> ○35 |
| | やってたよ。 | <input type="text"/> ○3, △2, ×30 |

B. 10年後ぐらいにやることを

想定して。

計 35名

- | | | |
|---|--------|----------------------------------|
| { | やるよ。 | <input type="text"/> ○35 |
| | やったよ。 | <input type="text"/> ○2, △2, ×31 |
| | やってるよ。 | <input type="text"/> ○32, △2, ×1 |
| | やってたよ。 | <input type="text"/> △1, ×33, 白1 |

6. 「彼女(現在大学1年生)は、大学を卒業するまえに、たぶん三曲ぐらい_____。」

- | | | | |
|---|----------|------------------------------|-------|
| { | 作曲するよ。 | <input type="text"/> ○33 | 計 33名 |
| | 作曲したよ。 | <input type="text"/> ○1, ×32 | |
| | 作曲しているよ。 | <input type="text"/> ○33 | |
| | 作曲していたよ。 | <input type="text"/> ×33 | |

7. 「彼女(現在大学1年生)は、大学を卒業するころにはたぶん三曲ぐらい_____。」

- | | | | |
|---|----------|----------------------------------|-------|
| { | 作曲するよ。 | <input type="text"/> ○28, △4, ×1 | 計 33名 |
| | 作曲したよ。 | <input type="text"/> ×33 | |
| | 作曲しているよ。 | <input type="text"/> ○33 | |
| | 作曲していたよ。 | <input type="text"/> ×33 | |

この結果をみると、どれにも、完成相非過去形「する」と完成相前非過去形に相当する継続相非過去形「している」とがあって、その両方が可能であるこ

とをしめしている。

しかし、基準の時点を「スルマエニ」としたものの(1, 6)は、「する」のほうが多いか(1), 両者がおなじであるか(6)であるのに対し、「スルコロニハ」としたものの(2, 7)では、「している」のほうが多い点は、前未来という文法的意味がいきているのだとおもう。この点は、第3問のA, Bについても、同様にあらわれる。

この調査は、「している」という形が前未来の意味をもっていることをしめしている。

なお、つぎの2点に注意しておく。

- i) 「～スルマエニ」のときにも「シテイル」があらわれることは、継続相アスペクトとしての結果の状態でなく、前未来というテンス的な意味があることをしめしている。
- ii) 少数ではあるが、「した」や「していた」に○をつけているものがあった。これについては、まちがい反応としてうけとめておく。

第3章 完成相前過去形に相当する 継続相過去形

第1節 過去のある時以前の動作の完成

過去のある時のことが問題になっているとき、それよりまえに動作が完成したことをあらわすのに、完成相前過去形に相当する継続相過去形がつかわれる。

(36) ところがこの二年前に、湯川秀樹氏が、それだけでは理論的にわりきれないとして、「中間子」の存在を予言していた。(根源105)

(37) 女たちは城をでるとき、重治に目通りしていた。女たちはそれだけで重治のために死ぬことをよろこんでいるのだった。(落城40)

(38) 豊は前夜それを竜岡にもらっていた。(暗夜37)

(39) 彼女は、《チャッターレー夫人の恋人》という本も、戦前によんでいた。
(自由51)

(40) 翁は上京後諏訪の方へあて手紙をよこしていた。(無限9)

(41) すでに1915年(大正4年)東京帝国大学教授で、医学部病理学教室の主任であった山際勝三郎博士と、その助手であった市川厚一氏は、ガンを人工的につくることに成功していた。(暗号149)

みじかい時間差であっても、前後関係が問題になるとときには、このかたちがつかわれる。

(42) ライト。ライナーがのびすぎました。ランナーがスタートしている。ボールが^ゴーるいおくった。ダブルプレー。初球うち。みごとなヒットをみせました6番の土屋。ライトへ糸をひくようなあたり。ランナーがスタートをきっていました。そのために辻井もどることができませんで、ライトからファーストの吉村にかえてダブルプレー。(81)

なお、「スタートしている」は、前非過去形に相当する継続相非過去形が現在以前をあらわしている例である。

さきに第2章でひいた調査の第4問、第5問は、つぎのとおりである。

4. かれ(現在50才)は大学を出るまえに三曲[]。』

作曲する。	☐ ○ 3, △ 5, × 27	計 35名
作曲した。	☐ ○ 35	
作曲している。	☐ ○ 32, △ 2, × 1	
作曲していた。	☐ ○ 34, △ 1	

5. 「かれ（現在50才）は、大学を卒業したときには三曲☐。」

作曲する。	☐ × 34	計 34名
作曲した。	☐ ○ 14, △ 7, × 13	
作曲している。	☐ ○ 23, △ 5, × 6	
作曲していた。	☐ ○ 34	

この「作曲していた」がこの項にあたる。なお、「作曲している」は、第2章第2節でのべた質化されたものである。

第2節 現在以前の動作やできごとの 質化されたものの過去

さきに第2章第2節で、過去の動作やできごとが質化されたものを取りあげた。そして、それがアスペクト、テンスから解放されているとのべた。

つぎのようなものも、やはり現在以前の動作を質化したもので、アスペクトから解放されている。これは瞬間的な動作であって、継続相の基本的な意味が実現されているわけではない。ところで、こちらは、第2章でとりあげたものとちがって、「していた」の形がつかわれている。これは、現在以前の動作の質を過去であらわしているのであって、テンス的な意味がはたらいっている。

(43) ファウル。外角ストレートをねらいましたが、ちょっとふりおくら
ておりました。(81)

(44) あたりはよかったが、レフト門田の正面をついておりました。(81)

(45) ファウル、ファウルです。わずかにバットにかすっておりました。(81)

つぎのようになると、ここに属するもののようでもあり、継続相の意味がはたらいっているようでもあり、はっきりしない。

(46) 右からすくいなげでなげをうちかえしたんですけれども、千代の富士は、あごをひいていました。(7月)

(47) 出羽の花もきょうはよくふみこんでおりました。(7月)

- (48) 翌日の新聞は、不況の経営をきりぬけるために首きり役としてとくに就任した社長が、争議団を不法侵入でうったえ、警官と争議団があらそって、けが人がでた、と報じていた。(火の86)
- (49) 先だって、三好達治君が、信州発哺のことを新聞にかいていた。
(私の35)
- (50) 「だれがそんなことをいった。」「久米公がきて、そういっていた。」
(末枯31)

第3節 現在以前に完成した動作の 発見、おもいだし

現在以前に動作が完成したことは、ふつうは、過去形、または前非過去形に相当する継続相非過去形であらわすのだが、そのことに気づいたとき、そのことをおもいだしたときには、前過去形に相当する継続相過去形であらわすこともできる。

これも、今回の資料のなかにみつからなかったので、アンケート調査をおこなった。インフォーマントは、第1～3問は前章と等質の20名、第4～5問は、おなじく22名である。

1. 校長が養護教諭に「あなたは、A子の目の検査をもうしましたか?」とたずねたとき、
 - 1) はい、月曜日にしました。 ☐ ◎5, ○15
 - 2) はい、月曜日にしています。 ☐ ○11, △4, ×5
 - 3) はい、月曜日にしていました。 ☐ ×20
2. 「B子の検査もしましたか?」——「ちょっとまってください」といって記録をみる。先月のはじめにした記録をみつけて、
 - 1) あっ、しました、しました。 ☐ ○19, ×1
 - 2) あっ、しています。 ☐ ◎4, ○15, ×1
 - 3) あっ、B子もしました。 ☐ ○16, △3
3. 「C子はどうですか?」——「あの子はP組ですので、記録がむこうのへやにあります。ちょっとまってください。」といっって見にいく。そして、かえってきて、
 - 1) C子も しました。 ☐ ◎1, ○13, △1, ×5

- 2) C子も しています。 ☐ ○18, △1, ×1
- 3) C子も していました。 ☐ ◎4, ○15, △1
4. 「あなたは、Aさんにあったことがありますか?」
- 1) はい、去年の正月に一度あいました。 ☐ ◎9, ○13
- 2) はい、去年の正月に一度あっています。 ☐ ○19, △2, ×1
- 3) はい、去年の正月に一度あっていました。 ☐ △1, ×21
5. 「では、Bさんにあったことは?」「ありません。」「ほんとうですか。よくかんがえてください。おもいだしませんか。」そこでおもいをめぐらしていると、C子のうちで去年の夏にあったことをトツゼンおもいだす。
- 1) あっ、あいました、あいました。 ☐ ◎3, ○16, △1, ×2
- 2) あっ、あってます。 ☐ ○11, △3, ×8
- 3) あっ、あってました。おもいだしました。 ☐ ◎1, ○17, ×3

これを見ると、発見やおもいだしでないばあい(1, 4)は、完成相過去形や、完成相前非過去形に相当する継続相非過去形がつかわれるのに対して、発見やおもいだしのばあい(2, 3, 5)には、それにくわえて、完成相前過去形に相当する継続相過去形もつかわれることがわかる。

第4節 非現実の仮定のばあいのテンス

つぎの例では、過去の非現実の仮定に対する帰結の述語に、完成相過去形がつかわれている。

- (5) その気になれば宏さんが払ったわ。五万円も貯金していたのよ、宏さん。(新藤兼人「事件」44, 年鑑代表シナリオ集'78)

この「払ったわ」は、「払ってるわ」「払ってたわ」にしてもよいだろう。

これについても、調査をこころみた。第5, 6問は、比較のため、単なる推量のばあいの例をあげた。結果の点は、当研究所日本語教育センターの研修生10名があたえた点の総計である。

1番ぴったりするもの4点, 2番3点, 3番2点, 4番1点。ただし、まったくダメなものは0点。(そのばあいでも、1番は4点, 2番は3点, 3番は2点をつけてください。)

- 1) もし、もう1時間はやくガスが爆発していたら、
- | | | | |
|---------------|---|-----------|-------------|
| わたしたち、みんなあそこで | { | 死にますね。 | <u>0</u> 点 |
| | | 死にましたね。 | <u>22</u> 点 |
| | | 死んでいますね。 | <u>28</u> 点 |
| | | 死んでいましたね。 | <u>40</u> 点 |
- 2) なに? P子、やらなかったの? だらしないわね。
- | | | | |
|-----------------|---|--------|-------------|
| (あのとき) Q子なら、きっと | { | やるわ。 | <u>14</u> 点 |
| | | やったわ。 | <u>27</u> 点 |
| | | やってるわ。 | <u>34</u> 点 |
| | | やってたわ。 | <u>33</u> 点 |
- 3) (あのとき) わたしだったら
- | | | |
|---|--------|-------------|
| { | やるわ。 | <u>16</u> 点 |
| | やったわ。 | <u>22</u> 点 |
| | やってるわ。 | <u>29</u> 点 |
| | やってたわ。 | <u>32</u> 点 |
- 4) もしおまえが(中止を)知らせてくれなかったら、
- | | | | |
|--------|---|--------|-------------|
| おれ、あした | { | いくよ。 | <u>7</u> 点 |
| | | いったよ。 | <u>21</u> 点 |
| | | いってるよ。 | <u>29</u> 点 |
| | | いってたよ。 | <u>34</u> 点 |
- 5) 「Aのやつ、きのうどうしたかな」——あいつのことだから、
- | | | | |
|--------|---|--------|-------------|
| きつとうまく | { | やるよ。 | <u>5</u> 点 |
| | | やったよ。 | <u>34</u> 点 |
| | | やってるよ。 | <u>30</u> 点 |
| | | やってたよ。 | <u>9</u> 点 |
- 6) 「Bのやつどうしたかな」——ちょうどいまごろ京都駅に
- | | | |
|---|--------|-------------|
| { | つくよ。 | <u>21</u> 点 |
| | ついたよ。 | <u>19</u> 点 |
| | ついてるよ。 | <u>39</u> 点 |
| | ついてたよ。 | <u>0</u> 点 |
- 7) もし事故がなかったら、わたしたち、いまごろ東京駅に
- | | | |
|---|--------|-------------|
| { | つくね。 | <u>6</u> 点 |
| | ついたね。 | <u>14</u> 点 |
| | ついてるね。 | <u>37</u> 点 |
| | ついてたね。 | <u>35</u> 点 |

これをみると、仮定の動作の時間が過去、現在、未来のいつであっても、完成相前非過去形に相当する継続相非過去形「している」と完成相前過去形に相当する継続相過去形「していた」とがでやすく、完成相単純過去形がそれにつぎ、単純非過去形がいちばんでにくいことがわかる。

この調査で、第1問の「する」が0点で、第2～3問の「する」がそれより高い点をとっているのは、たぶん第1問が過去の個別的なできごととしてはっきり位置づけられていることによるのだとおもわれるが、この調査だけからは、それ以上いわないほうがよいだろう。「している」と「していた」のちがいも、個別性、あるいは、できごと過程の時間的位置などがたぶんきいているのだとおもわれるが、ここでは、あまりふかいりしないほうがよいだろう。ここでは、ともかく、そうした形がつかわれるということをのべておこう。

現在の単なる推量のばあいには、「していた」はつかわれない。現在の単なる推量で、「している」がもっとも優勢であることは特筆にあたいます。けれども、このことも、将来「するだろう」「しているだろう」などの形をしらべてから結論をだしたい。

非現実の仮定のテンスは、ムードとからめないと、とけないものであり、ここではこうした事実があることをのべるにとどめる。ただし、くりかえしになるが、各問ごとに、これらの諸形式は、それぞれおなじアスペクト的な意味を実現しており、これらのちがいが、テンスとムードのかかわりのなかにあるのだということを強調しておきたい。

第Ⅶ部 継続相非過去形のテンス

第1章 継続相のテンス

第1節 継続相のテンスのふたつの あらわれかた

1) ある時間位置において持続過程のなかにあること

継続相は、アスペクトの面で完成相と対立している。つまり、完成相が動詞のあらわす動作またはその一定の局面を始発から終了までふくめたまるごとのすがたでさしだすのに対して、継続相は、その動作を、持続過程をなす一定の局面のなかにあるすがたでさしだす。このことは、テンスの面での両者の対立ともつながる。つまり、完成相のテンスは、動作またはその一定の局面が、一定の時間位置において、まるごとのすがたで成立することをあらわし、継続相は、動作が、一定の時間位置において、持続過程をなす一定の局面のなかにあることをあらわす。

たとえば、タ)が、その動作がまるごとのすがたでさっき成立したことをあらわすのに対して、チ)は、さっきその動作が運動の局面のなかにあったことをあらわす。したがって、タ)のばあいには、現在は、すでにその運動がすすんでいるのに対して、チ)のばあいには、その動作がいつ終わったかに無関心であって、現在もはしっているのかどうかかわからない。

タ) 太郎はさっき運動場ではした。

チ) 太郎はさっき運動場ではしっていた。

継続相のこのようなテンス的な意味は、その時間位置が過去、現在、未来のどこにあっても、同様になりたつ。

チ) 太郎はさっき運動場ではしっていた。

ツ) 太郎はいま運動場ではしている。

テ) 30分後に運動場へいけば、太郎はトラックをはしているよ。

このテ)のばあいも、現在のことにふれていないが、現在もはしっているの

かもしれない。つぎの例なら、たぶん、いまもはしっている。

ト) このしごとをすませてからいけ。30分ぐらいたったって、太郎は、まだ運動場をはしっているよ。

こうしたばあいの基準時間は、瞬間にかぎられない。

ナ) ぼくは運動場に2時間ほどいたが、そのあいだ、太郎は、ずっとはしっていた。

このばあいも、その2時間のまえのいつから、あるいは、そのあといつまではしっていたかには無関心である。

以上1)でのべたことは、継続相のアスペクトの性格と単純なかたちでかわっている。そして、これが継続相のテンスのあらわれかたの、かなりの部分をしめている。

2) ある時間位置のなかで持続が成立すること

継続相のテンスが、いつも一定の時間位置において持続過程のなかにあることをしめしていれば簡単なのだが、もうひとつ、持続過程そのものがその時間的位置にあることをあらわすばあいがある。そして、こちらも、かなりおおくの使用例をもっている。

ニ) きのは、あさの8時からばんの8時まで店があいていた。

ヌ) きのは、12時間店をあけていた。

ネ) では、2時から2時半までまっています。

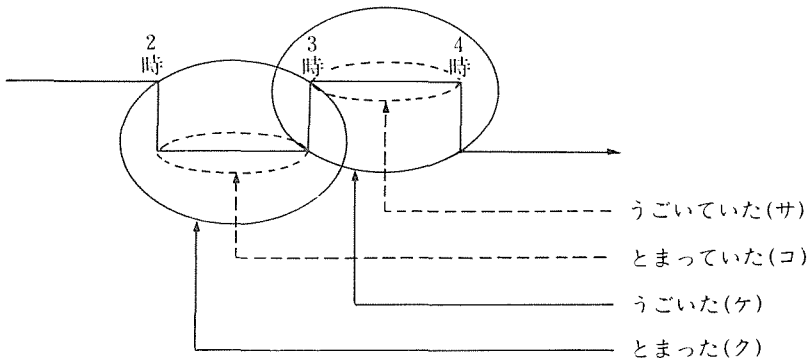
ノ) じゃ、2時から30分まってるよ。

これらの文は、その時間帯のことだけでなく、その時間帯の前後にはそのような状態がないことまでつたえている。とくに、12時間とか30分とか持続時間のながさが指定されているばあいには、そのことが積極的につたえられているといってもよいだろう。そして、これらは、完成相にかえて、「あいた」「あけた」「まちます」「まつよ」にしても、そのさししめすことがらがかわらない。このことは、チ)～ナ)のばあいとは、ちがっている。このことをかんがえると、やはり、一定の時間位置において持続過程が成立するという意味は、一定の時間位置において持続過程のなかにあるという意味と区別しておかなければならないだろう。

ここで、テンスとアスペクトの関係にふれておく必要がある。

さきに第II部第1章第1節で、つぎの4例がしめすアスペクト的なちがいをしめすために図をもちいたのを、もういちど、ここでとりあげる。

- サ) 時計は3時から4時までうごいていた。
- コ) 2時から3時までとまっていた。
- ケ) 3時から4時までうごいた。
- ク) 2時から3時までとまった。



アスペクトのばあいには、動詞のあらわす動作が、基準時間において、その過程の局面とかかわるすがたが問題であった。したがって、実線でかこまれたところと点線でかこまれたところとは、質的なちがいとなってあらわれた。ところが、テンスのばあいには、動作が成立する時間位置が問題になる。そうすると、このばあいの完成相と継続相のちがいは、ちいさいものとなる。

継続相のテンスが一定の時間位置に持続過程が成立することをあらわすと、そのテンス的な性格が完成相のテンスとにてくる。それは、持続過程の始発と終了がしめされるからである。

さきに第IV部第1章第2節で、完成相のテンスは基準時間のなかで動作過程が始発から終了まですすむことをあらわすのであり、そのために、文章のなかで、あいならぶ文とのあいだに順次性が生ずることをのべたが、継続相であっても、この2)の用法のばあいには、そのようなものがあらわれてくる。

- (1) 「どうもいろいろお世話になります。」父はこういった。そうしてまた昏睡状態におちいった。枕べをとりまいてる人は無言のまましばらく病人のようすをみつめていた。やがてそのうちの一人が立って次の間へでた。するとまた一人立った。私も三人目にとうとう席をはずして、自分

のへやへきた。(ここ143～144)

ただし、いつも順次性があらわれるとはかぎらない。

- (2) 話しつかれた二人はしばらくだまっていた。波うちぎわをゆっくりあるいてくる娘と社長のすがたがみえた。ほたるの火がひとすじヤシのなみきのなかからながれてきた。娘は手にもっていたうちわをさしあげた。ほたるの光はそれにちょっとからまったが、ひくくはずれて海のうえをわたり、またたかくあがって、星かげにまぎれこんでみえなくなった。

(河明340)

第2節 継続相のテンスと現在

1) 現在をまたぐ継続相

完成相は、基本的なテンス的意味において、非過去形が未来をあらわし、過去形が過去をあらわす。それに対して、継続相は、過去形は過去をあらわすが、非過去形は、現在をあらわすのが基本である。このことは、すでに多くのひとによってのべられてきた。

完成相の非過去形が現在をあらわさないのは、完成相が始発から終了までふくみこんでまるごとのすがたで動作をさしだすので、現在という話しの瞬間におさまらないからである。これに対して、継続相が現在をあらわすのは、現在という瞬間で持続過程を分割することができるからである。このことについては、すでに奥田靖雄1977がのべている。

2) 現在をまたがない継続相

継続相が一定の時間位置において動作が持続過程をなすその一定の局面のなかにあることをあらわすばあいには、現在をまたぐことができるのであるが、一定の時間位置において持続が成立することをあらわすばあいには、現在をまたぐことができない。つぎのア)は成立するが、イ)のような文は成立しないとおもう。

ア) いま美術館で××展をひらいています。(○)

イ) 先週から来週まで美術館で××展をひらいています。(×)

もっとも、文の述語としてつかわれないばあいには、つぎのようなものもあ

りうるだろう。けれども、これは、ただいまの問題ではない。

- ウ) きのうからあさってまで出張している Aさんたちは、きょうとあすの視察団招待のしごとをまぬがれるわけだ。

継続相のこの用法が現在をまたがないのは、その持続の始発と終了がしめされているからであって、このことは、完成相が現在をまたがないのとおなじである。

現在にかかっている、過去から現在まで、あるいは、現在から未来までなら、この用法でもしめすことができる。

- エ) 展覧会は先週からひらかれている。

- オ) 展覧会は来週までひらかれている。

これが可能なのは、現在をまたぐ両はしがしめされないかぎり、現在のなかに始発から終了までをとじこめる必要がないからである。

過去から現在までの持続は、継続相の非過去形でも過去形でもあらわすことができる。

- カ) あのひとは、さっきからあそこにたってますよ。

- キ) あのひとは、さっきからあそこにたっていましたよ。

どちらもおなじ事実をあらわしているのだが、非過去形のばあいは現在に、過去形のばあいは過去に中心をおいてのべている。このことについては、「アル」をつかった説明ではあるが、すでに三上章1953や金田一春彦1955がのべている。なお、三上1953は、「経験として報告する（間接的に）か、知覚として表出する（直接的に）か、そういう主観的相違によってテンスをかえる」とっている。

かたがわがとじているばあいには、完成相にかえることのできるものもある。

- ク) あと30分まっている。

- ケ) あと30分まつ。

- コ) もう2時間もまってるよ。

- サ) もう2時間もまってたよ。

- シ) もう2時間もまったよ。

第3節 継続相のテンスにおける 現在とひろげられた現在

1) 完成相のばあいのひろげられた現在

ひろげられた現在というのは、現在をふくんで、過去と未来の方向にあるていどひきのばされた時間帯のことである。このような時間帯に成立する動作をあらわす用法があることは、完成相も継続相も共通なのだが、そのありかたは両者のあいだでことなる。

完成相のばあいの、ひろげられた現在における動作というのは、その時間帯に、いくつかの動作がとびとびにおこることをいっていて、その時間帯のあいだじゅう、動作がべったりつまっているわけではない。

ア) わたしは、このごろ毎朝五時におきます。

イ) 一才児のマアちゃんは、はだしのまま、にわへでる。

もっとも、完成相形式をとっていても、意味的にアスペクトから解放されているばあいは、そのかぎりではない。

ウ) かれのいまつかっている自動車は、まえのとだいぶちがう。

けれども、完成相の基本的な意味が実現しているかぎり、現在の動作は、始発から終了までまるごとのすがたであられるひとつの動作であり、ひろげられた現在の動作は、まるごとさしだされる動作のくりかえし、つまり複数の動作である。

2) 継続相のばあいのひろげられた現在

継続相のばあいのひろげられた現在のばあいは、その時間帯が持続過程のなかにある、あるいは、その時間帯いっばいに持続過程が成立するということになるので、その時間帯のあいだじゅう、持続過程がきれめなく、べったりとつまっていることになる。この点が、完成相のばあいのそれと質的にことなる。

エ) 彼女は、大学につとめています。

オ) この門は、このごろずっとしまっている。

くりかえしのばあいも、継続相は、そのようなくりかえし状態の持続のなかにあるという意味になって、これも、うえの例とおなじになる。

カ) 彼は、さいきん流体力学の研究をしている。

なお、くりかえしのうち、ひとつひとつの動作について継続相の基本的意味が実現しているばあいには、完成相のばあいと同様、動作と動作のあいだにすきまができる。

キ) あそこのうち、ぼくがとおるときは、いつも戸があいてるよ。

ひろげられない現在と質的にことなるのは、さいごのばあいだけである。

3) 継続相のばあいの、現在とひろげられた現在

継続相非過去形が現在の動作を(持続過程をなす局面のなかにあるすがたで)さしだすばあいの現在にはばは、完成相のばあいほど精密でない。つぎの前例は後例よりも現在にはばがみじかいとおもわれるが、それにしても、発話時の始発から終了までというほど厳密なものではない。要するに、発話時間が持続時間よりもみじかければよいのである。

ク) ほら、あそこにとんびがとんでいる。

ケ) 美術館で××展をやっています。

これに「いま」「ただいま」などの状況語をおぎなってみても、時間が精密な発話時になるわけではない。

コ) ただいま美術館で××展をやっています。

「いま」という語は、完成相非過去形では直後未来、継続相非過去形では現在、完成相でも継続相でも過去形ならば直前過去をあらわすのである。^(注)

サ) いま昼めしをたべます。

シ) いま昼めしをたべています。

ス) いま昼めしをたべました。

セ) いま昼めしをたべていました。

継続相のばあい、基準時間は持続過程のなかにあればよいのであるから、みじかくても、ながくてもよい。そうすると、みじかいものからながいものまで、いろいろのものがあいて、結局は、ひろげられた現在とのあいだがきれくなる。

ソ) いま電話にでています。

タ) いま入院しています。

(注) このことは、現在までの辞書にはかかれていない。

チ) いま東京にすんでいます。

ツ) いま百年に1メートルのわりで隆起しています。

過去や未来のことであれば、完成相についても同様のことがいえる。

テ) この島の面積は、十万年のあいだに五倍にふえた。

ト) 定年まであと四年間、この会社ではたらきます。

現在のことにかぎってみると、このように現在**は**ばをひろげられるのは、継続相非過去形の**ば**あいだけである。(もちろん、アスペクトから解放されれば、完成相形式のものでもこれになれるが。)そうだとすれば、継続相のテンスの性格として、このことが記述されなければならない。

ただ、それを、「現在」のなかで記述すればよいのか、発話時とかさなる「現在」と、それよりはるかにながい「ひろげられた現在」とにわけて記述すればよいのか、ということが、理論上の問題としてはよくわからない。ここでは、いちおう前者のたちばにたって、「現在」のなかに「ひろげられた現在」を位置づけておく。

第2章 現在

第1節 現在持続過程のなかにあること

1) 持続過程をなす局面のなかにあること

継続相非過去形のテンスは、発話時点において、その動作が持続過程をなす局面のなかにあることをあらわすのが、もっとも基本的である。

(3) 木のうえで子どもが見てるよ。(雪国115)

(4) 少年「あ、時計だ。それオモチャ？ 空気女「これ？ 本物だよ。」少年「うごいている。」(死すp290)

これらは、現在点において動作がその運動の局面のなかにあることをあらわしている。このばあい、その持続過程そのもののながさはとわれない。うえの2例のうち、あとの時計の例のほうが持続過程はながいとおもわれる。

つぎのようなものは持続過程がみじかいだろう。

(5) あら、ないてる!! (宵待83)

(6) あれ、今ごろなってるあ、空襲警報。(時計57)

(7) ははっ、テレてる、かわゆーい。(宵待87)

(8) センター前進。ショートバック。ショートバックしている。(81)

それにくらべると、つぎのようなもののほうが持続過程がながいだろう。

(9) ねえ、みて、汽車がはしってる。(宵待51)

(10) 上空の風、ライトからレフトへつよくふいています。(巨神)

このことは、変化動詞が結果の局面のなかにあるすがたをあらわすばあいにもいえる。つぎの最初の例は、そのあとの2例より持続時間がみじかいだろう。

(11) 先頭からしんがりまでは、10馬身のなかにおさまっています。(10R)

(12) 右中間がかなりせまくなっています。(81)

(13) 右のバッテリーボックスに月山がはいています。(81)

つぎの例は、そのような状態があとどのていどつづくのかわからないし、そのつぎの例は、このあとずっとながい期間持続するとおもわれるが、そういうこととは関係なく、現在の時点において持続過程のなかにあることをあらわしている。

(14) 胸のあたりに黒い土が、甲子園の土がついています。(81)

(15) おゝ、アミダさまのお像がこわれています。(出家55)

2) 現在のはばのひろがり

以上のべたように、継続相非過去形の基本的なテンス的意味は、現在時において持続過程をなす局面のなかにあることをあらわしているのであって、その持続過程のながさは問題ではない。しかし、このばあい、基準時間が発話時間のなかにおさまるかどうかということは、現在というものの性格とかかわって問題になる。つぎの2例も、基準時間が発話時間よりながいだろう。

(16) 「だって、あたしの話、きいてないんだもの。話さしといて、ずるいや。」
「きいてるさ。ききながらちょっとかんがえていたんだ。」(暢気28)

(17) 今、とってもほがらかにさわいです。(雪国129)

持続時間でなく、基準時間のほうの長さにもいろいろあることは、つぎのような会話をみると、はっきりするだろう。

(18) A「あの本屋しまってるね。」B「きょうはあさからしまってるよ。」C
「いや、すくなくとも、ここ二三日はしまってるよ。」D「このごろずっとしまってるよ。おやじさんが入院してるんだって。」

このばあい、<しまっている>持続時間は、この会話からはわからない。けれども、基準時間は、B C Dの順にながくなっている。

基準時間がひろがるということは、現在のはばがひろがるということである。このように現在のはばが発話時をこえるということは、現在の意味として特筆しておく必要があるだろう。けれども、それがどれだけのながさになるかということは、はっきりしない。ここのところに継続相非過去形のテンスの特徴がある。つぎの諸例は、あとのものほど基準時間がながいといえるだろう。

(19) センターバックしている。(81)

(20) きょうは休診で、看護婦がみんなではらっています。(本日48)

(21) おい、糧秣いくらもっている。(野火27)

(22) あの子はこのごろ学校をやすんでいる。

(23) わたしはいま中学校の教師をしている。

(24) この川は、現在は、むかしとくらべて、ずっと西のほうをながれて
る。

これらは、アスペクトを問題にするかぎり、いずれも基準時間が持続過程のなかにあるすがたをしめしているので、そのちがいが問題にならないのであるが、テンスのばあいには、その基準時間の時間的位置が問題になるので、そのひろがり、完成相のばあいとちがうものとして設定されなければならない。

3) 持続や連続のなかにあること

「たもつ」「つづく」などは、積極的に持続をあらわす動詞である。これらの動詞の継続相非過去形のテンス的な意味は、その動詞のあらわす動作の一定の局面が現在持続過程のなかにあることをあらわすのであって、いままでのべてきたものとかわりない。

(25) 6対1と印旛高校が5点のリードをたもっています。(81)

(26) いぜんとして、小雨がふりつついます。

(27) わかったか。わかったら、おくっていってあげよう。追川初はねないで待っている。(木石81)

(28) 朝永先生はとても親切で、何をきいてもパッパッとすぐにこたえられたのが印象にのこっています。(根源110)

(29) 印旛高校、PL学園、決勝戦はきんぱくした好ゲームを展開しています。(81)

連続的なくりかえしのばあい、それがくりかえし過程のなかにあることは、その1回分だけをみる瞬間的な観察ではとらえることができない。それは、多少ひろげられた現在を基準時間としている。けれども、それは基準時間が多少ひろがっているだけで、その連続過程そのものの長さを問題にしているわけではない。その点で、いままでのべてきたものと同様である。

(30) 白木のバットを1回、2回とふっています。(神広)

(31) ゲリラのほうは、一発一発、時間をおいてうってる。(やさp40)

(32) 山根投手、たんたんとなげています。(神広)

(33) てっていしてインサイドをついてきています。(81)

4) 状態持続のなかにあること

動詞が動作性をうしなって、「している」の形で状態持続の過程のなかにあることをあらわすものがある。これについては、Ⅲ部第4章で準アスペクトと

してとらえたが、その非過去形は、テンスとしては、ふつうの継続相アスペクトのばあいと同様、現在、持続過程のなかにあることをあらわす。

(34) みろ。あいつ、あんだけたたかかれても、けろっとしてる。

(35) なにをぐずぐずしてる、はやくせんかい！ (女囚13)

(36) 権威にしがみつかねばやっていけなかった国民は、権威をとりさられて茫然自失している。(革命133)

(37) このあたり、朝潮の動作はひじょうにゆっくりとしております。(5月)

5) はばのひろい現在

長期間にわたる持続過程のなかにあるばあいも、短時間のものと質的にかわらないことは、すでにのべたとおりである。

(38) 小諸の与良という町には私のおじがすんでいます。(破戒200)

(39) 私のせがれもなんとかしてくらしています。(出家53)

(40) 養母はまもなく、かんがえどおりに、青山のほうのある伯爵家へお針女にはいつて今そこにつとめている。(桑の8)

(41) うん……座長さんか、みんな、元気にやってるかい。(寅次98)

(42) 忍ぶ川に、だいふ熱心にかよってるな。(忍ぶ77)

(43) いま自分は教師をしている。(波33)

(44) 長女のむこの美馬中です。大蔵省の主計局次長をやっています。

(華麗34)

6) 長期にわたるくりかえしの持続過程

非連続のくりかえしであっても、継続相であらわすと、ひとつづきの持続過程になることは、第Ⅲ部第2章でのべた。このばあいも、前項とおなじである。

(45) わたしはなぜこうなのだろうといつも自分をせめています。(出家76)

(46) (かあちゃん)は) ごとばかりいっている。(死すp303)

(47) お宅だけでなく、同じようなことが全国でおきています。(日本30)

(48) あなたのものをどれも感心して拝見しています。(友情74)

(49) 私んところでは農機具を農村にだしています。(闘牛130)

(50) 春三の話では、この家の主人は元軍人で、現在は会社につとめるかたわら鶏をかって卵をうっている。(本日93)

第2節 現在の質的な属性

1) 現在点における質的な属性

動詞が継続相形式で脱アスペクト化して、ものの質的な属性をしめす形容詞のようにはたらいっているものがある。このばあいのテンスは、その属性のもちぬしのありかたによってきまる。そのもちぬしが現在存在するものであるばあい、その属性は現在の属性だということになる。

(51) 1球目、一塁い線にうまくバントした。打球がしんでいる。ピッチャーがとった。(81)

(52) うちました。つまっている。(81)

(53) (敵機がとびさったあとに空襲警報のサイレンがなった。)[間がぬけてるなあ。](時計57)

もし属性のもちぬしが過去に存在したもので、属性が非過去形でしめされるばあいには、「前回のかれの打球はしんでいる。」のように、テンスから解放されることになる。

2) 長期にわたる現在における質的な属性

属性のもちぬしが長期にわたって存在するものであり、また、その属性も長期にわたって存在するばあいがある。

(54) その弁天さまのことを、みんなビタイテンとよんでいる。(高崎21)

(55) 「こんどは何ていっている。やはり京子というのか。」「いいえ、京葉さんというのよ。」(つゆ42)

(56) だから彼は、人があやまって謝花^{しやばな}という名を、シャカと音よみにしてもゆるしている。(やさp28)

ここにあげた例は、くりかえしの持続過程に近いかもしれない。

第3節 過去から現在までの持続

1) 過去から現在までの持続

継続相過去形は、「～から～まで」のような両がわのとじた期間をあらわす状

況語でかざることができる。

ア) 8時から9時までまっていた。

非過去形でも、未来のことならいえる。

イ) あすは8時から9時までまっています。

けれども、現在をまたぐばあいには、それがいえない。現在がはいるばあいは、かたがわのはしが現在のばあいだけである。

ウ) 3時からいまで2時間まっている。

エ) これから6時までまっている。

このような、「～から」や「～まで」でかざられるばあい、ふつうは、持続過程そのものの始発や終了をあらわすことになる。

継続相非過去形は、このようにして、過去から現在まで持続過程がつづくことをあらわすことができる。

(57) ばあやはもう昨夜から行李をだしてごそごそやってますよ。(桑の21)

(58) 「つるはたくさんいますか。」「いますとも、さっきからないてまさあ。」

(銀河278)

(59) 戦後の日本史の理解の変革にもかかわらず日本史研究は基本的には日本列島内で完結している、という見かたが今までつづいている。(学問257)

「～から」や「～まで」がなくても、現在までの持続をあらわしているものがある。

(60) その後、芹沢氏らは(中略)さらに調査をつづけている。(学問251)

(61) それでも、国民の間の不和は、ずっとひきつづいている。(もの111)

(62) かれはずっとここにすみついています。

(63) 戦争のない状態が40年ちかくつづいている。

(64) こっちこそごぶさたしています。(青銅42)

2) 「～からしている」と「～からしていた」

うえにあげた例の多くのものは、その継続相非過去形を過去形にかえることができる。

オ) ばあやは昨夜から行李をだしてごそごそやりましたよ。

カ) こっちこそごぶさたしていました。

このように過去形にかえられるということが、このテンス的な意味の特徴で

あり、その点で、第1節でのべたものとは、ちがうのである。それは、過去から現在までをあらわしているのであろう。

しかし、過去形のばあいと非過去形のばあいがまったくおなじなのではない。非過去形のばあいは、現在に中心があるのに対して過去形のばあいには過去に中心がある。そして、非過去形のばあいには現在のことをどうしてもはずせないのに対して、過去形のばあいは現在のまえにおわってもよい。

キ) おや、いませんか？ さっきからごそそやってみましたがね。

この例は非過去形にはかえられない。過去形でもいえるということは、かならずしも非過去形とおなじことがいえるということではない。非過去形のばあいには、現在のことをあらわすことが必須であり、そこに中心があるということとをだいにしたい。

「まだ」でかざられると、以前にはじまった状態が現在でもつづいていることをあらわす。

(65) おや、かおるねえさんまだねてるねえ。(銀河295)

(66) あなたまだ信心やっている？(間草148)

けれども、「まだ」は、あくまで現在のことをいっているのであって、過去から現在までのことをいっているのではない。「まだ」でかざられたものを、過去形にすると、過去のことになって、テンス的な意味がかわる。「まだ」でかざられたものを、テンス的な意味をかえないでつかうと、モーダルな意味がかわって、発見、確認、おもいだしになる。

(67) まだおきてたの？

(68) あっそうだ！ まだ、もうひとつのこった。

第3章 未 来

継続相も非過去形で未来のことをあらわすことができる。

(69) じゃ、ピッツバークであなたをまっています。(華麗218)

けれども現在にくらべて例がひじょうにすくない。また、それが未来であることをしめすためには、現在のばあいとくらべて、より多く文脈、場面にたよっている。そうした点から、現在のほうが基本的な意味であるとかんがえられる。

1) 未来に持続過程のなかにあること、未来に持続過程が成立すること

現在のばあいと同様、未来のある時に持続過程のなかにあることをあらわすものと、未来に持続過程が成立することをあらわすものがある。例がすくないので、どちらが基本的なのか、いまのところわからない。

(70) それでは2時にまっています。

(71) 自分がすこし有名になる時分に〔杉子は〕ちょうど十九か、二十になっている。(友情7)

これらは持続過程のなかにあることをあらわしているが、つぎの例は、持続過程が成立することをあらわしている。

(72) ぼくは君の幸福をいのっているよ。(友情96)

(73) 2時から3時までまっています。

2) 現在ときれた未来と、現在からつづく未来

持続過程が成立することをあらわすばあい、現在ときれているものと、現在からつづいているものがある。つぎの例は、現在ときれている。

(74) うん、かえてまってる。(妹47)

(75) さきにいて、きみがくるまで練習しているよ。

つぎのようなものは、現在からつづいている。

(76) ま、当分のあいだ、おとなしくしてるしかないな。(宵待6)

(77) もうしばらくまっています。

(78) いま工事が終わったところですから、あと2時間ぐらいにごっています。

3) ひろげられた未来

未来のひろげられた時間帯のなかで持続過程がくりかえされることをあらわすものがある。

(79) さびしいときはわたしがついています。(友情15)

(80) 先生、これからはぼく、日曜日ごとに先生のかばんもちをしたいんです。患者のうちで、先生が診察なさるとき、ぼくは先生のくつのみはりをしています。(本日91)

これらは、ひとつひとつが持続過程をあらわしていて、ひとまとめにしたために継続相になったのではない。したがって、あいだに空白があり、ひろげられた未来となるわけである。

第4章 現在以前から現在へ

1) 変化(始発)がおわって、現在結果(運動)の局面のなかにあること

第Ⅲ部第3章でのべた、ある局面の完成後につぎの局面のなかにあるすがたをあらわすというアスペクト的な意味をもつ継続相が非過去形のかたちをとると、このテンス的な意味が実現する。

(81) 軍配はさっと栃光、西にあがっています。(5月)

(82) そのあいだにランナーの佐々木かけぬけております。(81)

(83) はじまつてるぞ、もう。(やさp21)

(84) どうやらちょっとブルペンがうごきだしております。(巨神)

この用法は変化の局面が現在以前に完成し、現在その結果の局面のなかにあることをしめしている。たとえば、〈さっとあがる〉という変化が現在以前におこって、現在は、その結果としてのあがった状態のなかにあることをあらわしている。ここでは、変化がおこったのが現在以前であり、その結果のなかにあるのが現在なのであるから、ふたつのテンスがしめされているわけである。

2) このテンス的な意味の性格

この用法は、テンスがふたつあるところに大きな特徴がある。さきに第2章において、過去から現在までの持続をあらわすものがあることをのべた。

(57) ばあやはもう昨夜から行李をだしてごそごそやってますよ。(桑の21)

(58) 「つるはたくさんいますか。」「いますとも、さっきからないてまさあ。きかなかったのですか。」(銀河278)

これらは状態持続の始発時間がしめされているが、それは、ひとつの状態持続のはじまりが、昨夜であり、さっきであることをのべているだけであって、「昨夜」なり「さっき」なりにそのはじまりが完成したということを積極的にあらわしているわけではない。ところが、この第4章に属するものは、両方の局面のことを積極的にあらわしている。「さっと」は〈あがる動作〉であり、「あがっている」は、結果の状態である。これらが、ふたつながらあらわされているところに、このテンス的な意味の特徴がある。

このダブルテンスの、はじめのテンスは第Ⅵ部でのべた完成相前非過去形相

当の継続相非過去形の基本的な意味とおなじである。そして、あとのテンスは継続相非過去形の基本的なテンス的意味とおなじである。そうだとすれば、このテンス的な意味は、両者のあいだの中間的なものである。おそらくこれは、移行過程のなかであらわれてきたものであろう。

第5章 ひろげられた現在

ひろげられた現在を、ただその現在**は**ばという点だけからとらえると、継続相の**ば**あい**は**、ひろげられない現在とつながっていて、質的なちがいをみいだすことができない。そのことは、第2章の第1節に、5)、6)をもうけて、のべた。とくに、6)では、「長期にわたるくりかえしの持続過程」は、全体をひとつづきの持続過程としてとらえられるとして、第2章のあつかいにした。

けれども、第Ⅲ部第2章第2節でとりあげたようなものは、発話時における持続過程の存在には無関心であり、そのテンスのありかたは、完成相によるくりかえしの表現の**ば**あいとおなじである。したがって、これを、完成相の**ば**あいとそろえて、「ひろげられた現在」として、ひとつの章にした。

しかし、実際には、ほとんど用例がない。けれども、質的なちがいに注目して、あえて一章をもうけた。

(85) 池田さんの家のまえをとおると、いつもお嬢さんがうたをうたっています。

(86) そうとう早いつもりで行っても、いつもあのメガネ婦人が、さきに**い**ちばんよい席をとっている。

(87) おれのいく時間がわるいのかな。いついってもしまっている。

第6章 恒常的な状態

第1節 恒常的な状態とはなにか

1) 恒常的な持続の状態

継続相の非過去形のあらわす持続の状態が期限つきの持続過程としてでなく、ずっとそういう状態がつづくものとしてとらえられるべきがある。

- ア) 地球は自転している。
- イ) 道路のかたがわに歩道がつくられている。
- ウ) 山がそびえている。
- エ) この道はまがっている。

これらは、アスペクトの観点からいうと、ひとつの種類にかぎられてはいない。うえの前2例は、継続相の基本的なアスペクトの意味をそなえている。そして、ア)は動作の局面をとりだし、イ)は結果の局面をとりだしている。そして、あとの2例は、ウ)が語句の意味のレベルで動作から解放されており、エ)は文のレベルで動作から解放されるというふうに、ちがっている。けれども、いずれにしても、これらの継続相非過去形がさしめしている事象は、恒常的に持続している。このように、事象の性格として、事実上恒常的な持続のなかにあるということが、これらの例全体をとおしての共通の特徴であるといえることができる。

2) 事象の性格とテンスの性格

いまうえにのべたように、これらのさしめす事象は、恒常的な状態である。けれども、そのことが、ただちにテンスとして恒常的な状態をあらわすとはいえない。たとえば、つぎのオ)やカ)は、現在のことをのべているというべきであろう。

- オ) 現在ただいまも、地球はまわっています。
- カ) もちろん、いまみても、あの山がそびえている。

だから、これがテンスとして恒常的な状態をあらわすためには、その文がも

のごとの質的な属性をのべる文であって、その状態が恒常的な質的属性になっているという条件が必要である。

けれども、事象として恒常的な状態であるものをあらわす文は、オ) やカ) のような限定がつかないかぎり、恒常的な状態的属性をあらわす形式になっているとおもわれるので、ア) ～エ) は、その表現にかかわるテンスとして、恒常的な状態をあらわしているといつてよいだろう。

ただ、この種の継続相非過去形が過去形と対立することがあるので、その点にふれておく必要があるだろう。

たとえば、ふたりで道をすすんできて、その道がゆきどまりになっていることに気づいたとき、キ) のようにいうことができる。

キ) おや、この道、がけにぶつかってるね。

そして、つぎの日にそのことを第三のひとに報告するとき、つぎのようにいうことができる。

ク) あの道はがけにぶつかっていました。

もし、このキ) とク) とが現在と過去の対立ならば、キ) のほうは、恒常的な状態ではなく、現在のことをのべているということになるだろう。

しかし、つぎの日に第三のひとに報告するばあいにも、じつは、ケ) のようにいうことができる。これは、恒常的な状態としてのべている。

ケ) あの道はがけにぶつかっていますよ。

そして、もしキ) とケ) がおなじものであれば、キ) もまた恒常的な状態をのべているということになる。ところで、さきにのべたように、事象的に恒常的な状態であることがあきらかなものごとについてのべるときは、それを認識した時期をしめす状況語がないかぎり、恒常的な状態をのべることになるということであるならば、このばあいのキ) もケ) とおなじとみてよいだろうとおもう。

そうすると、ク) がなぜ過去形になっているかというと、それは、発見のニュアンスがついているからである。これは、発見してすぐ発言するのではないから、その発見の時点が過去である。したがって、それが過去であることについては、問題がない。けれども、恒常的な状態であることがあきらかなものについて、このように継続相過去形でのべると、発見のニュアンスがつく。このことについては、第Ⅷ部第3章でのべる。

3) 恒常的に存在するものの性質

継続相非過去形の形式をもつもののなかには、できごと過程をあらわさず、ものごとの質的な属性をあらわして、アスペクトから解放されているものがある。

コ) (チャイムをききながら) この音は、いつもとちがっているね。

サ) さっきのチャイムは、いつもとちがっているね。

シ) ここの玄関は、このあたりのふつうの家の玄関とちがっている。

これらの「ちがっている」は、語いの意味はおなじであり、それは、そのレベルですでに動作性をうしなって、質をあらわすものになっている。そして、そのことによって、文のなかで、いずれもアスペクトから解放されることになる。けれども、そのテンス的な意味は、この三つがおなじなのではない。それは、その質的な属性のもちぬしであるチャイムの音や、玄関の存在する時間位置とかかわっている。コ) のばあいの音は現在のみじかい時間に存在するものであって、その属性をしめす「ちがっている」は現在の属性をしめしている。サ) のチャイムの音は、過去に存在して現在は存在しないのであるから、これの属性を非過去形でさししめすと、テンスから解放される。そして、シ) の玄関は恒常的に存在しているものであり、その属性としての「ちがっている」も恒常的に持続することになる。

このことは、性質形容詞のテンスとおなじである。つぎの3例は、それぞれ、コ)、サ)、シ) と対応する。

ス) (空で妙にゆれているタコをゆびさしながら) あのあがりかた、おかしいね。

セ) きのうのあいつの発言はおかしいね。

ソ) この戸のつきかたはおかしいね。

4) 恒常的な状態の性質性と、性質の恒常性

うえの2) でのべた、ある状態が恒常的につづくということは、それが常にその状態のなかにあるということで、恒常的な性質だということができる。3) でのべたもののうち、その属性のもちぬしが恒常的に存在するものについては、その属性も、もちぬしとともに存在するのであるから、これも恒常的な性質だということができる。そしてまた、その性質が恒常的につづくということは、

そのような性質であるという状態がつづくのだといいかえることもできるだろう。こうしたことから、両者は、恒常的な性質、状態であるということで共通する。

5) そのテンス的な性格

恒常的な性質であるということは、現在から過去と未来へ、すきまなくひろがっているという点で、現在をばを無限にひろげたものだということができる。この意味で、この用法におけるテンスは、現在をあらわすという側面をもっている。

ところが、無限にひろがるということは、いつでも成立しているということであって、テンス的に時間位置を限定されていない。したがって、テンスから解放されているということもできる。この点で、これは、脱テンスの側面をもっている。

こうした点から、これのテンスの性格は、現在と脱テンスの間にあるものとして位置づけられるだろう。例文をみたとき、いろいろに感じられるのは、そのためだとおもわれる。

6) 恒常的な状態と、ひろげられた現在における状態

すべてのものは変化のなかにあるという世界観をもつことができる。たとえば、地球の存在にしても、宇宙史のなかでは、その生成と消滅のあいだの一定期間になりたつ事象にすぎない。その意味では、絶対的に恒常的な状態というものはない。けれども、微視的な世界に中心をおいて世界観をつくるばあいには、相対的に長期にわたる存在者は、無限期間の存在とみなすこともできる。いまここでテンスを問題にするばあい、もし、無限期間のなかのものとして表現しているならば、それは、個別的なテンスをこえたものとなるし、現在をふくむ有限期間のなかのものとして表現しているならば、それは、(ひろげられた)現在というテンスとなる。

ところが、実際には、そのことが積極的に言語化されていないものが大部分であり、恒常的な状態か現在かはっきりしないものがひじょうにおおい。たとえば、つぎのばあい、性質のもちぬしは、一定の寿命をもった人間であり、事実として、あきらかに有限期間のなかにある。

タ) 田中というひとは、しっかりしているねえ。

しかし、これをのべたひとは、田中の寿命を、よりながい期間のなかの一事象であるにとらえたかどうかは、はっきりしない。こうしたものについて、この報告では、恒常的な状態のほうにもっていったが、いろんな例のあつかいのなかでは、かならずしも限界がはっきりしていない。こうしたことは、今後の課題である。

第2節 恒常的な状態のいろんなタイプ

つぎのようなものがこれに属する。

継続相としての基本的なアスペクトの意味をもっているものであっても、その状態のもちぬしが恒常的に存在し、また、その状態が恒常的につづくばあいには、これになる。

(88) 地球は太陽のまわりをまわっている。

(89) 加茂川は京都のまちをながれている。

(90) ひろい野原のまんなかに一軒の家がたっている。

語一的意味としては動作や変化をあらわす動詞であっても、文のなかで、継続相非過去形で恒常的につづく一定の状態をあらわすばあいはこれになる。

(91) そこから階段が寝室にのぼっている。

(92) 海底を何条ものリップルマーク（波条痕）がはしっている。（日本12）

(93) ハカマカズラのふといつるが、奇怪なかたちにはいずりまわっている。

（高崎19）

(94) ストッキングのふくらはぎのあたりにあかいすじがはいっております。

（81）

継続相のかたちが語一的意味のレベルで状態をあらわすものがある。

(95) 山がそびえている。

(96) おまえもいい友達をもってるなあ。

(97) （かれは）強情ひとつでもっている。（末枯56）

「～をしている」のかたちで状態的性質をあらわすものがある。

(98) あんた、やわらかい手してるね。（津軽25）

(99) きれいなからだしてるね。（旅の67）

(100) あのかべは、くすんだような色をしている。

継続相の形が語句的意味のレベルで性質をあらわしていて、その性質のモチ
ぬしが恒常的に存在するもののばあいもこれになる。

(101) 「大宮というひとはずいぶんあたまのしっかりしているひとらしい
ね。」「あゝ、ずいぶんしっかりしている。」(友情43)

(102) 「(あいつは) しかし、かわってるなア。」(女生75)

(103) びわ湖はあわじ島と形がにている。

第7章 テンスからの解放

第1節 なりたつ時間に関係のない 命題のなかでの状態

つぎのようなものは、実際には恒常的なものなのであるが、この命題のなかでは、時間は考慮にはいっていない。

(104) 人間は虚栄によっていきている。(人生39)

(105) 自然においては、そのあらゆる現象に対してつねに普遍的な法則が成立している。(社会126)

実際にはくりかえし成立するが、時間と関係なくのべているとおもわれるものもある。

(106) 会議がおこなわれているときは、「会議中」のふだがかかっている。

(107) 風がつよいときは、このはたがばたばたと音をたてている。

これらのばあい、その条件は論理的なものとしてさしだされ、一定の時間的位置をもったものとしては、さしだされていない。

以上は、アスペクト的な意味をもっているが、つぎのようなものは、アスペクトからも解放されている。

(108) DNAは、糖と磷酸と塩基という三つの物質からなりたっている。

(暗号160)

(109) 電子顕微鏡写真でみると、タバコモザイクウイルスは、マッチ棒のような形をしている。(暗号156)

(110) 虚栄はもっとも多くのばあい、消費とむすびついている。(人生44)

(111) 幸福を単に感性的なものとかんがえることはまちがっている。

(人生18)

(112) このまよいのために、死をはやめるのはばかげている。(野火61)

とくに、すぐまえの2例は、主語でさしめられていることが現実にあるかどうかについてかんがえられていない。つぎのようになると、現実にはないこ

とについて、のべている。

- (113) 魚のように一度に何千ものたまごをうむことは、鳥類の能力をこえている。

第2節 過去のものごとの性質を 非過去形であらわすばあい

継続相形式がアスペクトから解放されて質的な属性をあらわし、その属性のもちぬしが過去に存在したものであるばあい、その属性を過去形であらわすと、過去における属性をあらわすことになるが、それを非過去形であらわすと、その時間位置の側面がきりすてられて、テンスから解放される。

- (114) しかし、今までのところ、各文化層の測定数値の序列は、考古学的判断ともだいたい一致している。(学問253)

- (115) 記念写真にうつるなんて、先生、芝居じみていますね。(本日92)

第3節 提示文のなかで

つぎのようなばあい、いちおう文のかたちをしているが、実際には、つぎの文といっしょになって、ひとつの文に相当する。こういうばあい、述語の陳述的な性格をあとの文にゆずるので、テンス、ムードから解放されることになる。

- (116) わたしがさきにいく。そして、あなたがくるまでまっている。それでいいんじゃないですか。

第4節 モーダルな条件のなかで

仮定の帰結としてのおしはかりの性格をもつ述語は、テンスから解放される。

- (117) それだけの速度があれば、スイッチをきいても、5分ぐらいまわっている。

- (118) わたしなら、そんなにとびまわらないで、じっとしているな。

- (119) それは彼女じゃないよ。彼女なら、こっちが目をそらすまでにらみつけているよ。

第Ⅷ部 継続相過去形のテンス

第1章 過 去

継続相過去形の基本的なテンス的意味は、動作の持続過程をなす局面が過去にあることであり、これは、だいたいにおいて継続相非過去形の基本的なテンスの意味と対応するが、ちがうのは、現在形のばあいには始発と終了のしめされた持続過程にかかわるものがないのに対して、過去形のばあいには、それがあることである。このことは、完成相非過去形が現在の動作をまるごとさしだすのが基本的でないのに対して、その過去形は、過去の動作をまるごとさしだすのが基本的であるのとなっている。

第1節 過去に持続過程のなかにあったこと

この用法は継続相過去形と対応するもので、過去形のなかでも、もっとも基本的なテンス的意味だといえる。

- (1) そこをでたときには、他のふたりはかなりによっていた。(暗夜28)

このばあい、過去の一定時にその持続過程のなかにあったということをいっているだけであって、その持続過程のひろがりについては、のべていない。

1) 基準時間が瞬間であるばあい

基準時間が過去のある瞬間であることは、みじかい時間をしめす時間の状況語があるばあい、状況的な条件句や条件節があるばあいには、はっきりわかる。

つぎのようなものは、状況語や状況句節でそれがわかる。

- (2) 午前七時、私はNHKのスタジオで待機していた。(未知323)

- (3) 眼をあいたときには、あかるい光が棒のように、雨戸のすきますきまにつつたっていた。(波36)

- (4) 有楽町の東口におりたときには、他人のことはどうでもいい人たちが、ゾロゾロあるいていた。(自由59)

条件句、条件節でそれがわかることがひじょうに多い。このばあい、条件句節は発見の条件をしめしている。そのなかでも、移動動詞と、みることや気がつくことをあらわす動詞の条件形がめだつ。

- (5) 島村も帳場へ行くと、炉ばたにおおがらの女がうしろむきにすわって
いた。(雪国87)
- (6) 患家のまえまでのりつけると、その家の戸口に春三のおふくろがいて、
先生の来着をまちうけていた。(本日87)
- (7) ある日学校からかえってみると、延年寺の和尚様がきていた。(思出32)
- (8) 物見のやぐらにでてみると、峠下の種市の村の野辺のあたりで白いけ
むりがあがっていた。(落城23)
- (9) ひょいと上のほうをみると、男の子のあたまだけが、土手のうえへで
ていた。(多情15)
- (10) 私がようやく広い路面までおりてきたとき、うしろから女の声がよび
とめたので、ふりかえってみると、まつ子が私をおってかけてきていた。
(冬の153)
- (11) みると、いつのまにか部屋の入口に娘がきて、しょんぼりとたっていた。
(本日60)
- (12) 気がつくと、まどのそとに、我ひとりたそがれの空の光を吸いがおに、
片々と雪がとんでいた。(多情65)
- (13) あくる朝目をあくと、駒子が机のまえにきちんとすわって、本をよん
でいた。(雪国108)

その他の動詞の条件形のばあいも、発見の条件をしめしている。

- (14) しかし、そういわれてみると、追川初の様子はいつもとかわっていた。
(木石68)
- (15) いわれてみると、なるほどトラックの車体には岡部の会社である阪神
工業の白い四つの文字がうきでていた。(闘牛117)
- (16) 半びらきのとびらをおしてはいると、群集が会堂にみち、ひざまずい
て、いのっていた。(野火62)
- (17) 瀬谷の妻が病人の手くびをにぎってみると、まだたしかに脈をうって
いた。(厚物25)

条件形でない従属句や、まへの文でわかるものもある。

- (18) 真知子も手くびをのぞいたが、これは衝突の時からとみえて三時四十分でとまっていた。(真知206)
- (19) 「旦那」せん枝はいった。——せん枝の声はふるえていた。(末枯41)
- (20) 私ははっとした。階級章は彼が伍長であることを示していた。(野火90)
- (21) 伴子は、声をのんだ。興奮はひざにおいた手にみえていた。(帰郷309)

2) 基準時間がはばのある時間であるばあい

基準時間が時点でなく、はばのある時間帯であることも多い。

つぎのようなものは、その時間をしめす状況語でそのことがわかる。

- (22) 新座敷のほうの庭から、丁字形にいりこんでいる中庭にのぞんだ主人の寝間を、お島はある朝、いつもするようにそうじしていた。(あら120)
- (23) 慶応四年十一月三日、雪は城をうずめてふりつもっていた。(落城48)
- (24) 芳子はその日医師へいっていた。(蒲団60)

また、瞬間とはそぐわない修飾語があるときも、そのことがわかる。

- (25) 中井と、綿政とは、ちいさい机にむかいあって、しきりと、素人細工な図面をかいていた。(ない76)
- (26) そのなかに一人の老翁がまざっていて、しきりに若いものの話や歌をまぜっかえしていた。(武蔵29)
- (27) 相手は函館からもってきたウイスキーを、薬でものむように、舌の先で少しずつなめていた。(カニ53)
- (28) 木村は電火にでもうたれたように判断力をうしなって、一部始終をぼんやりときいていた。(或る207)
- (29) 私は、りくつからでたともし統計からきたとも知れない、このちんぷなような母のことを黙ねんときいていた。(ここ106)
- (30) 小稲はそのだらけてゆく座をもちかえて、ただぼんやりとさびしい目つきをして、そこにあおむけに、長くなっている緒方のかおをじっとながめていた。(暗夜78)
- (31) 牛なべはつゆがきれたとみえて、ジイジイ火ばちのうえでうなっていた。(波22)
- (32) 女の体はすでに屍体の外観をあらわしはじめていた。息が沼からあがるガスのように、ぶつぶつ口からもれていた。(野火85)

- (33) 登喜子はだまって、くちびるをつけたまま、ただむやみにすっぱすっぱすっていた。(暗夜59)

「しながら」「いしい」のような副動詞にかざられていて、その副動詞が時間の持続を保証しているばあいにもこれになる。

- (34) その声をききながら、二桐はポツとして病人のプルスをみる手をわすれていた。(木石88)

- (35) このありさまを丑松は「わらによ」のかげにかくれながらみていた。
(破戒59)

- (36) 歩きながらも、彼は、けっして、駒子のさきがあるかないように、注意していた。(自由71)

- (37) 男は小さい手帖に鉛筆をなめなめ、なにかかいていた。(カニ12)
連続的なくりかえしのばあいは、そのこと自身によって、それがわかる。

- (38) 鷹夫の節の高い長いゆびがピアノでもひくように一本一本うごいて瑠璃子のかたをたたいていた。(女坂165)

- (39) 室内は三十人あまりの婦人部員が、ふぞろいに筆記したり、質問したり、私語したりしていた。(ない49)

- (40) 彼はなにげなくそのすがたに時々目をやっていた。(暗夜63)

動詞の意味そのものから、それであることが瞬間には確認できないものであることがわかるばあいがある。

- (41) 事務室で准尉は犯罪情報をさがしていた。(真空120)

- (42) 葉子は怒りにまかせて余白を乱暴にいたずらがきでよごしていた。
(或る179)

- (43) 私はそのゆくえをながめてぼうぜんとしていた。(平凡44)

- (44) あるきながら、私は自分の感覚を反すうしていた。(野火68)

けれども、瞬間なのか時間帯なのかを区別するマークがついておらず、どちらであるかわからないものもおおい。

- (45) ベッドには紅い血のついたハンカチがのこっていた。(冬の165)

- (46) 月は、ほとんど中天にのぼっていた。(田園78)

- (47) 襟子は青地のオーバー・ブラウスのえりをふかくたてていた。(木石72)

- (48) 行介はきぬ子のなみだをふいてやったハンケチを、自分の眼におしあてていた。(波52)

- (49) フォセット博士の研究室だという建物のよこの枯芝生で、りすがのどかにあそんでいた。(伸子51)

「なお」「依然として」「まだ」などがあれば、状態そのものはまえからつづいていたことがわかるが、基準時間のほうは瞬間なのか時間帯なのか、よくわからない。

- (50) 「う、うん。」なま返事をしながら、園田はなお時計をながめていた。

(波19)

- (51) 依然として内火艇の音が、高く低く海にひびいていた。(野火83)

- (52) 厩にはもう馬は一匹もないのだが、暗い奥からは生きもののにおいがまだにおっていた。(落城46)

基準時間が時点なのか、または、すこしはばのある時間帯なのかということは、この用法にとって本質的なことではない。そのことは継続相のばあいには、非過去形が現在をあらわすときにもみられるし、また過去形が過去をあらわすばあいには、完成相でもおなじことなのである。

ただ、時間はばをもつものと、つぎの節でのべる持続過程の成立とのさかいめがはっきりしないので、そのことにかかわるものとして、この1)と2)をわけてのべた。

第2節 過去に持続過程が成立したこと

前節では、持続過程のなかにある基準時間が過去に位置するものを取りあげたのだが、この節では、持続過程そのものが過去に位置するものを取りあげる。このばあいには、持続過程の終了も過去のものになっているので、持続過程が現在までつづいているということはない。その点では、完成相過去形が過去をあらわすばあいと共通である。

1) 時間量をしめす修飾語でかざられるばあい

時間量をしめす修飾語でかざられると、継続相過去形は、過去に持続過程がその時間のながさだけ成立したことをあらわす。

- (53) お島はそういつて、この商売をはじめた自分の行立^{はきだて}をはなして、みんなをおもしろがらせながら、二時間もはなしこんでいた。(あら171)

(54) 二時間そこにしゃがみこんでた。ぼんやりと……それから急にこわく
な^てって…… (妹74)

(55) 汽車のなかでは、金ぐさりや、指輪や、風船、絵本などを売る商人が、
なが^いことしゃべ^くって^いた。(放浪14)

(56) 二人の検査員はしば^らく^なにか話^して^いた。(生活122)

(57) しばらくのあいだ、二人はだまりこ^くって^ある^いて^いた。(故旧69)

これらは、完成相にかえても、さしめす事実はかわらない。ただし完成相と継続相とではアスペクト的な性格がことなるので、テンス・アスペクト的な面からみれば、おなじだとはいえない。つぎのような例のばあいは、完成相にかえると、アスペクトの面からの制約でかなりふしぜんになる。

(58) 二人はなが^いことだま^って^すわ^って^いた。(闘牛102)

(59) 「そう？」と駒子は自分をふりかえるように、なが^いことし^ずか^にして^いた。(雪国146)

(60) しばらく天守閣のもえるほのおの音とライフル砲のひびきとが、あつ
まりあ^って陸奥の耳の底にとけこ^むよう^になが^れこ^んで^いた。(落城51)

2) いつからいつまでと指定されたばあい

状況語によって、はじめとおわりの時点が指示されると、その時間、期間に持続が成立したことをあらわす。

(61) わたしは、10日から13日まで学校を^やす^んで^いた。

(62) 見はりがむこうへい^って^から、ふたたびこちらへもど^って^くる^まで^姿
勢をくずして^いた。

じっさいには、「～から」あるいは「～まで」のように一方だけがしめされたものが多く、両がわのしめされているものはひじょうにすくない。

(63) 「千鳥」は箏曲では最もポピュラーな曲の一つだから邦枝には自家薬籠
中のものであったが、日本で演奏する最後の曲、父と同じ日の演奏とい
うことに、なにかさそわれるものがあ^って、演目がさだまって^から今日
の日までけんめいにけいこを^かさ^ねて^いた。(有吉佐和子「地唄」211)

このばあいは、おそらく、1) よりも、完成相に近いのではないかとおもう。

3) 「あいだ」などでかざられるばあい

「～あいだ」という状況語でかざられたものも、持続過程の成立をあらわす。

- (64) 病気のあいだはうちにかえっていた。(友情29)
- (65) 境内でかの女がおがんでいるあいだ, 彼はたたずんでいた。(無限129)
- (66) そのあいだ, 松子はたたずんでいた。(無限121)
- (67) 私が正式の患者としてこの病院でくらしたあいだ, 私はかれらのよう
すを注意していた。(野火26)
- (68) こういう話を銀之助と文平とがしているあいだ, 丑松はだまって, ラ
ンプの火をみつめていた。(破戒47)
- (69) 私は郊外電車の駅まであるあいだ, 飛島さんにじょうだんばかり言
っていた。(火の74)
- (70) 昼間はねむりつづける。食欲をわすれているあいだは, ねむっている。
そして夜は, 一晩中目をさましていた。(厭が299)

4) 持続過程のなかにあることをしめす時間はば

時間はばをしめす状況語や修飾語でかざられていても、それが「は」や「も」などによってとりたてられているものであるばあいは、第1節と同様、持続過程のなかにあることをあらわすことがある。

- (71) 彼は下痢患者らしくおそろいほどやせて, 私の返事を待つ間も, じ
っと立っていられないらしく, からだをふらふらふっていた。(野火27)
- (72) 石工どもが, 昼のつかれを休めている真夜中にも, かたきとかたきは
あいならんで, 黙々としてつちをふっていた。(恩讐91)
- (73) すくなくとも, わたしがいた2時から5時までの3時間は, かれはな
にか書きものをしていた。

第3節 持続過程のいっぽうのはしが しめされるばあい

1) 「～からしていた」と「～までしていた」

「〇〇日から雨がふっていた」「〇〇日まで雨がふっていた」などは、持続過程のはじまるときやおわるときがしめされている。このばあいは、一方の限界

がしめされているだけで、他方の限界はしめされていない。

これらは、持続過程そのもののかたはしがしめされているので、第2節の持続過程の成立をあらわす意味にちかいが、「～からしていた」のばあい、文の内外の環境がしめされないと、現在までつづいているのかいないのかわからず、第1節にちかいのか、第2節にちかいのか、わからないものがある。

2) はじめのときがしめされているばあい

(74) 十一月七日の午後、伸子はめずらしく朝からホテルにひきこもっていた。(伸子35)

(75) 私は二幕目からおちつきをなくしていた。(火の29)

(76) 母親のお辰が四、五日まえからねついていた。(夫婦40)

(77) 二人はしばらくまえから天井をにらんだままじっとかんがえこんでいた。(根源111)

(78) 彼は私のところにきた信書をそつとのぞいてみるというくせをはじめからもっていた。(冬の175)

(79) 駿介はそれきりだまりこんでいた。(生活132)

(80) なあに、君のすがたは三町も先からわかっていた。(波9)

3) おわりのときがしめされているばあい

(81) 奥まった小さい部屋から、二人のはなしごえが、夜ふけまでぼそぼそきこえていた。(あら130)

(82) 二人は十時まえまでそこにすわっていた。(桑の34)

(83) 銭湯は、こんでいた。とくに女湯は、十一時ごろまで、赤ん坊や子どもたちまでわめき、たちこめる湯気のなかでさわいでいた。(ない63)

「いつまでも」は、このばあい、「ながいあいだ」の意味になる。どちらにしても、持続過程の成立をあらわしている。

(84) 眼をあいたまま、彼はいつまでもふとんのぬくもりのなかにひたっていた。(波36)

(85) 女はそこをおっぱらわれると、外へでていつまでもぶつぶついっていた。(あら242)

第4節 過去の長期間の持続

1) 過去の長期間の持続をあらわすばあいの特徴

しめされる時間が時間点であるばあい、それは、持続過程を分割する基準時間である。けれども、それが時間はばになると、持続過程を分割する基準時間になるばあいと、持続過程をいれこむ時間になるばあいの両方がでてくる。

ア) わたしは、そこについたとき、まだむねがときどきしていた。

イ) わたしがそこにいるあいだ、かれはしごとをしていた。

ウ) わたしは、そこにいるあいだ、かれのかおをみていた。

そして、その時間がながくなればなるほど、持続過程をいれこむほうへうつっていく。かなりながい時間になると、つぎのような特殊なものをのぞいて、だいたい、いれこむほうであるとかんがえてよいだろう。

エ) いまは知らないが、わたしが東京にいたころは、彼は目白にすんでいた。

長期間の持続をあらわす動詞や、非連続のくりかえしをひとまとめにする継続相過去形は、状況語があってもなくても、文脈、場面などでとくべつにしめされないかぎり、どちらかといえば、持続過程が成立したことをしめすといつてよいだろう。

2) 大規模な動作をあらわすもの

(86) ぼくはそのころ東京をとびだして、奈良でほとんど着のみ着のままのすがたでくらしていた。(私の17)

(87) 彼はまるでだれともあわず、散歩と読書とものをかくのと泣くのとで日をおくっていた。(友情100)

(88) 港の奥の石垣に、土ぐもが一びきすんできました。(やきp35)

(89) 最初の一月ほどは、時雄の家に仮寓していた。(蒲団12)

(90) 松子は日日髪結いのそれにかようていた。(無限131)

(91) 流行歌のおいとこそうだよの唄がはやっていた。(放浪7)

(92) 父は何十年か、その市役所につとめていた。(冬の166)

(93) 原田は百五十石取で、お側につとめていた。(阿部41)

- (94) 高等学校で太田はテニスの選手をしていた。(むら26)
- (95) 当初は捜査二係をやっていた。(わが120)
- (96) 継母は赤十字病院の看護婦長のようなことをしていた。(桑の6)

3) 断続的なくりかえしの持続過程をあらわすもの

- (97) 平素はできるだけ父の眼にふれぬようにしてあそんでいた。(冬の53)
- (98) ぜいたくずきで、始終金にはこまっていた。(暗夜41)
- (99) 彼はいつも重い革外套をきて、はなのあたまにあせをうかべ、せかせかととびあるいていた。(闘牛90)
- (100) 毎日のように、こんな問答をくりかえしていた。(根源111)
- (101) どこにいくあてもなく金もなく、そこで毎日ごろごろして、空想ばかりしていた。(私の17)

4) 内容や文脈から長期とわかるもの

- (102) しかし、咲子はよくもならず、わるくもならず、いつまでも同じような状態をつづけていた。(冬の101)
- (103) しかし、例の研究は著々として進んでいた。(木石68)
- (104) そこには、さまざまな研究課題がまっていた。(暗号163)
- (105) そのころの欧州には、量子力学という、新しい物理学が、疾風のようにふきまわっていた。(根源103)
- (106) 藤岡由夫さんらが「老人はあいてにせず」とあばれまわっていました。(根源108)
- (107) 私はこれに私達の幸福そのものの完全な絵を見出すだろうとゆめみていた。(風立98)

5) 「～から」でかざられた長期のもの

- (108) その職人は、来た時からお島の気にいっていた。(あら243)
- (109) しかし不公平には幼児からならされていた。(暗夜9)

第5節 過去の状態、性質

状態過程は、持続過程である点で、継続相の基本的なアスペクト的意味と共通であるが、動作過程の局面でない点がそれとことなり、この報告では、準アスペクトとよんできた。また、質的な属性をあらわすものは、アスペクトから解放されている。けれども、過去形のもの、ふつうテンスからは解放されず、過去の状態や性質をあらわしている。

1) 過去に状態の持続過程のなかにあったこと

(110) あらゆるものが不足していた。くすりはあたえられず、ほうたいはかえられなかった。(野火24)

(111) 先生の態度はむしろおちついていた。声はむしろしずんでいた。

(ここ15)

(112) 秋の陽ははれていた。(ない10)

(113) 寝台のうへは、わらぶとんをむきだしにして、さむざむとしていた。

(真空63)

(114) みちはひじょうにぬかっていた。(田園50)

2) 過去に存在したものの属性

継続相の形で動作性をうしなって、質的な属性をあらわすものがある。こうしたものの過去形が、過去に一時的に存在したものごとの属性をあらわすばあいには、テンス的意味として、過去になる。なお、恒常的な属性にかかわるものについては、第3章でとりあげる。

(115) 土浦へついたのは、予定の時間よりは、はるかにおくれていた。

(土29)

(116) かんじょうしてみると、先生が毎月例として墓参にいく日が、それからちょうど三日目にあたっていた。(ここ18)

(117) 羽根田の叔父のいいぐさは、あきらかに、人をばかにしていた。

(自由42)

(118) みたてちがいということもあるからと、天王寺の市民病院でみても

らうと、はたしてちがっていた。(夫婦40)

- (119) 私の不安はやはり内地をでて以来の、奇妙な感覚の混乱に属していた。(野火22)

第6節 ひろげられた過去

継続相形式が一回一回の持続過程をあらわしていて、それが非連続にくりかえされるばあいのことについては、第Ⅲ部第2章第2節でのべたが、それが過去形をとって、過去のひろげられた時間のなかでくりかえし成立するばあいである。

- (120) 先生の宅は夫婦と下女だけであった。行くたびに、たいていはひそりとしていた。(ここ24)

- (121) 土曜、日曜以外館内はひっそりしていた。(伸子22)

この2例は、状態の持続過程のなかにあることがくりかえされているが、継続相の基本的なアスペクトの意味が実現されているばあいも、あるはずである。

- (122) わたしがいくと、彼女は、いつもないていた。

第7節 直前までの持続

継続相過去形が発言の直前まで持続過程がつづいたことをあらわすばあいがある。これには、聞き手の、話し手に対する発言のときに、あるいは、話し手の発言によって、その持続過程がおわるものがおおい。

- (123) そのときにはじめて私に気づいたらしく、「あら、うっかりしていました。」といって立ちあがろうとした。(冬の136)

- (124) 私はうれしゅうございます。一生に一度はおめにかかりたいといっていました。(出家79)

- (125) 清、あわてておきあがる。(中略)早苗「ずっとみてたのよ。ねがお。」
(八月35)

- (126) いままでうそいていた。(無限27)

- (127) 今が今まで、きょうの君との話においてさえ、そういう君をのぞむわしの気もちがものをいっていた。(生活114)

「わすれていた」「おもっていた」「まっていた」という例がおおい。

(128) ねり「なにってんのよ、兄ちゃん！きょうはお母ちゃんの命日じゃない！わたしの誕生日もだいじだけど……」秋夫「忘れてたよ，そうか！」(妹43)

(129) 寅「あつ、わすれてた。」(寅次37)

(130) ええ、それを、うかがいたいと、おもってました。(自由315)

(131) たぶんそうくるだろうとおもっていた。(波9)

(132) しばらくこないのて、どうしているのかとおもっていた。(友情42)

(133) おまちしてましたよ。津上さん！(闘牛93)

(134) 「まっていた、まっていた。」ただ一句。しかし伯母ならずばとほくはおもった。(思出45)

一人称も多いが、たずねる文のなかでの二人称のばあいも多い。

(135) 香代ねえさん、どこへいったんだい。(忍ぶ138)

(136) 「ねてたのか？」「ああ」(暗夜40)

(137) 十分もまたして何してましたの！(わが40)

(138) なにをしていた。いえ。いわぬと、これだぞよ。(羅生13)

(139) さくら「(涙ぐむ) お兄ちゃん……そんなこと考えてたの。」(寅次91)

(140) クビになったんじゃないの？ほんと？じゃあ、ただ、なまけて、社をやすんでたのね。(自由20)

(141) わたしが(中略)はたらいてる間に、あんたは、ひと月も、ぶらぶらあそんでたのね。(自由22)

(142) いつのまにか寅が立っている。社長「あ……き、きいていたのかい」寅「きいてたよ」と笑顔で階段の下に近より、一同をふりむく。

(寅次90)

つぎの例はたずねるほうが現在形で、こたえるほうが過去形である。たずねる時点では、まだ持続過程のなかにあつたわけである。

(143) 親らん「そんなところで何をしている。」唯円「ばんやり町をとおり人を見ていました。」(出家66)

第8節 三種の時間帯と継続相過去形のテンス^(注)

1) 山田小枝1984の「三種の時間帯」と継続相過去形のテンス

山田小枝1984は、そのⅡの「事象の時間的構成とその認識」のなかで、「すべての事象は三種の時間の相対的關係として示されうということを一つの前提としておきたい。」として、つぎのような説明をおこなっている。

事象そのものの生起時間帯 I と、事象生起が話者 (= 観察者) によって観察される観察時間帯 (視野) J, 絶対時間 T である。J は別の用語では事象の背景 (background, Hintergrund), あるいは事象の生起する世界 (world), あるいは事象生起の機会 (occasion) ともよばれる。更にその背後にあるのが絶対時間 T で、事象の生起は I, J, T の三段構造として解析しないと説明のつかない部分が生ずる。これから、必要な場合にはこの三種の時間帯を三本の直線または不連続線で示すことにする。

特にこの三つの時間への言及が必要でなければ、事象は、J と I だけで示すことにするが、その場合にも T の存在は自明のことである。

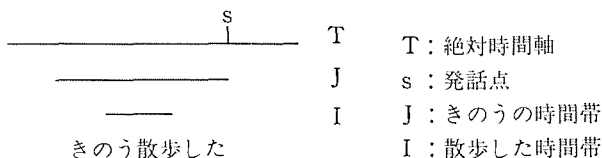


図8 三種の時間帯と事象

この図8は「きのう散歩した。」のばあいであり、図11は「毎日ジョギングする。」のばあいである。図11では、Jが毎日、Iが「ジョギングする」になるはずである。

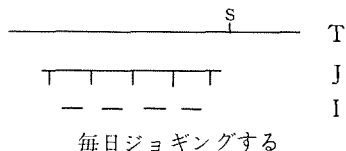


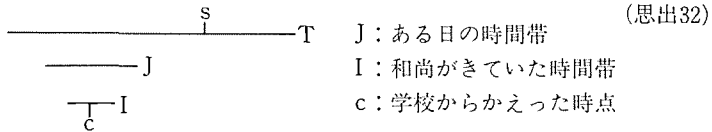
図11 均質不連続 (反復)

(注) この節は、山田小枝1984をよんでからつけたした。

(注)
2) 継続相のばあいの時間構成

山田1984の時間構成を継続相過去形のテンスにもちこむためには、もうひとつ、基準時間をしめすcをおぎなったほうがよいだろう。そうすると、つぎのA)は、図aのようになるだろう。

A) ある日学校からかえってみると、延年寺の和尚様がきていた。



図a

継続相のアスペクトを問題にするばあいは、cがIを分割している点にだけ注目すればよいが、そのテンスを問題にするばあいには、cとJの時間位置の両方に注目しなければならない。このばあい、cはIを分割しているが、JはIを分割していない。つまり、JとIの関係は、「きのう散歩した。」のような完成相のばあいとおなじになるのである。

ところが、継続相のばあい、いつもそうなるかという、かならずしもそうはならない。つぎのイ)のばあいには、IはJよりひろい時間帯をもっている。

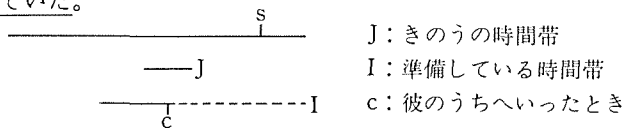
イ) 去年の元旦、先生の家_に年賀のあいさつ_をにうかがうと、先生は、暮れにかぜをひかれたとかで、床をとってやすんでおられた。



図b

それに、もっとやっかいなことには、Iが、sとかさなるかもしれないということがある。

ウ) きのう彼のうちへいったら、ねじりはちまきで、あさっての会の準備をしていた。



図c

(注) これは、山田1984にヒントをえて筆者が展開したものである。たぶんIの内容が山田1984からずれているものとおもわれるが、こちらのほうが、図aそのものにはちかいだろう。

Iに点線をまぜたのは、不確定だからである。

そして、このIがどのような長さになるかについては、第2節でのべた持続過程の成立をあらわしているものでないかぎり、その文内または文外の環境によってしかわからないのである。このばあいには、基準時間がないので、1)の図8とおなじになる。

エ) その日は、二人はしばらくのあいだはなしこんでいた。

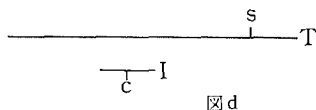
3) 「観察時間帯」や基準時間のしめされないばあい

実際の例では、山田の「観察時間帯」(J)のしめされていないものがおおい。

オ) 島村も帳場へ行くと、炉ばたにおおがらの女がうしろむきにすわっていた。(雪国87)

カ) 物見のやぐらにでてみると、峠下の種市の村の野辺のあたりで白いけむりがあがっていた。(落城23)

この例は、基準時間(c)はしめされているが、観察時間帯(J)はしめされていない。けれども、その内容や文脈から、「事象の生起の時間帯」(I)が発話時点(s)よりまえのことであることがわかる。



それは、文章の構造によって、大きなできごと過程が過去のものであることがわかるからである。だとすれば、文中にはなくても、やはり観察時間があるとかんがえたほうがよいだろう。つぎのように基準時間もしめされていないものについても、そのことがいえるとおもう。

キ) ベッドには、あかい血のついたハンカチがのこっていた。(冬の115)

ク) 月はほとんど中天にのぼっていた。(田園78)

この、大きなできごと過程が過去のものであるという点は、文章または段落の構造の研究によってうらづけられなければならないが、小説の地の文については、たいてい過去のものであるといえるだろう。

4) 長期にわたる持続のばあい

長期の持続のばあいも同様のことがいえるが、そこに時間位置をしめす状況

語があるばあい、ふつう、それは、Iではなく、Jであろう。

ケ) そのころの欧州には、量子力学という新しい物理学が疾風のようにふ
きまくっていた。(根源103)

なお、観察時間帯Jは、継続相と完成相に共通するものであって、完成相の始発から終了までの時間帯ではない。それはIである。継続相非過去形を「このごろ」「ことし」「今世紀は」などにかざることができるのも、それがIでなく、Jであるからだろう。

第2章 過去以前から過去へ

第1節 変化(始発)がおわって、過去のあるときに結果(運動)の局面のなかにあること

継続相の形式が、ある局面の完成後につぎの局面のなかにあるすがたをあらわすことがあることは、第III部第3章でのべた。このばあい、その継続相が過去形をとると、このテンス的な意味が実現する。

それが変化動詞であれば、そのまえにその動詞のあらわす変化の局面がおわって、そのとき結果の局面のなかにあったことをあらわす。

(144) 新治が次にあう手だてもかんがえつかずに、だまってあるうちに、
灯台をみおろすところまで二人はきいていた。(潮騒30)

(145) ふとふりかえると、いつのまにか後方の、車の灯はみえなくなってい
た。(未知329)

これらの例では、そのすこしまえに、〈まだきていない〉〈みえている〉という状態があつて、それが変化したことと、そのときには、その変化後の状態のなかにあったことをあらわしている。

また、それが動作動詞であれば、そのまえにその動詞のあらわす動作の始発の局面がおわって、そのとき運動の局面のなかにあったことをあらわす。

(146) まつ子と咲子とは、いつのまにか、咲子の知らぬ祖母、大祖母などの
はなしをしていた。(冬の143)

(147) 二桐もいつか泣いていた。(木石90)

これらの例では、そのすこしまえに、〈祖母たちのはなしをしていない〉〈泣いていない〉状態があつて、それがこのような運動の状態にはいったことと、そのときには、その運動の状態のなかにあったことをあらわしている。

これらは、そのまえの局面がまるごと完成したことをあらわす点において、部分的に完成相の意味を実現しているが、あとの局面のなかにあることをあらわしている点において部分的に継続相の意味を実現している。そして、たぶん、あとのほうに重点があるといってよいだろう。これらが過去以前の完成をあら

わす側面をもっていることは、第VI部でのべた完成相前過去形に相当する継続相過去形と共通である。けれども、後者は、局面の完成でなく、動詞のあらわす動作過程全体の完成をあらわしていて、あとの局面が分析しだされていない点で、この章でのべているものとちがっている。第VI部の「していた」が、過去のある時点を大きなできごと過程のそとにしているのに対して、第VIII部第2章の「していた」は、それを、大きなできごと過程のなかでとらえているのである。

この章でとりあげている「過去以前から過去へ」の用法は、第VII部第4章でとりあげた継続相非過去形の「現在以前から現在へ」と、テンズ的に対立する。けれども、使用例は、過去形のほうが多い。数そのものは、非過去形もかなりあるが、そのなかから、小説の地の文の例をとりさって、ほんとうに現在、状態のなかにあることをあらわすものだけをとりだすと、非過去形の例は、ぐんとへる。なぜそうなるかについてかんがえてみたい。

そのひとつは、形式間の対立のありかたの問題である。継続相過去形「していた」の〈過去以前から過去へ〉は、形式的には、継続相非過去形「している」の〈現在以前から現在へ〉と対立するが、意味的には、完成相過去形の〈過去から現在へ〉とも対立する。つまり、あとの二者が類義形式であって、それが前者と対立しているのである。

ア) そのときは、もう なおっていた。↔ {イ) いまは、もう なおっている。
ウ) いまは、もう なおった。

〈現在以前から現在へ〉あるいは、〈過去から現在へ〉のばあいには、話しの時点と変化の時点のふたつしかない。それに、現在のことは直接にも認知できることである。そのため表現形式による弁別力の精密さがそれほど要求されないためだとおもわれるが、ふたつの形式が類義形式として成立する。いいかえると、現在以前と過去の分化がそれほどすすんでいないのである。こういうことで、継続相過去形「していた」の〈過去以前から過去へ〉は、ふたつの形式と対立するものとして、そのひとつよりも多くの使用例をもっているとかんがえられるのである。

なお、現在以前と過去の形式の分化がすすんでいないことは、第V部第3節の「モウタベタ」と「キノウタベタ」の分化があまりすすんでいないこととも通じる。この問題については、第V部第3章でのべた。

継続相非過去形「している」の〈現在以前から現在へ〉の用法が継続相過去形「していた」の〈過去以前から過去へ〉よりもすくない理由は、もうひとつあるだろう。それは、現在がかんでいるばあい、わりに理解しやすく、それほど説明を要しないからである。〈現在以前から現在へ〉のばあい、「おや、はじまってるぞ」とか「もうすんだよ」とかのように、発見的要素があったり、とくに通達の必要があったりするばあいにしぼられる傾向がつよいのだとおもう。それに対して、〈過去以前から過去へ〉のばあいは、発話時（現在）と過去と過去以前という三つの時間位置がからんでいて、しかも、事象そのものが、直接認識できない、過去や過去以前のほうにあるので、いきおい、それを説明する必要がたかまるのだろう。

第2節 いろんなタイプ

ここは、第Ⅲ部第3章第2節と項目がかさなることになるが、使用例をあげておく。

1) この意味を実現させる動詞

a) とおりこしをあらわす動詞

(148) 結局これらをすべて運び、くみたてたときには、十一時をかなりオーバーしていた。(未知325)

(149) 信一はマントの間から帯にゆわえていた時計をひっぱりだした。七時まわっていた。(無限78)

(150) 市九郎の店に男女二人の旅人がたちよった。それはあきらかに夫婦であった。男は三十をこしていた。(恩讐63)

b) 経過をあらわす動詞

(151) それから八年たっていた。(私の79)

(152) りきはなぐられとおしだったが、その数がすくなくなり、なぐられるとこわいぞという感覚がりきの頭にかげをひそめてから、だいふ年月がたっていた。(あに143)

c) 到達をあらわす動詞

(153) 津上はだれがやっても、失敗するわずらわしい社会部の^{デスラ}副部長を三

年大過なくつとめあげていた。(闘牛82)

d) 始発をあらわす動詞

(154) 内部では、婦人部役員会がはじまっていた。(ない48)

(155) 車がうごきだしても、私はその眼のかがやきをおもいだしながら、剣持がそれをどう思っているかは知らないながら、彼に一種の嫉妬さえ感じはじめていた。(冬の185)

(156) おたがいがくいあうような目で、かおをみあっていたのは、数瞬時のことで、車は、なめらかにすべりだしていた。(帰郷33)

e) 終了をあらわす動詞

(157) タイヤの修理はおわっていた。(帰郷19)

f) 出現、消滅をあらわす動詞

(158) だが、敗戦によって、これらの調査のほとんどが国内にもちかえられず、アジア研究には、一種の真空状態がうまれていた。(学問248)

(159) 高の消息はその後たえていた。(冬の101)

(160) 彼女は、羽根田の十倍も、平常性をうしなっていた。(自由349)

(161) 魚はにげていた。彼はえさをとりかえて、また、竿をたれた。

(木石92)

g) 変化そのものをあらわす動詞

(162) 三浦にいわせると、終戦後、時代はまったくかわっていた。(闘牛125)

(163) おくみは夕方に行きがついたので、てがるな着物にきかえていた。

(桑の30)

h) 「なっていた」

(164) それから三年たったとき、扇朝は五六人の一座をつれて、旅から旅をまたまわってあるく不幸な芸人になっていた。(末枯22)

(165) 応召したときは38だったが、かえてみると、42才にになっていた。

(闘牛96)

(166) もっともこのときは、増見先生は辞職して、田中先生とかいう髪をていねいにわけた若い先生の時代になっていた。(思出23)

i) その他

(167) このごろでは、彼の駒子に対する不機嫌も、やっと、とけていた。

(自由345)

(168) 街路へでたときには、トッぷり、日がくれていた。(自由338)

2) この意味を実現させる状況語、修飾語

a) 「～のあいだに」「いつのまにか」など

(169) しかし、その沈黙のあいだに、話した以上に、すべてが判明していた。(ない69)

(170) ながくいるうちに、私は嘉門のそうした発作をあらかじめ感じることができるようなにさえなっていた。(冬の121)

(171) そして、しらずしらずのうちに、この兵隊のことをかんがえるというようになっていた。(真空82)

(172) われわれの見つめる東の地平線には、いつのまにか朝日が高くのぼっていた。(未知333)

(173) つめたいあけがたの空気が、いつのまにか、白んでいた。(ない71)

(174) いつか私はねむっていた。(野火83)

(175) そして部屋の主もいつしかこの部屋の殺風景なさまが似つかわしいまでに自分をかえていた。(生活55)

(176) 昨夜から今朝にかけて雪になっていた。

b) 「とうに」「とくに」など

(177) わたしはとうにきめていた。(平凡51)

(178) もうとくに就寝時間の九時はすぎていた。(風立103)

c) 「もう」「すでに」

(179) 山かいは日かげとなるのがはやく、もう寒々と夕暮色がたれていた。
(雪国59)

(180) 外にでると、もう春の夜はほのぼのとあけていた。(思出77)

(181) 女中が二人とんででたときには、娘はもう上へあがって肩かけやコ
ートをかなぐりすてていた。(多情21)

(182) 去年のくれのある土曜日――安吉はもう合宿にはいっていた。
(むら23)

(183) 室内の話し声はとびらの外まできこえたが、もはや二人のおし問答は終末にちかづいていた。(本日99)

(184) 彼女はすでにひたいに玉のあせをかいていた。(厭が273)

- (185) 「だめです」といかにも絶望的な調子でいったが、その眼はすでにわらっていた。(或る199)
- (186) 私はすでにその村にあゆみいていた。(野火62)
- (187) 彼とならんでいた韓延年はすでにうたれて死していた。(李陵165)
- (188) 時雄が社から帰ったときには、まだとても帰るまいと思った芳子がすでにその笑顔を玄関にあらわしていた。(蒲団44)
- d) 「また」「ふたたび」など
- (189) かえったときは私の気分がまたかわっていました。(ここ226)
- (190) 空は大きく雲の位置をかえながら、ときに切れ目をみせて冬の陽のような白い光をなげるかとおもうと、ふたたび小さな雨をおとしていた。(くれ115)
- e) 「すっかり」
- (191) 江ノ島から帰ってきたとき、美夜はすっかり元氣になっていた。
(女坂99)
- (192) どのくらい時間がたったか、すきま風がはだ寒く、すっかり夜になっていた。(夫婦43)
- f) 動作にかかる修飾語
- (193) まどの外に茂子をみとめると、彼はつととたちあがっていた。
- (194) 「あっ」とおもったときには、がたんとぶつかっていた。
- g) 動作にかかる状況語
- (195) 米子のくちびるは、熱でひからびていた。
- (196) 駿介はびっくりして老人をみつめていた。(生活114)

第3章 恒常的な質的属性を 継続相過去形であらわすとき

第1節 そのムード・テンス的な性格

1) 恒常的な属性を継続相過去形であらわすとき

つぎの描写は、継続相の非過去形でむすんだ文と過去形でむすんだ文がつづいている。

(197) 山は、海岸ぎりぎりまでせまっている。山と海にはさまれて、自動車道路と電車の軌道と国鉄とが、せまいおびのようにはしっていた。

(高崎 9)

この文章は説明文であって、小説の地の文ではない。まえの文が継続相非過去形でおわっているのは、いわゆる歴史的現在ではない。それが、現在をふくめて恒常的な属性であるので、非過去形がつかわれているのである。そして、そのあとの文にさしめられていることがらも同様のものであり、これも「はしっている」のように、非過去形にかえることができる。それでは、それがなぜ過去形でかかれているのかというと、それはそれをみたのが過去のことであるからである。その点から、まえの文も「せまっていた」と継続相過去形にかえることができるのである。このように、恒常的な属性をもっているものをみて報告するばあいには、それを恒常的な属性をもつものとしても、また、みたときの状態としても、いいあらわすことができる。

これの筆者の梅棹氏は、これをかくとき、これが恒常的な属性であることをしっていたであろうし、また、これをよむ読者にもそれがつたわっている。その点では、つぎの例のようなものと、あきらかにちがっている。

ア) いまはなくなったが、そのころは、国鉄がはしっていた。

こちらのばあいは、さしめされた状態そのものが過去である。

それに対して、恒常的な状態であるものを、話し手がみた時点のこのようにしてあらわすほうは、そこに、話し手がみたという、話し手の発見の要素はいつているのだということができよう。けれども、それが過去形であるのは、みたのが過去であるという、過去の要素もいつているのだといわなければな

い。それは、つぎのように、過去の要素のないものとはちがうのである。

イ) 「来週出張するところ、国鉄とおってるかな。」「ちょっとまって！(地図をみて) とおってた。とおってた。」

最初にあげた(197)のなかの「はしっていた」は、その同じ(197)のなかの「せまっている」と、イ)の「とおってた」の中間、つまり、過去と発見との中間のどこかに位置するものとおもわれる。このことについて、かんがえてみたい。

2) 継続相過去形の基準時間が発見時であるとき

三上章1953は、「八 テンスの問題」のなかで過去形の発見や確認の用法についてのべたあと、「以上五通りの対立のうち、心理的ニュアンスのつくのは、インパアフェクティブに多かった。テンスを明らかにするためには、まずアスペクトを明かにする必要があると言ったのは、ここを指したのである。」とのべている。この「インパアフェクティブ」というのは、継続相、または「ある」「～だ」などをさすのであるが、これは、だいたいな指摘である。この三上の指摘にもとずいて、継続相過去形についてかんがえてみると、そのいちばん基本的なところに、すでに発見の要素がかおをだしてくるのだということがわかる。

継続相のアスペクト的な意味は、基準時間において持続過程のなかにあるすがたをあらわすことであった。そして、継続相の非過去形のばあいには、その基準時間が現在であり、過去形のばあいには、それが過去に位置するというのが、その基本的なテンスの意味であった。現在のばあい、その現在というのは、発話時である。ところが、過去のばあい、その過去というものに、いろんなものがある。それを第1章第1節の1) からひろってみる。

ウ) 午前七時、私はNHKのスタジオで待機していた。

エ) 有楽町の東口におりたときには、他人のことはどうでもいい人たちがゾロゾロあるいていた。

オ) 島村が帳場へ行くと、炉ばたにおおがらの女がうしろむきにすわっていた。

カ) ひょいと上のほうをみると、男の子のあたまが土手のうえへでていた。

キ) 気がつくと、まどのそとに我ひとりたそがれの空の光をすいがおに、片々と雲がとんでいた。

ク) 瀬谷の妻が病人の手くびをにぎってみると, まだたしかに脈をうって
いた。

ケ) 真知子も手くびをのぞいてみたが, これは衝突の時からとみえて, 三
時四十分でとまっていた。

こうしてながめてみると, その基準時間が, その状態を認識した時点である
ことがかなりあることがわかる。とくに, 条件句節が基準時間をしめしている
ばあい, その条件句節は, 主文のさししめす状態を発見する条件をしめしてい
る。完成相のばあいは, ふつう, つぎのコ) のように, 主文のさししめす運動
をひきおこす条件になっているのだが, 継続相のばあいには, 条件句節のさし
しめす条件があってもなくても, 主文のさししめす状態は存在している^(注)のであ
って, 条件句節は, それを発見する条件にしかなくなっていないことがおおい。

コ) ひょいとうえをみると, 男の子があわててあたまをひっこめた。

つまり, 継続相過去形は, 過去のあるときに持続過程のなかにあったことを
しめしていると同時に, おおくのばあい, 過去のあるときに持続過程のなかに
あることをみつけたことを, かねあらわしているのである。つまり, それは,
つぎのようなものと共通する側面をもっているのである。

サ) 雪がとんでいるのに気がついた。

シ) 手くびをにぎってみると, たしかに脈をうっていることがわかった。

けれども, ここでは, 述語は過去の状態をあらわしている。発見という要素
がつけくわえられるとしても, それはニュアンスであって, これをもって, こ
の「していた」が発見をあらわしているなどということはできない。そのこと
は, これらを継続相非過去形にかえてみると, わかる。小説の地の文のばあい
には, いわゆる歴史的現在として, これらのうちのあるものは成立するかもしれ
ないが, 基本的には, 非過去形にかえることができない。これは, 過去のこ
とをあらわすものとして, そのテンス的なものがいきているからである。

それにしても, こんなところからすでに発見の要素がうまれているというこ
とは, 継続相過去形のテンスにとって, だいじな特徴であるということをも, み
のがすわけにはいかない。

(注) 高橋太郎1983Aでは, 発見条件のようなものを外的な条件とよんでいる。

3) てい察報告の文のなかで

親分から、100mさきにあるやしきの門があいているかどうかをみてこいと命じられた子分が、かえってきて、つぎのように報告したら、親分は、「それじゃいこう」といって、たちあがったとしよう。

ス) やしきの門はあいていました。

子分が過去形で報告したのは、みた時という過去において、その状態にあったからであり、親分が「それじゃいこう」といったのは、子分がみた時（過去）、親分が「いこう」といった時（現在）、みんなが門に到着するとき（未来）をとおして、その状態がつづくという前提にたったからである。もし子分も、この前提にたって発言するならば、現在形で報告してもよいわけである。

セ) やしきの門はあいています。

このふたつがどちらもおなじ事実をいっているのだとすれば、この二つの形の対立は、過去と現在の対立のうえに、認識の要素のありなしの対立がのっかっているということができよう。ただ、このうえにのかったほうの対立は、状態がつづくという前提に依存しているので、その前提の成立する確率が関係してくる。したがって、つぎのような、その前提成立の確率がひくいばあいには、過去と現在の対立としてしかなりたないだろう。

ソ) 門にカラスがとまっていました。

タ) 門にカラスがとまっています。

それに対して、つぎのようなものは、その前提成立の確率がひじょうにたかいので、過去形のばあいの発見的ニュアンスが、さらにつよいものとなるだろう。

チ) 門はだいぶこわれていました。

ツ) 門はだいぶこわれています。

こうしたものをくらべてみると、発見性のつよさは、過去性のよさと関係している。この事件のずっとのちになってからの話ならば、つぎの三つは全部成立するが、てい察して帰ってきた時の発言であれば、文としては、テ) がもっともしぜんであり、ナ) はもっともふしぜんだろう。（もちろん、てい察内容の情報としての価値については、べつの評価がありうるが。）

テ) やしきについたとき、カラスが門にとまっていました。

ト) やしきについたとき、門はあいていました。

ナ) やしきについたとき、門はだいぶこわれていました。

発見の意味が成立するためには、発見時から発話時までおなじ状態がつづいていて、おなじ大きなできごと過程のなかにあるという条件が必要だとおもわれるのである。

発見時と発話時とが接近すればするほど、過去性がよわくなって、発見性がつよくなるとおもわれる。やしきが80mさきにあるとき、50mさきにあるときというふうに、近くなればなるほど発見性がつよくなる。

このとき、二人の子分がてい察にいったとする。そして、ほとんど同時に二人がこの門をみたとすれば、おたがいに、つぎのようにいうだろう。

ニ) あ、あいてた。

このときは、完全に発見の過去形になって、テンス性は消失する。そして、その事象上の意味は、非過去形とおなじである。

ヌ) あ、あいてる。

以上のようにみえてくるとき、継続相の基本的なテンスの意味がきえて、ムード的な意味が発見にかわる過程を、ひとつの仮説としてさしだすことができる。ただし、これは、あたまのなかの操作でみちびきだしたものであって、歴史的に実証したわけではない。したがって、この仮説は、あるいは、まちがいかもしれない。今後の検討が必要である。

4) ふたたび、恒常的な属性を継続相過去形であらわすとき

恒常的な属性は、時間によってかわるものでないので、それを継続相過去形であらわすとき、発見・報告性がかなりつよくなる。やしきの門が毎日あいたりしまったりするのに対して、山や道のように、そんなにかんたんにかわるものではない。ひと月まえに派遣された調査隊がつぎのように報告しても、さっきの子分のばあい以上に発見のニュアンスがつよい。

ネ) 三の沢の道は、二の滝のてまえで尾根すじのほうへのぼっていました。

それだけでなく、ふつうの叙景文のばあいでも発見のニュアンスがつく。

(198) 背景の山は、いまにもむっくりとたちあがろうとしている恐竜のせなかのように、特徴のあるもりあがりをみせていた。山は、まわりから孤立して海岸ぎりぎりにたっていた。(高崎10)

この例は、「そのとき」「そのころ」など過去の時間位置をしめす語でかざることができない。これは、それをみたときのようなすをおもいだしてかかれたものだともうが、「それをみたとき」のような状況語でひろげることもできない。なにかの従属成分でひろげるとすれば、それは、「××からみると」のような条件句だろう。これは、発見の条件である。これを「××からみたとき」にかえられないことはないが、そのときでも、すでに、時間性はうしなわれて、それを「わたしが××からみたとき」「わたしが××からみると」のように個別化することができない。

条件句節でひろげられるのは、継続相過去形の一般的性格である。けれども、ふつうのばあいには、その条件句節を個別化しても、また、「～したとき」にかえても、それほどふしぜんではない。そのことは、2)のオ)～ク)の条件形をそのようにかえてみれば、すぐわかることである。

ともかく、ここで恒常的な属性のばあいには、過去形がつかわれても、テンズ性がよわいということを確認しておく必要があるだろう。

だからといって、これがまったく過去性をもたないとか、ただ発見・報告をあらわしているだけだなどとはいえないだろう。こうしたものは、過去性がよわまって、発見・報告性が生じてくる過程にあるものとして位置づけておくのが妥当であろうとおもう。

第2節 認識のときと、展開のとき

アспектから解放されて恒常的な属性をしめしている継続相が過去形であらわれるばあい、その基準時間は、その状態に気づいたときであることと、話題にしている事件が展開している時期であることがある。つまり、小さいできごと過程のなかにあるもののばあいと、大きなできごと過程のなかにあるばあいとがある。^(注)

両者は、それほどきちんとわかれていないし、また、両者をはねることもできる。しかし、だいたい、そのようなひろがりをもっているといってもよいだろう。それから、その基準時間は、たいていのばあい、ことばによってしめされていないということも、このタイプのひとつの特徴だろう。

(注) ここで言っていることは、たぶん、第1章第8節でとりあげたことと関係があるだろう。

1) 認識したときのこと

- (199) よごれた着物をきてあそんでいる子どもたちにあやしまれながら、
がけをつたってその住宅街にのぼっていくと、そこはでこぼこの多い
一帯の高台で、下の工場からの煙でくろくなった屋根が樹々にかこま
れて不規則にならび、そまつな生垣のかげに小月給とりなどの住宅ら
しいものが肩をならべていた。(冬の9)
- (200) 「ガン研究施設」——という表札は、このろうかからすこしおくまっ
たところにぶらさがっていた。(暗号163)
- (201) 前面のかべは雨水によるしみにおおわれ、石段の角はかけていた。
(野火77)
- (202) 家の背後は山つづきで竹やぶになっていた。(田園14)
- (203) やはり春三たちの長屋の造りにそっくりで、地面とほとんどすれす
れになるように床をひくくはり、掘立小屋式にできていた。(本日95)
- (204) この船だけは塩っくさくない、函館のにおいがしていた。(カニ72)

2) 事件が展開した時期のこと

- (205) 八代神社は綿津見^{わたつみのみこと}命をまつっていた。(潮騒5)
- (206) 山には、ペン・なんとかという、スコットランドふうの名まえがついでいた。(高崎26)
- (207) 障子をへだてて廊下であるが、それが美濃部たちの台所になっていた。(厭が280)
- (208) 私の座敷には控えの間というような四畳が付属していました。
(ここ204)

第4章 モーダルな性格とテンス

第1節 発見, 確認, おもいだし

前章で継続相過去形の、過去をあらわすものから発見をあらわすものへのつながりに言及したが、あきらかに現在のことを過去形であらわすばあいは、過去性がなくなる。そして、発見, 確認, おもいだしなどへとモーダルな意味がかわることがおおい。

つぎのようなものは、現在ある状態をみつけての発言である。

(209) おや, こんなトゲがささった。いたいはずだ。

つぎの例は、みつけての質問であって、確認ではない。

(210) やあ, 野上君。 きてたの? (八月17)

つぎのは確認である。

(211) 「礼美, おふろわいてたわね。」「はい」(女生16)

つぎのは、おもいだしである。

(212) あァ, ビールが一本, のこってたわ。(自由375)

これらは、すべて非過去形にすることができる。現在のことを継続相非過去形でいうと、基本的なテンスの意味が実現する。それは、ふつうの用法である。継続相過去形が発見, 確認, おもいだしなどをあらわすのは特殊な用法である。

なお, 第V部第5章第3節であげた「あった」, 「いた」は、ここでのべているのとおなじ用法である。

第2節 非現実の仮定のばあいのテンス

今回の資料にはなかったが、過去, 現在, 未来に仮定された, 持続過程のなかにあるすがたは、テンスから解放されて、継続相非過去形と過去形とがともに使用可能である。

(213) もしきのう天気だったら, ぼくらがついたとき, 試合をやっている
ね。

(214) もしきのう天気だったら, ぼくらがついたとき, 試合をやっていた

ね。

(215) もし合格していたら、いまごろ汽車にのってるね。

(216) もし合格していたら、いまごろ汽車にのってたね。

(217) あなたがおしえてくれなかったら、あとしばらくここでみてるね。

(218) あなたがおしえてくれなかったら、あとしばらくここでみてたね。

なお、これは、第Ⅵ部第3章第4節でのべたものとはちがう。第Ⅵ部のものは、継続相形式であっても、完成相のアスペクト的意味が実現しているのに対して、こちらでは、アスペクトとしては、継続相の基本的な意味が実現している。

第Ⅸ部 内容（細部のもくじ）

第Ⅰ部 序	説	1
第1章 この研究の対象		1
第1節 この研究の対象		1
第2節 現代日本語動詞のパラダイム		2
1) 動詞のとらえかた		2
2) 基本的な語形変化		3
3) 文法的な派生動詞やくみあわせ動詞が表現手段となる 動詞のカテゴリー		5
第3節 アスペクト語形とテンス語形のパラダイム上の位置づけ		7
1) アスペクト動詞のテンス語形		7
2) ムードのなかにあるテンス		7
第4節 アスペクト動詞と局面動詞など		8
1) 局面動詞		8
2) 「していく」「してくる」「しておく」「してある」 「しつつある」など		9
第2章 分析の観点		10
第1節 アスペクトについて		10
1) 対立のたちば		10
2) 形態論的な対立としての完成相と継続相		10
3) アスペクト形式の、局面動詞からの分離		11
4) 基準時間について		12
5) アスペクト的な意味の実現と、動作の局面		13
6) アスペクト的な意味の限定と展開		14
7) 状態の持続過程のなかにあること		15
8) アスペクトからの解放 (1) —— modus の要素のあるもの		15
9) アスペクトからの解放 (2) ——できごと過程のなかにはない 属性をあらわすもの		16
第2節 テンスについて		18

1) 形態論的な対立としての非過去形と過去形	18
2) 絶対的テンスと相対的テンス	18
3) ムードのなかにあるテンス	19
4) アスペクトとテンス	19
5) 現在点の精密度	20
6) テンスからの解放	21
7) コンスタントな属性をあらわすもの	22
第3節 完成相の分析的テンス形式に相当する継続相形式	22
1) 前非過去形と前過去形に相当する「している」と「していた」	22
2) 現在以前の動作やできごとの質化	23
3) 非現実の仮定のばあいのテンスの諸形式	23
第3章 用例のための資料	24
1) 文学作品	24
2) 論説文など	26
3) シナリオ	27
4) 録音資料(ラジオの実況放送)	28
第4章 参考文献	29
第Ⅱ部 完成相のアスペクト	33
第1章 動作のまるごとのすがた	33
第1節 完成相の基本的な意味	33
1) 「まるごと」の意味	33
2) 局面のとらえかたによる多義性	35
3) 「2時から3時までとまった」と「とまっていた」のちがい	36
4) 事象の過程のいろいろな部分	37
5) 動作動詞と変化動詞の局面の構成	38
6) アスペクトと局面	38
7) 局面動詞について	39
第2節 運動の局面でとらえる完成相	40
1) 動作動詞と変化動詞	40
2) 再帰的な動詞のばあい	41
3) 運動の局面	42
第3節 動作の局面と始発の局面	42
1) 瞬間過程と持続過程	42

2) 動作の局面と始発の局面	43
3) 始発の局面をとりだすばあい(1)	44
4) 始発の局面をとりだすばあい(2)	45
第4節 結果の局面をふくみこむばあい	46
1) 結果の局面をふくみこむばあい	46
2) あいまいなもの	47
3) 動作動詞化(1)——瞬間的な動作	47
4) 動作動詞化(2)——持続的な動作	48
5) 対象変化動詞のばあい	49
第5節 変化の局面と変化完成の局面	50
1) 変化の始発から終了までの局面	50
2) 変化の局面と変化完成の局面	51
3) 経過をあらわす動詞のばあい	52
第6節 移動動詞の局面	52
1) 出発, 移動, 到着	53
2) 結果の局面をふくみこむばあい	54
第2章 進行過程のなかにあるすがた	55
第1節 進行過程のなかにあるすがたをあらわす「いく」と「くる」	55
1) テンスのうえでの特殊性	55
2) 進行過程のなかにあるすがた	56
3) 「くる」と「きた」がおなじになる理由	56
第2節 「いく」「くる」に準じる動詞	57
第3節 進行のようすをしめす副詞にかざられるばあい	58
第3章 状態の持続のなかにあるすがた	60
第1節 「みえる」「きこえる」「おいがする」など	60
1) テンスのうえでの特殊性とアスペクトのうえでの特殊性 (準アスペクト)	60
2) モーダルな性格	61
第2節 「存在する」「すむ」「つづく」など	62
第3節 「ある」「いる」について	63
第4章 アスペクトからの解放	64
第1節 現在の直接的な心理体験をそのままのべるばあい	64
1) 「おもう」「かんがえる」「信じる」「気になる」など	64
2) 分割・非分割からの解放	65

3) モーダルな性格	66
4) 「おもった」「おもっている」について	67
5) 「つかれる」「すっとする」など	68
6) 「おどろく」「よわる」など	68
7) 「つかれた」「いやになった」などについて	69
第2節 過程的な側面をうしなった動詞	70
1) できごと過程にかかわらない属性	70
2) ものごとの特徴をあらわす動詞	72
3) 関係をあらわす動詞	72
4) 動詞述語文から名詞述語文へ	73
第3節 過程的な側面を要求しない述語のなかで	74
1) ものごとの質的な属性をのべる文のなかで	74
2) 特定のできごとをさししめして、質的な属性としてのべるばあい	75
3) できごと過程からひっぱりだした質的な属性をあらわす文のなかで	77
4) ものごとの性格、特徴を記述した箇条がきのなかで	79
第4節 アスペクトからの解放とテンスからの解放	80
1) アスペクトからの解放とテンスからの解放	80
2) アスペクトから解放されていて、テンスをもつもの	80
a) 「おもう」「かんがえる」など	80
b) 「めだった」「ちがった」など	81
c) 現在の質的な属性	81
d) 「5才になる」「5年たつ」など	81
e) 「はじめてみる」「なにをいう」など	81
3) テンスから解放されていて、アスペクトをもつもの	82
a) 一般的な命題の文のなかで動作をあらわす動詞	82
b) 完成相があらわす非連続のくりかえし	82

第Ⅲ部 継続相のアスペクト 85

第1章 持続過程をなす局面のなかにあるすがた 85

第1節 継続相形式があらわすアスペクト的な意味 85

1) 持続過程をなす局面のなかにあるすがた	85
2) 継続相と局面	87
3) 「進行の状態」というとらえかたについて	88
4) 「結果の状態」というとらえかたについて	89

5) 動作の断続的なくりかえしについて	90
6) 「単なる状態」について	91
7) 状態か動作の局面か	92
第2節 持続過程をなす運動の局面のなかにあるすがた	92
1) この意味が実現する条件	92
2) 動作動詞であるばあい	94
a) 持続をあらわす動詞	94
b) 持続的なうごきをあらわす動詞	94
c) 動作の連続的なくりかえし	95
d) 力学的な運動のない動作	96
e) 動作と状態のあいだ	96
f) 「たっている」「すわっている」など	97
g) 「いきている」「くらしている」など	99
3) 変化動詞であるばあい	100
a) 瞬間的な変化をあらわす動詞	100
b) すこしずつの変化をあらわす動詞	101
c) 主体の状態をかえる他動詞	101
4) 動作過程をあらわしていても、この用法をもたない動詞	102
第3節 持続過程をなす結果の局面のなかにあるすがた	103
1) 結果の局面をもつ動詞	103
2) 結果の局面をもつ動詞であっても、この意味を実現しないばあい	104
a) 変化の局面の完成をふくんでいるばあい	104
b) 状態の持続過程のなかにあるすがたをあらわすばあい	105
c) 変化の質をあらわす動詞	105
第2章 くりかえしの過程のなかにあるすがた	107
第1節 くりかえしの過程のなかにあるすがた	107
1) 「くりかえしの過程」について	107
2) 大規模な動作とのあいだ	108
3) くりかえしの過程になって、つづくわえられる意味	109
第2節 すがた的なもののくりかえし	111
第3章 ある局面の完成後につぎの局面のなかにあるすがた	113
第1節 ある局面の完成後につぎの局面のなかにあるすがた	113
1) そのアスペクト・テンシ的な性格	113
2) 基準時間のはじまりとのちがい	118

3) 前現在, 前過去とのちがい	119
第2節 この意味を実現する条件	119
1) この意味を実現させる動詞	120
a) とおりこしをあらわす動詞	120
b) 経過をあらわす動詞	120
c) 到達・接近をあらわす動詞	120
d) 始発をあらわす動詞	120
e) 終了をあらわす動詞	121
f) 出現, 発生, 消滅をあらわす動詞	121
g) 発見をあらわす動詞	121
h) 変化そのものをあらわす動詞	121
i) その他	121
2) この意味を実現させる状況語, 修飾語	122
a) 「～のあいだに」「いつのまにか」など	122
b) 「やがて」「まもなく」「もう」「すでに」など	122
c) 「やっと」「とうとう」など	123
d) 「また」「あたらしく」など	123
e) 「おどろいて」「急に」など	124
第4章 状態の持続のなかにあるすがた	125
第1節 状態の持続のなかにあるすがた	125
1) 状態の持続のなかにあるすがた	125
2) 結果の局面のなかにあるすがたと, 状態持続のなかにあるすがた	125
3) 運動の局面のなかにあるすがたと, 状態持続のなかにあるすがた	126
4) 状態である性質と, 性質の実現した状態	127
5) コンスタントな質的属性をあらわすもののアスペクト的な性格	128
第2節 状態持続のなかにあるすがたをあらわす継続相形式	128
1) 「している」の形で状態をあらわす動詞	128
2) 「している」の形で質をあらわす動詞のばあい	129
3) 「みえている」「きこえている」など	129
4) 「存在している」「すんでいる」など	129
5) モノの状態・質的な属性をあらわすばあい	130
6) 空間的な配置の述語	130
7) 状態のかたちで存在する関係	131
第5章 アスペクトからの解放	132

第1節 継続相の脱アスペクト化	132
1) 継続相の脱アスペクト化	132
2) 完成相の脱アスペクト化とのちがい	133
第2節 アスペクトからの解放とテンスからの解放	134
1) アスペクトから解放されているものとテンス	134
2) テンスから解放されていても、アスペクトからは解放されて いないもの	135
第IV部 完成相非過去形のテンス	137
第1章 完成相のテンス	137
第1節 テンス語形	137
1) テンスとアスペクトの語形	137
2) ムードのなかにあるテンス	139
第2節 完成相のテンス	140
1) 完成相のテンスと継続相のテンス	140
2) 完成相のテンスとモーダルな性格	142
第2章 未来	144
第1節 未来をあらわすことのモーダルな性格	144
1) 現実反映の側面におけるモーダルな性格	144
a) 未来の動作とモーダルなニュアンス	144
b) 未来の動作の確定性とモーダルな性格	146
2) 通達の側面におけるモーダルな性格	147
第2節 未来の動作の種々相	149
1) 「アクチュアルな未来」と「非アクチュアルな未来」について	149
2) 未来の動作の種々相	150
第3節 直後未来	153
1) 直後未来	153
2) 前兆を知覚して、しらせるばあい	154
3) 自分がこれからする動作を宣言するばあい	154
4) 聞き手の参加によって成立する自分の行為を宣言するばあい	155
5) 聞き手といっしょにする行為を宣言するばあい	155
6) あいての行動を指示するばあい	155
第3章 現在(1)——現在の動作、状態	157
第1節 発話時のなかにおさまる動作	157

1) 発話時のなかにおさまる動作	157
2) 成立時を予測できる瞬間的な動作の成立をのべるばあい	158
3) 自分の瞬間的な動作と同時の発言	159
4) 行為の実現となる発言	160
第2節 動作の進行のすがた	160
第3節 意味的に継続相と未分化なもの	161
1) 意味的に継続相と未分化なもの	161
2) 「おう」「かんがえる」など	162
3) 「つかれる」「はらがへる」など	162
4) 「みえる」「きこえる」など	163
5) 「存在する」など	163
6) 「ある」「いる」について	163
第4章 現在(2)——現在の質的な属性	165
第1節 できごと過程にかかわらない動詞	165
1) 質的な属性をあらわす動詞	165
2) 「よく」「いやに」などにかざられるばあい	166
3) 「九時になる」「半年たつ」など	166
第2節 できごと過程の特徴的な側面	167
第5章 ひろげられた現在	169
1) ひろげられた現在	169
2) 非連続のくりかえし	170
3) 一定の条件のもとになりたつ動作や変化	170
4) 性質の持続	171
第6章 テンスからの解放	172
第1節 なりたつ時間が限定されていないもの	172
1) コンスタントにくりかえされるできごと	172
2) なりたつ時間に関係のない命題のなかでの動作	172
3) なりたつ時間に関係のない命題のなかでの質的属性	173
第2節 過去のことの、時間の側面をきりすてた質化	173
1) 名詞述語文に相当するもの	174
2) 過去のことについての解説, 評価的ないいかた	174
3) 過去の仮定	175
第3節 その他	175
1) 操作てつづきの説明, 指示	175

2) 提示文のなかでの動作	176
3) その他	177

第Ⅴ部 完成相過去形のテンス 179

第1章 過去(1)——過去の動作 179

第1節 とおい過去から同時過去まで 180

1) 過去形であらわす動作の時間的な位置	180
2) 現在ときはなされた過去の動作	180
3) 現在と接する過去の動作	181
a) 直前過去の動作	182
b) 直前までの動作	183
c) 現在途中まですんだ動作や変化	183
d) 非過去形との対比	184
4) 現在といりまじった過去の動作	185
a) 発話の終了直前に完成する動作	185
b) 精密な現在点はいつか	186
c) 発話の終了と同時に完成する動作	188

第2節 結果の局面が現在存在しているばあいのこと 189

1) 変化動詞と結果の局面	189
2) 現在の事態をもたらした過去の動作や変化の説明	191
3) 直前の変化	191
4) 直前までの変化の成立	192
5) 現在に結果がのこっている過去の変化	193

第2章 過去(2)——過去の性質、ひろげられた過去など 195

第1節 過去の質的な属性 195

1) 過去の一時的な属性	195
2) ひろげられた過去における質的な属性	196

第2節 ひろげられた過去における動作 197

1) 過去における非連続のくりかえし	197
2) 過去の、なりたつ時間に関係のない命題のなかでの動作	197

第3節 過去の状態について 197

第3章 現在以前 200

第1節 「モウタベタ」と「キノウタベタ」について 200

1) 寺村秀夫1971のとらえかた	200
-------------------	-----

2) 鈴木重幸1979の批判	201
3) 現在以前と過去の対立	202
第2節 現在以前の成立	204
第4章 過去から現在へ	206
第1節 変化がおわって、現在結果の局面のなかにあること	206
1) 「今は」でかざられたもの	207
2) 「もう」「すっかり」でかざられたもの	207
3) 現状をさして、のべるばあい	208
4) 現状に気づいて、のべるばあい	208
5) 副詞や感動詞と共に起していない例	208
6) 完成相過去形と継続相非過去形	209
第2節 内的な感覚や感情の変化の結果が現在あること	209
第5章 モーダルな性格とテンス	212
第1節 過去の推量	212
第2節 決定の完成	213
1) 「買った!」と「やめた!」	213
2) 「した」と「なった」	214
3) 「する」と「した」	215
第3節 発見、確認、おもいだし	216
1) 発見	216
2) 確認	217
3) おもいだし	217
第4節 いますぐの命令	217
第Ⅵ部 完成相のテンス形式に準じる継続相	219
第1章 完成相あわせテンス形に相当する継続相について	219
第1節 前非過去形と前過去形に相当する「している」と「していた」	219
第2節 いわゆる「経験・記録」について	220
第3節 現在以前の動作やできごとの質化	222
第4節 発見、確認、おもいだしのばあいの「していた」	223
第5節 非現実の仮定のばあいのテンスの諸形式	223
第2章 完成相前非過去形に相当する継続相非過去形	225
第1節 現在以前における動作の完成	225
1) 現在以前の完成	225

2) 継続相とのちがい	225
第2節 現在以前の動作やできごとの質化	226
1) 現在以前の動作やできごとの質化	226
2) 基本的ということについて	227
3) 解説的ないいかた	228
第3節 未来のある時以前の動作の完成	228
第3章 完成相前過去形に相当する継続相過去形	231
第1節 過去のある時以前の動作の完成	231
第2節 現在以前の動作やできごとの質化されたものの過去	232
第3節 現在以前に完成した動作の発見, おもいだし	233
第4節 非現実の仮定のばあいのテンス	234
第Ⅶ部 継続相非過去形のテンス	237
第1章 継続相のテンス	237
第1節 継続相のテンスのふたつのあらわれかた	237
1) ある時間位置において持続過程のなかにあること	237
2) ある時間位置のなかで持続が成立すること	238
第2節 継続相のテンスと現在	240
1) 現在をまたぐ継続相	240
2) 現在をまたがない継続相	240
第3節 継続相のテンスにおける現在とひろげられた現在	242
1) 完成相のばあいのひろげられた現在	242
2) 継続相のばあいのひろげられた現在	242
3) 継続相のばあいの, 現在とひろげられた現在	243
第2章 現 在	245
第1節 現在持続過程のなかにあること	245
1) 持続過程をなす局面のなかにあること	245
2) 現在のはばのひろがり	246
3) 持続や連続のなかにあること	247
4) 状態持続のなかにあること	247
5) はばのひろい現在	248
6) 長期にわたるくりかえしの持続過程	248
第2節 現在の質的な属性	249
1) 現在点における質的な属性	249

2) 長期にわたる現在における質的な属性	249
第3節 過去から現在までの持続	249
1) 過去から現在までの持続	249
2) 「～から <u>している</u> 」と「～から <u>していた</u> 」	250
第3章 未 来	252
1) 未来に持続過程のなかにあること、未来に持続過程が成立すること	252
2) 現在ときれた未来と、現在からつづく未来	252
3) ひろげられた未来	253
第4章 現在以前から現在へ	254
1) 変化(始発)がおわって、現在結果(運動)の局面のなかにあること	254
2) このテンス的な意味の性格	254
第5章 ひろげられた現在	256
第6章 恒常的な状態	257
第1節 恒常的な状態とはなにか	257
1) 恒常的な持続の状態	257
2) 事象の性格とテンスの性格	257
3) 恒常的に存在するものの性質	259
4) 恒常的な状態の性質性と、性質の恒常性	259
5) そのテンス的な性格	260
6) 恒常的な状態と、ひろげられた現在における状態	260
第2節 恒常的な状態のいろんなタイプ	261
第7章 テンスからの解放	263
第1節 なりたつ時間に関係のない命題のなかでの状態	263
第2節 過去のものととの性質を非過去形であらわすばあい	264
第3節 提示文のなかで	264
第4節 モーダルな条件のなかで	264
第Ⅷ部 継続相過去形のテンス	265
第1章 過 去	265
第1節 過去に持続過程のなかにあったこと	265
1) 基準時間が瞬間であるばあい	265
2) 基準時間がはばのある時間であるばあい	267
第2節 過去に持続過程が成立したこと	269

1) 時間量をしめす修飾語でかざられるばあい	269
2) いつからいつまでと指定されたばあい	270
3) 「あいだ」などでかざられるばあい	271
4) 持続過程のなかにあることをしめす時間はば	271
第3節 持続過程のいっぽうのはしがしめされるばあい	271
1) 「～から <u>していた</u> 」と「～まで <u>していた</u> 」	271
2) はじめのときがしめされているばあい	272
3) おわりのときがしめされているばあい	272
第4節 過去の長期間の持続	273
1) 過去の長期間の持続をあらわすばあいの特徴	273
2) 大規模な動作をあらわすもの	273
3) 断続的なくりかえしの持続過程をあらわすもの	274
4) 内容や文脈から長期とわかるもの	274
5) 「～から」でかざられた長期のもの	274
第5節 過去の状態, 性質	275
1) 過去に状態の持続過程のなかにあったこと	275
2) 過去に存在したものの属性	275
第6節 ひろげられた過去	276
第7節 直前までの持続	276
第8節 三種の時間帯と継続相過去形のテンス	278
1) 山田小枝1984の「三種の時間帯」と継続相過去形のテンス	278
2) 継続相のばあいの時間構成	279
3) 「観察時間帯」や基準時間のしめされないばあい	280
4) 長期にわたる持続のばあい	280
第2章 過去以前から過去へ	282
第1節 変化(始発)がおわって, 過去のある時に結果(運動)の 局面のなかにあること	282
第2節 いろんなタイプ	284
1) この意味を実現させる動詞	284
a) とおりこしをあらわす動詞	284
b) 経過をあらわす動詞	284
c) 到達をあらわす動詞	284
d) 始発をあらわす動詞	285
e) 終了をあらわす動詞	285

f)	出現, 消滅をあらわす動詞	285
g)	変化そのものをあらわす動詞	285
h)	「なっていた」	285
i)	その他	285
2)	この意味を実現させる状況語, 修飾語	286
a)	「～のあいだに」「いつのまにか」など	286
b)	「とうに」「とくに」など	286
c)	「もう」「すでに」	286
d)	「また」「ふたたび」など	287
e)	「すっかり」	287
f)	動作にかかる修飾語	287
g)	動作にかかる状況語	287
第3章	恒常的な質的属性を継続相過去形であらわすとき	288
第1節	そのムード・テンスのな性格	288
1)	恒常的な属性を継続相過去形であらわすとき	288
2)	継続相過去形の基準時間が発見時であるとき	289
3)	てい察報告の文のなかで	291
4)	ふたたび, 恒常的な属性を継続相過去形であらわすとき	292
第2節	認識のときと, 展開のとき	293
1)	認識したときのこと	294
2)	事件が展開した時期のこと	294
第4章	モーダルな性格とテンス	295
第1節	発見, 確認, おもいだし	295
第2節	非現実の仮定のばあいのテンス	295
第IX部	内容(細部のもくじ)	297

国立国語研究所報告 82

現代日本語動詞のアスペクトとテンス

昭和60年 2 月

国 立 国 語 研 究 所

東京都北区西が丘 3 丁目 9 番14号

電話 (03) 900- 3 1 1 1 (代表)

UDC 895.6-5

NDC 815.5

本書の市販品発行所

〔〒162〕東京都新宿区納戸町40 (03) 260-5 2 8 1

株式会社 秀英出版

国立国語研究所刊行書一覧

国立国語研究所報告

1	八 丈 島 の 言 語 調 査	秀英出版刊	品切れ
2	言 語 生 活 の 実 態 ——白河市および付近の農村における——	〃	〃
3	現 代 語 の 助 詞 ・ 助 動 詞 ——用法と実例——	〃	2,000円
4	婦 人 雑 誌 の 用 語 ——現代語の語彙調査——	〃	品切れ
5	地 域 社 会 の 言 語 生 活 ——鶴岡における実態調査——	〃	〃
6	少 年 と 新 聞 ——小学生・中学生の新聞への接近と理解——	〃	〃
7	入 門 期 の 言 語 能 力	〃	〃
8	談 話 語 の 実 態	〃	〃
9	読 み の 実 験 的 研 究 ——音読にあらわれた読みあやまりの分析——	〃	〃
10	低 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	〃
11	敬 語 と 敬 語 意 義	〃	〃
12	総 合 雑 誌 の 用 語(前編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
13	総 合 雑 誌 の 用 語(後編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
14	中 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	〃
15	明 治 初 期 の 新 聞 の 用 語	〃	〃
16	日 本 方 言 の 記 述 的 研 究	明治書院刊	〃
17	高 学 年 の 読 み 書 き 能 力	秀英出版刊	〃
18	話 し こ と ば の 文 型 (1) ——対話資料による研究——	〃	2,000円
19	総 合 雑 誌 の 用 字	〃	品切れ
20	同 音 語 の 研 究	〃	〃
21	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (1) ——総記および語彙表——	〃	3,000円
22	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (2) ——漢 字 表——	〃	3,000円

23	話 し こ と ば の 文 型 (2) ——独話資料による研究——	秀英出版刊	2,000円
24	横 組 み の 字 形 に 関 す る 研 究	〃	品切れ
25	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (3) ——分 析——	〃	3,000円
26	小 学 生 の 言 語 能 力 の 発 達	明治図書刊	品切れ
27	共 通 語 化 の 過 程 ——北海道における親子三代のことば——	秀英出版刊	〃
28	類 義 語 の 研 究	〃	〃
29	戦 後 の 国 民 各 層 の 文 字 生 活	〃	400円
30-1	日 本 言 語 地 図 (1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
	日 本 言 語 地 図 (1) <縮刷版>	〃	17,000円
30-2	日 本 言 語 地 図 (2)	〃	品切れ
	日 本 言 語 地 図 (2) <縮刷版>	〃	17,000円
30-3	日 本 言 語 地 図 (3)	〃	品切れ
	日 本 言 語 地 図 (3) <縮刷版>	〃	17,000円
30-4	日 本 言 語 地 図 (4)	〃	品切れ
	日 本 言 語 地 図 (4) <縮刷版>	〃	17,000円
30-5	日 本 言 語 地 図 (5)	〃	品切れ
30-6	日 本 言 語 地 図 (6)	〃	〃
31	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究	秀英出版刊	〃
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) ——親族語彙と社会構造——	〃	〃
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	〃	350円
34	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (Ⅱ) ——新聞の用語用字調査の処理組織——	〃	品切れ
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) ——マキ・マケと親族呼称——	〃	〃
36	中 学 生 の 漢 字 習 得 に 関 す る 研 究	〃	〃
37	電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査	〃	〃
38	電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査 (Ⅱ)	〃	〃
39	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (Ⅲ)	〃	〃
40	送 り が な 意 識 の 調 査	〃	1,500円

41	待 遇 表 現 の 実 態 ——松江24時間調査資料から——	秀英出版刊	900円
42	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅲ)	〃	1,200円
43	動詞の意味・用法の記述的研究	〃	6,000円
44	形容詞の意味・用法の記述的研究	〃	4,000円
45	幼児の読み書き能力	東京書籍刊	4,500円
46	電子計算機による国語研究(Ⅳ)	秀英出版刊	700円
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3) ——性向語彙と価値観——	〃	700円
48	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅳ)	〃	3,000円
49	電子計算機による国語研究(Ⅴ)	〃	900円
50	幼児の文構造の発達 ——3歳～6歳児の場合——	〃	品切れ
51	電子計算機による国語研究(Ⅵ)	〃	1,000円
52	地域社会の言語生活 ——鶴岡における20年前との比較——	〃	1,800円
53	言語使用の変遷(1) ——福島県北部地域の面接調査——	〃	2,500円
54	電子計算機による国語研究(Ⅶ)	〃	1,000円
55	幼児語の形態論的な分析 ——動詞・形容詞・述語名詞——	〃	品切れ
56	現代新聞の漢字	〃	6,000円
57	比喩表現の理論と分類	〃	6,000円
58	幼児の文法能力	東京書籍刊	5,500円
59	電子計算機による国語研究(Ⅷ)	秀英出版刊	1,300円
60	X線映画資料による母音の発音の研究 ——フォネーム研究序説——	〃	2,500円
61	電子計算機による国語研究(Ⅸ)	〃	品切れ
62	研究報告集(1)	〃	1,700円
63	児童の表現力と作文	東京書籍刊	6,000円
64	各地方言親族語彙の言語社会学的研究(1)	秀英出版刊	2,000円
65	研究報告集(2)	〃	3,000円
66	幼児の語彙能力	東京書籍刊	8,000円

67	電子計算機による国語研究(X)	秀英出版刊	1,500円
68	専門語の諸問題	〃	4,000円
69	幼児・児童の連想語彙表	東京書籍刊	6,800円
70-1	大都市の言語生活——分析編——	三省堂刊	7,800円
70-2	大都市の言語生活——資料編——	〃	12,000円
71	研究報告集 (3)	秀英出版刊	4,800円
72	幼児・児童の概念形成と言語	東京書籍刊	6,800円
73	企業の中の敬語	三省堂刊	9,500円
74	研究報告集 (4)	秀英出版刊	4,200円
75	現代表記のゆれ	〃	2,700円
76	高校教科書の語彙調査	〃	5,000円
77	敬語と敬語意識 ——岡崎における20年前との比較——	三省堂刊	8,000円
78	日本語教育のための基本語彙調査	秀英出版刊	6,000円
79	研究報告書 (5)	〃	4,200円
80	言語行動における日独比較	三省堂刊	8,000円
81	高校教科書の語彙調査 (2)	秀英出版刊	5,000円
82	現代日本語動詞のアスペクトとテンス	〃	5,000円
83	研究報告集 (6)	〃	

国立国語研究所資料集

1	国語関係刊行書目 (昭和17~24年)	秀英出版刊	品切れ
2	語彙調査 ——現代新聞用語の一例——	〃	〃
3	送り仮名法資料集	〃	〃
4	明治以降国語学関係刊行書目	〃	〃
5	沖繩語辞典	大蔵省印刷局刊	4,300円
6	分類語彙表	秀英出版刊	1,800円
7	動詞・形容詞問題語用例集	〃	1,700円
8	現代新聞の漢字調査 (中間報告)	〃	品切れ
9	牛店安愚楽鍋用語索引	〃	1,500円

10	方言談話資料(1)	——山形・群馬・長野——	秀英出版刊	6,000 円
10-2	方言談話資料(2)	——奈良・高知・長崎——	〃	6,000 円
10-3	方言談話資料(3)	——青森・新潟・愛知——	〃	6,000 円
10-4	方言談話資料(4)	——福井・京都・島根——	〃	6,000 円
10-5	方言談話資料(5)	——岩手・宮城・千葉・静岡——	〃	6,000 円
10-6	方言談話資料(6)	——鳥取・愛媛・富山・沖縄——	〃	6,000 円
10-7	方言談話資料(7)	——老年層と若年層との対話——	〃	6,000 円
11	日 本 言 語 地 図 語 形 索 引		大蔵省印刷局刊	1,500 円

国立国語研究所研究部資料

1	幼児のことば資料(1)―2歳・3歳誕生日のことばの記録―	秀英出版刊	3,800 円
1-2	幼児のことば資料(2)―4歳誕生日のことばの記録―	〃	3,800 円
1-3	幼児のことば資料(3)―1歳児のことばの記録―	〃	6,000 円
1-4	幼児のことば資料(4)―2歳児のことばの記録―	〃	6,000 円
1-5	幼児のことば資料(5)―3歳前半のことばの記録―	〃	6,000 円
1-6	幼児のことば資料(6)―3歳後半のことばの記録―	〃	6,000 円

国立国語研究所論集

1	こ と ば の 研 究	秀英出版刊	品切れ
2	こ と ば の 研 究 第 2 集	〃	〃
3	こ と ば の 研 究 第 3 集	〃	〃
4	こ と ば の 研 究 第 4 集	〃	1,300 円
5	こ と ば の 研 究 第 5 集	〃	1,300 円

国立国語研究所年報 秀英出版刊

1	昭和24年度	品切れ	13	昭和36年度	品切れ	25	昭和48年度	品切れ
2	昭和25年度	〃	14	昭和37年度	〃	26	昭和49年度	〃
3	昭和26年度	160 円	15	昭和38年度	250 円	27	昭和50年度	700 円
4	昭和27年度	160 円	16	昭和39年度	品切れ	28	昭和51年度	非売品
5	昭和28年度	品切れ	17	昭和40年度	〃	29	昭和52年度	〃
6	昭和29年度	200 円	18	昭和41年度	300 円	30	昭和53年度	800 円
7	昭和30年度	品切れ	19	昭和42年度	300 円	31	昭和54年度	1,200 円
8	昭和31年度	〃	20	昭和43年度	品切れ	32	昭和55年度	1,300 円
9	昭和32年度	〃	21	昭和44年度	〃	33	昭和56年度	1,300 円
10	昭和33年度	〃	22	昭和45年度	〃	34	昭和57年度	2,000 円
11	昭和34年度	〃	23	昭和46年度	450 円	35	昭和58年度	2,200 円
12	昭和35年度	〃	24	昭和47年度	品切れ			

国 語 年 鑑 秀英出版刊

昭和29年版	品切れ	昭和40年版	品切れ	昭和51年版	4,000円
昭和30年版	"	昭和41年版	"	昭和52年版	品切れ
昭和31年版	"	昭和42年版	"	昭和53年版	"
昭和32年版	"	昭和43年版	"	昭和54年版	"
昭和33年版	"	昭和44年版	"	昭和55年版	"
昭和34年版	"	昭和45年版	1,500円	昭和56年版	"
昭和35年版	"	昭和46年版	2,000円	昭和57年版	5,500円
昭和36年版	"	昭和47年版	2,200円	昭和58年版	5,500円
昭和37年版	"	昭和48年版	2,700円	昭和59年版	5,800円
昭和38年版	"	昭和49年版	3,800円		
昭和39年版	"	昭和50年版	3,800円		

高 校 生 と 新 聞 国立国語研究所共編 日本新聞協会 秀英出版刊 280円

青年とマス・コミュニケーション 日本新聞協会共編 国立国語研究所 金沢書店刊 品切れ

国立国語研究所三十年のあゆみ——研究業績の紹介—— 秀英出版刊 1,500円

日本語教育教材

日本語と日本語教育—発音・表現編—	国立国語研究所 文化庁	共編	大蔵省印刷局刊	700円
日本語と日本語教育—文字・表現編—	国立国語研究所編		"	850円
日本語の文法(上)—日本語教育指導参考書4—	"	"	"	450円
日本語の文法(下)—	"	5—	"	550円
日本語教育の評価法—	"	6—	"	700円
中・上級授法—	"	7—	"	500円
日本語の指示詞—	"	8—	"	500円
日本語教育基本語彙七種 比較対照表—	"	9—	"	1,000円
日本語教育文献索引—	"	10—	"	1,400円
談話の研究と教育 I—	"	11—	"	550円
語彙の研究と教育(1)—	"	12—	"	600円

日本語教育映画基礎編一覧

(各巻16ミリカラー, 5分, 日本シネセル社販売)

巻 題 名 制作年度(昭和)

ユニット 1

1* これは かえるです ——「こそあど」+「は～です」——

2*	さいふは どこにありますか ——「こそあど」+「～がある」——	49
3*	やすすくないです, たかいです ——形容詞——	49
4*	きりんは どこにいますか ——「いる」「ある」——	51
5*	なにを しましたか ——動詞——	50
ユニット 2		
6*	しずかな こうえんで ——形容動詞——	50
7*	さあ, かぞえましょう ——助数詞——	50
8*	どちらが すきですか ——比較・程度の表現——	52
9*	かまくらを あるきます ——移動の表現——	51
10*	もみじが とても きれいでした ——です, でした, でしょう——	52
ユニット 3		
11*	きょうは あめが ふっています ——して, している, していた——	52
12*	そうじは してありますか ——してある, しておく, してしまう——	53
13*	おみまいに いきませんか——依頼・勧誘の表現——	53
14*	なみのおとが きこえてきます ——「いく」「くる」——	53
15*	うつくしい さらに なりました ——「なる」「する」——	50
ユニット 4		
16*	みずうみのえを かいたことが ありますか ——経験・予定の表現——	54
17*	あのいわまで およげますか ——可能の表現——	54
18	よみせを みに いきたいです ——意志・希望の表現——	54
19*	てんきが いいから さんぽを しましょう ——原因・理由の表現——	55
20*	さくらが きれいだそうです ——伝聞・様態の表現——	55
ユニット 5		
21*	おけいこを みに いっても いいですか ——許可・禁止の表現——	56
22	あそこに のぼれば うみがみえます ——条件の表現1——	56
23	いえが たくさんあるのに とてもしずかです ——条件の表現2——	56
24	おかねを とられました ——受身の表現1——	51
25	あめに ふられて こまりました ——受身の表現2——	55
ユニット 6		
26	このきつぷを あげます ——やり・もらいの表現1——	57

27	にもつを もって もらいました ——やり・もらいの表現2 ——	57
28	てつだいを させました ——使役の表現——	57
29	よく いらっしゃいました ——待遇表現1 ——	58
30	せんせいを おたずねします ——待遇表現2 ——	58

販 売 価 格

	16%カラー	VTRカラー (¼インチ)	VTRカラー (½インチ)
全巻セット	¥720,000	¥480,000	¥384,000
各ユニット	¥112,500	¥ 75,000	¥ 60,000
各 巻	¥ 30,000	¥ 20,000	¥ 16,000

第1巻～第3巻は文化庁との共同企画

* については日本語教育映画解説の冊子がある。

日本語教育映画 関連教材・資料

日本語教育映画	基礎編	教師用マニュアル (全 6 分冊)	各分冊1,000円
日本語教育映画	基礎編	練習帳 (全 6 分冊)	" 500円
日本語教育映画	基礎編	シナリオ集 (全 1 冊)	" 1,000円